

北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ
建設に伴う埋蔵文化財調査報告第1集

下植木壺町田遺跡

中世館跡とその周辺の調査

1999

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

| | | |
|-----------------|-----------|--------|
| 資料 | 財群馬県埋蔵文化財 | 01-353 |
| | 調査事業団保管 | 702 |
| 99- No. 1831 | 平成11年7月1日 | 1(5) |

北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ
建設に伴う埋蔵文化財調査報告第1集

下植木壺町田遺跡

中世館跡とその周辺の調査

1999

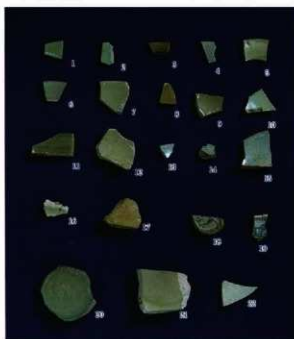
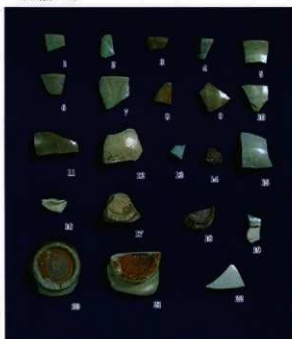
建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

口絵 1



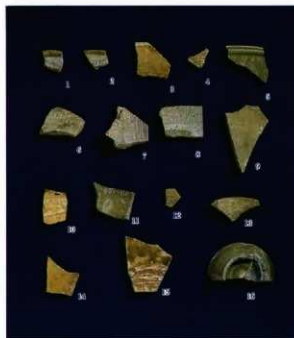
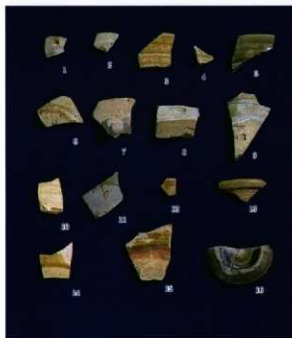
1区南堀内部分 中世面全景

口絵 2



中国陶磁器

1. 遺構外-1 2. 同-3 3. 同-2 4. 4-28土-1 5. 遺構外-11 6. 1-855土-1 7. 遺構外-4 8. 同-5
9. 1-1堀-31 10. 遺構外-6 11. 同-7 12. 同-10 13. 1-1堀-32 14. 遺構外-14 15. 1-1堀-29 16. 遺構外-13
17. 同-8 18. 1-1堀-33 19. 遺構外-12 20. 1-1堀-30 21. 遺構外-9 22. 1-1堀-28

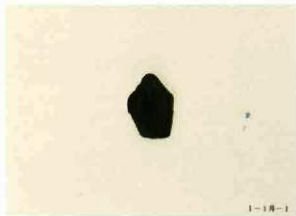
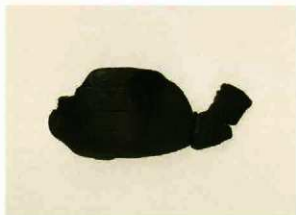
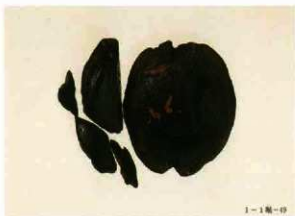


国産陶磁器

1. 1-1堀立-1 2. 1-256土-1 3. 1-1堀-24 4. 1-10堀立-1 5. 1-1堀-26 6. 遺構外-3 7. 同-4
8. 1-1堀-25 9. 同-27 10. 1-255土-1 11. 1-515土-1 12. 遺構外-1 13. 1-325土-2 14. 1-1堀-23
15. 遺構外-2 16. 同-5

口絵 3

漆器



序

本書は、伊勢崎市の西部、三和町を中心とした地域に所在する『下植木壱町田』遺跡に関し、建設省が伊勢崎インターチェンジ建設に伴う事前発掘調査を県教育委員会に委託し、県から再委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成8年から同9年にかけて実施した発掘調査およびその整理結果に関する報告書です。

遺跡周辺は一見平坦に見えますが、実際には丘有り、谷有り、川有り、湧き水有りと起伏に富み、土地改良や工業団地造成に起因する伊勢崎市教育委員会の発掘や、北関東自動車道建設に起因する当埋文事業団の発掘等で、これまでに、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、歴史時代と、きわめて重要な遺跡の発見が相継ぎ、埋もれていた歴史が次々と明らかになりつつあります。

この地域は、上武道路が完成する以前にさほど注目されることはなく、西に隣接する前橋市や伊勢崎市の中心地に比較して、のどかな風景が広がっていました。しかし、上武道路の開通にあわせて周辺に物流基盤が整備され、さらに、東関東と結ぶ本県三本目の高速道路となる北関東自動車道が完成すると、二つの基幹道路にアクセス可能な地として、周辺の重要性は倍加されることとなります。建設省はこのような事情を背景に、北関東自動車道の伊勢崎インターチェンジ建設を計画し、事前に広範な範囲で埋蔵文化財の発掘調査が必要となった次第です。

本書の刊行が、この地域に居住する人々に知られざる土地の歴史を広め、また、末長く基本的な資料として活用され、ひいては県民の郷土愛を育む礎となることを念願いたします。最後になりましたが、建設省高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には大変な御盡力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げます。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 菅野 清

例 言

1. 本書は、北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ建設に伴う事前調査である。また、本遺跡は昭和59・60年度に一般国道17号（上武道路）改築に伴い事前調査され、同63年3月に報告された『上植木老町田遺跡』の南北に隣接するが、同書が諸般の事情から『下植木老町田遺跡』の名称を使用しなかったことから、遺跡名として通番を付していない。なお、『上植木老町田遺跡』部分と遺構が連続し、合成その他引用する必要が生じた場合には、その都度『上植木調査区』と明記して掲載することとした。

2. 遺跡所在地 伊勢崎市三和町2703番地ほか

3. 事業主体 群馬県教育委員会（建設省）

4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間及び担当者

(1) 発掘調査 調査期間 1996(平成8)年4月1日～1997(平成9)年7月31日

担当課長 平成8年度 岸田治男

平成9年度 能登 健

調査担当 平成8年度 石塚久則 角田芳昭 飯森康広

平成9年度 中沢 悟 角田芳昭

(2) 整 理 調査期間 1998(平成10)年4月1日～1999(平成11)年3月31日

担当課長 平野進一

整理担当 飯森康広

新井悦子 今井サチ子 渡辺フサ枝 小池 緑 白井和子 矢野純子

新井加寿恵

(3) 事 務 常務理事 曾野 清 赤山容造 事務局長 原田恒弘 赤山容造

管理部長 蜂巣 実 渡辺 健 調査研究部長 赤山容造 神保佑史

総務課 小沢 淳 坂本敏夫 国定 均 笠原秀樹 井上 剛 小山建夫 須田朋子

吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌 宮崎忠司 大澤友治

吉田恵子 松井美智代 内山佳子 星野美智子 羽鳥京子 菅原淑子

若田 誠 山口陽子 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 本地友美

狩野真子

6. 報告書作成関係者

編 集 飯森康広

本文執筆 第1章第1節 神保佑史、 第4章第1節 津島秀章

上記以外 飯森康広

縄土石器観察 関根慎二

古墳・平安時代遺物の年代比定 坂口 一

墨書土器文字判読・瓦観察 木津博明

上記以外の遺物観察 飯森康広

遺構写真撮影 発掘調査担当者 技研測量設計株式会社(航空写真)

遺物写真撮影

佐藤元彦

金属器・動物遺存体保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 高橋初美

木器・植物遺存体保存処理および実測・樹種同定プレバート作成 高橋真樹子 田中富子
田中のふ子

分析・委託 火葬人骨・馬歯鑑定 宮崎重雄 (群馬県大間々高校教諭)
石材鑑定 飯島静男 (群馬地質研究会)
樹種同定・種実分析 株式会社 バレオ・ラボ
自然科学分析 株式会社 古環境研究所
鉄滓分析 赤沼英男 (岩手県立博物館)
遺構遺物図測量トレース 株式会社 測研

7. 中世陶磁器の選定・観察については、当事業団職員木津博明、大西雅広、坂井 隆にご指導をいただいた。
8. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)。

建設省、伊勢崎市教育委員会、山田昌久(東京都立大学)、星野正明、平田貴正
坂爪久純(境町教育委員会)、大江正行ほか当事業団職員諸氏。

9. 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センター及び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。
10. 発掘調査にあつては、地元伊勢崎市をはじめとし、前橋市、東村等から多くの方々々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

参考文献

中世遺跡

- ・『梅原胡堂遺跡発掘調査報告(遺構編) - 東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ -』(財)富山県文化振興財団 1994年
- ・『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 松本市内その1 - 総論編』長野県教育委員会他 1990年

中国陶磁器

- ・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年を中心として -」『九州歴史資料館研究論集4』 1978年

- ・森田勉「14-16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年

- ・小野正敏「15、16世紀の染付磁、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年

中世遺物

- ・『古瀬戸編年表』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯 1997年

- ・赤羽一郎・中野増久「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館 1995年

- ・『新編 高崎市史資料編3 中世Ⅰ』

- ・木津博明「上野国に於ける在地生産土器に就いて - 上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして -」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会 1989年

- ・星野守弘「中世内耳銅鏡について」『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』高崎市遺跡調査会他 1994年

凡 例

1. 挿入図に使用した方位は、座標北を表している。

2. 遺構図については、下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿入図にスケールを貼付してあるので参照されたい。

| | | | | | |
|-----|---------------|----------|--------|-----------|--------|
| 住居跡 | 1 : 60 | 住居跡のカマド | 1 : 30 | 掘立柱建物跡・柱列 | 1 : 80 |
| 土坑 | 1 : 40・60・80 | 鍛冶遺構・土壇墓 | 1 : 40 | 火葬跡 | 1 : 30 |
| 堀・溝 | 1 : 60・80・100 | 井戸跡 | 1 : 60 | | |

3. 遺構図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。



4. 遺物図の縮尺は下記のとおりであるが、それ以外のものは各挿入図中にスケールを明記してある。

| | | | |
|------------------------------------|-------|----|-------|
| 古銭・石鏃・白玉 | 1 : 1 | 鉄器 | 1 : 2 |
| 土器 坏・碗・皿類・鍋類・鉢・破片、漆器碗・皿、瓦、鉄滓、砥石、石斧 | 1 : 3 | | |
| 土器 壺・甕類、木器製品、くほみ石、蔽石、石皿、石鉢 | 1 : 4 | | |
| 木杭・柱材、板碑、石臼・茶臼 | 1 : 6 | | |

5. 遺物図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。



なお、テフラについては記号を用い、Hr-F A のみ略称として F A を用いた。正式名称と給源、降下年代は下記のとおりである。

| | | | | | |
|--------|--------------|------------|------|----------|------------|
| Hr-H P | 榛名八崎テフラ | 4.0~4.2万年前 | A T | 始良 Tnテフラ | 2.2~2.5万年前 |
| As-B P | 浅間板鼻褐色(群)テフラ | 1.7~2.1万年前 | | | |
| As-Y P | 浅間板鼻黄色テフラ | 1.3~1.4万年前 | As-C | 浅間Cテフラ | 4世紀中葉 |
| Hr-F A | 榛名二ツ岳渋川テフラ | 6世紀初頭 | As-B | 浅間Bテフラ | 西暦1108年 |
| As-A | 浅間Cテフラ | 西暦1783年 | | | |

参考文献 町田洋・新井房夫 著 『火山灰アトラス』[日本列島とその周辺] 1992

6. 遺物写真は、遺物図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。

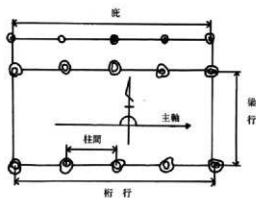
7. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

| | | |
|-------------|------------|---------------------|
| 国土地理院 | 1 : 50,000 | 「前橋」・「大胡」・「高崎」・「深谷」 |
| 伊勢崎市都市計画区域図 | 1 : 2,500 | |

8. 遺物観察表(土器)の法量は、口径を口、底径を底、器高を高と略し、また高杯・台付甕の杯部口径・脚部底径・台部底径は各々杯・脚・台と略した。なお、推定径には全て()を付すこととした。

遺物観察表(石器・鉄器類)の規模は、欠損品の数値は()を付して完形品と区別し、別に推定径が求められるものについては、その都度推定径等と記載した。

9. 遺物観察表（土器）の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版標準土色帖」に拠った。
10. 竪穴住居跡の主軸方位については、カマドを有する辺に対して直交方向を主軸として計測を行った。カマドを有しないものについては、北辺に対して直交方向を主軸として計測を行った。土坑の主軸方位は長辺を基準とし、火葬跡は張り出しを有する辺を基準として直交方向を主軸方位とした。
11. 掘立柱建物跡の各部の名称及び各計測値は、以下に図示したとおりである。全体規模については梁行×桁行の順で、庇を伴う場合は+を付すこととし、下図の例は(1+1)×4間と表した。また、全体規模の計測値はメートルと尺表記を併記したが、尺は30.3cmを基準として使用した。掘立柱建物跡の認定は平面測量図(1:50)を方眼図(尺基準)に載せて抽出し、現地で柱穴の形状及び埋土と総合判断して認定した。このため、計画寸法は総長寸法が優先するが、柱間寸法は現地で各柱穴の芯々をスチールテープで計測した数値を使用した。ただし、1区18・24・25号掘立柱建物跡、3区1号掘立柱建物跡は整理段階で認定したため、柱間寸法も図上計測値である。柱痕跡も、現地で平面又は断面確認できたものについて認定し、現地で計測した数値のみを採用した。庇は、柱穴の規模・形状及び柱間が、身舎部分と異なることを基準として認知したため、廊下である可能性も含んだ名称である。



目 次

口絵

序

例言

凡例

本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 調査の経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の経過 | 1 |
| 第2章 調査の方法 | 3 |
| 第1節 調査の方法 | 3 |
| 第2節 調査区の設定 | 3 |
| 第3節 基本土層 | 5 |
| 第3章 地理的環境と歴史的環境 | 7 |
| 第1節 地理的環境 | 7 |
| 第2節 歴史的環境 | 9 |
| 第4章 検出された遺構と遺物 | 14 |
| 第1節 旧石器時代 | 16 |
| 第2節 古墳時代 | 18 |
| 第1項 竪穴住居跡 | 18 |
| 第2項 溝 | 32 |
| 第3項 まとめ | 32 |
| 第3節 平安時代 | 34 |
| 第1項 竪穴住居跡 | 34 |
| 第2項 鍛冶遺構 | 44 |
| 第3項 溝 | 47 |
| 第4項 As-B下水田跡 | 47 |
| 第5項 まとめ | 48 |
| 第4節 中世 | 49 |
| 第1項 1区 | 52 |
| 1. 掘立柱建物跡・柱穴列 | 52 |
| (1) 堀内部分 | 52 |
| (2) 堀外部分 | 78 |
| 2. 方形竪穴建物跡 | 86 |
| 3. 土坑・柱穴 | 86 |
| (1) 堀内部分 | 86 |

| | |
|---|-------------------|
| (2)堀外部分 | 96 |
| 4. 土墳墓 | 100 |
| 5. 火葬跡 | 101 |
| 6. 堀・溝 | 103 |
| 7. 入口遺構 | 116 |
| 8. 井戸跡 | 124 |
| 第2項 2区～4区 | 138 |
| 1. 掘立柱建物跡・柱穴列 | 138 |
| 2. 土坑・柱穴 | 142 |
| 3. 土墳墓 | 146 |
| 4. 火葬跡 | 147 |
| 5. 井戸跡 | 147 |
| 第3項 まとめと問題点 | 155 |
| 1. 遺構の変遷と特徴 | 155 |
| (1)館跡とその周辺 (2)掘立柱建物跡 (3)土坑 (4)土墳墓・火葬跡 (5)1号堀 (6)井戸跡 | |
| 2. 遺物 | 181 |
| (1)在地土器 (2)国産施釉陶器 (3)中国陶磁器 (4)石鉢・石臼・茶臼 | |
| 第5節 近世以降 | 186 |
| 第1項 溝 | 186 |
| 第2項 馬蹄痕 | 188 |
| 第3項 集水遺構 | 189 |
| 第4項 まとめ | 190 |
| 第6節 時期不明及び遺構外遺物 | 191 |
| 第1項 土坑・土坑群・粘土採掘坑 | 191 |
| 第2項 遺構外遺物 | 194 |
| 第5章 自然科学分析 | 202 |
| 1. 群馬県、下植木町田遺跡の自然科学分析(1) | (株)古環境研究所 202 |
| 2. 群馬県、下植木町田遺跡の自然科学分析(2) | (株)古環境研究所 213 |
| 3. 群馬県、下植木町田遺跡の自然科学分析(3) | (株)古環境研究所 223 |
| 4. 下植木町田遺跡出土炭化材の樹種同定 | 植田弥生(株)パレオ・ラボ 238 |
| 5. 下植木町田遺跡出土木材の樹種同定 | 松葉礼子(株)パレオ・ラボ 241 |
| 6. 下植木町田遺跡の樹種同定 | 松葉礼子(株)パレオ・ラボ 245 |
| 7. 下植木町田遺跡から出土した大型植物化石(1) | 新山雅広(株)パレオ・ラボ 250 |
| 8. 下植木町田遺跡から出土した大型植物化石(2) | 新山雅広(株)パレオ・ラボ 251 |
| 9. 下植木町田遺跡の岩石について | 飯島静男 252 |
| 10. 遺物の自然科学調査からみた下植木町田遺跡における鉄生産活動 | 赤沼英男 253 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|--------|---------------------------------------|----|---------|---|-----|
| 第 1 図 | 調査範囲図 | 2 | 第 58 図 | 1 区 9 号獨立柱建物跡 | 63 |
| 第 2 図 | 調査区設定図 | 4 | 第 59 図 | 1 区 10 号獨立柱建物跡・出土遺物 | 64 |
| 第 3 図 | 基本土層位置図 | 5 | 第 60 図 | 1 区 20 号獨立柱建物跡 | 65 |
| 第 4 図 | 基本土層図 | 6 | 第 61 図 | 1 区 34 号獨立柱建物跡・6 号柱穴列 | 66 |
| 第 5 図 | 遺跡周辺の地形分類図 | 8 | 第 62 図 | 1 区 17・8・22 号柱穴列 | 67 |
| 第 6 図 | 周辺の遺跡 (1) | 10 | 第 63 図 | 1 区 1 号獨立柱建物跡・出土遺物 | 68 |
| 第 7 図 | 周辺の遺跡 (2) | 11 | 第 64 図 | 1 区 2 号獨立柱建物跡・45 号土坑 | 69 |
| 第 8 図 | 全体図 | 15 | 第 65 図 | 1 区 3 号獨立柱建物跡 | 70 |
| 第 9 図 | 旧石器時代出土遺物と出土地点土層断面図 | 16 | 第 66 図 | 1 区 4 号獨立柱建物跡 | 71 |
| 第 10 図 | 旧石器時代遺物出土地点と試掘トレンチ位置図 | 17 | 第 67 図 | 1 区 5 号獨立柱建物跡 | 72 |
| 第 11 図 | 1 区 1 号住居跡 | 18 | 第 68 図 | 1 区 6 号獨立柱建物跡 | 73 |
| 第 12 図 | 1 区 1 号住居跡出土遺物 (1) | 19 | 第 69 図 | 1 区 16・17 号獨立柱建物跡 | 74 |
| 第 13 図 | 1 区 1 号住居跡出土遺物 (2) | 20 | 第 70 図 | 1 区 29 号獨立柱建物跡・出土遺物 | 75 |
| 第 14 図 | 1 区 2 号住居跡 | 21 | 第 71 図 | 1 区 3・25 号柱穴列 | 76 |
| 第 15 図 | 1 区 2 号住居跡出土遺物 | 22 | 第 72 図 | 1 区 15 号柱穴列 | 77 |
| 第 16 図 | 1 区 3 号住居跡 | 23 | 第 73 図 | 1 区 19 号獨立柱建物跡 | 77 |
| 第 17 図 | 1 区 4 号住居跡 | 24 | 第 74 図 | 1 区 18・25 号獨立柱建物跡 | 78 |
| 第 18 図 | 1 区 6 号住居跡・出土遺物 | 25 | 第 75 図 | 1 区 27 号獨立柱建物跡 | 79 |
| 第 19 図 | 1 区 6 号住居跡掘り方 | 26 | 第 76 図 | 1 区 10・14 号柱穴列 | 80 |
| 第 20 図 | 1 区 7 号住居跡・出土遺物 (1) | 26 | 第 77 図 | 1 区 23 号獨立柱建物跡・12 号柱穴列 | 81 |
| 第 21 図 | 1 区 7 号住居跡・出土遺物 (2) | 27 | 第 78 図 | 1 区 24 号柱穴列 | 82 |
| 第 22 図 | 1 区 9 号住居跡 | 28 | 第 79 図 | 1 区 21 号獨立柱建物跡 | 82 |
| 第 23 図 | 1 区 10 号住居跡・出土遺物 | 29 | 第 80 図 | 1 区 22 号獨立柱建物跡 | 83 |
| 第 24 図 | 1 区 11 号住居跡・出土遺物 | 30 | 第 81 図 | 1 区 24 号獨立柱建物跡 | 84 |
| 第 25 図 | 1 区 12 号住居跡・出土遺物 | 31 | 第 82 図 | 1 区 26 号獨立柱建物跡・11 号柱穴列 | 85 |
| 第 26 図 | 1 区 13 号住居跡・出土遺物 | 31 | 第 83 図 | 1 区 1 号方形竪穴建物跡 | 86 |
| 第 27 図 | 1 区 14 号住居跡 | 32 | 第 84 図 | 1 区 44・129・211 号土坑・出土遺物 | 87 |
| 第 28 図 | 3 区 14 号漢土層断面 | 32 | 第 85 図 | 1 区 47・55・64・68・70・71 号土坑 | 88 |
| 第 29 図 | 4 区 14 号溝 | 33 | 第 86 図 | 1 区 72A・72 B・75・78・90・488・1075 号土坑・ 出土遺物 | 89 |
| 第 30 図 | 1 区 5 A 号住居跡 | 34 | 第 87 図 | 1 区 堀内部分土坑・柱穴・出土遺物 (1) | 91 |
| 第 31 図 | 1 区 5 A 号住居跡出土遺物 | 35 | 第 88 図 | 1 区 堀内部分土坑・柱穴・出土遺物 (2) | 93 |
| 第 32 図 | 1 区 5 B 号住居跡・カマド | 36 | 第 89 図 | 1 区 堀内部分土坑・柱穴・出土遺物 (3) | 95 |
| 第 33 図 | 1 区 5 B 号住居跡掘り方 | 37 | 第 90 図 | 1 区 堀外部分土坑・出土遺物 (1) | 97 |
| 第 34 図 | 1 区 5 B 号住居跡出土遺物 (1) | 38 | 第 91 図 | 1 区 堀外部分土坑・出土遺物 (2) | 98 |
| 第 35 図 | 1 区 5 B 号住居跡出土遺物 (2) | 39 | 第 92 図 | 1 区 1021 号土坑・792 号柱穴・出土遺物 | 99 |
| 第 36 図 | 1 区 5 B 号住居跡出土遺物 (3) | 40 | 第 93 図 | 1 区 1・2 号土庫基・出土遺物 | 100 |
| 第 37 図 | 1 区 8 号住居跡出土遺物 (1) | 41 | 第 94 図 | 1 区 火葬跡 (1) | 102 |
| 第 38 図 | 1 区 8 号住居跡・カマド・出土遺物 (2) | 43 | 第 95 図 | 1 区 火葬跡 (2) | 102 |
| 第 39 図 | 1 区 1 号鍛冶遺構・出土遺物 | 44 | 第 96 図 | 1 区 1 号漢土層断面・遺物出土状況・調査区西側配 置図 | 105 |
| 第 40 図 | 1 区 2 号鍛冶遺構・出土遺物 | 45 | 第 97 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (1) | 106 |
| 第 41 図 | 1 区 3 号鍛冶遺構・出土遺物 | 46 | 第 98 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (2) | 107 |
| 第 42 図 | 1 区 4 号鍛冶遺構・出土遺物 | 47 | 第 99 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (3) | 108 |
| 第 43 図 | 1 区 4 号溝 | 48 | 第 100 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (4) | 109 |
| 第 44 図 | 3 区 Aa-B 水田跡エレベーション・南壁・輪郭 土層断面 | 48 | 第 101 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (5) | 110 |
| 第 45 図 | 1 区・4 区・「上植木調査区」中世南全体図 | 50 | 第 102 図 | 1 区 1 号堀出土遺物 (6) | 111 |
| 第 46 図 | 1 区 南堀内部分全体図 | 51 | 第 103 図 | 1 区 2 号溝 | 111 |
| 第 47 図 | 1 区 11 号獨立柱建物跡・433 号土坑 | 52 | 第 104 図 | 1 区 2 号溝出土遺物 | 112 |
| 第 48 図 | 1 区 12 号獨立柱建物跡 | 54 | 第 105 図 | 1 区 3 号溝出土遺物 | 112 |
| 第 49 図 | 1 区 13 号獨立柱建物跡・294 号土坑 | 55 | 第 106 図 | 1 区 6・7 号溝・出土遺物 | 113 |
| 第 50 図 | 1 区 14 号獨立柱建物跡 | 56 | 第 107 図 | 1 区 8・9 号溝・出土遺物 | 114 |
| 第 51 図 | 1 区 15 号獨立柱建物跡・363 号土坑・30 号獨立柱建 物跡 | 57 | 第 108 図 | 1 区 10・14 号溝 | 115 |
| 第 52 図 | 1 区 31 号獨立柱建物跡 | 58 | 第 109 図 | 1 区 1 号入口遺構 | 116 |
| 第 53 図 | 1 区 33 号獨立柱建物跡 | 59 | 第 110 図 | 1 区 1 号入口遺構遺物出土状況 | 117 |
| 第 54 図 | 1 区 1 号柱穴列 | 59 | 第 111 図 | 1 区 1 号入口遺構出土遺物 (1) | 118 |
| 第 55 図 | 1 区 2・4・16・28 号柱穴列 | 60 | 第 112 図 | 1 区 1 号入口遺構出土遺物 (2) | 119 |
| 第 56 図 | 1 区 7 号獨立柱建物跡・246 号土坑 | 61 | 第 113 図 | 1 区 1 号入口遺構出土遺物 (3) | 120 |
| 第 57 図 | 1 区 8 号獨立柱建物跡 | 62 | 第 114 図 | 1 区 1 号入口遺構出土遺物 (4) | 121 |

| | | |
|-------|----------------------------|-----|
| 第115図 | 1区2号入口遺構・出土遺物(1) | 122 |
| 第116図 | 1区2号入口遺構・出土遺物(2) | 123 |
| 第117図 | 1区4号入口遺構 | 124 |
| 第118図 | 1区1号入口遺構・20・21号柱穴・出土遺物 | 125 |
| 第119図 | 1区1号井戸跡・出土遺物 | 127 |
| 第120図 | 1区2号井戸跡・出土遺物(1) | 128 |
| 第121図 | 1区2号井戸跡・出土遺物(2) | 129 |
| 第122図 | 1区3号井戸跡・出土遺物 | 130 |
| 第123図 | 1区4号井戸跡・出土遺物 | 131 |
| 第124図 | 1区5号井戸跡・出土遺物 | 132 |
| 第125図 | 1区7号井戸跡・出土遺物 | 133 |
| 第126図 | 1区8・9号井戸跡・出土遺物 | 134 |
| 第127図 | 1区10号井戸跡・出土遺物 | 135 |
| 第128図 | 1区11号井戸跡 | 137 |
| 第129図 | 3区1号孤立柱建物跡 | 138 |
| 第130図 | 4区1・2号孤立柱建物跡・6・10号土坑 | 139 |
| 第131図 | 4区3号孤立柱建物跡・7・8号土坑・4号孤立柱建物跡 | 140 |
| 第132図 | 4区1号柱穴 | 141 |
| 第133図 | 4区土坑・出土遺物(1) | 142 |
| 第134図 | 4区土坑・出土遺物(2) | 143 |
| 第135図 | 4区土坑・出土遺物(3) | 144 |
| 第136図 | 4区土坑・出土遺物(4) | 145 |
| 第137図 | 4区1・2号土壌墓・出土遺物 | 146 |
| 第138図 | 3区1号火葬跡 | 147 |
| 第139図 | 2区4・5・7号井戸跡・出土遺物 | 148 |
| 第140図 | 2区6号井戸跡・出土遺物 | 149 |
| 第141図 | 4区1号井戸跡・出土遺物(1) | 150 |
| 第142図 | 4区1号井戸跡・出土遺物(2) | 151 |
| 第143図 | 4区1号井戸跡・出土遺物(3) | 152 |
| 第144図 | 4区2・3号井戸跡・出土遺物 | 152 |
| 第145図 | 4区4号井戸跡・出土遺物(1) | 153 |
| 第146図 | 4区4号井戸跡・出土遺物(2) | 154 |
| 第147図 | 孤立柱建物跡・柱穴列主軸方位別分布グラフ | 156 |
| 第148図 | 1区堀内部分遺構新旧関係模式図 | 156 |
| 第149図 | 1区堀内部分主軸分類別配置図(1) | 157 |
| 第150図 | 1区堀内部分主軸分類別配置図(2) | 158 |
| 第151図 | 1区堀内部分柱穴分布図 | 159 |
| 第152図 | 1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図(1) | 162 |
| 第153図 | 1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図(2) | 163 |
| 第154図 | 孤立柱建物跡規模別分類図(1) | 165 |
| 第155図 | 孤立柱建物跡規模別分類図(2) | 166 |
| 第156図 | 孤立柱建物跡規模分類別柱穴規模一覧 | 169 |
| 第157図 | 1区土坑主軸別分布グラフ | 170 |

| | | |
|-------|-------------------------|-----|
| 第158図 | 4区・「上植木調査区」土坑主軸方位別分布グラフ | 171 |
| 第159図 | 1区堀内部分・4区土坑主軸方位別分布図 | 171 |
| 第160図 | 1区土坑主軸方位別分布図 | 172 |
| 第161図 | 「上植木調査区」土坑主軸方位別分布図 | 173 |
| 第162図 | 在土器カワラケ形態分類図 | 181 |
| 第163図 | 在土器鉢・内耳鍋形態分類図 | 183 |
| 第164図 | 3区清洲土層断面 | 187 |
| 第165図 | 4区2号溝 | 188 |
| 第166図 | 3区周縁痕・出土遺物 | 188 |
| 第167図 | 4区1・2号集水遺構・出土遺物 | 189 |
| 第168図 | 1区1号粘土探掘坑 | 191 |
| 第169図 | 1区2号粘土探掘坑・1147・1148号土坑 | 192 |
| 第170図 | 3区1号土坑群 | 193 |
| 第171図 | 3区7・8号土坑 | 194 |
| 第172図 | 遺構外出土 縄文時代遺物(1) | 194 |
| 第173図 | 遺構外出土 縄文時代遺物(2) | 195 |
| 第174図 | 遺構外出土 古墳時代遺物 | 195 |
| 第175図 | 遺構外出土 古代土器・瓦(1) | 196 |
| 第176図 | 遺構外出土 古代瓦(2) | 196 |
| 第177図 | 遺構外出土 古代瓦(3) | 197 |
| 第178図 | 遺構外出土 古代瓦(4) | 198 |
| 第179図 | 遺構外出土 古代瓦(5) | 199 |
| 第180図 | 遺構外出土 中世在土土器 | 200 |
| 第181図 | 遺構外出土 中世陶器地輪陶器 | 200 |
| 第182図 | 遺構外出土 中世焼酎器 | 200 |
| 第183図 | 遺構外出土 中国産陶磁器 | 201 |
| 第184図 | 遺構外出土 銅銭 | 201 |
| 第185図 | 遺構外出土 石鉢・石臼 | 201 |
| 第186図 | 遺構外出土 鹿角玉 | 201 |
| 第187図 | 自然科学分析図(1) | 206 |
| 第188図 | 自然科学分析図(2) | 210 |
| 第189図 | 自然科学分析図(3) | 215 |
| 第190図 | 自然科学分析図(4) | 218 |
| 第191図 | 自然科学分析図(5) | 222 |
| 第192図 | 自然科学分析図(6) | 225 |
| 第193図 | 自然科学分析図(7) | 231 |
| 第194図 | 自然科学分析図(8) | 232 |
| 第195図 | 自然科学分析図(9) | 237 |
| 第196図 | 3区41号溝横列 | 247 |

| | |
|-----|------------|
| 付図1 | 全体図 |
| 付図2 | 中世面全体図 |
| 付図3 | 1区南堀内部分全体図 |
| 付図4 | 3区全体図 |

表 目 次

| | | |
|-----|-----------------------|-------|
| 第1表 | 周辺の遺跡一覧表 | 12・13 |
| 第2表 | 孤立柱建物跡・柱穴列主軸方位一覧表 | 49 |
| 第3表 | 1区1号堀出土土器・石器一覧表 | 104 |
| 第4表 | 1区堀内部分遺構新旧関係基礎資料 | 156 |
| 第5表 | 1区孤立柱建物跡柱間尺数(南行) | 167 |
| 第6表 | 1区孤立柱建物跡柱間尺数(東行) | 168 |
| 第7表 | 3・4区孤立柱建物跡柱間尺数(南行・東行) | 169 |
| 第8表 | 下植木老町田遺跡形態別中世土坑計測値分析表 | |

| | | |
|-------|-----------------------|---------|
| | | 175~177 |
| 第9表 | 「上植木調査区」形態別中世土坑計測値分析表 | 177・178 |
| 第10表 | 中世在土土器カワラケ遺物観察表 | 181・182 |
| 第11表 | 中世在土土器鉢・内耳鍋遺物観察表 | 183・184 |
| 第12表 | 中世在土土器鉢・茶釜・火鉢遺物観察表 | 184・185 |
| 遺構計測表 | 在土器カワラケ・茶釜・火鉢遺物観察表 | 260~271 |
| 遺物観察表 | | 272~287 |

写真図版目次

| | | | |
|-------------|---|------|---|
| 口絵1 | 1区南端内部分中世面全景 | | |
| 口絵2 | 中国陶器器・国産陶器器 | | |
| 口絵3 | 漆器 | | |
| 遺構写真 | | | |
| PL1 | 1. 遺跡の周辺地形（北方面） 2. 遺跡の周辺地形（南方面） | | |
| PL2 | 1. 1区南端内部分全景（1） | | |
| PL3 | 1. 1区中世面全景 2. 1区南端内部分全景（2） | | |
| PL4 | 1. 1区中世面壁外部分 2. 1区中世面1号堀北部分周辺 3. 1区中世面北堀内部分 4. 2区全景 5. 5区全景 | | |
| PL5 | 1. 3区北部分 2. 3区南部分 3. 4区全景 | | |
| PL6 | 1. 2区旧石器出土地点土層断面 3. 1区1号住居跡全景 4. 1区2号住居跡全景 5. 1区3号住居跡全景 6. 1区4号住居跡全景 7. 1区6号住居跡全景 8. 1区7号住居跡全景 | | |
| PL7 | 1. 1区9号住居跡全景 2. 1区9号住居跡柱穴1 3. 1区9号住居跡柱穴2 4. 1区9号住居跡柱穴4 5. 1区10号住居跡全景 6. 1区10号住居跡遺物出土状態 7. 1区10号住居跡柱穴2 8. 1区10号住居跡柱穴3 | | |
| PL8 | 1. 1区11号住居跡全景 2. 1区12号住居跡全景 3. 1区13号住居跡全景 4. 1区13号住居跡掘り方 5. 1区14号住居跡全景 6. 3区14号溝全景 7. 4区14号溝全景 | | |
| PL9 | 1. 1区5A号住居跡遺物出土状態（1） 2. 1区5A号住居跡遺物出土状態（2） 3. 1区5A号住居跡遺物出土状態（3） 4. 1区5A号住居跡遺物出土状態（4） 5. 1区5A号住居跡土層断面 | | |
| PL10 | 1. 1区5B号住居跡全景 2. 1区5B号住居跡掘り方 3. 1区5B号住居跡カマド 4. 1区5B号住居跡内土坑1 5. 1区5B号住居跡内土坑2 | | |
| PL11 | 1. 1区8号住居跡全景 2. 1区8号住居跡遺物出土状態 3. 1区8号住居跡カマド 4. 1区8号住居跡土層断面 5. 1区8号住居跡貯蔵穴 | | |
| PL12 | 1. 1区1号鍛冶遺構全景 2. 1区1号鍛冶遺構遺物出土状態 | | |
| | | PL13 | 1. 3区1号鍛冶遺構土坑3 2. 3区1号鍛冶遺構土坑4 3. 4区4号溝全景 4. 4区4号溝As-B堆積状況 5. 3区As-B下水田跡北部分 6. 3区As-B下水田跡南部分 7. 3区As-B下水田跡南部分畦 8. 3区As-B下水田跡南部分畦土層断面 |
| | | PL14 | 1. 1区南端内部分北側 |
| | | PL15 | 1. 1区南端内部分南側 |
| | | PL16 | 1. 1区11・12号掘立柱建物跡全景 2. 1区12号掘立柱建物跡P5土層断面 3. 1区4・13・16号掘立柱建物跡全景 4. 1区13号掘立柱建物跡内294号土坑全景 5. 1区16号掘立柱建物跡内287号土坑全景 |
| | | PL17 | 1. 1区4・13・16号掘立柱建物跡全景 2. 1区6・14・15号掘立柱建物跡全景 |
| | | PL18 | 1. 1区30号掘立柱建物跡全景 2. 1区17号掘立柱建物跡内15号土坑全景 3. 1区3・9号掘立柱建物跡全景 4. 1区5・7・8・10・17号掘立柱建物跡全景 |
| | | PL19 | 1. 1区20号掘立柱建物跡全景 2. 1区1・2号掘立柱建物跡全景 3. 1区2号掘立柱建物跡P6 4. 1区1号掘立柱建物跡P1 5. 1区1号掘立柱建物跡P4 6. 1区1号掘立柱建物跡P5 7. 1区1号掘立柱建物跡P9 |
| | | PL20 | 1. 1区19号掘立柱建物跡全景 2. 1区27号掘立柱建物跡全景 3. 1区14号柱穴列全景 4. 1区15・16号柱穴列全景 5. 1区23号掘立柱建物跡全景 6. 1区12号柱穴列全景 7. 1区21・22号掘立柱建物跡・10号柱穴列全景 8. 1区21号掘立柱建物跡全景 |
| | | PL21 | 1. 1区22号掘立柱建物跡全景 2. 1区21号掘立柱建物跡・24号柱穴列全景 3. 1区26号掘立柱建物跡全景 4. 1区11号柱穴列全景 5. 1区1号方形竪穴建物跡全景 6. 1区1号方形竪穴建物跡土層断面 7. 1区1号方形竪穴建物跡P2 8. 1区1号方形竪穴建物跡P3 |
| | | PL22 | 1. 1区66号土坑全景 2. 1区55・64-68・70-72A・B・75・90号土坑全景 3. 1区282号土坑全景 4. 1区325号土坑全景 5. 1区514-516号土坑全景 6. 1区655・656号土坑全景 7. 1区671-674号土坑全景 8. 1区854・855号土坑全景 |

| | | | |
|--------|--|--------|---|
| P L 23 | 1. 1区962号土坑全景 2. 1区1021号土坑全景 3. 1区1号火葬坑出土状态 4. 1区1号火葬坑土層断面 5. 1区2号火葬坑全景 6. 1区2号火葬坑土層断面 7. 1区3号火葬坑全景 8. 1区3号火葬坑土層断面 | | 6. 4区3号獨立柱建物跡全景 7. 4区3号獨立柱建物跡内7・8号土坑全景 8. 4区2号土坑全景 |
| P L 24 | 1. 1区4号火葬坑全景 2. 1区5号火葬坑全景 3. 1区5号火葬坑土層断面 4. 1区6号火葬坑全景 5. 1区1号棺A断面 6. 1区1号棺B断面 7. 1区1号棺C断面 8. 1区1号棺D断面 | P L 32 | 1. 4区14号土坑全景 2. 4区15号土坑全景 3. 4区17~23・29号土坑全景 4. 4区26・40号土坑全景 5. 4区27号土坑全景 |
| P L 25 | 1. 1区1号棺H区西手件出土状态 2. 1区1号棺H区内耳珥出土状态 3. 1区1号棺X区南漆器出土状态 4. 1区1号棺Y区南漆器出土状态 5. 1区2号溝A断面 6. 1区6号溝全景 7. 1区7号溝遺物出土状态 8. 1区10号溝全景 | P L 33 | 1. 4区1号土塚墓全景 2. 4区2号土塚墓全景 3. 3区1号火葬坑全景 4. 2区5号并戶跡全景 5. 4区1号并戶跡全景 6. 4区1号并戶跡土層断面 7. 4区2号并戶跡全景 8. 4区2号并戶跡土層断面 |
| P L 26 | 1. 1区1号入口遺構全景 2. 1区1号入口遺構遺物出土状态 (1) 3. 1区1号入口遺構遺物出土状态 (2) 4. 1区1号入口遺構枕1 | P L 34 | 1. 4区3号并戶跡全景 2. 4区3号并戶跡土層断面 3. 4区4号并戶跡全景 4. 4区4号并戶跡遺物出土状态 5. 4区4号并戶跡土層断面 |
| P L 27 | 1. 1区1号入口遺構枕2 2. 1区1号入口遺構枕3 3. 1区1号入口遺構枕4 4. 1区2号入口遺構全景 (1) 5. 1区2号入口遺構全景 (2) 6. 1区2号入口遺構枕1 7. 1区2号入口遺構枕2 8. 1区2号入口遺構枕3 | P L 35 | 1. 3区1号溝全景 2. 3区41号溝西平分 3. 3区41号溝西平分 4. 3区41号溝木枕出土状态 5. 3区65号溝全景 6. 3区81号溝全景 7. 4区2号溝全景 8. 3区馬蹄痕檢出土状态 |
| P L 28 | 1. 1区3号入口遺構全景 2. 1区3号入口遺構遺物出土状态 (1) 3. 1区3号入口遺構遺物出土状态 (2) 4. 1区3号入口遺構馬面出土状态 5. 1区1号并戶跡全景 | P L 36 | 1. 4区1号集水遺構全景 2. 4区1号集水遺構土層断面 3. 4区2号集水遺構全景 4. 1区1号粘土採掘坑土層断面 5. 1区2号粘土採掘坑全景 6. 1区1147・1148号土坑全景 7. 3区1号土坑群全景 8. 3区8号土坑全景 |
| P L 29 | 1. 1区2号并戶跡全景 2. 1区2号并戶跡土層断面 3. 1区3号并戶跡全景 4. 1区3号并戶跡土層断面 5. 1区4号并戶跡土層断面 6. 1区5号并戶跡全景 7. 1区5号并戶跡土層断面 8. 1区7号并戶跡全景 | | |
| P L 30 | 1. 1区8号并戶跡全景 2. 1区8号并戶跡土層断面 3. 1区9号并戶跡全景 4. 1区9号并戶跡土層断面 5. 1区10号并戶跡全景 6. 1区10号并戶跡土層断面 7. 1区11号并戶跡全景 8. 1区11号并戶跡土層断面 | | |
| P L 31 | 1. 3区1号獨立柱建物跡全景 2. 4区1-4号獨立柱建物跡全景 3. 4区1号獨立柱建物跡全景 4. 4区2号獨立柱建物跡全景 5. 4区2号獨立柱建物跡内6号土坑全景 | | |

出土遺物写真

| | |
|---------------|---|
| P L 37 | 第1節 旧石器時代 |
| P L 37~P L 40 | 第2節 古墳時代 壙穴住居跡 (P L 37~40) |
| P L 40~P L 44 | 第3節 奈良・平安時代 壙穴住居跡 (P L 40~43) 鍛冶遺構 (P L 43・44) |
| P L 44~P L 53 | 第4節 中世 1区 土坑・柱穴・土塚墓 (P L 44) 火葬坑 (P L 45) 壙 (P L 45・46) 溝 (P L 46・47) 入口遺構 (P L 47~50) 并戶跡 (P L 50~53) |
| P L 53~P L 56 | 第4節 中世 2~4区 4区土坑・土塚墓 (P L 53・54) 2・4区并戶跡 (P L 54~56) |
| P L 56 | 第5節 近世 馬蹄痕 (P L 56) 集水遺構 (P L 56) |
| P L 57~P L 59 | 第6節 時期不明及不明遺構外遺物 縄文時代 (P L 57) 古墳時代 (P L 57) 古代 (P L 57・58) 中世在地土器 (P L 58) 銅銭 (P L 59) 石鉢・石臼 (P L 59) 鉄珠玉 (P L 59) |
| P L 60~P L 72 | 第5章 自然科学分析 |

報告書抄録

| | |
|--------|-----------------------------------|
| フリガナ | シモウエキイチョウダイセキ |
| 書名 | 下榎木岩町遺跡 |
| 調査名 | 北関東自動車道伊勢崎インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 |
| 巻次 | 第1巻 |
| シリーズ名 | 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第248巻 |
| 編著者名 | 飯森康広 |
| 編集機関 | 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 所在地 | 群馬県勢多郡北碓村下榎田784-2 |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月25日 |

| 所収遺跡名 | フリガナ 所在地 | コード | | 北緯 °' " | 東経 °' " | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|-------|-------------|-------|------|------------|------------|-------------------|-----------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 下榎木岩町 | 伊勢崎市三和町 | 10204 | | 36°20'50" | 139°13'15" | 19960401～19970731 | 27,696 | 道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----------|-------------|-----------------|-----------|------------|---|
| 下榎木岩町 | 集落 | 旧石器時代 | | | 石器 | |
| | | 古墳時代 | 竪穴住居 溝 | 13軒 2条 | 土師器 | |
| | 集落 生産 | 奈良・平安 時代 | 竪穴住居 | 3軒 | 土師器・須恵器・瓦・ | 9世紀後半～10世紀前半にあたる小鍛冶に 関連する竪穴住居跡と土坑を検出。 |
| | | | 鍛冶遺構 溝 水田 | 4基 | 鉄滓 | |
| | 館跡 集落 | 中世 | 掘立柱建物 | 37棟 | 中国青磁・染付・ | 南北の長さ約120mの堀で区画された館跡 と堀外部分に配置された掘立柱建物群。 (14世紀後半～16世紀前半) |
| | | | 柱穴列 | 20列 | 古瀬戸・在地土器・ | |
| | | | 方形竪穴建物 | 1基 | 木器・漆器・石鉢・ | |
| | | | 土坑 | 124基 | 石臼 | |
| | | | 土壇基 | 4基 | | |
| | | | 火葬跡 | 7基 | | |
| 堀 | | | 1条 | | | |
| 溝 | | | 8条 | | | |
| 近世 | 近世 | 入口遺構 | 4ヶ所 | | | |
| | | 井戸跡 | 18基 | | | |
| | | 溝 | | | | |
| 時期不明 | 時期不明 | 馬蹄痕 | | | | |
| | | 熊木遺構 | 2基 | | | |
| | | 粘土探掘坑 | 2基 | | | |
| | | 土坑 | 4基 | | | |
| | | | 土坑群 | | | |

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

茨城、栃木、群馬の3県を結ぶ北関東自動車道は平成5年11月に施工命令が初めて出され、既に本県の高崎市から茨城県ひたちなか市に至る約150km全線が事業化されている。本県でも高崎JCTと伊勢崎IC間約15kmの工事が平成7年度より行われている。北関東自動車道の建設工事は、日本道路公団が行っているが、伊勢崎ICと一般国道17号の上武道路を接続する道路については、建設者と日本道路公団の協議の結果、建設者が行うこととなった。

伊勢崎ICと上武道路を接続する伊勢崎市三和町字壱町田の地域は、既に上武道路建設工事の際、上榎木壱町田遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行っている。本遺跡は、接続道路内にも広がっていることが事前に明らかになっていたため、関係機関の協議の結果、工事実施前に同遺跡の記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成8年度、9年度の2ヶ年で行うことになり、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が建設者より発掘調査の委託を受けた群馬県教育委員会より再委託を受けて実施した。(神保)



第2節 調査の経過

発掘調査は、平成8年4月12日から平成9年7月31日まで15か月間で調査対象面積27,696㎡を実施した。調査区は、中央部を東西に走向する一般国道17号線(上武道路)によって南北に分断されることから、北側に位置する2・3・4区を先行して調査終了した後、南側1・5区に事務所を移設して調査を行う計画のもと調査を開始した。このため、南側調査時の事務所用地とするため、6月24日から1区表土掘削を開始したところ、予測以上の遺構数を確認し、特に南堀内部分では中世の掘立柱建物跡などが複雑に重複することから、随時検討する期間を確保しながら調査を進めるため、10数名程度の調査班を分班して先行調査することに計画変更した。なお、12月に入り急遽1区調査区内の工事行程として、橋脚用地の早期引き渡しが要請されたことから、1月末から全身体制に切り換えて調査することとなり、年度末には東側低地部を残して調査を完了した。

調査第2か年目となる平成9年度は、前年度の計画変更によって中途となってしまった3区南・4区北と、1区一部・4区南(8年度事務所用地)・5区の調査を行った。遺構量としては、4区中世面を除けば少なく、特に面積8,600㎡を持つ5区において遺構が検出されなかったため、当初予定よりも大幅な調査期間短縮となった。

第1章 調査の経過

日誌抄録

平成8年度

- 1996年 4.12 発掘調査事務所の設置、調査準備。
 17 3区グリッド発掘調査開始。
 5. 1 1区グリッド発掘調査開始。
 15 3区北 表土掘削。
 6. 4 3区北 近世以降湧出調査開始。
 24 1区表土掘削及び中世面調査開始。
 7. 4 3区近現代面をバルーンにより航空写真撮影。
 30 3区As-B下水道跡の調査開始。1区1号堀の調査開始。
 8. 8 1区南端内部分掘立柱建物跡・土坑調査開始。
 29 3区全景をバルーンにより航空写真撮影。
 9. 3 3区全景を高所作業車で写真撮影。
 11 3区旧石器時代試掘調査開始。
 24 2区表土掘削。
 10.11 栃木県埋蔵文化財センター職員研修(40数名)のため来跡見学。
 15 2区近世以降面調査開始。
 23 4区北 表土掘削。
 11.初 精華公民館公開講座受講者(館長ほか10数名)研修のため来跡見学。
 15 1区堀外部分調査開始。
 19 2区旧石器時代試掘調査開始。
 26 2・4区全景を高所作業車で写真撮影。
 12. 5 3区南 As-B下水道跡調査開始。
 10 3区北調査終了。
 12 1区南端内部分全景を高所作業車で写真撮影。
 1977年 1. 9 1区北端内部分中世面・4区北As-B下面調査開始。

- 13 2区調査終了。埋め戻し。
 2.12 1区堀外部分の壑穴住居跡・旧石器時代試掘調査開始。
 20 1区中世面をバルーンにより航空撮影及び南端内部分航空測量。
 24 1区堀内部分の壑穴住居跡の旧石器時代試掘調査開始。
 3.26 1区東側低地部を残し調査終了。

平成9年度

- 1997年 4.14 1区東側低地部及び周辺壑穴住居跡・西側農道跡、3区南、4区南調査開始。
 30 1区東側低地部、3区南、4区南As-B下面を高所作業車で写真撮影。
 5. 1 1区低地部トレンチ、3区南溝・土坑、4区南溝調査開始。
 23 伊勢崎市小学校の教員40名来跡見学。
 26 5区試掘トレンチ調査開始。
 6.16 1区南土坑・井戸など調査開始。
 23 3区南旧石器時代試掘調査開始。
 7. 8 4区南中世面を高所作業車で写真撮影。
 11 5区調査終了。埋め戻し。
 31 1・3・4区調査終了。埋め戻し。



第1図 調査範囲図

第2章 調査の方法

第1節 調査の方法

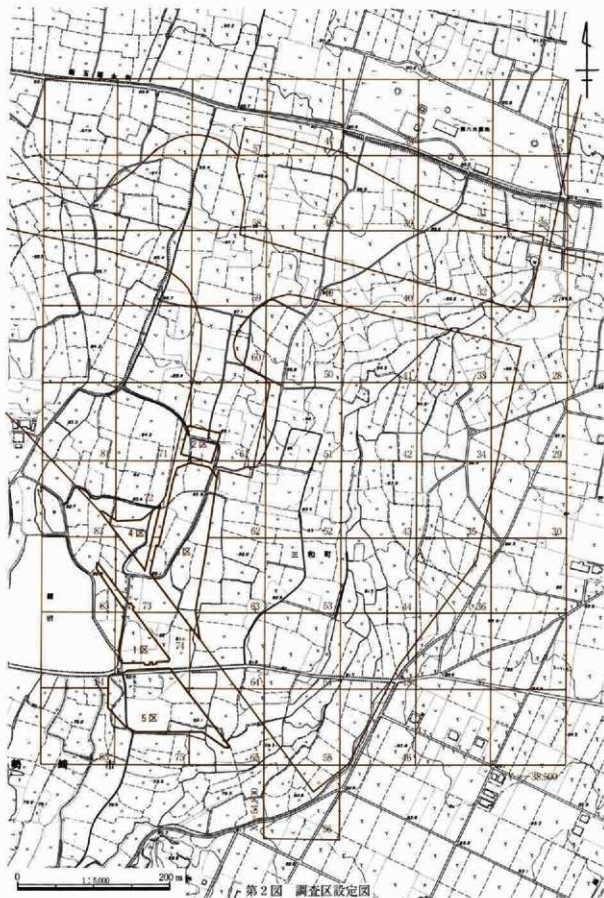
発掘調査にあたっては、便宜上調査区内を通る国道・市道によって、1～5区の調査区に分け実施したが、5区では遺構が検出されなかった。調査は下記によって行った。

- ①掘削機（バックホー）による表土（現耕作土およびAs-B混土層）の掘削。
- ②遺構確認作業の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸跡、水田跡などを検出した（第1面）が、1区では竪穴住居跡と中世遺構が重複することから、中世面終了後竪穴住居跡の調査を行った。
- ③埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定して、移植ゴテほかにより遺構を掘削した。
- ④遺構断面（縮尺1/20）測量および写真撮影。
- ⑤遺構平面測量にあたっては、平板を使用し任意に縮尺1/10、1/20、1/40、1/100を選択して行った。但し、広範囲に及ぶ測量及び精度を要求される堀内部分の測量は、技研測量株式会社に航空測量委託した。
- ⑥記録写真の撮影には、基本的に6×7・35mmの白黒フィルムとリバーサルフィルムを使用し、全体写真の撮影は、高所作業車、気球を用いて行った。
- ⑦第1面調査終了後、旧石器時代の遺構・遺物確認のため試掘調査を行った。ただし、1区では1面調査終了後、竪穴住居跡の調査を③～⑥の作業で行った後、旧石器時代の遺構・遺物確認のため試掘調査を行った。

第2節 調査区の設定

調査区の設定は、下記によって行った。

- (1) 調査区の設定は、平成6年より本遺跡に隣接して発掘調査中の三和工業団地遺跡（伊勢崎市教委調査）が使用した方法に準拠し、群馬県を網羅している国家座標第Ⅸ系を利用して行い、グリッドのうちに国家座標と置き換えられるように設定した。
- (2) 調査区の最小単位は、10メートル四方とし、その設定は国家座標第Ⅸ系と同様に座標軸の第2象限にあてはめ、西方向をX軸（国家座標Y軸）、北方向をY軸（国家座標X軸）とした。
- (3) グリッドの呼称は、100m四方を大グリッドとし、隣接する前記三和工業団地遺跡の呼称をそのまま使用した。大グリッド内では南東隅を基準点A-0と称し、頭文字に大グリッド名を冠して、例えば74A-0と呼称した。アルファベットはY軸方向（北方向）に10m進むごとにB、Cと順次変化させ、またX軸方向（西方向）に10m進むごとに数字を1、2と順次増加させていき、アルファベットと数字の組み合わせによって各グリッドと呼称した。
- (4) 方眼杭の設定は、技研測量株式会社に委託した。



第3節 基本土層

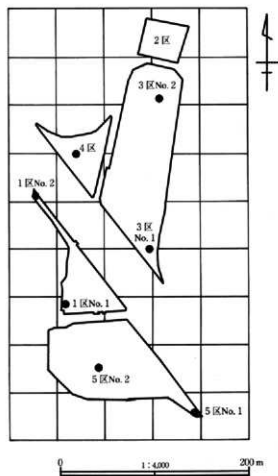
本遺跡は大間々扇状地の扇央部に位置し、谷底平野が樹枝状に延びる起伏に富んだ地形を形成している。調査区では、2区から1区方向へ帯状に微高地が延びる形となることから、1区両端、3区東半、4区西半が谷地への変換点にあたり、5区が谷地部となっている。

Ⅲ (As-B) は、1区東端・西端 (1区No.2)、3区東半 (3区No.1)、4区西半で最大10cm程堆積しており、谷地形に集積した状況を示すものと見られるが、5区は谷地部のため流失したものと考える。特に3区東半ではAs-B下水田跡を検出することができた。

Ⅵ (ATを含む黄灰～灰白色粘土) は、4区で未確認だが調査区のはほぼ全域に堆積しており、ATは所々で純堆積に近い状況も見られる。ATは旧石器時代の指標テフラであり、2区ではその下層から、3区ではその上層から旧石器1点ずつが出土した。

Ⅷ以下では各調査区ともに水成堆積の様相を示し、基盤である砂礫層に達している。特に5区東端 (5区No.1) では、砂礫層の標高が高くなっている。

- I 暗褐色粘質土 表土。現水田耕作土。
- I' 礫土
- II 暗褐～褐色粘質土 As-Bが所々で見られる。
- III As-B
- IV 黒～黒褐色粘質土 As-Cが所々で見られる。
- IV' 黒色粘質土 As-B下水田耕作土。
- V 明黄褐色粘質土 As-Y P、As-B Pが混在する。
- V' 黒灰～灰白粘質土 As-Y P、As-B Pが混在する。
- VI 黄灰～灰白シルト ATを含む。
- VII 明褐色粘質土
- VIII 灰褐色粘質土
- IX 明褐～灰白色粘土・シルト
- IX'a 灰褐～暗褐色粘質土
- IX'b 黒～暗褐色粘土
- X As-H P
- XIa 褐～灰白色粘土・シルト
- XIb 黄色砂質土
- XIc 褐～灰白色粘土・シルト
- XId 青灰色砂質土
- XII 砂礫



第3図 基本土層位置図

第3章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、赤城山南麓に形成された大間々扇状地上に所在する。赤城山の火山活動の始まりは、約40～50万年前と言われ、古い方から古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の3つの時期に区分される。古期成層火山形成期は、およそ13万年前頃まで続いたが、中でも特筆すべき事件として、約20～30万年前の梨木泥流の発生がある。梨木泥流は山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれで、浪志江町から豊城町にかけて多くの泥流丘（流れ山）を形成させた。浪志江町の稲岡、豊城町（八寸）の権現山や華蔵寺公園の小丘はその代表的なものであり、現在の伊勢崎を構成する地形の中で、最も古い地形である。

渡良瀬川は、今からおおよそ5～6万年前まで、大間々町で流路を南西方向にとり、赤城山の裾野と新田郡笠懸村の鹿田山との間に河道を開削して伊勢崎方向に向かい、豊城町（八寸）の権現山の西側に流れ、その流路に扇状地を形成した。この大間々扇状地は新旧2つの扇状地から成り立つとされるが、伊勢崎市に見られるものは古期扇状地（桐原面）とされ、この扇状地礫層上には関東ローム層が粘土化した状態で覆っている。このため、比較的水利に恵まれ、三和町書上付近の等高線85～90mの間には、大井戸、掛矢清水、雙沼、そして佐波郡東村との境には尾ヶ池などの湧水池が分布し、これら湧水の南方には細長い谷底平野の発達が見られる。結果として、上植木本町から南部にかけては水田がよく開かれることとなった。

大間々扇状地の西限である粕川と、西方の神沢川・広瀬川に挟まれた比較的広範囲を伊勢崎台地と呼ぶ。その成因は赤城山斜面からの大量の砂質物質が、比較的短時間に流出し堆積したものと見られる。形成時期は、洪積世最末期に当たる今からおおよそ1万年前のことと推定される。

本遺跡は、まさしく古期大間々扇状地面に立地しており、5区は湧水池大井戸によって形成された谷底平野部分に当たる。なお、本遺跡は湧水池と近接していることから、同様な湧水を起源とする埋没谷が樹枝状に存在する複雑な地形を形成する。3区の東側及び4区の西側は、各々大井戸、掛矢清水に起因する谷地形に向かって傾斜することとなるが、3・4区ともにそれとは別に分岐する形で埋没谷が存在している。こうした状況は離水時期の時期差として現れ、本遺跡調査区内でもA・Tその他テフラの堆積状況に微妙な違いを生じている。

以上のやや複雑な地形形成の中、1区は早くから安定した微高地として鳥状に出現したことから、古墳から平安時代を通して居住域として土地利用され、中世に至っては鳥状の地形を更に区画堀で分離する手段によって、隔離された空間を形成することに成功することとなったのである。

慶長18年（1613）に構築された雙沼は、周辺で最も多い水量を持っていたであろう大井戸流路から微高地をカットして掛矢清水の流路へ導水する圓形的な土木工事であったが、用水確保の努力はその後も続き、新たな溜め池の構築や粕川からの直接的な導水へと発展するが、扇状地地形から来る用水不足の問題は昭和期の大正用水整備まで解消されることはなかったのである。

参考文献

- ・「群馬県史」通史編1 原始古代1 1990
- ・「伊勢崎市史」通史編1 原始古代中世 1987

第2節 歴史的環境

赤城山南麓地域では、岩宿遺跡に端を発して日本の旧石器研究をリードする発見がなされた。昭和49年から63年にわたる上武国道建設に伴う発掘調査では書上本山遺跡(10)、堀下八幡遺跡など8か所で旧石器時代遺跡が確認されている。近くでは、4つの文化層を持ち、石器1776点が出土した三和工業団地遺跡(4)がある。

縄文時代の遺跡は、広瀬川低地帯の東側に当たる赤城火山斜面、大間々扇状地、伊勢崎台地上に多くの遺跡が分布している。主な集落遺跡としては前期を主体とする129軒が調査された草期後半～後期の三和工業団地遺跡(5)がある。

弥生時代の遺跡は、沖積平野である広瀬川低地帯に望む伊勢崎台地の西縁辺部に所在する中期後半の西太田遺跡・中相遺跡があるが、集落としては貧弱で、十分な発達は見られない。

古墳では、県内最古の古墳の一つとされる華藏寺裏山古墳(18)、5世紀中頃には長持形石棺を有し首長墓と見られる御富士山古墳(19)が現れる。

古墳から平安時代の集落遺跡の分布は、広瀬川以東の地域に集中しており、中でも伊勢崎市の北部地域に当たる殖蓮・三郷地区は特に分布密度が高い地域である。この集落遺跡の集中傾向は、古墳の分布や上植木麻寺(17)や東山道(21)の存在などを加味して考えたとき、伊勢崎及び周辺地域でも中心的な位置を占めていたことを示すものと考えられる。

本遺跡が所在する粕川以東の地域は、大間々扇状地の古期扇状地(桐原原)の西端部に位置し、伏流水が湧出する地帯であり、尼ヶ池(27)・大井戸(24)・鯉沼(23)・掛矢清水(25)などの湧水点が点在する。尼ヶ池からのびる浸食谷の右岸台地上には、天ヶ地遺跡、園芸試験場第二遺跡、下吉祥寺遺跡、八寸B遺跡、原之城遺跡(16)と続く。原之城遺跡は中期の豪族居館に比定され、この地域で中心的な位置を占めていたものとされる。また、これら遺跡群のさらに南で佐波郡境町城に入るが、佐位郡街

に推定されている十三宝塚遺跡(20)がある。

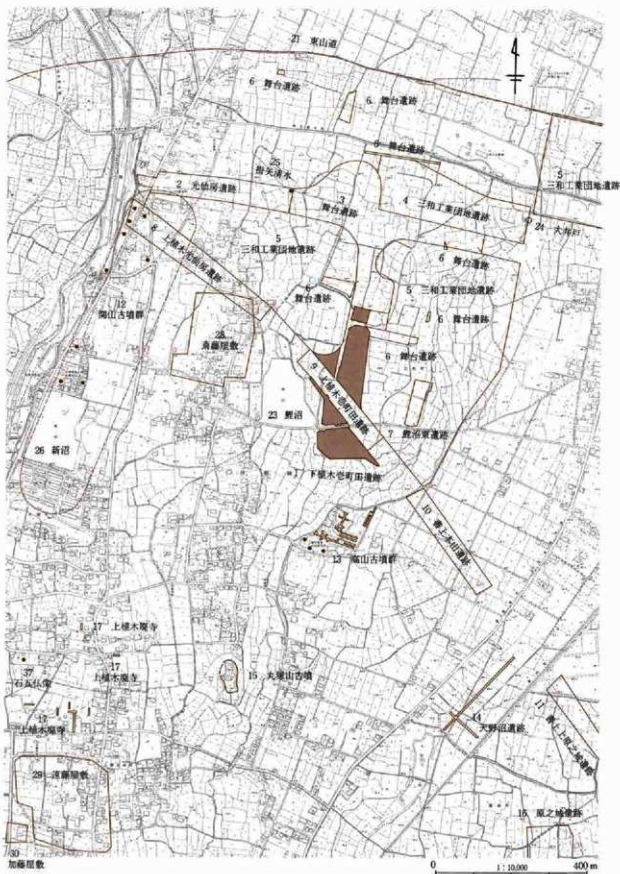
尼ヶ池からのびる浸食谷の左岸台地上は、行政区分では佐波郡東村城に入るが、右岸台地上と同様に集落遺跡が分布している。

大井戸および鯉沼からのびる浸食谷に臨む左岸台地上には、三和工業団地遺跡(4・5)、舞台遺跡(3・6)、鯉沼東遺跡(7)、上植木沓町田遺跡(9)、恵下遺跡など、左岸台地上には書上本山遺跡、天野沼遺跡(14)があり、本遺跡は前者に属する。このほか粕川左岸には上植木光仙房遺跡(8)がある。

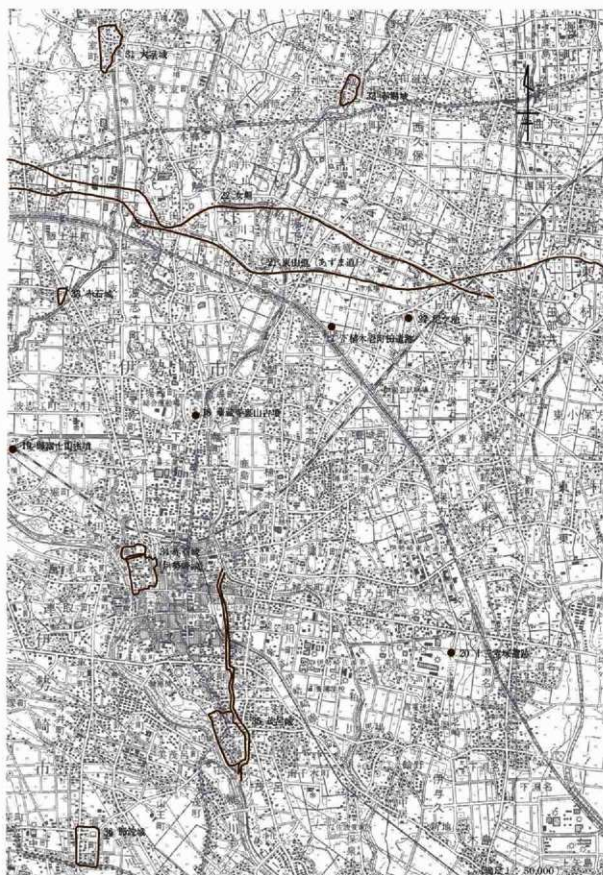
中世前期では、本地域を含む佐位郡全域を荘域として仁和寺法金剛院領測名荘が開発される。その開発に際して、灌漑用水として計画されたものが女堀(22)であると言われる。本遺跡周辺では、建長3年(1251)に^{ウチノ}街があったことが知られており、東山道上の要衝としての位置を窺うことができる。その後測名荘は、那波氏と赤堀氏の勢力下となり、本県の戦国期の幕開けとも言うべき享徳の乱では、古河公方足利成氏方の赤堀氏が植木・赤石(伊勢崎市)で敵対する関東管領上杉氏方と合戦に及んでいる。戦国期には赤石城(34)を拠点とした那波氏が勢力を持つが、後北条氏方であったため、永禄3年(1560)越山した上杉謙信に攻め落とされる。この折、在地の百姓が方々へ逃散したことを「茂呂村申伝え書上帳」は記している。天正18年(1590)後北条氏滅亡によって徳川氏が関東に入部すると、松平家乗が1万石を宛行われて那波城(36)に入り、酒井氏を経て、慶長6年(1601)稲垣長茂が1万石を領して伊勢崎に入り伊勢崎藩が成立する。鯉沼の構築は、この稲垣長茂に依るものとされ、以後江戸期には溜め池が数カ所造られることとなった。そうした中で、本遺跡地は水田化されたものと解される。

参考文献

- ・『伊勢崎市史』通史編1 原始古代中世 1987年



第6図 周辺の遺跡(1)



第7図 周辺の遺跡(2)

第1表 周辺の遺跡一覧表

| No. | 遺跡名 | 概 要 | 文 献 等 |
|-----|-------------------|--|--|
| 1 | 下植木屯町田遺跡 光仙房遺跡 | 本報告書 古墳時代中期を主体とする粘土探掘域約200基を検出し、一木平盤、曲柄平盤が出土した。 | 『年報17』 群裡文 1998 |
| 3 | 舞台遺跡 | 縄文時代整穴住居4軒、古墳時代前期整穴住居53軒・方形周溝墓10基、中後期整穴住居76軒、奈良・平安時代整穴住居12軒などを検出した。特に平安時代の須磨器窯跡11基は地下式・平地式窯構造で、規模は3～6mと小規模であるなど、須磨器生産の研究に重要な資料である。 | 『年報16』 群裡文 1997 |
| 4 | 三和工業団地遺跡 | 旧石器時代の異なる4つの文化層から旧石器1776点出土。縄文時代前期整穴住居3軒、古墳時代整穴住居140軒、平安時代整穴住居20軒、中世の方形区画遺構などを検出した。 | 『年報15・16』 群裡文 1996・1997 |
| 5 | 三和工業団地遺跡 | 旧石器時代石核・剥片石器ほか、縄文時代前期整穴住居129軒、古墳時代整穴住居7軒・方形周溝墓17基、平安時代整穴住居8軒ほかを検出した。 | 『年報15・16』 群裡文 1996・1997 伊勢崎三和工業団地遺跡埋蔵文化財発掘調査団 |
| 6 | 舞台遺跡 | 古墳時代前期～奈良時代の住居跡、溝を検出した。井戸からは14世紀代の板碑5基が出土した。 | 中澤貞治・村田喜久夫『舞沼東遺跡・舞台遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977 |
| 7 | 舞沼東遺跡 | 大井戸湯水池による開拓谷右岸の台地上に位置する。古墳時代～平安時代の住居跡、土坑、火葬跡を検出した。 | 中澤貞治・村田喜久夫『舞沼東遺跡・舞台遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977 |
| 8 | 上植木光仙房遺跡 | 5世紀末～7世紀の古墳10基、平安時代の小竪治跡等を検出。 | 飯塚誠『上植木光仙房遺跡』群裡文 1989 |
| 9 | 上植木屯町田遺跡 | 縄文時代中期～平安時代の住居跡が検出された。井戸からは板碑が出土している。 | 飯塚誠『書上下吉祥寺遺跡・書上原之城遺跡・上植木屯町田遺跡』群裡文 1988 |
| 10 | 書上本山遺跡 | 旧石器時代のユニット2、古墳時代の住居跡4軒、平安時代の溝、掘立柱建物跡等を検出した。瓦塔片、石椀骨製品が出土している。 | 『書上本山遺跡』 群裡文 1985 |
| 11 | 書上原之城遺跡 | 掘立柱建物跡の在り方及び多数の磨き土器などの出土等から、調査地は集落の中核部分と思われる。 | 飯塚誠『書上下吉祥寺遺跡・書上原之城遺跡』群裡文 1988 |
| 12 | 関山古墳群 | 柏川左岸の洪積台地上に位置する7世紀～8世紀初頭にかかる古墳群。 | 中澤貞治『関山古墳群』『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |
| 13 | 高山古墳群 | 高山と呼ばれる独立丘陵の裾部に構築された古墳群。整穴式石室を持つもの1基、横穴式石室のもの2基、計3基を調査した。7世紀初頭と考えられる。朝形埴輪出土。 | 中澤貞治『高山遺跡・天ヶ塚遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977 |
| 14 | 天野沼遺跡 | 天野沼を中心として北から東西に囲むように形成されている台地の基部に位置する。古墳時代末期の整穴住居跡5軒が検出された。 | 中澤貞治『高山遺跡・天ヶ塚遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡』伊勢崎市教育委員会 1977 |
| 15 | 丸塚山古墳 | 後円部墳頂に箱式棺状整穴式石室3室を持つ全長81mの帆立式前方後円墳。5世紀後半の構築。 | 坂場一寿『丸塚山古墳』『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |
| 16 | 原之城遺跡 | 長方形区画の南りに溝を持つ古墳時代中期の環濠居館跡。整穴住居跡・掘立柱建物跡・祭壇跡・内部区画の溝等が検出されている。 | 中澤貞治『原之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会 1988 |
| 17 | 上植木庵寺 | 1982(昭57)年からの調査で南北と西辺を走る溝、横列が確認される。7世紀後半に創建され約300年開存続したものと推定。 | 早川隆弘・松村一美・須長幸一『上植木庵寺一 昭和62年度発掘調査概報』伊勢崎市教育委員会 1988 |
| 18 | 華藏寺裏山古墳 | 主軸長40m前後とされる前方後円墳で主体部は粘土製の可能性が高い。伊勢崎地域の初現期のもので5世紀初頭と考えられる。 | 坂場一寿『華藏寺裏山古墳』『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |
| 19 | 御富士山古墳 | 墳丘長は約125mで三段築成と見られ、幅約30mで扇形の周堀を持つ。後円部頂上には典型的な長持形石棺を持ち、墳丘の表面には川原石積み葺きの墓石を施す。5世紀中葉の首長墓の可能性が高い。 | 中沢貞治『御富士山古墳』『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |
| 20 | 十三宝塚遺跡 | 8世紀末～10世紀にかけて機能していた施設で、倉位部または官人の居宅か寺院と見られる。3棟の基壇建物と横列で台形に囲んだ中核部と付随する3群の掘立柱建物跡、外郭を区画する溝、及び多数の整穴住居跡からなる。出土遺物は奈良三彩陶、瓦塔などがある。 | 領田 茂『十三宝塚遺跡』『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 大江正行『史跡十三宝塚遺跡』群裡文 1992 |

| No. | 遺跡名 | 概 要 | 文 献 等 |
|----------|---------------|--|--|
| 21 | 東山道 (あずま道) | 律令国家の整備に伴い官道として各国国府への命令使の下達と、各国からの上申使等や租庸調の貢進運道等として整備された。上榑水地内の酒造・火生石・舞台付近は佐位駅の所在地に比定される。 | 峰岸純夫「東山道と佐位駅」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 歴史の道調査報告書 『東山道』群馬県教育委員会 1983 |
| 22 | 女廻 | 前橋市上町付近の旧利根川を起点に終点の佐波郡東村西国定まで、赤城山南麓から大間々層状地1面にかけて幅15～30m、深さ3～4mの規模で12.75kmにわたって開闢された用水遺構であると言われる。 | 鹿田雄三「女廻」 群理文 1984 |
| 23 | 熊沼 | 慶長18年(1613)伊勢崎藩主堀田長茂によって築造されたと伝える。規模は南北約130m東西約147m面積19,988㎡で灌漑面積は4町5反6畝6歩(御領分石高宛)。水源は湧水大井戸。 | 藤木弘明「熊沼」『伊勢崎市史 通史編2』伊勢崎市 1993 |
| 24 | 大井戸 | 上榑水と下榑水の両者を含まれ、前者では大井戸、後者では男井戸と呼ぶ。湧水点は幾つかに分岐する。近年埋め立てられ消滅した。 | 星野正明「伊勢崎の地名由来」『群馬地名大より』7号 群馬地名研究会 1990 |
| 25 | 掛矢湧水 | 弁慶掛矢湧水または角掛湧水とも呼ぶ。義経に水を求められた弁慶が掛矢にて地面を叩いたところ水が湧き出したとも、田部弁角の強敵があったとも言われる。近年埋め立てられ消滅した。 | 同上 |
| 26 | 新沼(八幡沼) | 宝永7年(1710)完成で大井戸を水源とした溜池新沼(三和郵便局の前)の堀底が高く貯水量が小さいことから、それに代わるものとして文久2年(1861)開削された。八幡宮が在ったことから八幡沼とも呼ばれる。計画面積19,390㎡。柏川に取水堰を設ける。 | 菊池誠一「上榑水村」『伊勢崎市史 通史編2』伊勢崎市 1993 |
| 27 | 尾ヶ池 | 伊勢崎市と東村境で、村指定史跡「六道の遺標」の南に位置し、保存整備されている。直径7m程を成す。柳田国男『日本の伝説』の中に「おどろきの湧水」の一つとして紹介される。 | 星野正明前掲書 |
| 中世城館・石造物 | | | |
| 28 | 斎藤屋敷 | 熊沼の西側に位置する。本郭に土塁を残す。戦国期武蔵国から移住した斎藤氏の居館と伝える。現在でも居住者は下榑水壱町田遺跡1区を所有し元屋敷と呼んでいたという。字堀之内に存し、堀・土塁を残存する。 | 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会 1988 その他、星野正明氏ご教授による。 |
| 29 | 遠藤屋敷 | 同上 | 同上 |
| 30 | 加藤屋敷 | 加藤玄蕃の居所と伝える。 | 同上 |
| 31 | 大宝城 | 本丸跡には現在大宝神社が建つ。天正期は白井長尾氏の家臣牧氏の居城であった。 | 山崎 一「群馬県古城址の研究」上巻 1978 |
| 32 | 赤堀城 | 柏川とその支流熊木川との間に築かれ、東西170m南北350mで、本丸には高さ4mの高土塁を残す。 | 同上 |
| 33 | 赤石城 | 荒砥川と神沢川の合流点北に築地する崖城。赤石左衛門尉の築城といわれ、後伊勢崎に移ったという。最南端の郭部分が発掘調査され、上層5～6mの堅切とピット検出。 | 藤巻幸男「荒砥前原遺跡・赤石城址」群馬県教育委員会・群理文 1985 |
| 34 | 赤石城(伊勢崎城) | 戦国期には早くから佐々木氏方として勢力を有した地域の領主那波氏の居城。永禄3年上杉謙信に攻められ、以後由良氏支配となる。その後伊勢崎城と改名。江戸期には伊勢崎藩の陣屋となる。 | 山崎 一「群馬県古城址の研究」上巻 1978 |
| 35 | 茂呂城 | 広瀬川左岸に立地する崖城。那波城と共に天正期の那波氏の拠点である。 | 峰岸純夫「佐位・那波の城と館」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |
| 36 | 那波城 | 鎌倉時代以来の那波氏の館跡が城郭化したもので、近世には松平家乗が居城とした。 | 同上 |
| 37 | 一石五仏像 | 一石一如東西首長の像あり。総高60cm幅37cm厚さ22cm。平内彫。表面銘文「建長三年大才実開二月 日」。 | 横田友治「伊勢崎地方の中世石造物一瞥」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市 1987 |

略称：群理文：財団法人群馬県歴史文化財調査事業団

第4章 検出された遺構と遺物

概要 本遺跡は東西の谷地に接する微高地に立地することから、居住及び生産遺構が重層し、検出された遺構は旧石器時代から近世以降までわたる。以下にその概要を示す。

旧石器時代遺物は、2区で石刃1点、3区で尖頭器1点が出土した。

古墳時代の竪穴住居跡は、1区のみ分布し12軒を検出した。また、3区から4区にかけて北東-南西方向に走向する14号溝は、FAに被覆された導水路であり、生産域が想定される西側の谷地への関連性が強い。

平安時代の竪穴住居跡は、1区のみ分布し3軒を検出した。5B号住居跡は埋土中に鉄滓を多数含んでいたほか、床面の円形土坑内にチップを多く含んだ小鍛冶の住居跡に位置付けられ、同じく5B号住居跡埋没後の窪みを利用した5A号住居跡も鍛冶との関連が想定される。同時期では周辺において、4基の鍛冶遺構が屋外に分布し、鉄精錬を想定させることから当時の小鍛冶工人の様子を知る資料として注目される。

中世の遺構は、1～4区で検出できた。1区では南北に走向する1号堀に区画された館跡が存在し、その内側である堀内部分及び外側の堀外部分で、主軸方位から第1～3類・その他の4つに分類できる掘立柱建物跡群ほかを検出した。なお、堀内部分は調査範囲の事情で南北に分断されたことから、便宜的に北堀内部分、南堀内部分として区別した。詳細な遺構数量は、堀内部分で掘立柱建物跡24棟、井戸跡6基、土墳墓2基、火葬跡1基、土坑多数、堀外部分では掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、火葬跡5基、土坑多数である。特に掘立柱建物跡は、南堀内部分で複雑に重複しており、同一分類内においても重複関係から第1類でA・Bの2群に、第2・3類で各々A・B・C群ずつの3群に細分することができた。その詳細な検討はまとめて譲るが、複数の掘

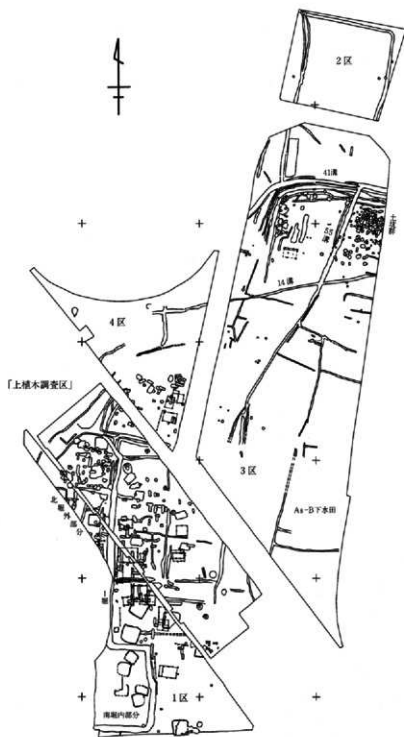
立柱建物跡を配置して長期間存続したことが判明した。また、こうした主軸方位による分類は堀外部分にも適用でき、第3類の時期に遺構数の最大値を持つ。館跡は「上植木調査区」で1号堀が立ち上がってしまうことから、完全に閉鎖されていないが、1区内で4か所の入口遺構を検出した。1～3号入口遺構は杭や柱材のほか、やや多くの木器が遺存していた。

2区では中世の井戸跡4基を検出したが、掘立柱建物跡などの遺構は伴わない。関連する遺構としては、後代まで存続した1・2号溝が想定されるが、東隣する三和工業団地遺跡（伊勢崎市調査分）でも当期の堀及び井戸跡群が検出されており、一連の遺構として捉えられる。

3区では掘立柱建物跡1棟が検出されたが、主軸方位から中世とした。

4区では掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基、土墳墓2基、土坑31基が検出された。掘立柱建物跡の主軸方位は全て同じ第4類に分類でき、1区の掘立柱建物跡群とは一致しないことから、时期的な違い或いは性格的な違いを表すものとして検討される。

近世以降では明確な年代比定はできないものの、埋土及び出土遺物から近世以降であるものを掲載した。溝は近世当初に本地域が開田された状況を示しており、特に41号溝とそれに並走する溝は、「大井戸」から導水する本流として、慶長18年（1613）伊勢崎藩主堀垣長茂時代に構築された鯉沼へ引水した本流である可能性が高い。



第8図 全体図 (1:1,600)

第1節 旧石器時代

石器No.1 (PL 6-1, 37)

黒色頁岩製の石刃。打面の一部に自然面を残し、石器の先端部に折断痕が認められる。

A地点より出土。A地点では、後期旧石器時代を通しての水成堆積層が認められた。石器出土層のⅧ層も水成堆積層である。Ⅵ層がA Tを含む層であり、Ⅷ層はいわゆるA T下の暗色帯部分に相当する層と考えられる。

石器No.2 (PL 6-2, 37)

チャート製の尖頭器。B地点より出土。B地点でも、後期旧石器時代を通しての水成堆積層が認められる。石器出土層のⅤ層も水成堆積層である。Ⅴ層

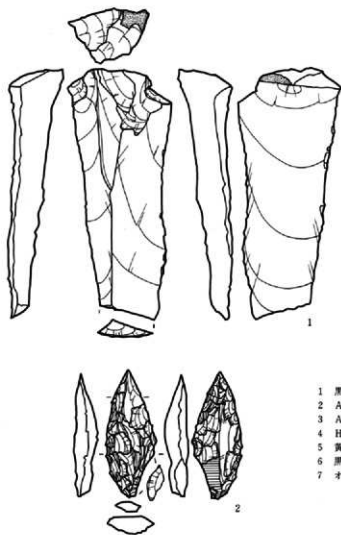
は、As-B Pの一次堆積層の直上層に位置し、As-B Pが混在する層である。

地形的特質と石器群について

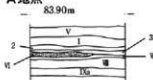
石器検出地の周辺は、三和工業団地I遺跡をはじめとして後期旧石器時代の石器群が数多く発見されている。そして、遺跡地周辺の当時の地理的環境も復元されている(津島 1999 P10)。

本遺跡からは2点の石器が確認されたにすぎない。しかし、それは低地域と想定される地点から出土しており、同地域における旧石器時代の人の活動を考える上では重要な石器群である。(津島)

津島秀幸 1999 『三和工業団地I遺跡—旧石器時代編—』

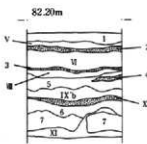


A地点



- 1 灰色砂質土
- 2 黄灰色砂質土
- 3 濃いオレンジ色砂質土 鉄分の凝集産物あり。

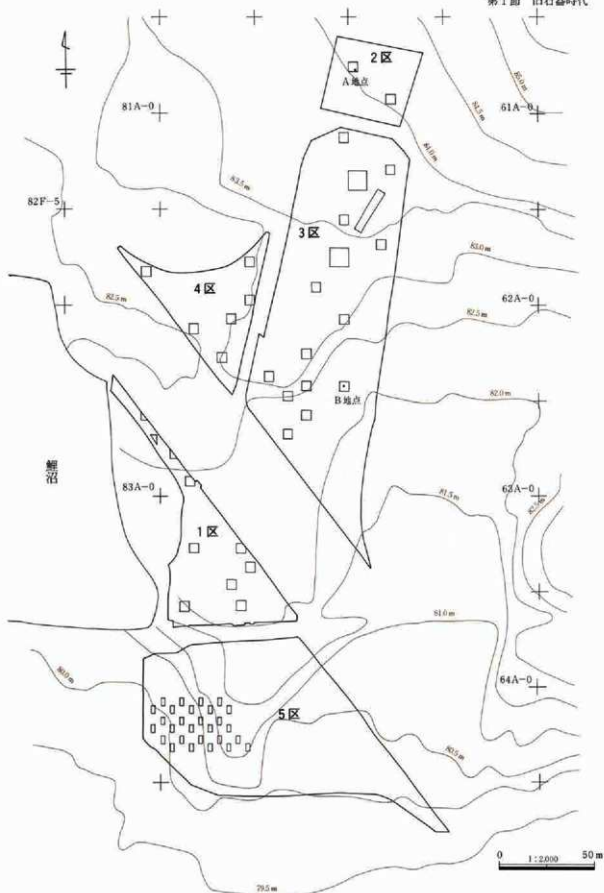
B地点



- 1 黒褐色土 (IVに似る) 粗粒軽石 (As-OK₁) 含む。
- 2 As-B Pグループ
- 3 A T
- 4 Hr-HA
- 5 黄灰色粘質土と黄灰色軽石 (Hr-HA) の混土
- 6 黒色粘質土
- 7 オリーブ褐色粘質土

0 1:80 2m

第9図 旧石器時代出土遺物と出土地点土層断面図

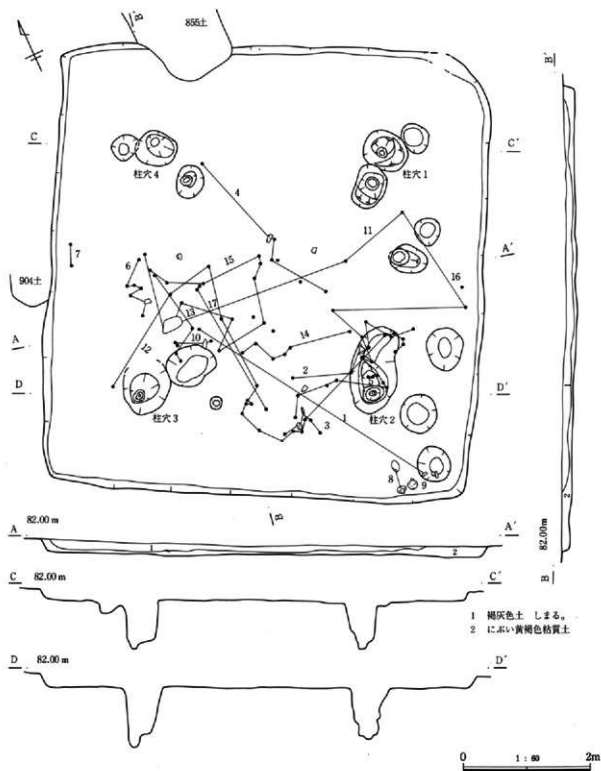


第10図 旧石器時代遺物出土地点と試掘トレンチ位置図

第2節 古墳時代

第1項 竪穴住居跡

1区1号住居跡 (PL 6-3、37、38)



第11図 1区1号住居跡

位置 74 I・J-7グリッド

重複 855・904号土坑より古い。

形態 ほぼ正方形

主軸方位 N-27°-E

規模 南北7.07m、東西6.86m

壁 壁高は北辺12~17cm、東辺12~17cm、南辺16~20cm、西辺14~21cmで平均16.1cmである。

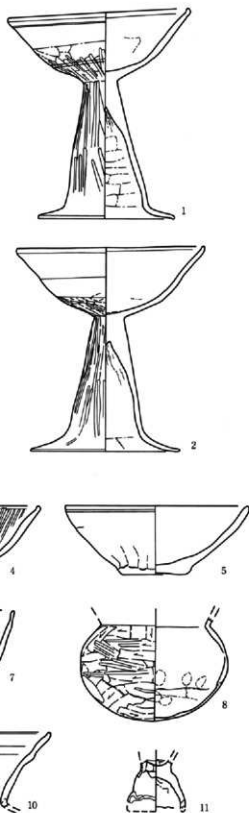
カマド・炉 なし

内部施設 柱穴1の規模は径72×58cm、深さ74cm、柱穴2の規模は径139×74cm、深さ83cm、柱穴3の規模は径(77)×75cm、深さ73cm、柱穴4の規模は径61×52cm、深さ78cmで、全て楕円形を呈する。その他、径19~79cmのほぼ円形の小穴10基が検出された。床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

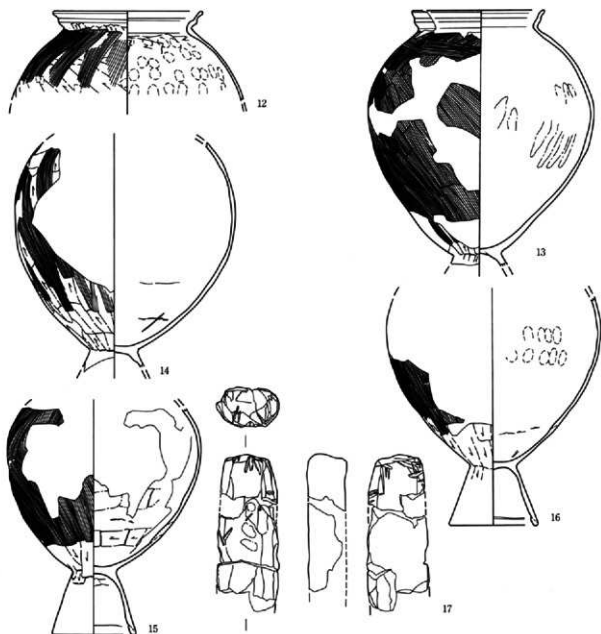
埋没状況 壁際から三角堆積しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 中央部南寄りの柱穴2・3周辺にはば集中する。また南東隅にはほぼ完形の土師器埴(7・8)が置かれていた。

時期 出土遺物から4世紀後半に比定される。



第12図 1区1号住居跡出土遺物(1)



第13図 1区1号住居跡出土遺物(2)

1区2号住居跡 (PL 6-4, 38)

位置 74H・I-7・8グリッド

重複 なし

形態 ほぼ正方形

主軸方位 N-13°-E

規模 南北6.82m、東西7.10m

壁 壁高は北辺13-18cm、東辺4-16cm、南辺5-12cm、西辺6-12cmで平均10.8cmである。

カマド・炉 なし

内部施設 柱穴1の規模は径60×57cm、深さ128cm、

柱穴2の規模は径65×50cm、深さ90cm、柱穴3の規模は径65×56cm、深さ127cm、柱穴4の規模は径55×54cm、深さ123cmで、全て円形を呈する。南西隅に径170×142cm、深さ16cmの円形の土坑と、径(213)×80cm、深さ17cmの長楕円形の土坑、中央部にも径208×65cm、深さ5cmで、同じく長楕円形の土坑が検出された。その他、径62-98cmのほぼ円形の小穴6基が検出された。

床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平さ

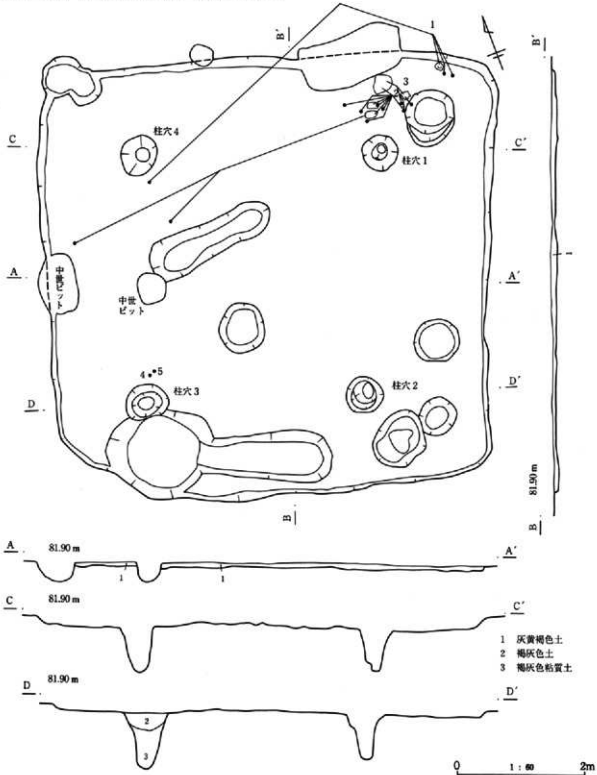
れていたものと見られる。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

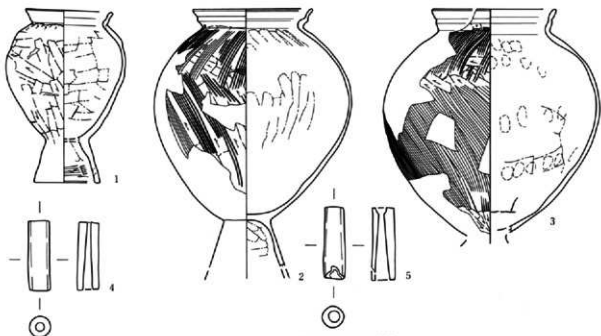
遺物出土状態 出土遺物は多くない。北東隅円形土

坑の西側で土師器台付甕(1・2・3)、柱穴3付近で管玉(4・5)が出土している。

時期 出土遺物から4世紀後半に比定される。



第14図 1区2号住居跡



第15図 1区2号住居跡出土遺物

1区3号住居跡 (PL6-5)

本住居跡の北東隅は、上植木町田遺跡で12号住居跡として調査されていたものである。

位置 74H・I-5・6グリッド

重複 なし

形態 はほぼ半分が調査区域外となるが、方形を呈するものと考えられる。主軸方位 N-11°-E

規模 南北6.68m、東西6.82m

壁 壁高は北辺16~20cm、東辺14~17.5cm、南辺0~1cm、西辺2~6cmで平均9.6cmである。

カマド・炉 なし

内部施設 柱穴1の規模は径90×66cm、深さ48cm、柱穴2の規模は径80×56cm、深さ46cmで、ともに不整形円形を呈する。その他、径18~51cmのほぼ円形の小穴6が検出された。

床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

遺物出土状態 出土遺物は縄文前期土器片(諸磯式)1片が混入するのみである。

時期 「上植木調査区」を検討の結果、4世紀後半に比定する。

1区4号住居跡 (PL6-6)

位置 74I-7・8グリッド

重複 75・90・96・1075号土坑よりも古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-41°-E

規模 南北(4.74)m、東西5.00m

壁 壁高は北辺2~7cm、東辺3~8cm、南辺3cm、西辺3~6cmで平均4.6cmである。

カマド 検出できなかったが、南辺やや東寄りに焼土が多く分布しており、75号土坑によって破壊され消滅した可能性がある。

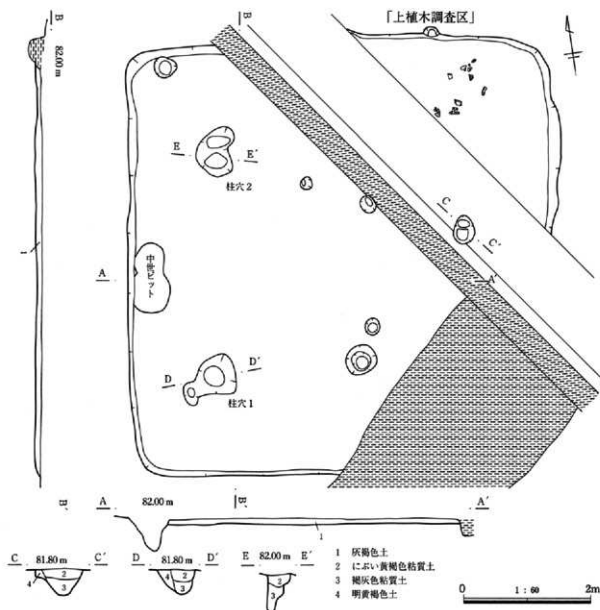
内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し円形を呈する。規模は径73×71cm、深さ39cmである。その他、北東隅に径(70)×57cm、深さ12cmの円形の土坑が検出された。

床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

遺物出土状態 出土遺物は土師器高杯・甕片等わずかである。

時期 出土遺物から4世紀後半に比定される。



第16図 1区3号住居跡

1区6号住居跡 (PL6-7, 39)

位置 74E・F-7グリッド

重複 5A・5B号住居跡より古い。

形態 ほぼ正方形

主軸方位 N-12°-W

規模 南北5.32m、東西(5.27)m

壁 壁高は北辺3-13cm、東辺16-21cm、南辺4-10cm、西辺9-11cmで平均10.9cmである。

カマド・炉 なし

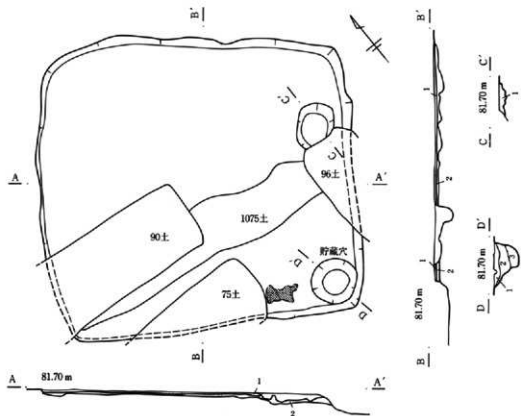
内部施設 柱穴1の規模は径(42)×32cm、深さ34cm、柱穴2の規模は径18×16cm、深さ36cm、柱穴3の規

模は径32×28cm、深さ42cm、柱穴4の規模は径30×26cm、深さ48cmで、全て円形を呈する。

床 はほぼ平坦で、貼床は見られない。掘り方面より15cm程オリーブ褐色土を盛り、やや堅く踏みしめる。掘り方 明確な床下土坑等は存在しないが、浅い不整形な落込みが多く見られる。

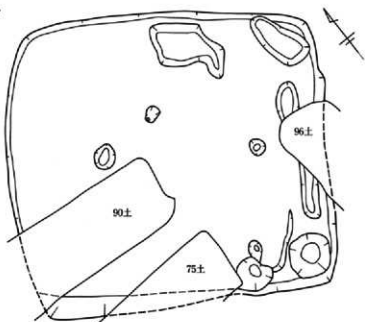
埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

遺物出土状態 出土遺物は少なく、土師器杯(1・2)、甕(3)が壁寄りに散在する。埋土中から白玉



- 1 オリーブ褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石粒1%含む。
- 2 黒褐色土 オリーブ褐色土大ブロック10%、白色軽石粒1%含む。
- 3 オリーブ褐色土

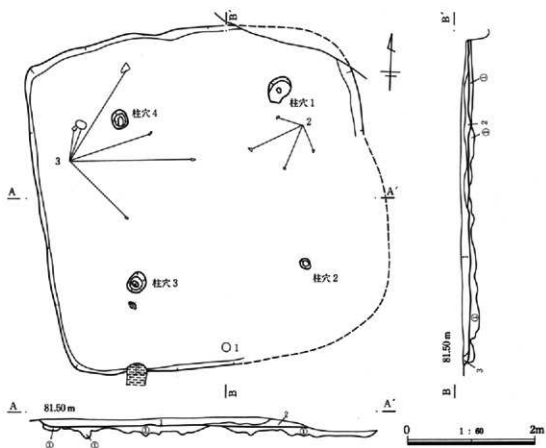
掘り方



第17図 1区4号住居跡

(4-8)が出土している。

時期 出土遺物から6世紀中葉に比定される。

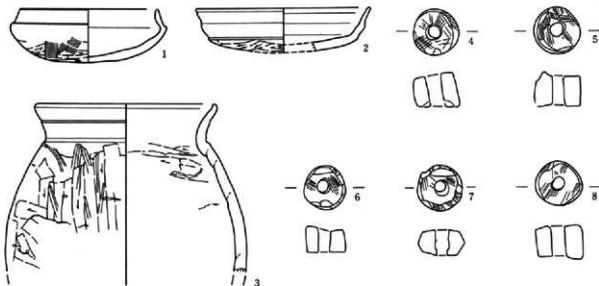


1 黒褐色粘質土 白色軽石粒1%含む。

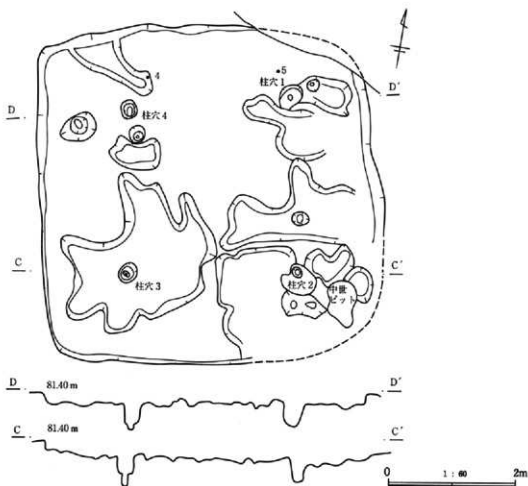
2 黒褐色粘質土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石粒1%含む。

3 黒褐色粘質土 焼土粒5%、白色軽石粒1%含む。

① オリーブ褐色粘質土 黄褐色土大ブロック20%含み、ややし
まる。麻土



第18図 1区6号住居跡・出土遺物



第19図 1区6号住居跡掘り方

1区7号住居跡 (PL 6-8、39)

位置 74D・E-5・6グリッド

重複 1号粘土採掘坑より古い。

形態 はほぼ正方形

主軸方位 N-0°

規模 南北(6.72)m、東西(6.30)m

壁 壁高は北辺11~17cm、東辺22~25cm、南辺11~15cm、西辺7~20cmで平均16.8cmである。

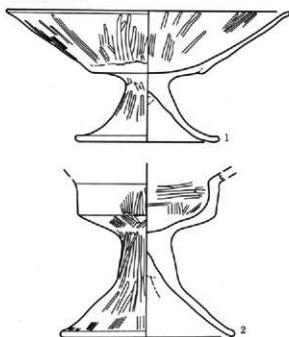
カマド・炉 なし 内部施設 なし

床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されていたものと見られる。

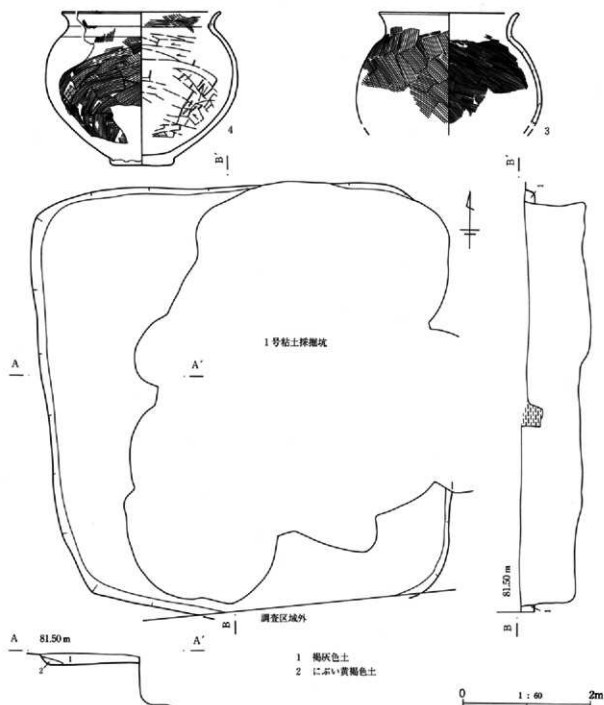
埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

遺物出土状態 出土遺物は少ない。1号粘土採掘坑による攪拌が著しく、出土位置は不明。

時期 出土遺物から4世紀前半に比定される。



第20図 1区7号住居跡出土遺物(1)



第21図 1区7号住居跡・出土遺物(2)

1区9号住居跡 (PL7-1~4)

位置 74F・G-7・8グリッド

重複 64-68・70・72B・75号土坑より古い。

形態 ほほ正方形

主軸方位 N-15°-E

規模 南北(5.57)m、東西(5.86)m

壁 壁高は北辺9~12cm、東辺3~10cm、南辺4~

16cm、西辺4~6cmで平均8.0cmである。

カマド・炉 なし

内部施設 柱穴1の規模は径68×58cm、深さ38cm、柱穴2の規模は径58×44cm、深さ40cm、柱穴3の規模は径40×38cm、深さ34cm、柱穴4の規模は径48×46cm、深さ60cmで、全て円形を呈する。

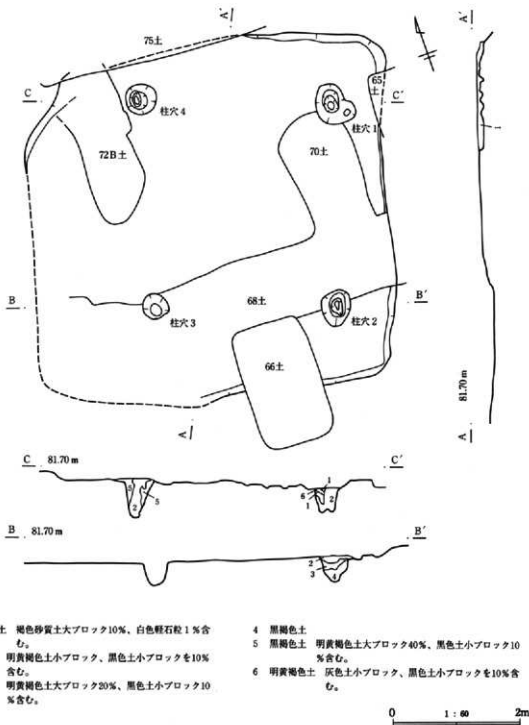
第4章 検出された遺構と遺物

床 本住居跡は壁高も浅いことから、床面は削平されてきたものと見られる。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋填か判断できない。

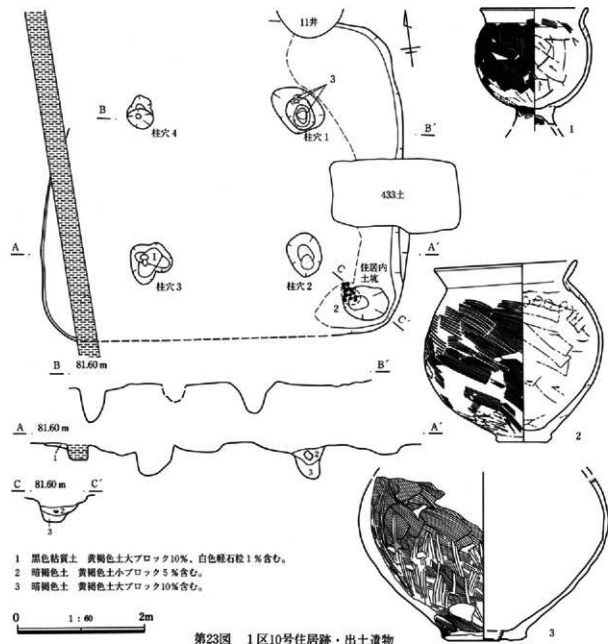
遺物出土状態 出土遺物は非常に少なく、土師器残片3片のみである。

時期 出土遺物から4世紀代に比定される。



第22図 1区9号住居跡

1区10号住居跡 (PL 7-5-8, 39)



第23図 1区10号住居跡・出土遺物

位置 74F-8グリッド

重複 なし

形態 残存する面積が狭く詳細は不明だが、ほぼ正方形と考える。

主軸方位 N-8°-E

規模 南北(4.88)m、東西(5.80)m

壁 壁高は北辺9.5cm、東辺0~10.5cm、南辺2.5~8.5cm、西辺2.0~5.5cmで平均5.5cmである。

カマド・炉 なし

内部施設 柱穴1の規模は径90×64cm、深さ48cm、柱穴2の規模は径68×51cm、深さ50cm、柱穴3の規模は径70×67cm、深さ40cm、柱穴4の規模は径50×42cm、深さ49cmで、全て不整形円形を呈する。その他、南東隅に径70×50cm、深さ40cmの住居内土坑が検出された。

床・埋没状況 柱穴以外ほとんど残存せず不明。

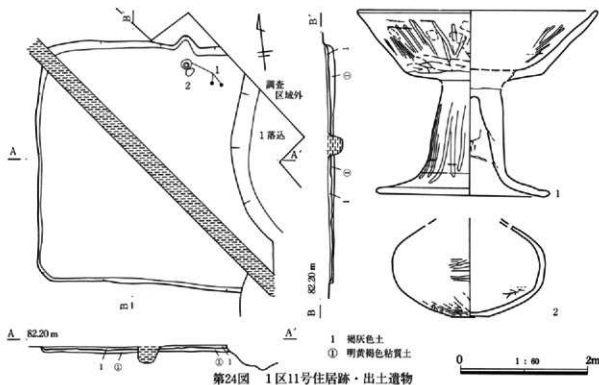
遺物出土状況 出土遺物は非常に少ない。住居内土坑から土師器甕(2)、柱穴3から小型台付甕(1)が

第4章 検出された遺構と遺物

出土している。

時期 出土遺物から4世紀前半に比定される。

1区11号住居跡 (PL8-1、39、40)



第24図 1区11号住居跡・出土遺物

位置 73C-9グリッド

重複 2号土墳墓、1号落込より古い。

形態 一部調査区域外となるが方形を呈する。

主軸方位 N-8°-E

規模 南北3.82m、東西(3.74)m

壁 壁高は北辺2~16cm、南辺5~7cm、西辺4~14cmで平均8.0cmである。

カマド 北辺に位置し、住居内に燃焼部を持つ。天井部・両袖部とも崩壊して残存しない。規模は、焚口~煙道が0.38m、袖焚口幅が0.26mである。火床面は床面とほぼ同レベルで、2cm程焼土が堆積している。掘り方は火床面から7cm程を測る。

内部施設 なし

床 ほぼ平坦で貼床及び硬化面は見られない。掘り方面より9cm程黄褐色土を盛る。

掘り方 ほぼ平坦で、明確な床下土坑等は存在しない。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋

没か人為埋填か判断できない。

遺物出土状態 出土遺物は少ないが、カマドから土師器高杯(1)・壺底部(2)が出土している。

時期 出土遺物から5世紀後半に比定される。

1区12号住居跡 (PL8-2、40)

位置 73B・C-9グリッド

重複 670号土坑、2号落込より古い。

形態 残存する面積が極めて狭く不明。

主軸方位 不明

規模 南北(2.44)m、東西(2.70)m

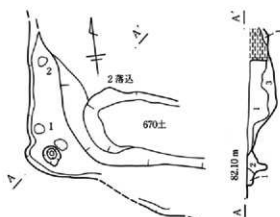
壁 壁高は南辺10~14.5cm、西辺8.5~12cmで平均11.3cmである。カマド・炉 なし

内部施設 南西隅に径33×26cm、深さ32cmの落ち込みが検出された。

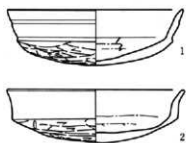
床・埋没状況 南西隅以外残存しておらず不明。

遺物出土状態 ほぼ完形の土師器杯2個(1・2)が転置されていた。

時期 出土遺物から6世紀後半に比定される。



第25図 1区12号住居跡・出土遺物



- 1 暗褐色土
 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
 3 オリーブ褐色土

0 1:60 2m

1区13号住居跡 (PL 8-3・4、40)

位置 74G・H-4・5グリッド

重複 なし

形態 ほぼ半分が調査区域外となり不明。

主軸方位 不明

規模 南北(3.90)m、東西(4.00)m

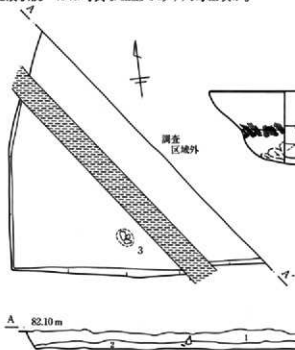
壁 壁高は南辺3~6cm、西辺1~3cmで平均3.3cmである。

カマド・炉 なし 内部施設 なし 床 不明

埋没状況 ほぼ均質な埋土であり人為埋填か。

遺物出土状態 出土遺物は少なく土師器台付壺(3)以外埋土中である。埋土からミニチュア土器(4)が出土している。

時期 出土遺物から4世紀前半に比定される。



- 1 黒褐色土 黄褐色粘土較5%含む。
 2 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック5%含む。

0 1:60 2m

第26図 1区13号住居跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

1区14号住居跡 (PL8-5)

位置 74H-5グリッド

重複 なし 形態 残存状況悪く不明。

主軸方位 不明 規模 不明 壁 不明

カマド・炉 なし 内部施設 なし

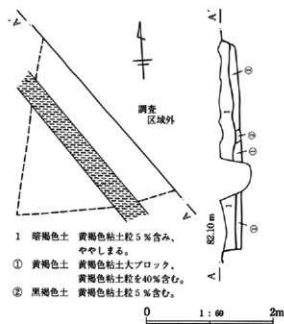
床 表土掘削時に誤って削平してしまいましたが、断面観察ではほぼ平坦。掘り方面から15cmほど黄褐色土を盛る。

掘り方 ほぼ平坦で明確な床下土坑等は存在しない。

埋没状況 ほぼ均質な埋土であり人為埋填か。

遺物出土状態 出土遺物は非常に少なく土師器杯・台付甕片2片のみである。

時期 出土遺物から4世紀代に比定される。



第27図 1区14号住居跡

第2項 溝

3区14号溝・4区14号溝 (付図4 PL8-6・7)

位置 3区中央部を東西に横断して、市道を挟んで4区につながり中央部で不明となる。

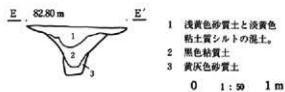
重複 3区55号溝、4区2号溝より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は3区14号溝が長さ64.72m、最大幅1.26m、深さは断面観察部で66cm、4区14号溝が長さ(24.60)m、最大幅1.62m、深さは断面観察部で74cmである。走向方位はN-78°-Eであり、傾斜に対して直交方向に設ける。断面はV字に近い逆台形を呈する。底面近くに砂質土が堆積しており流水の存在を認める。4区では埋土中位に5cm程度F Aの堆積が見られ(第5章3参照)、F

A降下時には既に廃棄されていたものとする。形態及び周辺の状況から北東500mに位置する湧水点「大井戸」流路からの導水を目的とした用水路である可能性が高い。

出土遺物 なし

時期 F A降下(6世紀初頭)以前である。



第28図 3区14号溝土層断面

第3項 まとめ

本遺跡検出の堅穴住居跡の年代は以下のとおりである。

4世紀前半 1区7・10・13号住居跡

4世紀後半 1区1・2・3・4号住居跡

(4世紀代) 1区9・14号住居跡

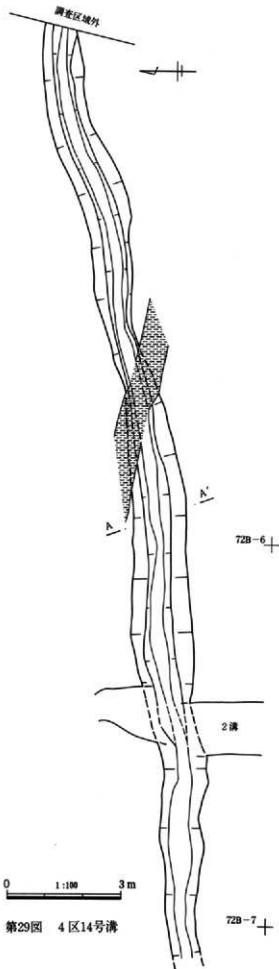
5世紀後半 1区11号住居跡

6世紀中葉 1区6号住居跡

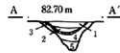
6世紀後半 1区12号住居跡

以上から住居跡の変遷を概観すると、4世紀前半から数軒程度のまとまりとして出現し、5世紀前半には消滅するが、再び1軒程度が現れ、その後消滅したこととなる。また、5世紀代については「上植木調査区」で5世紀中葉の堅穴住居跡が2軒(3・7号住居跡)、5世紀後半の堅穴住居跡が1軒(1号住居跡)検出されており、本遺跡に含めて考えれば、本遺跡区域では4世紀前半から6世紀後半まで

ほぼ継続的に居住するが、徐々に減少してゆく傾向が見える。なお、北方に近接する三和工業団地遺跡（当団調査）では、3世紀末から4世紀前半の竪穴住居跡が140軒弱存在し、また同時期の墓域として舞台遺跡（当団調査）、三和工業団地遺跡（伊勢崎市調査）で周溝墓群が調査されており、そうした領域の南端に本遺跡は位置づけられる。一方水田等の生産域は、北東の湧水点「大井戸」流域である本遺跡東及び南側の谷地と、西側の谷地が想定されるが、3区から4区を北東-南西方向に横断する14号溝は、この西側谷地に「大井戸」から導水する用水路として機能したものと考える。なお、3区14号溝に連続すると見られる溝が、北東側の三和工業団地遺跡（伊勢崎市教委調査）で検出され、北東方向（大井戸方向）の低地部へ向かって、軸を北東-南西方向に変えて、やがて不分明となることが確認されている。



第29図 4区14号溝



- 1 黄灰色粘質土
- 2 灰色粘質土 FA1%含む。
- 3 FA
- 4 黄灰色粘質土
- 5 黄灰色砂質土

第3節 平安時代

第1項 竪穴住居跡

1区5A号住居跡 (PL9-1-5, 40, 41)

遺構確認面において埋土中に炭化材が散見され焼失住居跡と判断された。炭化材及び炭・灰層は、埋土の深さ約10cm下において面的に広がっており、炭化材面として調査を行った。その後、その下層の5B号住居跡出土遺物との比較結果から、炭・灰層下面を5A号住居跡、その下層を5B号住居跡とする2軒の住居跡の重複であることが判明した。

位置 74F-7グリッド

重複 5B・6号住居跡より新しい。

形態 横長方形 主軸方位 N-17°-E

規模 南北3.64m、東西5.96m

壁 不明 カマド なし

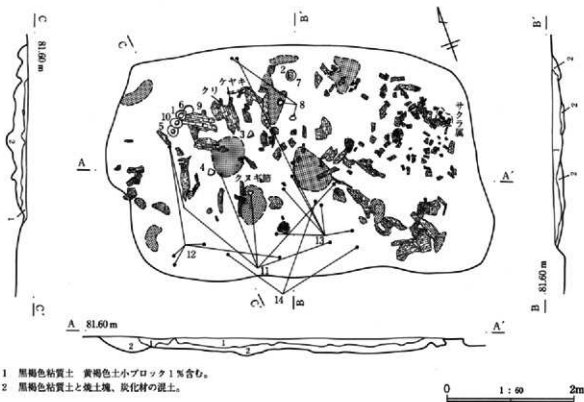
内部施設 炭・灰層下面を面的に調査したが、柱穴等を精査しておらず、内部施設は未検出である。

床 詳細は不明だが断面観察の結果ほぼ平坦である。

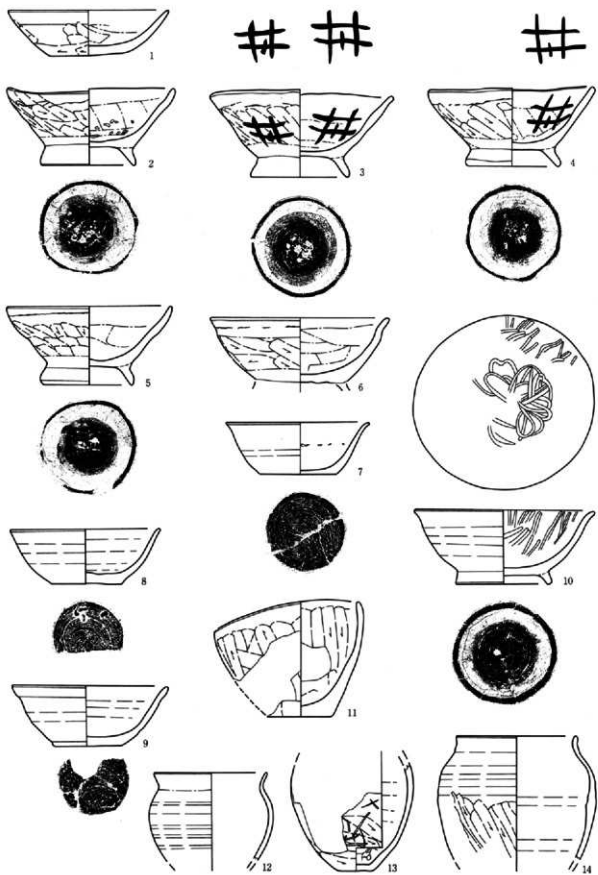
埋没状況 ほぼ均質な埋土であり、焼失後人為埋填したものと考える。

遺物出土状態 北西部に完形の土師器椀(3・4・6)、須恵器杯(9)・椀(10)が、また北壁際中央寄り土師器椀(2)・須恵器杯(7)が転置されており、状況から見て伏せられていたものと見られる。その他は須恵器壺(12-14)等が細片となって散在していたが、全体として出土遺物量は少ない。炭化材はクリやケヤキ等が混在し(第5章参照)、住居の柱材はかの用材と考えられるが、分布を見るとほぼ南西部分が空白となる一方、南東隅から中央部へ向かって連続する炭化材が出土している。こうした状況から見て、上屋が北側へ焼け落ちた状態を示すものと考えられる。

時期 出土遺物から10世紀前半に比定される。



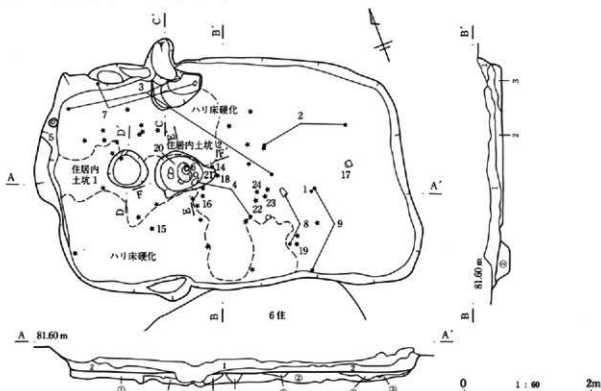
第30図 1区5A号住居跡



第31图 1区5A号住居跡出土遺物

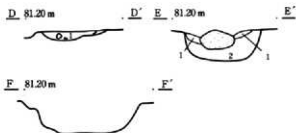
第4章 検出された遺構と遺物

1区5B号住居跡 (PL10-1~5, 41, 42)



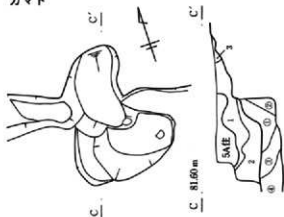
- 1 灰褐色粘質土 黄褐色土小ブロック、焼土粒を1%含む。
 2 灰褐色粘質土 黄褐色土大ブロック40%含む。
 3 黒色粘質土 黄褐色土大ブロック20%含む、ややしまる。

- ① 暗褐色粘質土 ややしまる。床土。
 ② 黒褐色粘質土 黄褐色土小ブロック20%含む。
 ③ 黒色粘質土



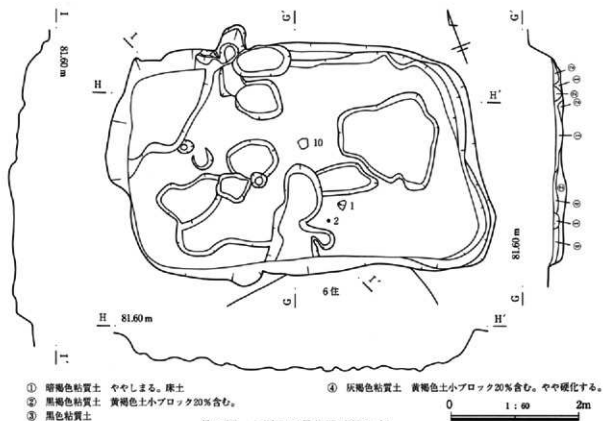
- 住居内土坑1・2
 1 暗褐色粘質土 径1~3cm大の鉄滓20%含む、しまらない。
 2 暗褐色粘質土 灰色粘土小ブロック20%含む、しまらない。チップを含む。

カマド



- 1 暗褐色粘質土 焼土粒10%、白色軽石粒5%、炭粒1%含む。
 2 オリーブ褐色粘質土 黄褐色土小ブロック10%含む。
 3 黒褐色粘質土 黄褐色土小ブロック10%含む。
 ① におい黄褐色粘質土 黒色土小ブロック10%含む。
 ② 黄褐色粘質土 灰色粘土小ブロック10%含む。
 ③ 黒色粘質土 灰色粘土小ブロック10%含む。
 ④ 灰褐色粘質土 黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

第32図 1区5B号住居跡・カマド



第33図 1区5B号住居跡掘り方

遺構確認面では5A号住居跡と同一の焼失住居跡と考えたが、掘り下げの結果別住居跡であることが判明した。埋土中からは多量の鉄滓(★)と羽口が出土することから小鍛冶の住居跡と考え、埋土全てを篩にかけた上で肉眼と磁石によって鍛冶関連遺物の検出を行った。また、床面から鍛冶に関連する住居内土坑2基を検出できた。

位置 74F-7グリッド

重複 6号住居跡より新しく、5A号住居跡より古い。

形態 横長方形 主軸方位 N-17°-E

規模 南北3.64m、東西5.96m

壁 壁高は北辺4~35cm、東辺11~32cm、南辺29.5~42.5cm、西辺26~40cmで平均27.5cmである。

カマド 残存状況が悪く、5A号住居跡により破壊された可能性がある。規模は、焚口~煙道が0.63m、袖焚口幅が0.29mである。掘り方は主軸0.60m、幅0.46mである。

内部施設 中央部やや西寄りの住居内土坑1は円形

を呈し、規模は径65×56cm、深さ13cmである。その東隣の住居内土坑2もほぼ円形を呈し、規模は径96×75cm、深さ45cmであり、埋土中から金床として使用された巨円礫が出土し、叩面を横にして土坑底面から浮いた状態であったことから原位置ではなく、住居跡廃棄時に投棄されたものと解される。また、その埋土中から鉄滓及び多量のチップが出土した。床 西側半分及び南壁際中央部で黒色粘質土を踏み固め非常に硬化した床面を検出したが、中央部の住居内土坑1・2の周辺及び東側半分では硬化面はなく非常に軟弱であった。掘り方面より10cm程黒~暗褐色粘質土を盛る。

掘り方 明確な床下土坑などは存在しないが、浅い不整形な落ち込みが多く見られる。

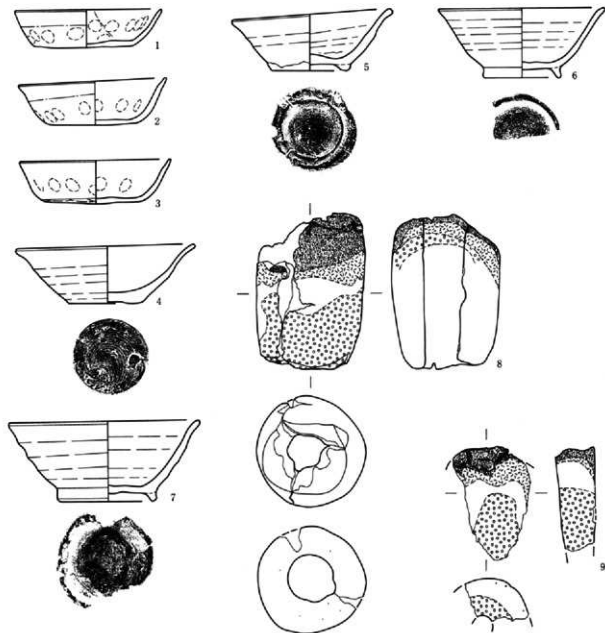
埋没状況 壁際から三角堆積しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 住居内土坑2ではほぼ完形の須恵器杯(4)・柄(7)が出土したが、投棄されていた金床の上面であることから同じく土坑内に投棄されたも

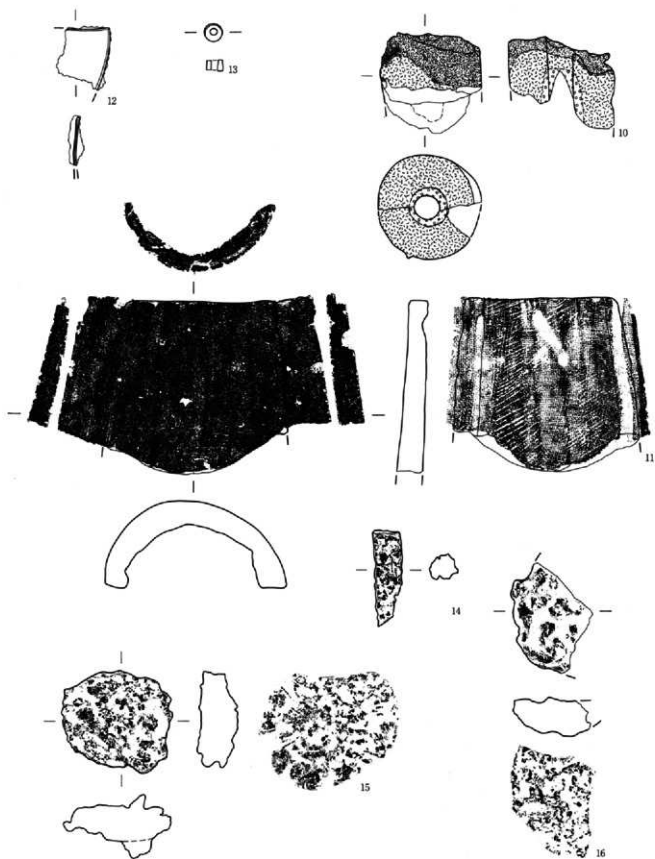
第4章 検出された遺構と遺物

のと見られる。その他は土師器杯(1~3)等が住居北側に散在していたが、全体として土器類の出土量は少ない。鍛冶関連の遺物としては、羽口(8~10)が中央部東寄り出土するが、炉等の関連する施設はなかった。鉄滓は掲載遺物のほか、碗形鉄滓片42個1.8kg、重い鉄滓56個1.65kg、やや重い鉄滓4.42kg、軽い鉄滓8.95kg合計16.82kgと多量に出土しており、鋼精錬時のスラグ材として再利用されるものとし

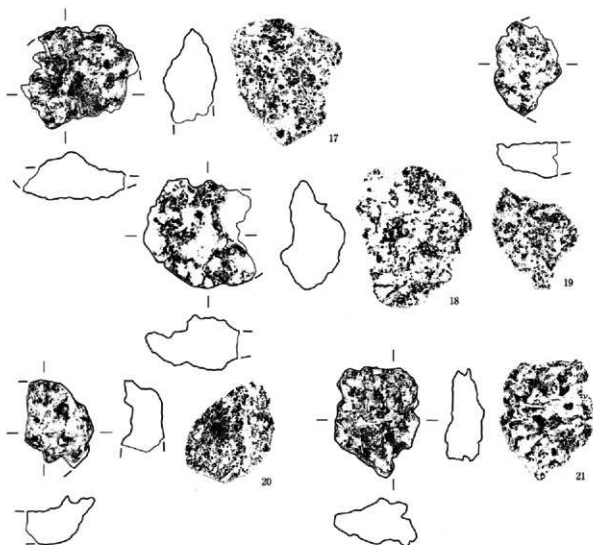
て、北側に近接する3号鍛冶遺構との関連が濃厚となる。また、住居内土坑2及び埴土からチップ(微細な鉄滓も含まれる)268gが検出され、本遺構内で鍛造行為がなされていたものと考えられる。その他最大径7.6mmの円球状の湯玉2g、羽口片900gが出土した。以上の状況は鉄滓の分析結果とも符合している。時期 出土遺物から9世紀後半に比定される。



第34図 1区5B号住居跡出土遺物(1)



第35圖 1区5B号住居跡出土遺物(2)



第36図 1区5B号住居跡出土遺物(3)

1区8号住居跡 (PL11-1-5、42、43)

位置 74F-8グリッド

重複 55号土坑、2号溝より古い。

形態 残存面積が狭く詳細は不明だが、方形と見られる。

主軸方位 N-180°

規模 南北(3.14)m、東西(1.64)m

壁 壁高は北辺12cm、東辺13~15cmで平均13.3cmである。

カマド 南辺やや東寄りに位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部・両袖部とも崩壊して残存しない。規模は、笑口~煙道が1.36m、袖笑口幅が(0.53)mである。左袖は崩壊しているが構築材とする瓦片が残存し、貯蔵穴内でも40×25×23.5cmの巨礫が出土

しており、住居廃棄時にカマドを破壊した際、袖石または天井石が投棄されたものと解される。火床面は床面よりやや下がる。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し、不整楕円形を呈する。規模は径120×73cm、深さ29cmである。その他、中央部に径62×53cm、深さ7cmの住居内土坑と、やや南寄りに径(68)×(38)cm、深さ(8)cmの落ち込みが検出された。

床 ほぼ平坦で、貼床及び硬化面は見られない。

掘り方 なし

埋没状況 ほぼ均質な粗土であり、人為埋填か。

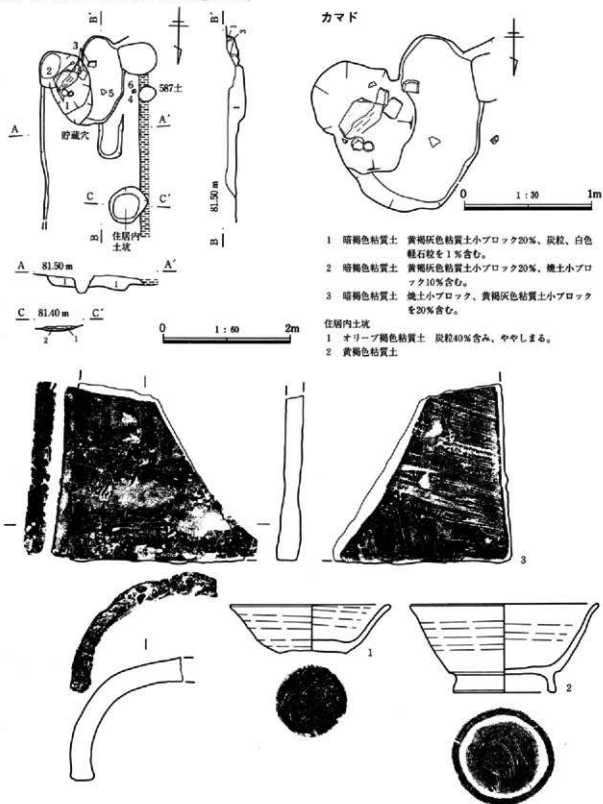
遺物出土状態 遺物はカマド及び貯蔵穴に集中しており、瓦(3~6)はカマドの袖等の構築材として使



第37图 1区8号住居跡出土遺物(1)

われていたものと想定される。

時期 出土遺物から9世紀中葉に比定される。

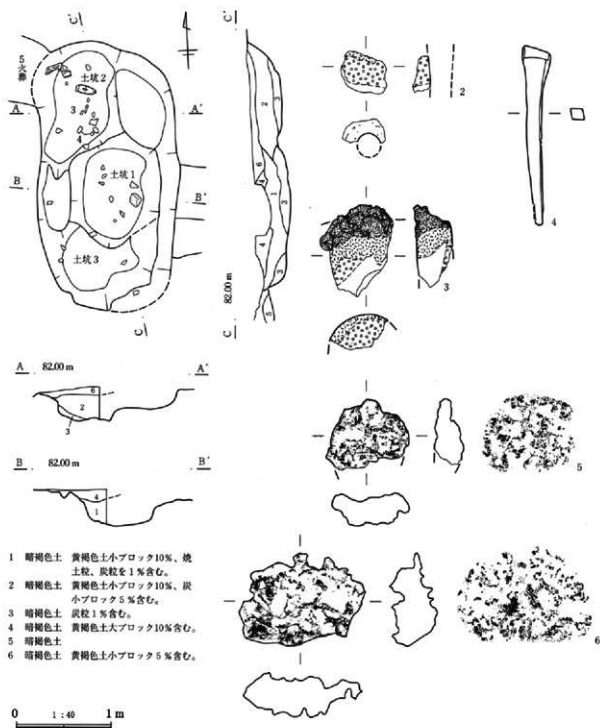


第38図 1区8号住居跡・カマド・出土遺物(2)

第2項 鍛冶遺構

1区1号鍛冶遺構 (PL 12-1・2, 43)

全体の形状は長楕円形で、東西1.48m、南北2.84mである。内部には3基の土坑が重複する。土坑の形状は全てほぼ隅丸方形で、底面は丸みを持つ。新旧



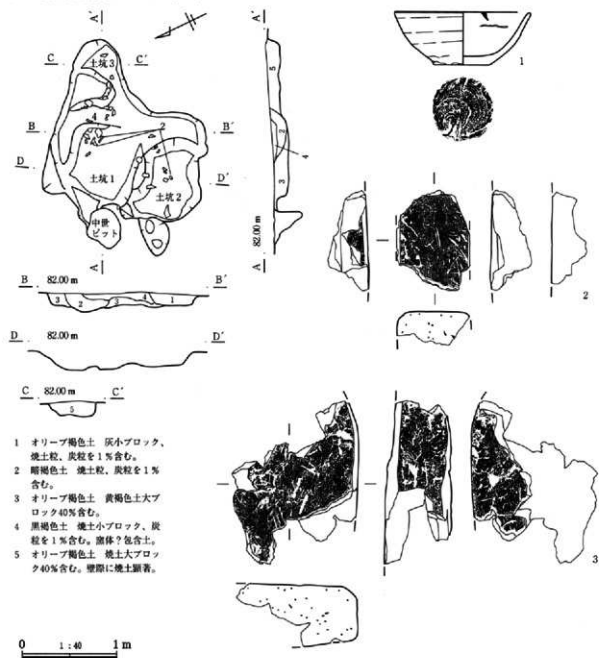
- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック10%、焼土粒、炭粒を1%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック10%、炭小ブロック5%含む。
- 3 暗褐色土 炭粒1%含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。

第39図 1区1号鍛冶遺構・出土遺物

関係では中央部の土坑1が新しく、両端の土坑2・土坑3がそれより古い。規模は土坑1が長辺122cm、短辺95cm、深さ41cm、土坑2が長辺140cm、短辺110cm、深さ36cm、土坑3が長辺119cm、短辺(97)cm、深さ48cmである。遺物は埋土中から土師器杯(1)、鉄釘(4)及び土師器・須恵器片がやや多く出土している。また鍛冶関連遺物としては掲載した羽口片(2・3)、鉄滓(5・6)のほか、椀形鉄滓80g、重い鉄滓230g、

やや重い鉄滓105g、軽い鉄滓92g合計507gが出土し、埋土中にも焼土が少量混入することから、銅精錬に関連する遺構である可能性が高く、鉄滓の分析結果とも符合している。本遺構は調査時に半載した結果、鍛冶関連であることが判明したため、埋土の精査は半分しか行っておらず、鍛冶関連遺物の検出量が少ないのはそれに因るところも大きい。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

1区2号鍛冶遺構 (PL 12-3・4、44)



第40図 1区2号鍛冶遺構・出土遺物

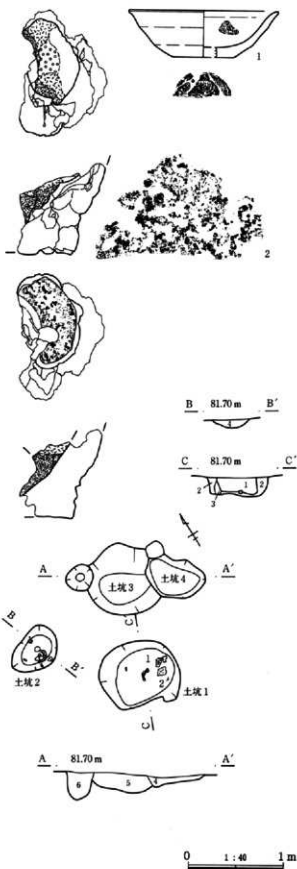
第4章 検出された遺構と遺物

全体としてL字状を呈し、規模は東西1.69m、南北2.00mである。構造は3基の土坑よりなる。土坑1は隅丸方形で、規模は長辺106cm、短辺75cm、深さ20cmである。底面は平坦だが、硬化面は見られない。土坑2は不整形円形。規模は径88×73cm、深さ16cmである。土層観察断面に垂直の立ち上がりが見られることから、木枠等を伴う水槽であったと考える。土坑3は不整形円形。規模は径71×65cm、深さ16cmである。平面確認段階では埋土中に多く焼土を含み、特に壁際に焼土が顕著に分布したことから、炉跡を想定して調査を行った。しかし掘り下げの結果、外形の輪郭は不鮮明となり、壁や底面の焼土化もないことから遺構の性格は特定できなかった。遺物は内側の口縁から底部にかけてケイ化物が付着する須恵器杯(1)、スサを多く混入するレンガに似た粘土塊(2・3)のほか土師器片がやや多く出土している。鍛冶関連遺物は掲載した輪形鉄滓(4)以外、埋土中を精査しても検出できず、鍛冶行程の性格は不明である。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

1区3号鍛冶遺構 (PL 12-5・6, 44)

4基の土坑で構成され、東西2.24m、南北1.73mの範囲に散在する。中心となる土坑1は隅丸方形で、規模は長辺83cm、短辺68cm、深さ21cmである。土層観察断面に垂直の立ち上がりが見られることから、木枠等を伴う水槽であったと考える。土坑2・4ともに埋土に焼土を含むため、土坑3も含めて一連の遺構と考える。規模は土坑2が径56×39cm、深さ9cm、土坑3が径28×26cm、深さ29cm、土坑4が径64×41cm、深さ12cmである。遺物は土坑1から内側にケイ化物が付着した須恵器碗片(1)、羽口が入ったままで精錬した容器の底部の形態をそのまま留め

- 1 黒色砂質土 黄褐色土大ブロック5%、焼土粒、炭粒を1%含む。
- 2 オリーブ黒色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 3 黒色土 黄褐色土小ブロック10%含む。
- 4 暗褐色土 焼土大ブロック、黄色土大ブロック、炭粒を10%含む。
- 5 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 6 黒色土 黄褐色土大ブロック20%含む。

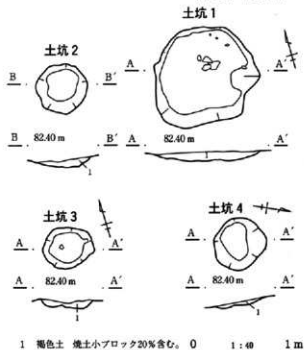


第41図 1区3号鍛冶遺構・出土遺物

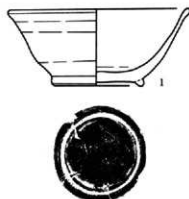
る鉄滓(2)が出土したが、遺物出土量は土坑2も含めて極めて少ない。土坑1ではその他チップ等がわずかの0.11g検出できた。土坑2・4に焼土が混入する状況を考慮すれば、銅精錬に関連する遺構である可能性が高い。時期は出土遺物から10世紀前半に比定される。

3区1号鍛冶遺構 (PL12-7・8、13-1・2、44)

4基の土坑で構成され、東西4.10m、南北6.20mの範囲に散在する。中心となる土坑1は不整形形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦。規模は径110×100cm、深さ12cmである。この土坑から西へ1.60mの間隔をとって土坑2があり、そこから北へ5.21mで土坑3、更にそこから東へ3.05mで土坑4が存在する。これらの土坑は全て粗土中に多量の焼土大ブロックを含んでいた。規模は土坑2が径54×52cm、深さ11cm、土坑3が径55×44cm、深さ10cm、土坑4が径55×49cm、深さ10cmである。遺物は土坑1から須恵器碗(1)が出土したほか、土坑2・3から須恵器片がわずか出土している。鍛冶関連遺物としては、土坑1から重い鉄滓100g、やや重い鉄滓340g、軽い鉄滓35g、羽口片60g、チップ(微細な鉄滓を含む)が64g、最大径3.8mmの円球状の湯玉1gが検出されており、土坑2～4も含めて銅精錬及び鍛造両方の行程に関連する遺構である可能性が高い。時期は出土遺物から9世紀後半に比定される。



1 褐色土 焼土小ブロック20%含む。 0 1:40 1m



第42図 3区1号鍛冶遺構・出土遺物

第3項 溝

4区4号溝 (PL13-3・4)

位置 調査区中央部から南壁に向かって走向する。

重複 なし

形態 ほぼ直線状で、南側がやや湾曲する。規模は長さ12.32m、最大幅1.06m、深さは断面観察部で15cmである。走向方位はN-60°-Eである。断面は皿状で浅い。As-Bの純堆積によって埋没するが用途は不明。

出土遺物 なし

第4項 As-B下水田跡

3区As-B下水田跡 (付図4 PL13-5~8)

位置 62J・72Jグリッドライン以南、2グリッドライン以東の約南北120m、東西30mの範囲に位置する。

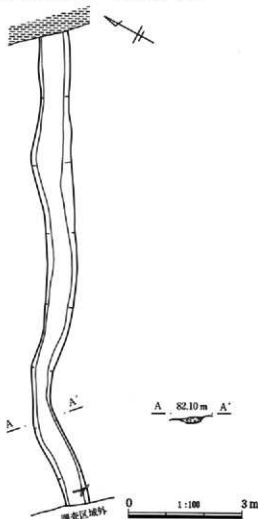
地形 湧水点「大井戸」流域低地へ向かって緩やかに東南傾斜しており、その低地に向かってAs-Bが厚く堆積する傾向にある。

形態 明確なアゼは未検出であり区画も不明。73C-1グリッドにはアゼの一部が残る。また、73G・H-0・1グリッドではコンタの状況から区画が想定される。取配水の方法も全く不明であるが、用

第4章 検出された遺構と遺物

水としては北東500mに位置する湧水点「大井戸」または北西400mの湧水点「角弥清水」水系からの導水が想定できる。

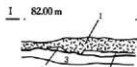
耕作土 黒色粘質土 出土遺物 なし



第43図 4区4号溝

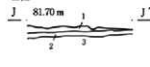
G 82.40 m G'

南壁



- 1 砂礫 As-B二次堆積層。
- 2 黒色粘質土
- 3 灰黒色粘質土

畦部



- 1 黒色粘質土 白色軽石5%含む。
As-B下水田耕土。
- 2 灰黒色粘質土 白色軽石1%含む。
- 3 灰黒土 鉄分の凝集斑紋あり。

0 1:200 5m

0 1:50 2m

第44図 3区As-B下水田跡エレベーション・南壁・畦部土層断面

第5項 まとめ

(1) 竪穴住居跡の変遷

本遺跡検出の竪穴住居跡の年代は、9世紀中葉が8号住居跡、9世紀後半が5B号住居跡、10世紀前半が5A号住居跡である。また「上植木調査区」でも、9世紀後半が2・4・5・6号住居跡、10世紀前半が8・11号住居跡と同様な状況を示しており、9世紀中葉に出現した竪穴住居跡は10世紀前半まで数件程度の集落を構成するが、10世紀後半には消滅したものと整理される。なお、3区東半分でAs-B下水田(12世紀初頭)が検出されたことから、9・10世紀においても生産域と位置付けることが可能と考える。

(2) 鍛冶関連遺構

本遺跡検出の9世紀後半の5B号住居跡は鍛冶跡を残す小鍛冶の住居跡であり、一部に鋼精錬用と見られる鉄滓を備蓄していたものと考えられる。また、5A号住居跡は5B号住居跡埋没後の窪地を利用し10世紀前半に比定されるが、同時期の鋼精錬跡と見られる3号鍛冶遺構が近接しており関連性が高く、同様に鍛冶に関連する住居跡と位置付けられる。したがって、南北50m内に分布する同時期の1・2号鍛冶遺構を含めた領域を設定することができる。なお、5B号住居跡と同時期の9世紀後半の屋外鍛冶遺構としては、やや離れるが3区1号鍛冶遺構がある。

第4節 中世

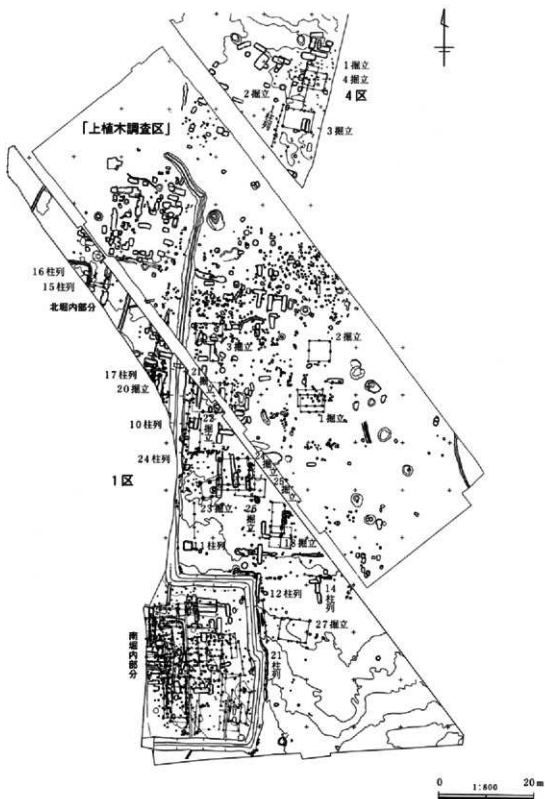
概要 中世遺構は、1区と4区で多数検出されたが、特に1区では1号堀に区画された館跡が発見され、3・4区や「上植木調査区」もその影響下にあることがわかった。1区では区画疆である1号堀が南北に走向しており、調査区をほぼ東西に分割している。中世遺構は特に西南部の方形の張り出し部分で顕著に分布していたため、1号堀より西側を館内部と結論づけ、西側を堀内部分、東側を堀外部分と称することとした。ただし、調査範囲の関係で堀内部分が南北に分断されるため、北側を北堀内部分、南側を南堀内部分と細分した。中でも数量が多い遺構として、掘立柱建物跡・柱穴列・土坑があり、掲載に当たっては遺構番号によらず堀内・外部分の順に行なった。また、南堀内部分ではそれらが顕著に重複しており、幾つかに時期区分されることが想定された。そこで主軸方位に着目したところ、第2表のとおり、その他を含めて5分類されることが判明した

ため、この分類を時期区分の指標として採用し掲載順を確定した。なお、分類は第1～3類の順で年代が新しくなるよう配慮したが、第4類は年代順によらない。また、同じ分類内においても重複があり細分が可能であったが、総合的な検討を加える意図をもって本節末のまとめで細分を示した。

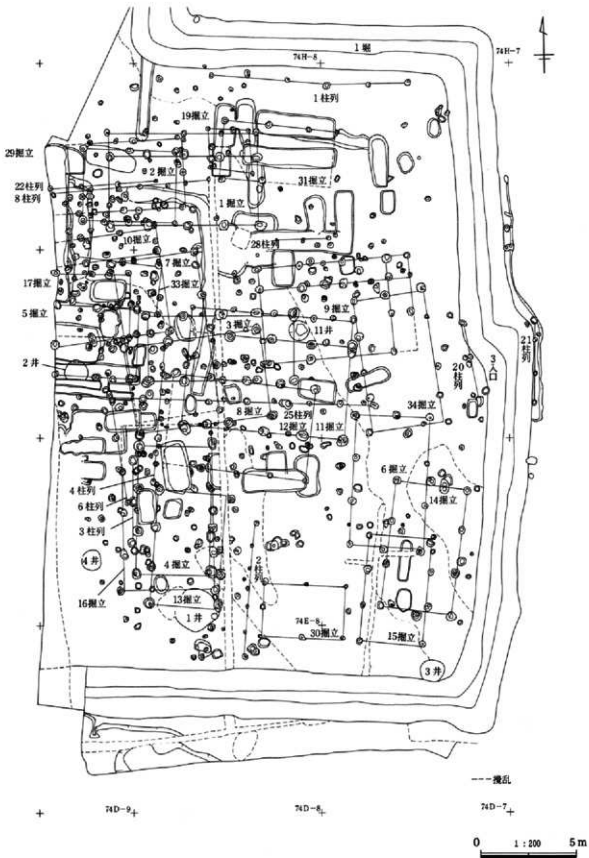
土坑は掘立柱建物跡と相関関係が強く、主軸方位によって同様な分類が可能であるが、数量が多く混乱を避けるため、巻末の計測表にその分類を示すこととした。本節で扱う遺構は、相互に共存し一括性が非常に高いものと見られ、館跡とその周辺という景観として捉えることも可能である。

第2表 掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位一覧表

| | 主軸方位 | | 1区堀内部分 | | 1区堀外部分 | | 主軸方位 | | 1区堀内部分 | | 1区堀外部分 | |
|-----|---------|------|---------------|------|-------------|------|---------|------|--------------|------|--------|-----------|
| | 1区堀内 | 1区堀外 | 1区堀内 | 1区堀外 | 1区堀内 | 1区堀外 | 1区堀内 | 1区堀外 | 1区堀内 | 1区堀外 | 1区堀内 | 1区堀外 |
| 第1類 | N-81°-W | | | | | | N-9°-E | | | | | 27掘立 |
| | N-82°-W | | 33掘立 | | 14柱列 | | N-8°-E | | | | | 10柱列 |
| | N-83°-W | | 12掘立・16柱列 | | | | N-7°-E | | 14掘立 | | | |
| | N-84°-W | | 31掘立・28柱列 | | 18掘立 | | N-6°-E | | 15掘立 | | | |
| | N-85°-W | | 11掘立・30掘立・1柱列 | | | | N-5°-E | | 13掘立・2柱列・4柱列 | | | |
| | N-86°-W | | | | 25掘立 | | N-4°-E | | | | | |
| 第2類 | N-4°-W | | | | | | N-96°-E | | 22柱列 | | | |
| | N-5°-W | | 20掘立 | | 12柱列 | | N-85°-E | | 8柱列 | | | |
| | N-6°-W | | | | | | N-84°-E | | 9掘立・17柱列 | | | |
| | N-8°-W | | 34掘立 | | | | N-82°-E | | 8掘立・10掘立 | | | |
| | N-9°-W | | 7掘立・6柱列 | | | | N-81°-E | | | | | 23掘立・24柱列 |
| 第3類 | N-10°-W | | | | | | N-80°-E | | | | | |
| | N-87°-W | | 5掘立 | | | | N-3°-E | | 6掘立 | | | 22掘立 |
| | N-88°-W | | 2掘立・25柱列 | | | | N-2°-E | | 4掘立 | | | 26掘立 |
| | N-89°-W | | 17掘立 | | 21掘立 | | N-1°-E | | 3柱列 | | | |
| | N-90° | | 1掘立 | | | | N-0° | | | | | |
| | N-89°-E | | 3掘立・25掘立 | | 24掘立 | | N-1°-W | | 16掘立 | | | 11柱列 |
| その他 | N-88°-E | | | | 21柱列 | | N-2°-W | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | |
| 第4類 | 主軸方位 | 1区堀内 | 1区堀外 | 3・4区 | | | 主軸方位 | 1区堀内 | 1区堀外 | 3・4区 | | |
| | N-74°-W | | | | | | N-16°-E | | | | | 4区1柱列 |
| | N-75°-W | | 15柱列 | | | | N-15°-E | | | | | |
| | N-77°-W | | | | | | N-13°-E | | | | | 4区1掘立 |
| | N-78°-W | | 20柱列 | | | | N-12°-E | | | | | 4区2掘立 |
| | N-79°-W | | | | 4区4掘立 | | N-11°-E | | | | | |
| | N-80°-W | | | | 3区1掘立・4区3掘立 | | N-10°-E | | | | | |
| その他 | N-82°-W | | 19掘立 | | | | | | | | | |
| | 1 | | | | | | | | | | | |
| | N-88°-W | | | | | | | | | | | |



第45図 1区・4区・「上榑木調査区」中世面全体図



第46图 1区南堀内部分全体图

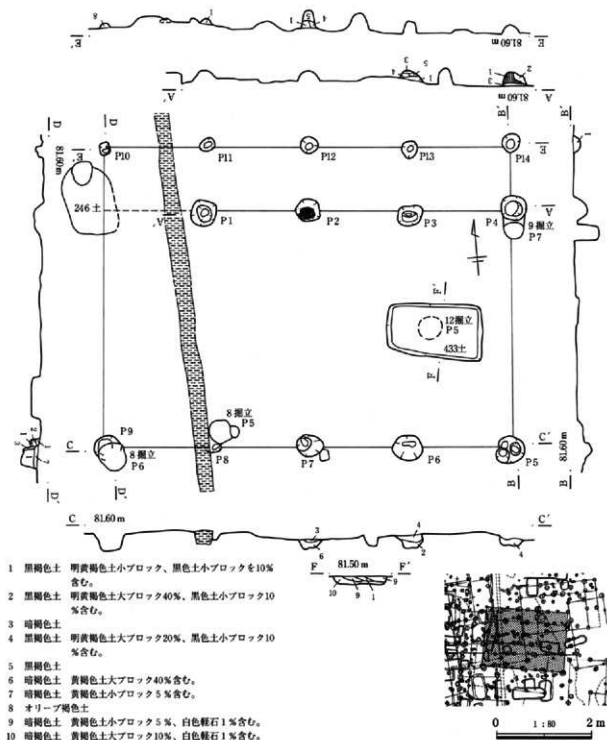
第1項 1区

1. 掘立柱建物跡・柱穴列

(1) 堀内部分

ア. 第1類

1区11号掘立柱建物跡 (PL16-1)



第47図 1区11号掘立柱建物跡・433号土坑

位置 南堀内部分のほぼ中央部で、74E・F-7・8グリッドに位置する。

重複 P8・P9は各々8号掘立柱建物跡のP5・P6より古いため、建物跡としても同様に古い。また、内部施設433号土坑は12号掘立柱建物跡のP5より新しいため、同じく建物跡としても新しい。

主軸方位 N-85°-W

形態 身舎は1×4間(4.95×8.68m)の東西棟で、北側に幅1.40~1.45mの間隔を取って庇が付き、全体として6.30~6.40×8.68m、(16.5+4.5)尺×29尺の規模である。桁行の柱間は7尺と7.5尺が多い。北辺の西角柱穴は246号土坑により欠損するが、他はほぼ等間隔である。南辺ではP8が攪乱により残存状態が悪いが、P6とP7、P8とP9の間隔をほぼ20cm広く取っており、その分P7とP8の間隔を狭くする。北庇はP10とP11の間隔がほぼ10cm程狭い以外はほぼ等間隔である。柱穴は柱軸に非常に良く載っている。柱痕跡はP1・P2・P4で見られ10~14cmを測る。身舎部分の柱穴は隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模は長径52~64cm、短径43~56cm、深さ22~31cmでほぼ均整がとれている。庇部分の柱穴はP14を除き円形で、長径27~39cm、短径22~36cm、深さ13~38cmとやや数値にばらつきがあるが、総じて身舎部分よりも小さいことが分かる。

内部施設 身舎梁行中央部のP3とP6を結んだ線よりやや西寄りから東辺にかけて、主軸方位にほぼ平行な433号土坑があり、規模は長辺220cm、短辺117cm、深さ17cmで、主軸方位N-82°-Wである。形状は長方形で浅く、底面は平坦。本土坑は12号掘立柱建物跡のP5の埋土上面をよく纏めて構築するが、底面全体として特に硬化面はない。また、埋土には焼土や灰・炭等は全く見られない。遺物は出土しなかった。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP1・P4・P5・P10に混入するのみであった。

1区12号掘立柱建物跡(PL16-1・2)

位置 南堀内部分の中央部やや南寄りで、74E・F-8グリッドに位置する。

重複 P5は11号掘立柱建物跡の内部施設433号土坑構築時に明黄褐色土によって人為埋填されるため、建物跡としても同様に古い。P6は514号土坑より古く、P7は515号土坑と新旧関係不明。これらの土坑の主軸方位は第3類に属することからP5とは状況が異なる。

主軸方位 N-83°-W

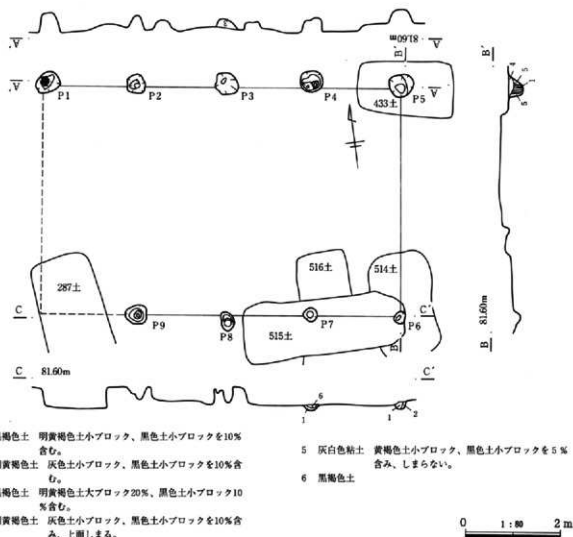
形態 1×4間(4.80×7.50m・16尺×25.5尺)の東西棟。桁行の柱間は6尺または6.5尺。北辺のP2とP3の間隔は10cm程狭い。南辺の南西柱穴は287号土坑により欠損するが、その他はほぼ等間隔。柱穴はP8が柱軸からやや南側に外れる以外は非常に良く載っている。柱痕跡はP1・P5で見られ、17・13cmを測る。柱穴は円形のP2・P8を除き隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。したがって、P6・P7は重複による欠損によって、下部の小穴のみが残存した可能性が高い。規模はやや小さなP2・P8を除いて長径44~51cm、短径40~44cmで、深さは18~39cmと数値にばらつきがある。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4・P6・P8に混入するのみであった。



第4章 検出された遺構と遺物



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 4 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む、上面しまる。
- 5 灰白色粘土 黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを5%含む、しまらない。
- 6 黒褐色土

第48図 1区12号掘立柱建物跡

1区13号掘立柱建物跡 (PL16-3・4、17-1)

位置 南堀内部分の南西部で、74E-8グリッドに位置する。1号堀南辺から北へ3.5m程をとる。

重複 P3は4号掘立柱建物跡のP4よりも古いため、建物跡としても同様に古い。また、1号井戸跡との新旧関係は平面観察上は不明だが、位置及び埋土から本遺構が古いと考える。

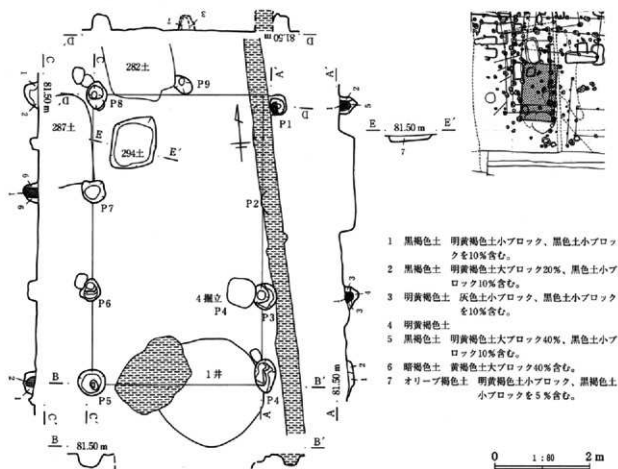
主軸方位 N-5°-E

形態 2×3間 (3.60-3.85×5.70-6.10m・12尺×20.5尺)の南北棟。桁行・梁間の柱間は6.5尺と7尺が多い。東辺のP2は大部分攪乱に壊され詳細は不明だが、P1・P2とも柱軸から20cm程東へ外れる。南辺も北辺のP9と同様、中間に柱穴が存在したと思われるが、1号井戸跡と重複のため検出で

きなかった。西辺のP5・P6の間隔は20cm程狭い。柱痕跡はP1・P3・P5-P7で見られ、12-17cmを測る。柱穴は不整形なP2・P4を除きほぼ隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模は長径42-57cm、短径30-53cm、深さ20-36cmでほぼ均整がとれている。

内部施設 北西隅の柱間1間分のほぼ中央部に294号土坑があり、規模は長径102cm、短径93cm、深さ11cmで、主軸方位N-55°-Eである。形状は正方形に近い方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物 なし



第49図 1区13号掘立柱建物跡・294号土坑

1区14号掘立柱建物跡 (PL 17-2)

位置 南堀内部分の南東部で、74E-7グリッドに位置する。1号堀の東辺から西へ1m程、同南辺から北へ3.5m程をとる。

重複 なし 主軸方位 N-7°-E

形態 2×3間 (3.80×6.75~6.80m・12.5尺×22.5尺)の南北棟。柱間は桁行7.5尺、梁間6尺か6.5尺。東辺・西辺ともに柱穴は等間隔で柱軸に良く載る。南辺のP5は20cm程東寄り、北辺のP10は逆に20cm程西寄りで符合しないが、両者とも共通して柱軸より外側へ外れている。柱痕跡はP2・P3・P6~P9で見られ、10~19cmを測る。柱穴は隅丸方形で、規模は大小2つに分かれ、P3~P5・P10は長径46~56cm、短径43~51cm、深さ26~35cmで、残りは長径37~45cm、短径32~39cm、深さ23~35cmである。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP9に混入するのみであった。

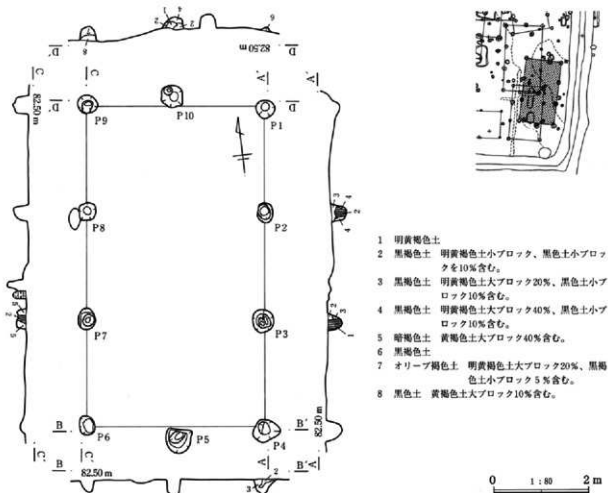
1区15号掘立柱建物跡 (PL 17-2)

位置 南堀内部分の南東部で、74D・E-7グリッドに位置する。1号堀の東辺から西へ2.5m程、同南辺から2m弱をとる。

重複 なし 主軸方位 N-6°-E

形態 2×3間 (3.40×5.70~5.75m・11尺×19尺)の南北棟。柱間は桁行6尺か6.5尺で、梁間5.5尺。東辺の柱穴はほぼ等間隔に設けるが、P2・P3が柱軸よりやや東に外れる。南辺も北辺のP9と同様、中間に柱穴が存在したと思われるが、やや攪乱を受けていたため検出できなかったものと考え。北辺のP9はその中央部にあるが、柱軸から30cm程北へ外れる。柱痕跡はP2・P4で見られ、13・10cmを測る。柱穴は隅丸方形のP7・P9を除きほぼ円形

第4章 検出された遺構と遺物



第50図 1区14号掘立柱建物跡

で、規模は大小2つに分かれ、P3・P7は長径43・45cm、短径37・42cm、深さ35・48cm、残りは長径26~37cm、短径24~32cmで、深さは15~45cmで数値にばらつきがある。

内部施設 P2とP7を結んだ線よりやや南寄りから北辺にかけて、主軸に西辺を接して主軸方位にほぼ平行な363号土坑があり、規模は長辺218cm、短辺62cm、深さ13cmで、主軸方位N-7°-Eである。形状は隅丸細長方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物 なし

1区30号掘立柱建物跡 (PL 18-1)

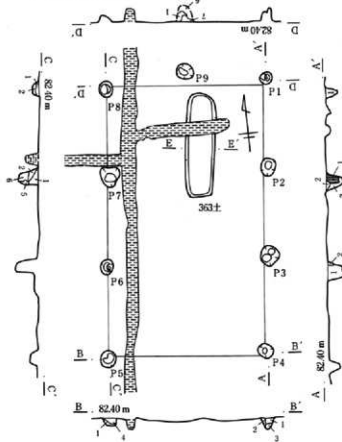
位置 南堀内部分の南端部中央で、74D・E-7・8グリッドに位置する。1号堀の南辺から北へ2m弱をとる。

重複 なし **主軸方位** N-85°-W

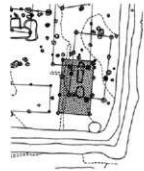
形態 2×2間 (2.75~2.90×4.28~4.42m×9.5尺×14.5尺)の東西棟。柱間は桁行で7尺か7.5尺、梁間で4.5尺~5.5尺。東辺のP4は柱軸から20cm程東へ外れる。南辺は柱軸から北東-南西方向に振れる。柱痕跡なし。柱穴は隅丸方形のP4・P8を除きほぼ円形で、規模は大小2つに分かれ、P1・P4・P6・P8は長径27~35cm、短径27~30cm、深さ15~35cmで、残りは長径18~27cm、短径15~18cm、深さ7~15cmである。

内部施設 なし **出土遺物** なし

15号掘立柱建物跡・363号土坑

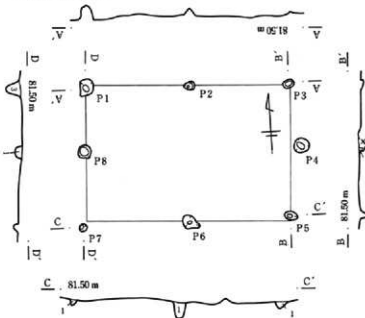


E 81.40 m E'

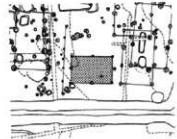


- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 明黄褐色土
- 4 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 7 オリーブ褐色土

30号掘立柱建物跡



B' 81.50 m B



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。

0 1:80 2 m

第51図 1区15号掘立柱建物跡・363号土坑・30号掘立柱建物跡

第4章 検出された遺構と遺物

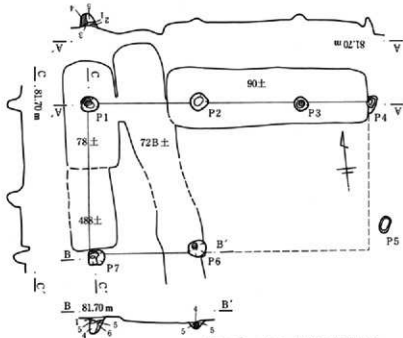
1区31号掘立柱建物跡

位置 南堀内部分の北端部中央で、74G-7・8グリッドに位置する。1号堀の北辺から南へ3m程をとる。

重複 P1は78号土坑構築時に人為埋填後明黄褐色土で被覆されるが、78号土坑の主軸方位は第3類に属しており、P1廃棄との時期差を想定する。P2・P3は90号土坑と重複し、90号土坑底面で初めて確認できたため、不確実ながらこの土坑より古く、建物跡としても同様に古い。なお、90号土坑の主軸方位も第1類に属しており、新旧関係は重要。P6は72B号土坑と新旧関係不明である。

主軸方位 N-84°-W

形態 1×2間 (3.25×4.48m・10.5尺×15尺) の



第52図 1区31号掘立柱建物跡

1区33号掘立柱建物跡

位置 南堀内部分の西端部中央で、74F-8・9グリッドに位置する。

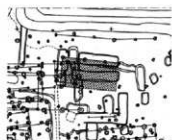
重複 P1は211号土坑と新旧関係不明。P5は7号掘立柱建物跡のP8よりも古く、建物跡としても同様に古い。

主軸方位 N-82°-W

形態 1×2間 (2.69×4.46~4.58m・8.5尺×15尺) の東西棟で、更に西へ延びる可能性がある。桁

東西棟で、東側に幅1.55mの間隔を取って庇が付き、全体として3.25×5.96m (10.5尺×17+5尺)の規模である。ただし、P3と対面する南辺の柱穴は検出できず、P5も柱軸から大きく外れるなど、東側半分は検討の余地を残す。桁行の柱間は7尺~8尺と数値にばらつきがある。北辺のP1~P3は等間隔に並ぶが、P2の残存状態は悪い。P5は東庇の南東柱と考えるが、60cm程北東に外れる。柱痕跡はP1・P3で見られるが計測値なし。柱穴はP1・P6・P7がほぼ隅丸方形で、他は除外。規模は長径32~34cm、短径29~31cm、深さ11~32cmでほぼ均整がとれている。

内部施設 なし **出土遺物** なし

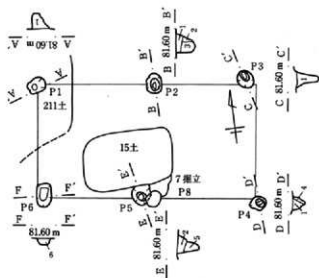


- 1 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 明黄褐色土 黒色土大ブロック20%含む。
- 3 明黄褐色土 黒色土大ブロック40%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。

0 1:80 2m

行の柱間は6.5尺~8.5尺と数値にばらつきがある。北辺のP3は30cm程西寄りであるため、P2・P3の間隔は狭く、東辺は柱軸から北西~南東方向へ振れる。柱痕跡なし。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模は長径35~50cm、短径29~35cmで、深さはP6が13cmと浅い以外13~53cmで、総じて均整がとれる。

内部施設 なし **出土遺物** なし



第53図 1区33号掘立柱建物跡

- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 6 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

0 1:80 2m

1区1号柱穴列

位置 南堀内部分の北辺縁辺部で、74G-7・8グリッドに位置する。1号堀北辺から20~70cmをとる。

重複 なし

主軸方位 N-85°-W、N-88°-E

形態 全長10.52mで東西方向に走向する。柱間は1.97~2.25mで均整がとれる。P2は北側に古い段階の柱穴があり、1度据え直しされたものと考えられる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は大中小3つに分かれ、P4が最大で、次いでP6、残りが長径22~28cm、短径22~26cm、深さ33cmである。

出土遺物 なし

1区2号柱穴列

位置 南堀内部分の南半部中央で、74D・E-8グリッドに位置する。

リッドに位置する。13号掘立柱建物跡と30号掘立柱建物跡の中間に存在する。P7は1号堀南辺から50cmをとる。

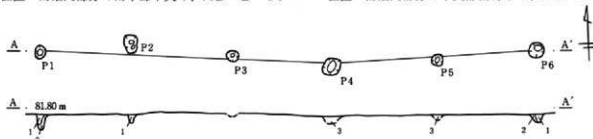
重複 なし 主軸方位 N-5°-E

形態 全長7.16mで南北に走向する。柱間は0.90~1.35mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴はP1・P7を除きほぼ円形で、規模は大小2つに分かれ、両端の柱穴であるP1・P7が長径29・30cm、短径26・27cm、深さ15cm以上・22cmで、残りが長径17~24cm、短径13~18cm、深さ5~12cmである。柱穴の規模から見て橋跡とするのが妥当と考える。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP7に混入するのみであった。

1区4号柱穴列

位置 南堀内部分の中央部西寄り、74E・F-8グリッドに位置する。



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 黒色土

0 1:80 2m

第54図 1区1号柱穴列

第4章 検出された遺構と遺物

グリッドに位置する。12号掘立柱建物跡の西脇に存在する。

重複 P1は8号掘立柱建物跡のP2よりも古い。

主軸方位 N-5°-E

形態 全長7.18mで南北に走向する。柱間は0.60-1.41mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴はやや大きいP2・P5を除いて、長径23-35cm、短径24-26cm、深さ7-29cmである。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP5に混入するのみであった。

1区16号柱穴列 (PL20-4)

位置 北堀内部分の中央部で、83C-0グリッドに位置する。

重複 P1は6号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。主軸方位 N-83°-W

形態 全長4.81mで東西に走向する。柱間は2.40-2.42mで均一。柱痕跡はP3で見られるが、計測値なし。柱穴は隅丸方形で長径41cm、短径28-36cm、深さ46-68cmである。出土遺物 なし

1区28号柱穴列

位置 南堀内部分の中央部北寄り、74G-7・8グリッドに位置する。

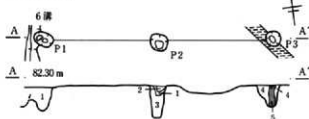
重複 64・68号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。このうち68号土坑は第3類に属する。

主軸方位 N-84°-W

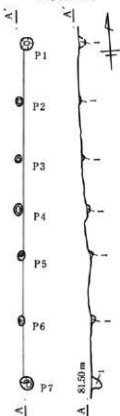
形態 全長2.85mで東西に走向する。柱間は1.38-1.48mとほぼ等しい。柱痕跡は見られない。P1・P2は重複により残存状態が悪いが、柱穴の形状は円形と隅丸方形が混在し、規模は長径25cm程度である。

出土遺物 なし

16号柱穴列



2号柱穴列



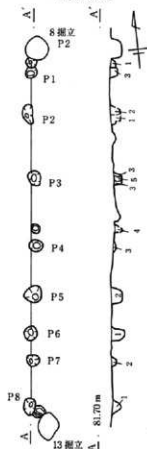
2号柱穴列

1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

4号柱穴列

- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 5 黒褐色土

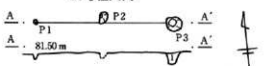
4号柱穴列



28号柱穴列

- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 オリーブ褐色土
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 暗褐色土

28号柱穴列



16号柱穴列

- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 オリーブ褐色土
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 暗褐色土

28号柱穴列

- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%、白色軽石1%含む。

0 1:80 2m

第55図 1区2・4・16・28号柱穴列

イ、第2類

1区7号掘立柱建物跡 (PL18-4)

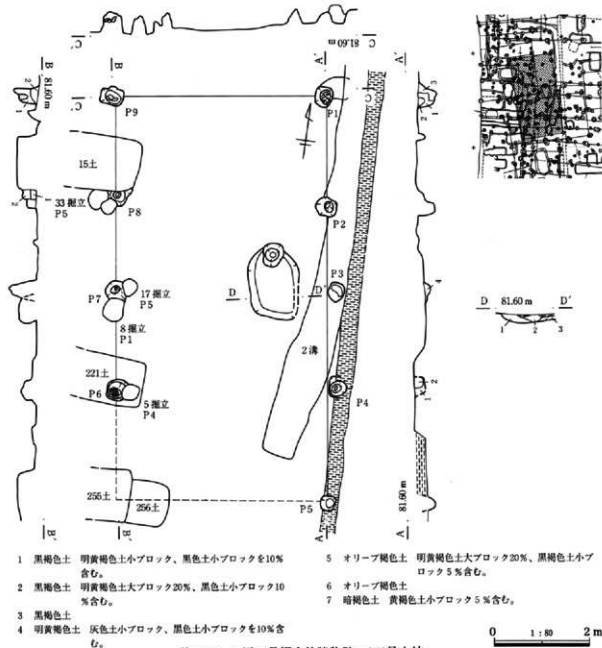
位置 南堀内部分の中央部西寄り、74F-8・9グリッドに位置する。

重複 P2は2号溝と重複し、土層断面観察では新しく見えるが、攪乱の影響もあり疑問残る。P6は5号掘立柱建物跡P4より古いため、建物跡としても同様に古い、221号土坑との新旧関係不明で、この土坑は第1類に属する。P7は8号掘立柱建物跡P1、17号掘立柱建物跡P5より古いため、建物

跡としても同様に古い。P8は33号掘立柱建物跡P5よりも新しいため、建物跡としても同様に新しいが、15号土坑よりも古い。15号土坑は第3類に属する。

主軸方位 N-9°-W

形態 1×4間 (4.60×8.44m・15尺×28.5尺)の南北棟。桁行の柱間は6尺〜8尺で一定しないが、案分すればほぼ7尺となる。東辺のP3は2号溝と



第56図 1区7号掘立柱建物跡・246号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

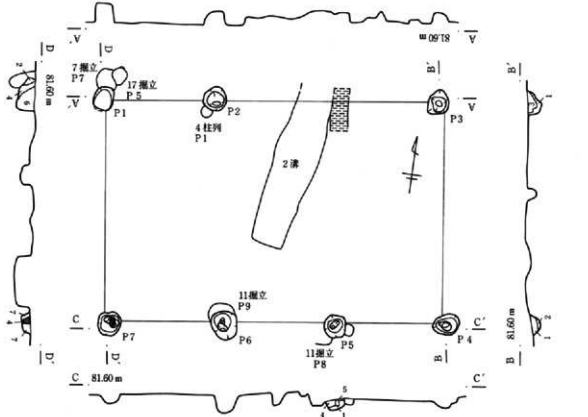
重複するため残存状況が悪く、P4・P5も攪乱に壊されるが、P2とP3の間隔は他よりも20cm程狭く西辺とも符合する。P3・P4は柱軸から20cm程東へ外れる。西辺の南西角柱穴は255号土坑との重複により検出できなかったが、この土坑は第1類に属する。西辺の柱穴は非常に良く柱軸に載る。柱痕跡はP2・P6で見られ、ともに16cmを測る。柱穴は重複が多く残存状況は不良だがP7を除き隅丸方形で、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模は長径43-47cm、短径37-40cmで、深

さは30-54cmで数値にばらつきがある。

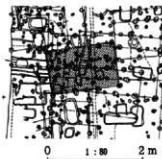
内部施設 中央部東寄りに主軸方位にはほぼ平行する246号土坑があり、位置から内部施設の可能性が高い。規模は長辺159cm、短辺104cm、深さ17cmで、主軸方位はN-8°-Wである。形状は隅丸長方形で浅く、底面はほぼ平坦だがやや丸みを持つ。粗土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4・P9に混入するのみであった。

1区8号掘立柱建物跡 (PL18-4)



- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 4 オリーブ褐色土
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 6 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 7 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。



第57図 1区8号掘立柱建物跡

位置 南堀内部分の中央部西寄り、74C-8・9グリッドに位置する。

重複 P1は7号掘立柱建物跡P7より新しいため、建物跡としても同様に新しい。P2は4号柱穴列のP1より新しいが、この柱穴列は第1類に属する。P5・P6はともに11号掘立柱建物跡P8・P9よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。P2とP3の間にも柱穴が存在したものと考えるが、2号溝と重複及び攪乱により検出できなかった。

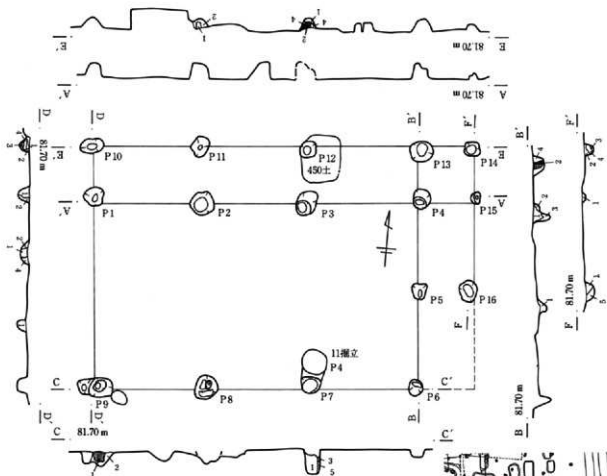
主軸方位 N-82°-E

形態 1×3間(4.70~4.80×7.10~7.20m×15.5尺×24尺)の東西棟。桁行の柱間は7.5尺~8.5尺で一定しないが、案分すればほぼ8尺である。各辺の柱穴は非常に良く軸柱に載る。柱痕跡はP2・P3・P7で見られ、10~15cmを測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、長径50~58cm、短径38~52cmで、深さは20~40cmと数値にややばらつきがある。

内部施設 なし

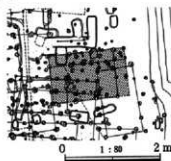
出土遺物 平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。

1区9号掘立柱建物跡 (PL18-3)



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 暗褐色土

第58図 1区9号掘立柱建物跡



第4章 検出された遺構と遺物

位置 南堀内部分の中央部東寄り、74F-7・8グリッドに位置する。

重複 P12は450号土坑よりも古い。また、南東角付近は5A・5B号住居跡と重複し、その埋土が黒色土のため柱穴の確認は困難で、P6は検出できたがその東にも柱穴が存在した可能性もあり、底部の延長を想定した。

主軸方位 N-84°-E

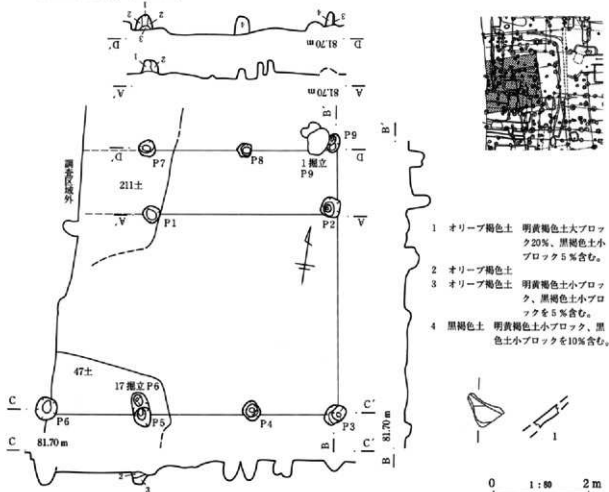
形態 身舎は2×3間(3.90~3.95×6.90~7.08m)の東西棟で、北側に幅1.00~1.05mの間隔を取って庇が付き、更に東側に幅1.04~1.13mの間隔を取って庇が付き、全体として4.94~5.00×8.06~8.10m、(13+4)尺×(23+4)尺の規模である。桁行の柱間は7.5尺と8尺である。東辺のP5はほ

ぼその中間にあるが、対面する西辺では検出されなかった。柱穴は非常に良く柱軸に載る。柱痕跡はP1・P8~P10・P12・P13で見られ、9~13cmを測る。身舎部分の柱穴は、P6が5A・5B号住居跡と重複のため形状が不正確であることを除けばほぼ隅丸方形で、底部分では不整形のP10と隅丸方形のその他に分かれる。柱穴の規模は大小2つに分かれ、P5・P6・P14・P15は長さ25~35cm、短径24~32cm、深さ7~32cmで、残りが長さ41~58cm、短径32~48cm、深さ17~51cmである。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP9に混入するのみであった。

1区10号掘立柱建物跡 (PL 18-4)



第59図 1区10号掘立柱建物跡・出土遺物

位置 南堀内部分の西端部中央北寄り、74F・G-8・9グリッドに位置する。

重複 P6は47号土坑よりも新しく、この土坑は第1類に属する。P9は1号掘立柱建物跡のP9よりも古い、建物跡としても同様に古い。P1・P7は211号土坑と、P5は17号掘立柱建物跡P6と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-82°-E

形態 身舎は1×3間以上(5.80×6.20m以上)の東西棟で、北側に幅1.43mの間隔をとって庇がつき、全体として5.80×6.20m以上、(14+4.5)尺×21尺以上の規模である。桁行の柱間は6尺〜8尺で一定しない。西側は調査区域外となり、本遺構は更に西に延びている可能性がある。身舎部分北辺では、P1とP2の間に柱穴を検出できなかった。P2は柱軸からやや北西方向に外れるが、他はほぼ柱軸に載っている。南辺のP4とP5の間隔は他よりも40cm程広くとる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が不分明に混在しており、規模は大小2つに分かれ、P1・P7〜P9が長径30〜37cm、短径26cm、深さ38cmで、残りが長径40〜46cm、短径36〜45cm、深さ24〜50cmである。総じて身舎部分よりも庇部分の柱穴の方が小さいことが分かる。

内部施設 なし **出土遺物** P9の埋土から古瀬戸大皿(1)のみが出土している。

1区20号掘立柱建物跡 (PL 19-1)

位置 北堀内部分の1号堀近くで、73A・B-9グリッドに位置する。1号堀から西に1.5m程をとる。

重複 なし

主軸方位 N-5°-W (南北棟とした場合)

形態 1以上×2間以上(2.05以上×5.11m以上・7尺以上×17尺以上)で棟方向は判断出来ない。東辺のP3は20cm程北寄りである。柱痕跡は見られない。柱穴はP1を除き円形で、規模は大小2つに分かれ、P1・P4が長径48・52cm、短径36・42cm、深さ59・42cmで、P2・P3が長径36・38cm、短径28・26cm、深さ27・21cmである。

内部施設 なし **出土遺物** なし

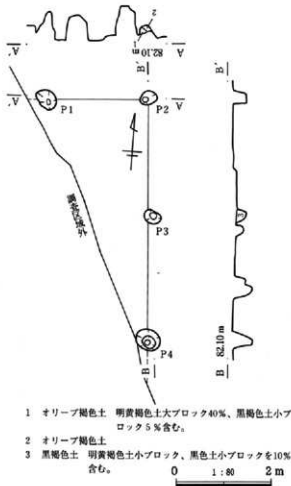
1区34号掘立柱建物跡

位置 南堀内部分の中央部東端で、74F-7グリッドに位置する。1号堀東辺の折れ部に正対しており、西へ2〜3mの間隔をとる。また、この折れ部は3号入口遺構と名付けた部分であり、関連も想定される。

重複 P3〜P9は5A・5B・6号住居跡と重複しており、埋土が黒色土であることから柱穴の確認作業は困難となり、最終的に掘立柱建物跡として認識できたのは上記住居跡調査段階となってしまった。したがって、本遺構の柱穴は個々に作図した土層断面を方位に関係なく掲載することとなった。

主軸方位 N-8°-W

形態 2×4間(3.64〜4.18×7.00〜7.20m・12.5尺×23.5尺)の南北棟。柱間は桁行・梁間ともに4.5尺〜9尺で一定しない。東辺ではP2とP3の



第60図 1区20号掘立柱建物跡

第4章 検出された遺構と遺物

間隔が他よりも1.2m程長く、他は1.48～1.53mと非常に均整がとれており、P2とP3の間隔のみが際立つ。南辺のP6は15cm程西寄りであり、北辺と符合する。西辺ではP8とP9の間隔が他よりも45cm程狭く、他は1.82～1.93mとほぼ均整がとれる。北辺のP12は30cm程西寄りであり、南辺と符合する。柱穴は北辺を除き柱軸から内外へやや外れるものが多い。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が不明明に混在しており、規模は大中小3つに分かれ、P2は特に小さく、次いでP3～P5・P7・P9が、長径31～37cm、短径29～35cm、深さ17～54cmで、残りが長径40～50cm、短径31～46cm、深さ12～42cmである。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4・P7に混入するのみであった。



1区6号柱穴列

位置 南堀内部分の西端部中央で、74E・F-9グリッドに位置する。8号掘立柱建物跡の西脇に存する。

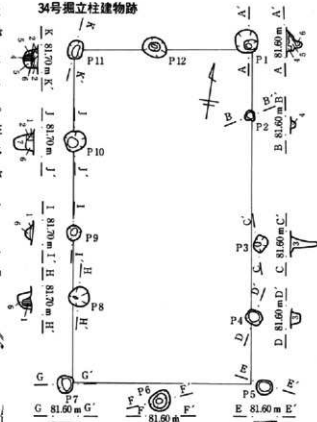
34号掘立柱建物跡

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 3 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 7 黒褐色土

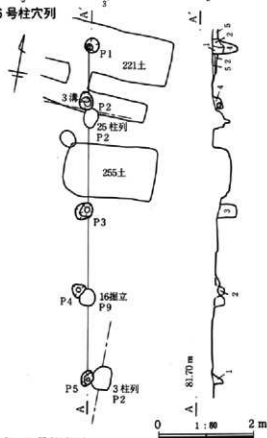
6号柱穴列

- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 オリーブ褐色土
- 4 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。

34号掘立柱建物跡



6号柱穴列



第61図 1区34号掘立柱建物跡・6号柱穴列

重複 P1は221号土坑より新しい。P2は3号溝と重複するが新旧関係不明。P4は16号掘立柱建物跡のP9よりも古く、建物としても同様に古い。P5は3号柱穴列のP2より新しいが、この柱穴列は第3類に属しており注意を要する。

主軸方位 N-9°-W

形態 全長6.98mで南北に走向する。柱間は1.17~2.25mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、規模は長径29~40cm、短径24~33cm、深さ22~41cmでほぼ均整がとれる。

出土遺物 なし

1区8号柱穴列

位置 南堀内部分の北西部で、74G-8・9グリッドに位置する。

重複 P1・P2は129・211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。これら土坑は第3類に属する。 **主軸方位** N-85°-E

形態 全長8.28mで東西に走向する。柱間は1.00~1.95mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在しており、規模は長径22~31cm、短径18~31cm、深さ7~24cmでやや数値にばらつきがある。柱穴の規模から見て槽跡とするのが妥当である。 **出土遺物** なし

1区17号柱穴列

位置 北堀内部分の1号掘寄りで、73B-9グリッドに位置する。P4は1号堀から西へ1m程をとる。

重複 なし **主軸方位** N-84°-E

形態 全長4.32mで東西に走向する。柱間は1.35~1.56mでほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、長径58cm、短径26~33cm、深さ39~46cmである。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP3に混入するのみであった。 **出土遺物** なし

1区22号柱穴列

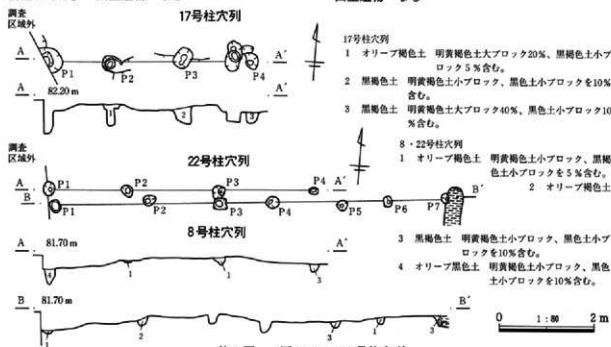
位置 南堀内部分の北西部で、74G-8・9グリッドに位置する。

重複 P1は129号土坑よりも新しいがこの土坑は第3類に属することから注意を要する。P2は211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。この土坑も第3類に属する。

主軸方位 N-86°-E

形態 全長5.57mで東西に走向する。柱間は1.64~1.97mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、長径19~29cm、短径14~25cm、深さ5~34cmである。

出土遺物 なし



第62図 1区17・8・22号柱穴列

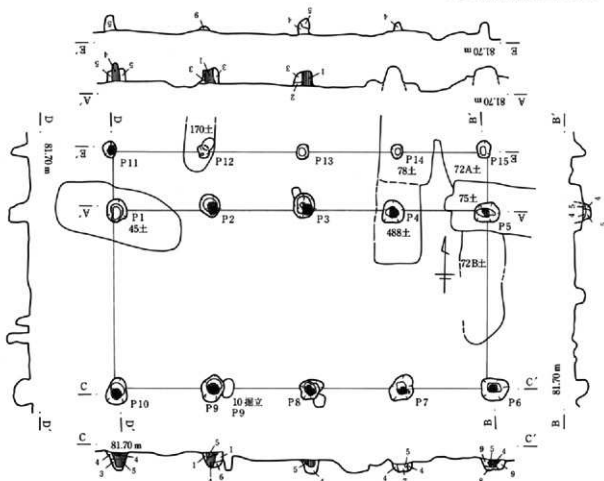
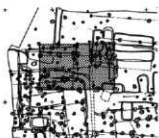
ウ. 第3類

1区1号掘立柱建物跡 (PL19-2・4-7)

位置 南堀内部分の北端部西寄り、74G-8・9
グリッドに位置する。1号堀が北辺で北方向に直角
に折れる部分から南へ3m程をとる。

重複 P9は10号掘立柱建物跡のP9よりも新し
く、建物跡としても同様に新しい。P14は78号土坑
よりも古く、この土坑も第3類に属する。P1・P

4・P5・P6・P7・P12・P15も各々45・
488・75・71・55・170・72A号土坑と重複するが新



- 1 黒褐色土 黒色土大ブロック40%含む。
- 2 オリーブ褐色土
- 3 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 7 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。

- 8 黒褐色土
- 9 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。

0 1:80 2m

第63図 1区1号掘立柱建物跡・出土遺物

旧関係は確認できなかった。

主軸方位 N-90°

形態 身舎部分は1×4間(3.77~3.80×7.84~8.00m)の東西棟で、北側に1.30mの間隔をとって庇がつき、全体として5.00×7.84~8.00m、(12.5+4)尺×26.5尺の規模である。桁行の柱間は6.5尺と7尺が多い。柱穴は非常に良く柱軸に載っている。柱痕跡はP2~P4・P6・P8~P10で見られ、13~18cmを測る。身舎部分の柱穴はほぼ隅丸方形で、長径49~61cm、短径40~46cm、深さ22~42cm、底部分の柱穴はP12を除き隅丸方形で、長径32~34cm、短径24~25cm、深さ34~38cmである。庇部の柱穴は、身舎部分よりも明らかに小さいことが分かる。

内部施設 なし

出土遺物 P3で古瀬戸皿(1)が出土しているが、P4・P6では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

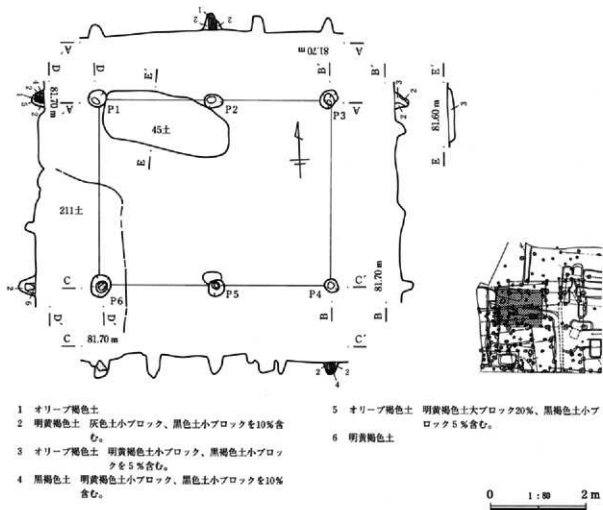
1区2号掘立柱建物跡(PL19-2・3)

位置 南堀内部分の北西端で、74G-8・9グリッドに位置する。1号堀北辺西角から南へ3.5m程をとる。

重複 P6は211号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。

主軸方位 N-88°-W

形態 1×2間(3.90×4.95m・13尺×16.5尺)の東西棟で、西へ1.5m程で調査区域外となるため、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。桁行の柱間は7.5尺~8.5尺だが、案分すれば8尺である。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はP1・P2・P



第64図 1区2号掘立柱建物跡・45号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

4・P5で見られ、13-17cmを測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模はP4がやや小さい以外、長径33-39cm、短径28-35cm、深さ28-36cmである。

内部施設 P1とP2に沿って北西端部に45号土坑があり、規模は長辺274cm、短辺114cm、深さ14cmである。**主軸方位** N-76°-W。形態 攪乱によりやや残存状況が悪いが、位置から内部施設の可能性が高い。形状は隅丸長方形で浅く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。遺物は出土しなかった。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP5に混入するのみであった。

1区3号掘立柱建物跡 (PL18-3)

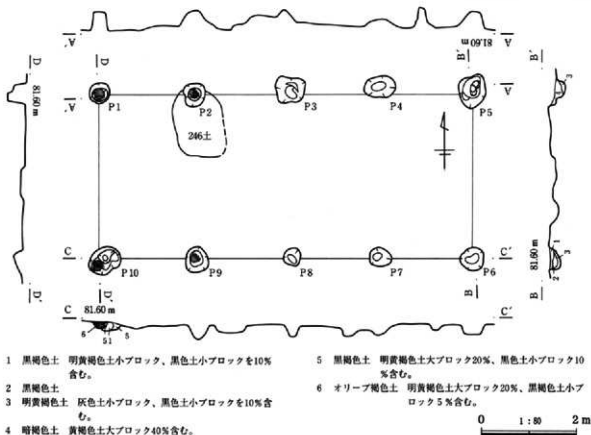
位置 南堀内部分の中央部で、74F-8グリッドに位置する。

重複 P2は246号土坑と重複し新旧関係は明確にできなかったが、この土坑は第2類に属し7号掘立

柱建物跡の内部施設である可能性が高い。

主軸方位 N-89°-E

形態 1×4間 (3.40-3.65×7.76-7.83m・11.5尺×26.5尺)の東西棟。桁行の柱間は6.5尺が多い。北辺のP1とP2の間隔は他よりも10cm程広くとっており南辺と符合する。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はP1・P3-P10で見られ、13-17cmを測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、規模は大中小3つに分かれ、P8が小さく、大きくはP3-P5・P10が長径64-72cm、短径44-58cm、深さ16-34cmで、残りは長径44-54cm、短径40-48cm、深さ16-38cmである。



第65図 1区3号掘立柱建物跡

内部施設 なし

出土遺物 P7で天目茶碗細片が出土しているが、P1・P3・P6・P8では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

1区4号掘立柱建物跡 (PL16-3、17-1)

位置 南堀内部分の南西部で、74E-8グリッドに位置する。1号堀南辺から北へ5.5m程をとる。

重複 P2は325号土坑よりも古いが、この土坑も第3類に属する。P3の南にはもう一つ古い段階の柱穴が接しており、一度掘え直しが想定される。P4は13号掘立柱建物跡のP3よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。P7は287号土坑よりも古く、この土坑も第3類に属するが、位置から見て16号掘立柱建物跡の内部施設と思われる。

主軸方位 N-2°-E

形態 1×3間(3.82~4.10×6.85m・13尺×23尺)の南北棟。桁行の柱間は7.5尺と8尺である。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はP1・P3・P7で見られ、14~16cmを測る。柱穴は隅丸方形で、規模は長径46~61cm、短径44~54cmで、深さは23~41cmで数値にばらつきがある。

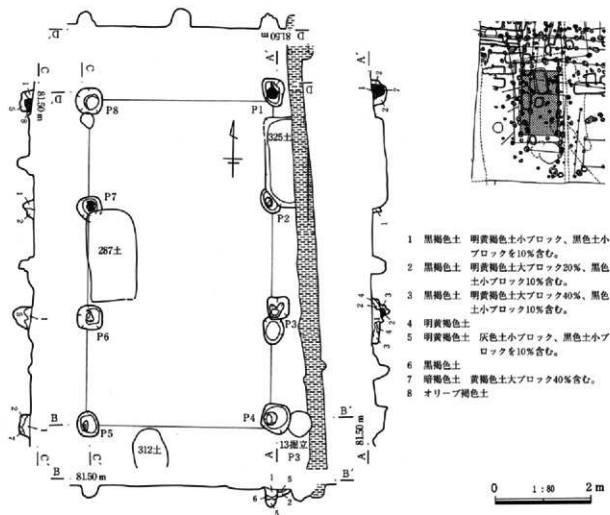
内部施設 なし

出土遺物 P5で在土器鉢片?のほか平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

1区5号掘立柱建物跡 (PL18-4)

位置 南堀内部分の西端部中央で、74F-8・9グリッドに位置する。

重複 P4は7号掘立柱建物跡のP6よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。P5・P6は221号土坑と重複し、P5は不明でP6はそれより



第66図 1区4号掘立柱建物跡

第4章 検出された遺構と遺物

も新しいが、この土坑は第1類に属する。

主軸方位 N-87°-W

形態 1×2間 (3.65×4.27~4.28m・12.5尺×14.5尺)の東西棟で、西辺は調査区域境と接することから、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。桁行の柱間は7尺が多い。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡はP3~P5で見られ、13~16cmを測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径44~50cm、短径34~40cmで、深さは38~54cmで数値にばらつきがある。

内部施設 なし

出土遺物 なし



1区6号掘立柱建物跡 (PL17-2)

位置 南堀内部分の東南部で、74E・F-7グリッドに位置する。1号堀の東辺から西へ3m程をとる。

重複 なし

主軸方位 N-3°-E

形態 2×3間 (3.70~3.98×7.00~7.28m・13尺×23.5尺)の南北棟。桁行の柱間は8尺が多い。東辺・西辺ともほぼ等間隔だが、P8の柱穴は柱軸からやや東へ外れる。南辺のP5は20cm程西寄り、柱軸から10cm程南へ外れる。北辺のP10は南辺とは逆に40cm程東寄り、柱軸からわずかに北へ外れる。柱痕跡はP3・P4・P9で見られ、11~14cmを測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径30~47cm、短径26~42cmでほぼ均整がとれており、深さは18~52cmで数値にばらつきがある。

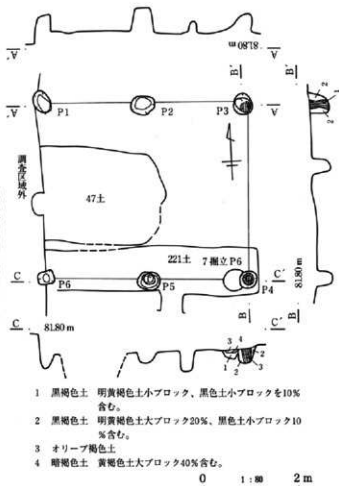
内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP3・P7~9に混入するのみであった。

1区16号掘立柱建物跡 (PL16-3・5、17-1)

位置 南堀内部分の南西部で、74E・F-8・9グリッドに位置する。1号堀南辺から北へ4.5m程をとる。

重複 P2は325号土坑よりも古い、この土坑も第3類に属す。P9は6号柱穴列のP4より新しい



第67図 1区5号掘立柱建物跡

ため、建物跡としても同様に新しい。

主軸方位 N-1°-W

形態 1×4間 (5.08×8.86m・16尺×29.5尺)の南北棟。桁行の柱間は6尺~8尺で一定しないが、案分すれば7.5尺である。東辺のP4とP5の間隔は他よりも30cm程狭く、西辺のP6・P7の間隔も符合して狭い。西辺の北西角柱穴は255~257号土坑と重複するため検出できなかったが、これらの土坑も第1類に属す。柱痕跡はP3~P5で見られ、11~15cmを測る。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模はP8・P9がやや小さい以外、長径43~58cm、短径39~43cm、深さ20~35cmでほぼ均整がとれている。

内部施設 西辺寄り中央部に主軸方向に平行な287号土坑があり、規模は長辺193cm、短辺105cm、深さ35cmである。主軸方位N-0°。形状は長方形でや

や深く、底面は平坦。埋土には焼土や灰・炭等は全く見られず硬化面もない。この土坑は4号掘立柱建物跡のP7よりも新しいため、建物跡としても同様に新しいこととなる。遺物は在地土器断片?のほか平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物 なし

1区17号掘立柱建物跡 (PL 18-2・4)

位置 南堀内部分の西端部中央で、74F-9グリッドに位置する。

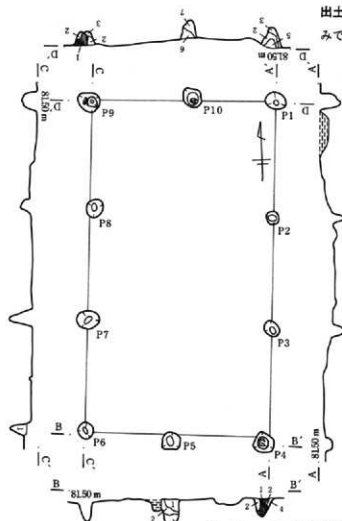
重複 P1は129号土坑より新しいが、この土坑も第3類に属す。P5は7号掘立柱建物跡のP7よりも新しいため、建物跡としても同様に新しい。P6と10号掘立柱建物跡P5、47号土坑は新旧関係不明。

主軸方位 N-89°-W

形態 2×2間以上 (3.40×3.86m以上・11尺×13

尺以上)の東西棟。桁行・梁間ともに柱間は5尺〜7尺で一定しない。P3は柱軸から北西方向にやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径31〜38cm、短径29〜32cm、深さ41〜54cmでほぼ均整がとれる。
内部施設 東半部に主軸方向に直交及び平行する12号土坑及び15号土坑がある。12号土坑の規模は長辺172cm、短辺103cm、深さ15cmで、主軸方位N-0°。15号土坑の規模は長辺192cm、短辺117cm、深さ44cmで、主軸方位N-2°-E。この2つの土坑は形状に違いがあり機能的な差違が想定される。12号土坑の形状は不整隅丸長方形で浅く、底面はやや丸みを持つが平坦。遺物は出土しなかった。15号土坑の形状は長方形でやや深く、底面は平坦。平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP3に混入するのみであった。



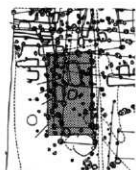
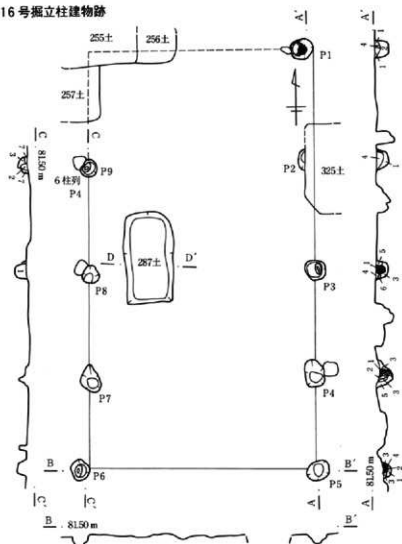
第68図 1区6号掘立柱建物跡



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 6 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 7 黒色土 黄褐色土大ブロック20%含む。

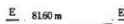
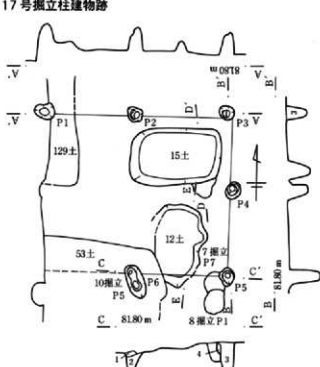
0 1:80 2m

16号掘立柱建物跡



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。
- 4 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 5 明黄褐色土
- 6 黄褐色粘質土
- 7 黒色土

17号掘立柱建物跡



- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック5%含む。
- 3 オリーブ褐色土
- 4 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 5 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。

0 1:80 2m

第69図 1区16・17号掘立柱建物跡

1区29号掘立柱建物跡

位置 南堀内部分の北西端で、74G-8・9グリッドに位置する。1号掘北辺の折れ部から南へ4m程をとる。

重複 P5は2号溝よりも古い。

主軸方位 N-89°-E

形態 2×2間以上(3.66×4.68-5.00m・12.5尺×16尺以上)の東西棟で、西へ2m程で調査区域外となることから、柱穴が更に西へ延びる可能性もある。柱間は桁行は7.5尺と8尺、梁間は6尺。柱穴は柱軸に良く載っている。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が不分明に混在しており、規模は長径27~41cm、短径23~33cm、深さ20~54cmでほぼ均整がとれる。

内部施設 なし

出土遺物 P7から在地土器カワラケ(1)が出土し

ているが、P3・P7では平安時代以前の遺物が混入するのみであった。

1区3号柱穴列

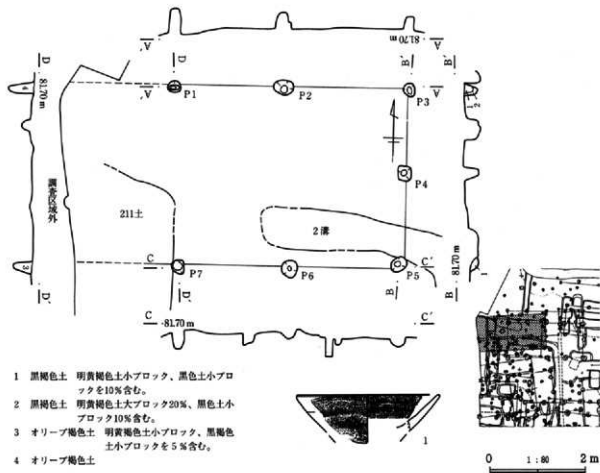
位置 南堀内部分の南西端で、74E-8・9グリッドに位置する。4号掘立柱建物跡と隣接するが柱軸が合致せず関連づけはできない。

重複 P2は6号柱穴列のP5より古いが、6号柱穴列は第2類に属しており注意を要する。

主軸方位 N-1°-E

形態 全長4.44mで南北に走向する。

柱間は2.22mで均一である。柱痕跡は柱穴全てに見られるが計測値はない。柱穴は隅丸方形で、長径48~51cm、短径39~41cm、深さ28~30cmで非常に均一であり、隣接する4号掘立柱建物跡の柱穴に類似する。柱穴の規模から見て掘立柱建物跡の一部とするのが妥当と考える。 出土遺物 なし



第70図 1区29号掘立柱建物跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

1区25号柱穴列

位置 南堀内部分の中央部で、74F-7~9グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡の南面に存する。

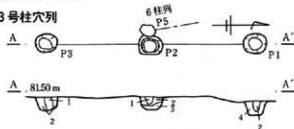
重複 P6は10号住居跡の柱穴3よりも新しい。P11は3号溝よりも古い。

主軸方位 N-88°-W

形態 全長15.79mで東西に走向する。柱間は1.30~2.21mで一定しないが、特にP4・P5の間隔が2.21mで際立って広い。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在しており、規模は大小2つに分かれ、P1・P4・P7・P8が長径26~27cm、短径21~24cm、深さ16~37cmで、残りが長径35~45cm、短径27~38cm、深さ12~40cmである。

出土遺物 なし

3号柱穴列

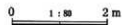


3号柱穴列

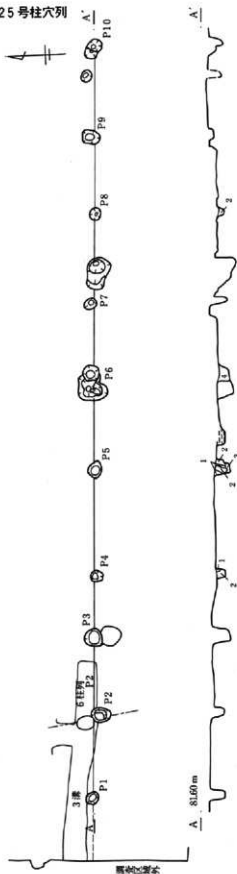
- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。

25号柱穴列

- 1 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 黒褐色土
- 4 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。



25号柱穴列



第71図 1区3・25号柱穴列

エ. 第4類

1区15号柱穴列 (PL20-4)

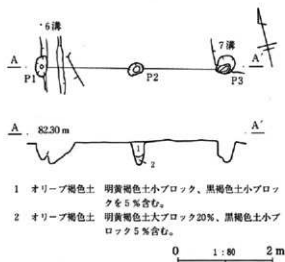
位置 北堀内部分の中央部で、83D-0グリッドに位置する。

重複 P1・P3は各々6・7号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位 N-75°-W

形態 全長3.88mで東西に走向する。柱間は1.86・2.02mでほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、規模はP2以外は重複して不明だが、P2より大きい。

出土遺物 なし



- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。

第72図 1区15号柱穴列

オ. その他

1区19号掘立柱建物跡 (PL20-1)

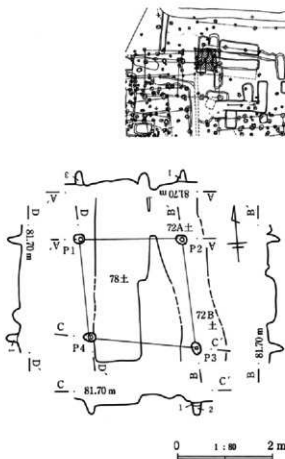
位置 南堀内部分の北端部中央で、74G-8グリッドに位置する。1号堀北辺から南へ3m程をとる。

重複 P2・P3は各々72A・72B号土坑と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。72A号土坑は第2類、72B号土坑は第3類に属す。

主軸方位 N-82°-88°-W (南北棟と考えた場合)

形態 1×1間 (南北2.10~2.29m、東西2.15~2.21m) のほぼ正方形で、柱間は7尺~8尺。棟方向は確定できない。各辺の柱軸は全て北西方向に振れており、平面形は菱形に歪む。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、長径21cm、短径18cm、深さ29cmで非常に均一である。

内部施設 なし 出土遺物 なし



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%、白色軽石1%含む。
- 2 暗褐色土
- 3 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。

第73図 1区19号掘立柱建物跡

(2) 堀外部分

ア. 第1類

1区18号掘立柱建物跡

位置 調査区の中央部東寄り、74H・I-6グリッドに位置する。南堀内部分北辺から8m弱をとる。

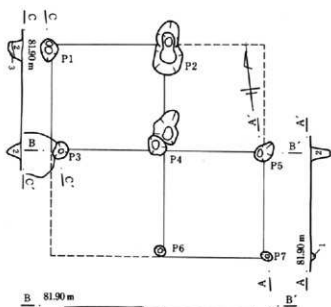
重複 P2・P4・P5は3号住居跡と重複するが、埋土近似することからP2の確認が3号住居跡調査時となってしまう、掘立柱建物跡として認識したのは整理作業段階となってしまった。このため北東角柱穴の有無について確認作業がやや弱い。ただし、北西角柱穴は検出に努めたが確認できなかった。

主軸方位 N-84°-W

形態 2×2間(南北4.4m、東西4.22m)で1辺15尺の正方形。総柱建物跡か。棟方向は確定できない。柱間は6.5~8.5尺で一定ではない。柱穴は柱軸から外れるものが多い。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小2つに分かれ、P6・P7は長径25cm、短径23・18cm、深さ9cmで、残りは長径37~47cm、短径32~46cm、深さ30~50cmである。

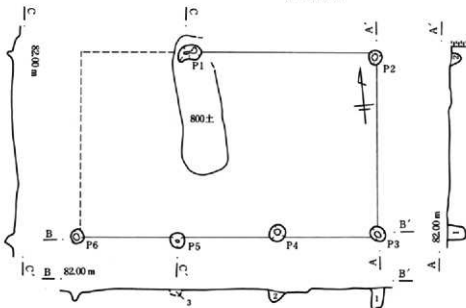
内部施設 なし 出土遺物 なし

18号掘立柱建物跡

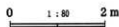


- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 黒褐色土

25号掘立柱建物跡



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 オリブ褐色土



第74図 1区18・25号掘立柱建物跡

1区25号掘立柱建物跡

位置 調査区の中央部で、74 I・J-6・7グリッドに位置する。8号井戸跡に接する。

重複 P1は800号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかったが、この土坑も第1類に属する。

主軸方位 N-86°-W

形態 1×3間(3.72×6.36m・13尺×21尺)の東西棟。桁行の柱間は7尺である。北西角の柱穴は855号土坑と重複するため検出できなかったものと見られるが、この土坑は第1類に属する。また、P1・P2の間にも柱穴が存するものとして検出に努めたが確認できなかった。南辺のP4・P5は柱軸からやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形のP1を除き円形である。規模はやや大きいP1以外、長径29~36cm、短径28~32cm、深さ20~39cmである。

内部施設 なし 出土遺物 なし

1区27号掘立柱建物跡 (PL20-2)

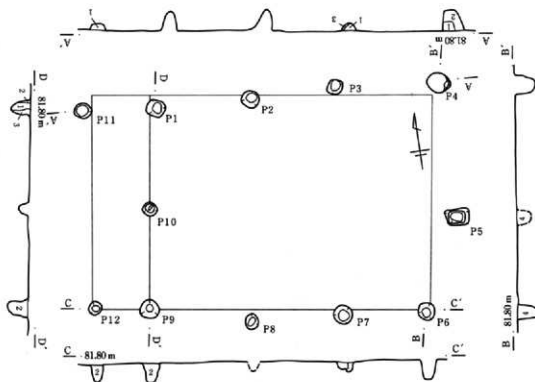
位置 南堀内部分の東面で、74 F・G-5・6グリッドに位置する。1号堀東辺から5m程をとる。

重複 なし

主軸方位 N-9°-E

形態 身舎は2×3間(4.22~4.84×5.88~5.97m)の東西棟で、西側に幅1.13~1.57mの間隔をとって庇が付き、全体として4.15~4.84×6.98~7.54m、15×(20+4)尺である。桁行の柱間は6尺~7尺で一定しない。北辺は柱軸から北東-南西方向へ大きく振れる。東辺のP5は50cm程南寄りで、柱軸から30cm程東へ外れる。西辺のP10は中央に位置する。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模は大小2つに分かれ、P4・P5が長径50・51cm、短径40・34cm、深さ45・29cmで、残りが長径29~42cm、短径27~39cm、深さ15~45cmである。

内部施設 なし



- | | |
|-----------------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。 | 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。 |
| 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。 | 4 黒色土 |

0 1:80 2m

第75図 1区27号掘立柱建物跡

第4章 検出された遺構と遺物

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4・P6・P8・P9に混入するのみであった。

1区10号柱穴列 (PL20-7)

位置 調査区中央部で、74J-73B-8グリッドに位置する。一部は1号堀の東に接して徐々に間隔を広げるが、最大でも60cm程に過ぎない。

重複 なし

主軸方位 N-8°-E

形態 全長11.83mで南北に走向する。柱間は1.32~2.64mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模はやや大きいP5を除き、長径27~35cm、短径26~31cm、深さ14~44cmで、ほぼ均整がとれる。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP5に混入するのみであった。

1区14号柱穴列 (PL20-3)

位置 調査区南東部で、74H-5グリッドに位置する。1号堀北辺から東へ10m程をとる。

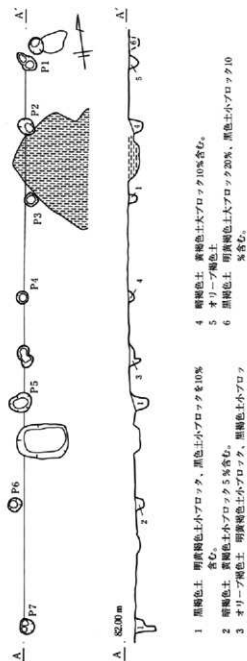
重複 P3・P5とも不整形な小穴と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位 N-82°-W

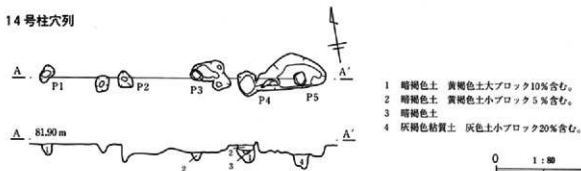
形態 全長5.38mで東西に走向する。柱間は1.10~1.66mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形で、P4がやや大きい以外、径40cm弱である。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP5に混入するのみであった。

10号柱穴列



14号柱穴列



第76図 1区10・14号柱穴列

イ、第2類

1区23号掘立柱建物跡 (PL20-5)

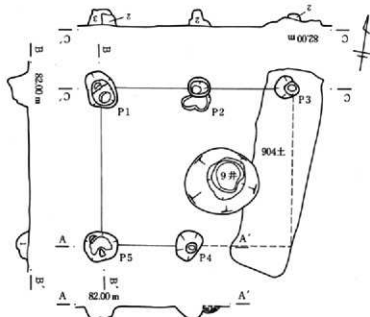
位置 調査区の中央部で、74 I・J-7・8グリッドに位置する。1号堀から東へ5m程をとる。

重複 P3は904号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。この土坑は第3類に属する。

主軸方位 N-80°-E

形態 1×2間(3.06×3.97m・11尺×13.5尺)の東西棟。桁行の柱間は6.5尺である。東南角柱穴は904号土坑と重複したものと見られ検出できなかった。柱痕跡は見られない。柱穴は円形と隅丸方形が混在し、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模はやや数値にばらつきがあるが、長径45~84cm、短径40~63cm、深さ24~38cmである。内部施設 中央部に9号井戸跡(134頁参照)が存在することから、本遺構は井戸の上屋と見られる。出土遺物 平安時代以前の遺物がP1に混入するのみであった。

23号掘立柱建物跡



23号掘立柱建物跡

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。

1区12号柱穴列 (PL20-6)

位置 南堀内部分の東面で、74 F・G-6グリッドに位置する。1号堀から1.5mをとる。

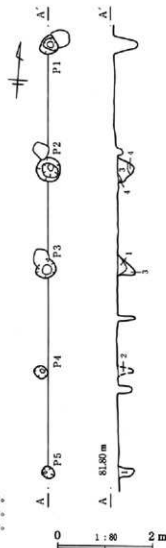
重複 なし

主軸方位 N-5°-W

形態 全長9.00mで南北に走向する。柱間はP1・P2が2.58mとやや長い、他は2.13~2.15mで均一である。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小2つに分かれ、P4・P5が長径30・28cm、短径26・23cm、深さ34cmで、残りが長径39~50cm、短径35~50cm、深さ35~52cmである。

出土遺物 なし

12号柱穴列



12号柱穴列

- 1 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 4 暗褐色土

第77図 1区23号掘立柱建物跡・12号柱穴列

第4章 検出された遺構と遺物

1区24号柱穴列 (PL21-2)

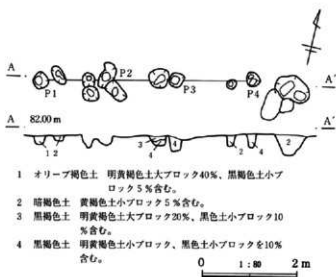
位置 調査区中央部で、74J-8グリッドに位置する。P1は1号堀から東へ1.5m程をとる。

重複 重複はしないが同程度の柱穴が密集しており、数度の掘え直しも想定される。

主軸方位 N-80°-E

形態 全長4.54mで東西に走向する。柱間は1.43-1.64mではほぼ均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で上面がやや乱れるP2を除けば、規模は長径31-36cm、短径27-33cm、深さ19-33cmではほぼ均一である。

出土遺物 なし



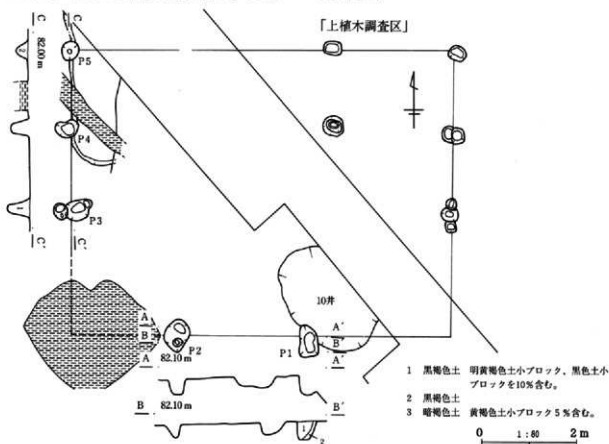
第78図 1区24号柱穴列

ウ. 第3類

1区21号掘立柱建物跡 (PL20-7・8、21-1・2)

本遺構東半分の柱穴は、整理作業段階で「上植木調査区」の原因を使用して精査した結果抽出できたものである。したがって相応の誤差を含むものと判

断し、1棟の掘立柱建物跡として扱うけれども、各柱穴の間隔など数値に係わるものについては検討から除外した。



第79図 1区21号掘立柱建物跡

位置 調査区中央部で、74A・B-7・8グリッドに位置する。東半分は「上植木調査区」に存する。

1号堀から東へ1.5m程をとる。

重複 P1は10号井戸跡と重複するが新旧関係は確認できなかった。

主軸方位 N-89°-W

形態 3×3間(20尺×27尺)の東西棟。総柱建物跡か。本遺跡検出分は南北6m、東西7m程である。柱間は桁行で9尺、梁間で5.5尺か。南辺のP1・P2とも柱穴が2基重複しており、新旧関係は不明だが1度据え直されているものと考え。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模はややP5が小さい以外、径50~60cm程である。

内部施設 なし **出土遺物** なし

1区22号掘立柱建物跡 (PL20-7)

位置 調査区中央部で、74J・73A-8グリッドに位置する。1号堀から東へ1.5mをとる。

重複 西辺の南側は1号鍛冶遺構と重複しており、埋土が近似していた結果検出できなかった可能性もある。

主軸方位 N-3°-E

形態 1×3間(2.32~2.60×6.98~7.54m・8尺×24尺)の南北棟。桁行の柱間は7尺~9尺で一定しない。柱穴は柱軸にはば載るが、南辺のP5は40cm程南西方向へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴はP5・P6を除き隅丸方形で、長径34~43cm、短径31~38cmで、深さは9~61cmと数値にばらつきがある。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。

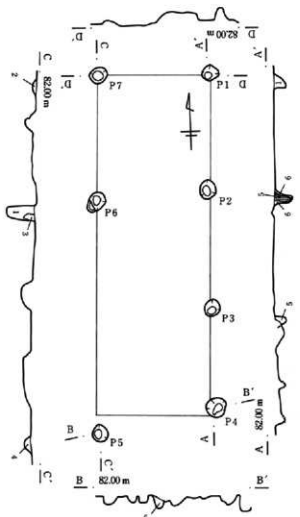
1区24号掘立柱建物跡

位置 調査区の中央部で、74I・J-7グリッドに位置する。

重複 P1・P6・P8は各々910・855・904号土坑と重複するが新旧関係は確認できなかった。また910号土坑の主軸方位は第2類に、残りは第3類に属する。

主軸方位 N-89°-E

形態 身舎は2×3間(5.45×6.80m)で、南側に1.24mの間隔をとって庇が付き、更に東側にも0.93mの間隔をとって張り出しが付き、全体として6.66×7.58m、(18+4)尺×(22+4)尺である。桁行の柱間は6.5尺~7.5尺で一定しない。P3から東へ1.2m程で調査区域外となることから、更に東側に柱穴列が延びて、東側も此である可能性がある。



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 オリーブ褐色土
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 4 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。

0 1:80 2m

第80図 1区22号掘立柱建物跡

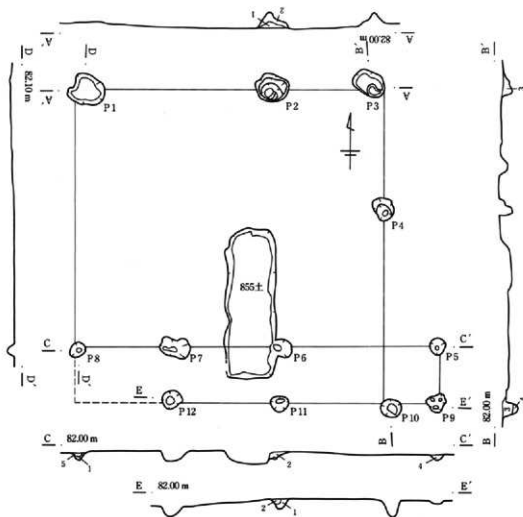
第4章 検出された遺構と遺物

北辺のP1・P2の間には柱穴は検出できなかったが、東辺のP4・P10の間と南辺の西角柱穴、西辺のP8・P1の間では、各々土坑と重複した結果柱穴が未検出となってしまった可能性がある。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と不整形と円形が混在し、内部に更に小穴を有する2段構造のものも見られる。規模は大小2つに分かれ、P1～P3・P7が長径64～74cm、短径43～65cm、深さ4～33cmで、残りが長径35～50cm、短径28～40cm、深さ6～32cmであり、庇部分の柱穴が身舎部分の柱穴よりも

小さいことが分かる。

内部施設 中央部に主軸方位と直角方向に主軸を持つ855号土坑があり、P6と重複するが位置から見て関連が想定される。規模は長辺318cm、短辺105cm、深さ33cmで、主軸方位N-0°。形状は隅丸細長方形でやや深く、底面は平坦。埋土の底面に2cm程暗褐色土が堆積し、一定期間開口していたものと思われる。遺物は青磁碗(1)のみが出土している。

出土遺物 なし



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。

- 4 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒色土小ブロック10%含む。

0 1:80 2m

第81図 1区24号掘立柱建物跡

1区26号掘立柱建物跡 (PL21-3)

位置 調査区の中央部で、74I-6・7グリッドに位置する。

重複 P2・P3は不整形形の浅い落ち込みと重複するが新旧関係は確認できなかった。

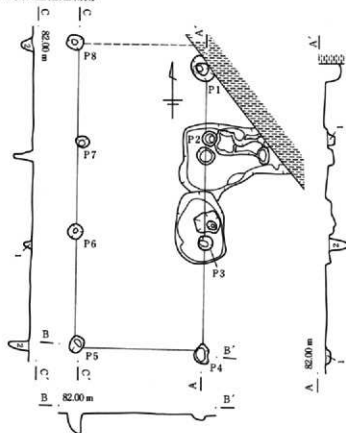
主軸方位 N-2°-E

形態 1×3間 (2.61~2.68×6.01~6.30m・9尺×21.5尺)の南北棟。桁行の柱間は5尺~7.5尺で一定しない。東辺のP1は50cm程南寄りである。西辺のP7は柱軸から東へやや外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模はP1が際だって大きい以外、長径29~42cm、短径23~31cm、深さ12~43cmである。

内部施設 なし

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。

26号掘立柱建物跡



1区11号柱穴列 (PL21-4)

位置 調査区中央部西端で、74H・I-8グリッドに位置する。1号堀から東へ3~3.5mをとる。

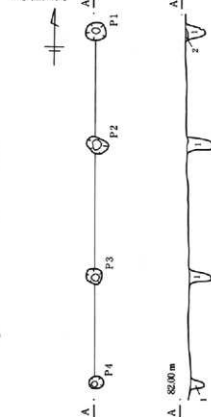
重複 なし

主軸方位 N-2°-W

形態 全長7.42mで南北に走向する。柱間は2.25~2.80mで一定しない。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は長径30~45cm、短径26~39cm、深さ30~53cmとややばらつく。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP3に混入するのみであった。

11号柱穴列



26号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。

11号柱穴列

- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。

0 1:80 2m

第82図 1区26号掘立柱建物跡・11号柱穴列

2. 方形竪穴建物跡

1区1号方形竪穴建物跡 (PL 21-5~8)

位置 調査区中央部西端で、74H-8グリッドに位置する。南端内部分北西角から北東へ5mをとる。

重複 なし 形態 ほぼ正方形

主軸方位 N-1°-E (東辺基準)

規模 南北2.00m、東西1.91m

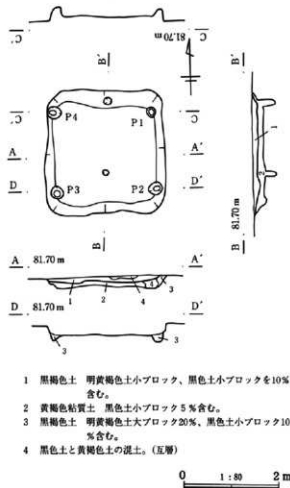
壁 壁高は北辺17.5~18cm、東辺19.5cm、南辺15.5~18cm、西辺14~14.5cmで、平均17.1cmである。

内部施設 4隅に柱穴を持つ。柱穴1の規模は径16×13cm、深さ11cm、柱穴2の規模は径21×18cm、深さ11cm、柱穴3の規模は径19×18cm、深さ9cm、柱穴4の規模は径21×20cm、深さ14cmで、全て円形を呈する。

床 土層断面観察の結果、床面を想定できたが面的な調査はなく検証できていない。底面から20cm程黄褐色粘質土を盛るが、上面は特に硬化していなかった。

埋没状況 残存する深さが浅く、埋没状況は自然埋没か人為埋没か判断できない。

出土遺物 遺物は出土しなかった。



- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 黄褐色粘質土 黒色土小ブロック5%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 4 黒色土と黄褐色土の混土。(互層)

第83図 1区1号方形竪穴建物跡

3. 土坑・柱穴

(1) 堀内部分

1区44・129・211号土坑 (PL 44)

形状から長方形の44号土坑と細長方形の129・211号土坑に類別され、後者は明確な重複関係にはないが、同様な機能を持って繰り返し付設されたと考えられる。

44号土坑 半分以上が129号土坑と重複して不明となってしまったが、西側は更に調査区域外に延び、長方形を呈すると見られる。壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(137)cm、短辺(100)cm、深さ19cmである。主軸方位N-89°-E。129号土坑よりも新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

129号土坑 西側半分が調査区域外となるが、細長方形を呈すると見られる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、南北に細長いのが水平である。規模は長辺566cm、短辺(79)cm、深さ25cmである。主軸方位N-0°。17号掘立柱建物跡P1・22号柱穴列P1・44号土坑よりも古い。8号柱穴列P1・211号土坑とは新旧関係不明。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

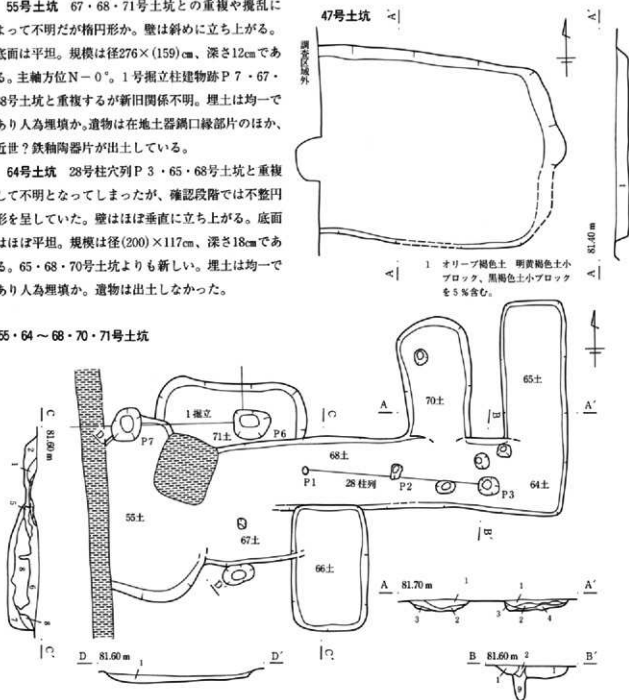
211号土坑 南端部へ向かって外形が不明となるが、細長方形を呈する。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、南北に細長いのが水平である。規模は長辺(340)cm、短辺(85)cm、深さ14cmである。主軸

第4章 検出された遺構と遺物

55号土坑 67・68・71号土坑との重複や攪乱によって不明だが楕円形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径276×(159)cm、深さ12cmである。主軸方位N-0°。1号掘立柱建物跡P7・67・68号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器罎口線部片のほか、近世?鉄軸陶器片が出土している。

64号土坑 28号柱穴列P3・65・68号土坑と重複して不明となつてしまつたが、確認段階では不整形を呈していた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径(200)×117cm、深さ18cmである。65・68・70号土坑よりも新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかつた。

55・64～68・70・71号土坑



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%、白色軽石1%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石1%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 6 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。

- 7 オリーブ褐色土
- 8 オリーブ黒色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 9 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 10 暗褐色土

0 1:60 2m

第85図 1区47・55・64～68・70・71号土坑

65号土坑 細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(225)cm、短辺102cm、深さ18cmである。主軸方位N-0°。64号土坑より古い。埋土中に灰色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は近世?長石種陶器片のみが出土している。

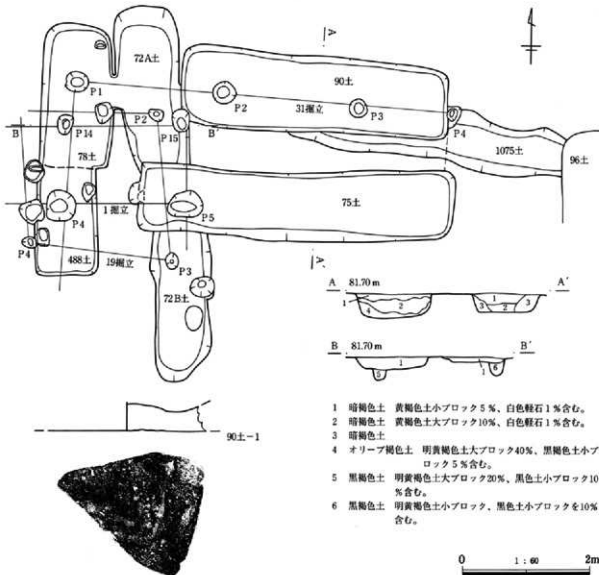
66号土坑 隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北に向かって徐々に立ち上がる。規模は長辺198cm、短辺120cm、深さ48cmである。主軸方位N-0°。埋土中に明黄褐色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

67号土坑 66・68号土坑と重複するため平面形・

壁ともに不明。底面はほぼ平坦。規模は径(129)×(75)cm、深さ10cmである。土層断面観察の結果、66号土坑よりも新しいことが判明した。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

68号土坑 55・66・67号土坑との重複で不明だが細長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺(360)cm、短辺105cm、深さ18cmである。主軸方位N-90°。28号柱穴列と新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は平安時代以前の遺物がやや多く出土するが混入と見られる。

70号土坑 64・68号土坑との重複で不明だが隅丸長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。



第86図 1区72A・72B・75・78・90・488・1075号土坑・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

規模は長辺(186)cm、短辺105cm、深さ18cmである。主軸方位N-0°。64号土坑よりも古い。埋土中に灰色土ブロックを多く含んでおり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

71号土坑 55・68号土坑との重複や攪乱によって南半分が不明だが隅丸長方形か。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺237cm、短辺(90)cm、深さ12cmである。主軸方位N-0°。1号掘立柱建物跡P6、68号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区72A・72B・75・78・90・488・1075号土坑 (PL 22-2)

形状から細長方形の72B・75・90・1075号土坑、隅丸長方形及び長方形の72A・78・488号土坑に類別できる。後者は平面形・深さともに大差ないことから、同じような機能を持って繰り返し設置されたものと考えられる。埋土は全て人為埋填である点も注意を要する。

72A号土坑 隅丸長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、北へ向かって徐々に立ち上がる。規模は長辺(246)cm、短辺102cm、深さ9cmである。主軸方位N-5°-W。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器片のほか、近世陶器片が出土している。

72B号土坑 細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(238)cm、短辺98cm、深さ6cmである。主軸方位N-1°-W。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は72A号土坑と不分明に混在。

75号土坑 細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺504cm、短辺111cm、深さ30cmである。主軸方位N-88°-W。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は平安時代以前の遺物がやや多く出土するが混入と見られる。

78号土坑 隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は長辺(225)cm、短辺111cm、深さ21cmである。主軸方位N

-0°。1号掘立柱建物跡P14より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

90号土坑 細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺426cm、短辺126cm、深さ36cmである。主軸方位N-84°-W。埋土中に黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は在地土器鉢(1)のほか在地土器片が出土している。

488号土坑 長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(174)cm、短辺99cm、深さ19cmである。主軸方位N-0°。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1075号土坑 細長方形で、外形は波打つ。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は長辺(440)cm、短辺88cm、深さ7cmである。主軸方位N-78°-W。90・96号土坑より古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区94号土坑

長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は長辺125cm、短辺78cm、深さ22cmである。主軸方位N-1°-W。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区96号土坑

細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、若干北へ向かって立ち上がる。規模は長辺287cm、短辺120cm、深さ32cmである。主軸方位N-4°-W。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

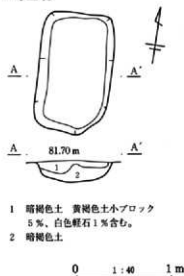
1区170号土坑

細長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(429)cm、短辺69cm、深さ9cmである。主軸方位N-3°-E。南側に2.3mの間隔をとって2号溝があり、3号溝・221号土坑とともに1つの区画を囲い込んでいる可能性がある。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区193号土坑

楕円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹

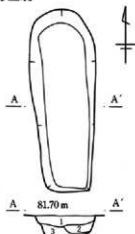
94号土坑



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック
5%、白色軽石1%含む。
- 2 暗褐色土

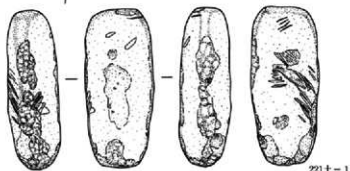
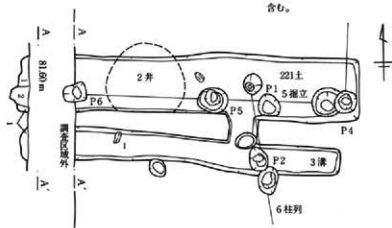
0 1:40 1 m

96号土坑

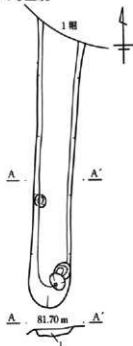


- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック
5%、白色軽石1%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック
10%、白色軽石1%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック
10%、黒褐色土小ブロック5%
含む。

221号土坑・3号溝



170号土坑



170号土坑

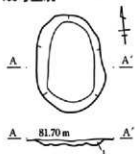
- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック
5%、白色軽石1%含む。

221号土坑 (3号溝を含む)

- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土小
ブロック、黒褐色土小ブロック
を5%含む。
- 2 オリーブ黒色土 明黄褐色土小
ブロック、黒色土小ブロックを
10%含む。

0 1:60 2m

193号土坑



- 1 黒色土 黄褐色土大ブロック10%
含む。

0 1:40 1 m

第87図 1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物 (1)

第4章 検出された遺構と遺物

する。規模は径101×70cm、深さ6cmである。主軸方位N-3°-E。埋土は残存する深さが浅く、自然埋没か人為埋没か不明。遺物は出土しなかった。

1区194号土坑

不整形円形。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径100×80cm、深さ11cmである。主軸方位N-0°。埋土は残存する深さが浅く、自然埋没か人為埋没か不明。遺物は出土しなかった。

1区221号土坑 (PL 44)

細長方形。壁は斜めに立ち上がる。東端は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(453)cm、短辺99cm、深さ6cmである。主軸方位N-85°-W。東側に2.7mの間隔をとって2号溝があり、北側に1つの区画を囲い込んでいる可能性がある。6号柱穴列P1より古く、2号井戸跡より新しい。埋土は均一であり人為埋没か。遺物は叢石(1)のみが出土している。

1区234号土坑

やや北東方向に歪んだ長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺114cm、短辺65cm、深さ10cmである。主軸方位N-6°-E。埋土は均一であり人為埋没か。遺物は出土しなかった。

1区255・256・257・616・617号土坑・614号柱穴

形状から長方形・細長方形の255・256・616・617号土坑と、やや大きい方形の257号土坑に類別できる。前者は平面形・深さともに大差ないことから、同じような機能を持って繰り返し付設されたものと考えられる。新旧関係は古い順から616号土坑→255号土坑→256号土坑である。255号土坑は一定期間開口していた点で注目される。

255号土坑 長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺195cm、短辺114cm、深さ36cmである。主軸方位N-90°。底面に1cm程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないもの。一定期間開口して使用されていたものと想定される。257号土坑よりも古い。埋土中に黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋没か。遺物は古瀬戸大皿(1)のみが出土している。

256号土坑 255号土坑に壊されるが長方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(84)cm、短辺93cm、深さ15cmである。主軸方位N-90°。255号よりも古い。埋土は均一であり人為埋没か。遺物は古瀬戸皿(1)のほか在地土器銅片数片が出土している。

257号土坑 方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺300cm、短辺225cm、深さ15cmである。主軸方位N-90°。616号土坑よりも古く、255号土坑よりも新しい。ピット・硬化面は見られない。埋土は均一であり人為埋没か。遺物は出土しなかった。

616号土坑 西半分は調査年度が変わり、遺構確認面が深くなってしまったため不整形形となっていたが、元来は東半分と合わせて細長方形を呈していたものと考えられる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は長辺240cm、短辺88cm、深さ36cmである。主軸方位N-90°。埋土はほぼ均一であり人為埋没か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

617号土坑 西半分は調査年度が変わり、遺構確認面が深くなってしまったため未確認となっていたが、元来は東半分と合わせて長方形を呈していたものと考えられる。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(114)cm、短辺96cm、深さ24cmである。主軸方位N-90°。埋土は均一であり人為埋没か。遺物は出土しなかった。

614号柱穴 規模は径(52)×(39)cm、深さ13cmである。柱痕跡は見られない。在地土器カワラケ(1)のみが出土している。

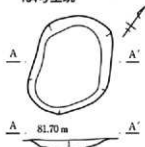
1区264号土坑

楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径99×62cm、深さ21cmである。主軸方位N-2°-E。埋土はほぼ均一であり人為埋没か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区282号土坑 (PL 22-3)

長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺280cm、短辺140cm、深さ46cmである。主軸

194号土坑



- 1 黒色土 黄褐色土大ブロック10%含む。

234号土坑



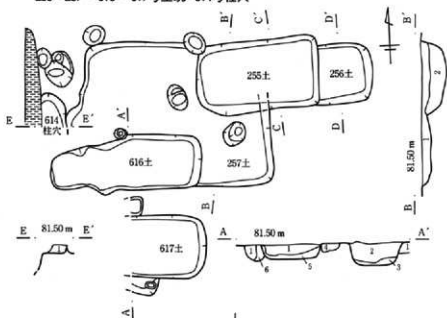
- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

264号土坑

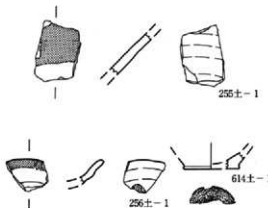


- 1 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。

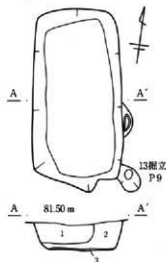
255~257・616・617号土坑・614号柱穴



- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 3 暗褐色土
- 4 オリーブ褐色土
- 5 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 7 黒褐色土
- 8 明黄褐色土



282号土坑



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 3 黒褐色土

第88図 1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

方位N-9°-W。底面に1cm程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器片のほか、近世陶器片1片も出土している。

1区312号土坑

楕円形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、やや丸みを持つ。規模は径98×73cm、深さ18cmである。主軸方位N-18°-W。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区325号土坑 (PL 22-4)

攪乱に東壁を壊されるが隅丸長方形か。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺190cm、短辺(62)cm、深さ31cmである。主軸方位N-0°。4号掘立柱建物跡のP2、16号掘立柱建物跡のP2よりも新しく、しかも主軸方位も同じく第3類であることから注意を要する。遺物は在地土器鍋口縁部片(1)・古瀬戸四耳壺口縁部片(2)のみが出土している。

1区450号土坑

隅丸方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺100cm、短辺85cm、深さ11cmである。主軸方位N-4°-W。9号掘立柱建物跡のP12よりも新しく、また主軸方位が同じく第2類である点で注意を要する。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区514・515・516号土坑 (PL 22-5)

形状から隅丸細長方形の515号土坑、長方形・隅丸長方形の514・516号土坑に類別できるが、形態的には近似する。515号土坑は前出するが、埋土から一定期間開口して使用されていたと見られる。

514号土坑 隅丸長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺150cm、短辺86cm、深さ12cmである。主軸方位N-0°。土層断面観察の結果、515号土坑の底面から黄褐色粘質土を充填して本遺構底面を構築していることが確認され、硬化面はないが底面を意識的に平坦にしていることが判明した。12号掘立柱建物跡P6・515号土坑より

新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

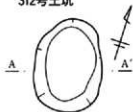
515号土坑 隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺235cm、短辺78cm、深さ21cmである。主軸方位N-90°。底面に2cm程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。514号土坑よりも古く、12号掘立柱建物跡P7とは新旧関係不明。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は古瀬戸平碗(1)のほか在地土器内耳鍋片が出土している。

516号土坑 長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(142)cm、短辺73cm、深さ15cmである。主軸方位N-0°。515号土坑より新しい。埋土は均一であり人為埋填か。遺物は在地土器鍋片のほかは平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区252号柱穴 (PL 44)

規模は径46×36cm、深さ32cmである。柱痕跡は見られない。遺物は在地土器香炉(1)のみが出土している。

312号土坑

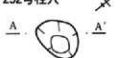


A 81.40m A'



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック 5%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック 10%含む。

252号柱穴



A 81.50m A'



- 1 オリーブ褐色土
- 2 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロックを10%含む。
- 4 明黄褐色土 灰色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

450号土坑

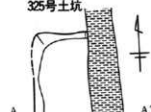


A 81.70m A'

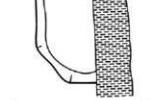


- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック 5%含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。

325号土坑



A 81.50m A'



- 1 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。

252穴-1



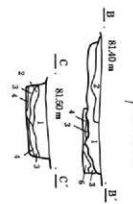
325土-2



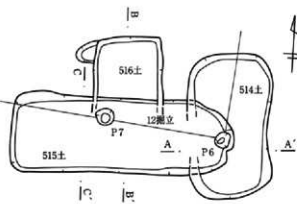
325土-1

0 1:40 1m

514・515・516号土坑



515土-1



A 81.40m A'



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック 5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック 10%含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土大ブロック 20%含む。
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 6 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 7 黄褐色粘質土 人為充填土。

0 1:60 2m

第89図 1区堀内部分土坑・柱穴・出土遺物(3)

(2) 堀外部分

1区655・656号土坑 (PL 22-6、44)

両土坑とも近似しており、同様な機能を持って繰り返し付設されたものか。北側に50cm程の間隔をとって7号溝と向き合っており関連が想定される。

655号土坑 656号土坑と重複するが隅丸長方形か。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。

規模は長辺(206)cm、短辺126cm、深さ56cmである。

主軸方位N-3°-E。東半部分では底面に1cm程黒色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。656号土坑よりも古い。埋土中に褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は出土しなかった。

656号土坑 隅丸長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(188)cm、短辺116cm、深さ67cmである。主軸方位N-3°-E。655号土坑よりも新しい。埋土中に明黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。遺物は在土器内耳鍋(1)のほかは平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区671・672・673・674号土坑 (PL 22-7)

形状は672号土坑がやや不整形以外全て長方形で、673号土坑→674号土坑、672号土坑→671号土坑の順で付設されるが、同様な機能を持って繰り返し付設されたものか。673号土坑は埋土から一定期間開口して使用されていたと見られる。

671号土坑 長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(135)cm、短辺73cm、深さ35cmである。主軸方位N-82°-W。西側に前出の土坑が重複するが詳細不明。672号土坑よりも新しい。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

672号土坑 不整形長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺(124)cm、短辺(100)cm、深さ(21)cmである。主軸方位N-27°-E。671号土坑より古い。埋土は均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

673号土坑 674号土坑と重複するが長方形か。壁

は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(145)cm、短辺(74)cm、深さ32cmである。主軸方位N-73°-W。底面に1cm程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。674号土坑より古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

674号土坑 北側は調査区域外へ延びるが長方形か。南に前出の土坑が重複するが詳細は不明。壁は垂直に立ち上がる。底面はやや丸みを持つ。規模は長辺(87)cm、短辺62cm、深さ27cmである。主軸方位N-76°-W。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区686号土坑

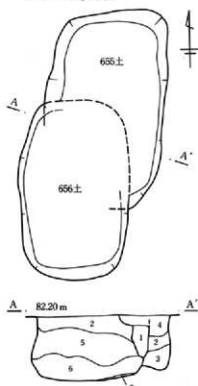
やや長辺が外側へ湾曲した長方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(133)cm、短辺110cm、深さ37cmである。主軸方位N-90°。埋土中に黒色土・黄褐色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。出土遺物は砥石(1)のみである。

1区854・855号土坑 (PL 22-8)

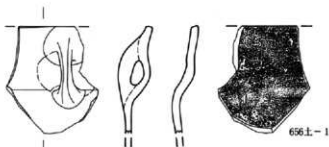
854号土坑 隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦で、南北に長いが水平。規模は長辺(702)cm、短辺96cm、深さ8cmである。主軸方位N-8°-W。底面西半分に1cm程黒褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。855号土坑よりも古い。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

855号土坑 隅丸細長方形。壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦だが、中央部から両端部へ向かってやや丸みを持って立ち上がる。規模は長辺318cm、短辺105cm、深さ33cmである。主軸方位N-0°。底面に2cm程暗褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。854号土坑よりも新しい。24号掘立柱建物跡P6と重複し新旧関係不明だが、位置から見て関連も考えられる。出土遺物は青磁碗(1)のみである。

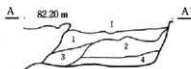
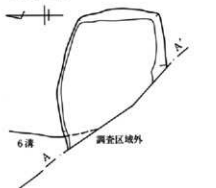
655・656号土坑



- 1 黄褐色土 褐色土小ブロック10%含む。
- 2 黄褐色土 黒色土大ブロック、褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 褐色土小ブロック10%含む。
- 4 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 5 オリーブ褐色土 黄褐色土小ブロック10%含む。
- 6 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 7 黒色砂質土



686号土坑

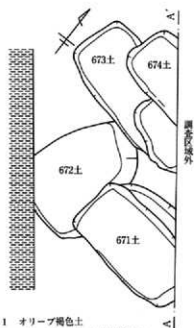


- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 3 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 4 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック40%、黒褐色土小ブロック5%含む。



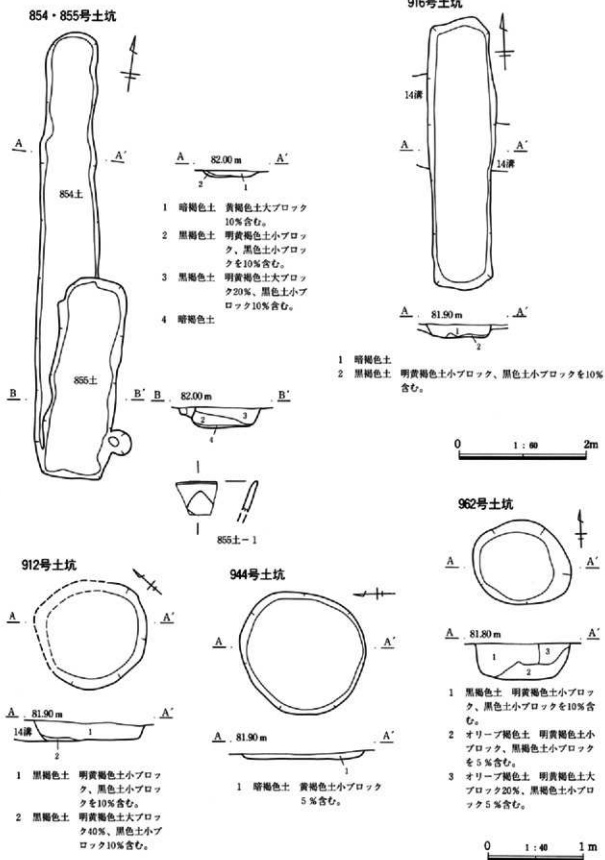
0 1:40 1m

671～674号土坑



- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。

第90図 1区堀外部分土坑・出土遺物(1)



第91図 1区堀外部分土坑・出土遺物(2)

1区912号土坑

北半分が14号溝と重複しており、外形は確定できなかったが、土層断面観察から南半分と合わせて整った円形を呈していたと見られる。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径(118)×(114)cm、深さ18cmである。14号溝より新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区916号土坑

細長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南端から北端へ向かって緩やかに立ち上がり、比高差は15cm程を測る。規模は長辺429cm、短辺111cm、深さ18cmである。主軸方位N-3°-E。底面に2cm程黒褐色土が堆積しており、硬化面はないものの一定期間開口して使用されていたものと想定される。14号溝より新しい。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区944号土坑

円形。壁は浅く詳細は不明だが垂直か。底面は平坦。規模は径132×128cm、深さ7cmである。埋土はほぼ均一であり人為埋填か。遺物は出土しなかった。

1区962号土坑 (PL 23-1)

隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺102cm、短辺86cm、深さ38cmである。主軸方位N-89°-W。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

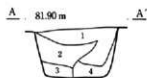
1区1021号土坑 (PL 23-2)

隅丸方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺106cm、短辺88cm、深さ52cmである。主軸方位N-7°-E。埋土中に灰色土大ブロックが多く混入しており人為埋填か。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1区792号柱穴 (PL 44)

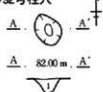
規模は径35×25cm、深さ15cmである。柱痕跡は見られない。出土遺物は祥符天寶(1)のみである。

1021号土坑



- 1 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 2 灰褐色粘質土 灰色土大ブロック20%含む。
- 3 灰褐色粘質土 灰色土大ブロック40%含む。
- 4 灰褐色粘質土

792号柱穴



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。

0 1:40 1m



792穴-1

第92図 1区1021号土坑・792号柱穴・出土遺物

4. 土壌墓

1区1号土壌墓 (PL44)

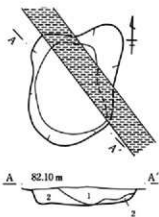
隅丸方形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺100cm、短辺82cm、深さ10cmである。主軸方位N-10°-W。埋土は均一で人為埋填。小柱穴と重複するが新旧関係不明。出土遺物は治平元寶(1)と元符通寶(2)のみである。

1号土壌墓



- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。

2号土壌墓



- 1 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%、黒褐色土小ブロック5%含む。
2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。

0 1:40 1 m

1区2号土壌墓 (PL44)

隅丸方形を呈し浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺132cm、短辺112cm、深さ19cmである。主軸方位N-48°-E。出土遺物は永楽通寶(1)と明道元寶(2)のみである。



1墓-1



1墓-2



2墓-1



2墓-2

第93図 1区1・2号土壌墓・出土遺物

5. 火葬跡

1区1号火葬跡 (PL23-3・4、45)

隅丸長方形で西辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で植物攪乱等によりやや荒れる。規模は長辺119cm、短辺72cm、深さ12cmで、張り出し部は長さ15cm、幅24cmである。主軸方位はN-90°-W。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化し、内側がやや黄白色を呈し火力は強い。壁の焼けは下層へ向かって弱く、底面は全く焼けておらず、確認面近くが燃焼面か。確認面から10cm程下面には概ね3cm厚の炭層が全面に堆積しており、その下層にも若干の埋土が存在する。遺物は焼締陶器片1片が確認面に露出していたが混入かもしれない。焼人骨は確認面から底面にわたって少量出土した。掲載骨を含めて総量は49.59gで、内訳は頭蓋骨2.07g、上顎槽骨片0.19g、腿肢骨37.06g、その他10.27gである。頭蓋骨(1)は北側に集中することから頭部を北向きに置いた可能性が高いが、骨の残存量から考えて取骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区2号火葬跡 (PL23-5・6)

不整形円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径100×87cm、深さ11cmである。南側の壁がよく焼けるが、全体としては埋土中に焼土を含む以外、底面等の焼土化は見られない。炭も多く混入するが、炭層を形成するまでには至らない。遺物・焼人骨ともに出土しなかった。

1区3号火葬跡 (PL23-7・8、45)

隅丸長方形で西辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹するが平坦。規模は長辺117cm、短辺68cm、深さ27cmで、張り出し部は長さ9cm、幅23cmである。主軸方位N-87°-W。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化し、壁の焼けは下層へ向かって弱く、底面は全く焼けていない。確認面近くが燃焼面か。確認面から10cm程下面に炭を多く含んだ埋土が現れ底面まで堆積する。北半部中央には厚さ10cm弱のクリの炭化材

(第5章参照)が底面から10cm程浮いて出土しており、燃料であるとともに燃焼台のような機能も想定される。出土した土器は平安時代以前の遺物で混入と見られる。焼人骨は埋土中から少量出土した。掲載骨を含めて総量は149.88gで、内訳は頭蓋骨0.50g、椎骨4.02g、腿肢骨77.92g、その他67.44gである。骨の残存量から考えて取骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区4号火葬跡 (PL24-1)

削平により残存状況は悪くT字形を呈するが、元来は他の火葬跡同様隅丸長方形で南辺に小規模な張り出しを持っていたものと見られる。規模は長辺(75)cm、短辺(47)cmで、最深部は11cmだがほとんどは浅く残存状況は極めて悪い。張り出し部は長さ26cm、幅30cmである。主軸方位N-180°。張り出し部の両側がよく焼けるが、主体部は壁もほとんど残っておらず底面も含め焼けは見られない。埋土は炭・炭粒を主体とする。出土した土器は平安時代以前の遺物で混入と見られる。焼人骨は埋土中からわずかに0.05g出土した。骨の残存量から考えて取骨して別の場所に埋葬した可能性が高い。

1区5号火葬跡 (PL24-2・3)

隅丸長方形で南辺中央に小規模な張り出しを持つ。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で植物攪乱等によりやや荒れる。規模は長辺110cm、短辺66cm、深さ20cmで、張り出し部は長さ24cm、幅57cmである。主軸方位N-176°-E。外形線に沿って壁は一部焼土化するが、底面は焼けていない。埋土に焼土はなく炭粒を少量含む。1号鍛冶遺構よりも新しい。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られ、焼人骨は出土しなかった。

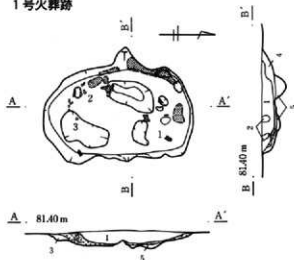
1区6号火葬跡 (PL24-4)

ほぼ円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径90×87cm、深さ11cmである。埋土中に焼土と炭粒を多く含むが、壁・底面に焼土化は見

第4章 検出された遺構と遺物

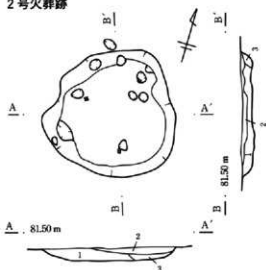
られない。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られ、焼人骨は出土しなかった。

1号火葬跡



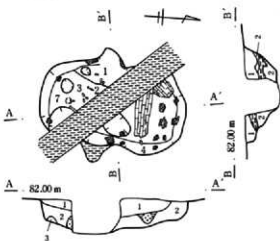
- 1 黒褐色土 黄褐色土小ブロック、炭粒を10%含む。
- 2 黒褐色土 炭粒40%、黄褐色土小ブロック10%含む。
- 3 オリーブ褐色土 焼土粒5%含む。
- 4 オリーブ褐色土 炭大ブロック40%、焼土大ブロック10%含む。
- 5 オリーブ褐色土 炭大ブロック5%含む。

2号火葬跡



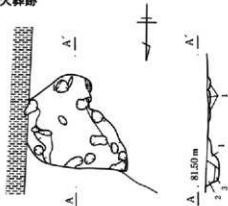
- 1 オリーブ褐色土 焼土大ブロック、炭大ブロックを40%含む。
- 2 オリーブ褐色土 炭大ブロック20%、黄褐色土大ブロック5%含む。
- 3 オリーブ褐色土 黄褐色土大ブロック10%、炭大ブロック5%含む。

3号火葬跡



- 1 にぶい黄褐色土 黄褐色土小ブロック20%、炭粒5%含む。
- 2 オリーブ褐色土 炭大ブロック40%、骨片、焼土粒を1%含む。
- 3 黄褐色土ブロック

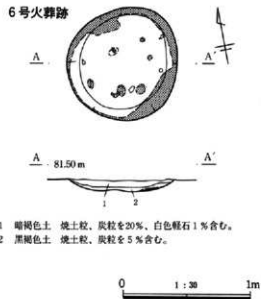
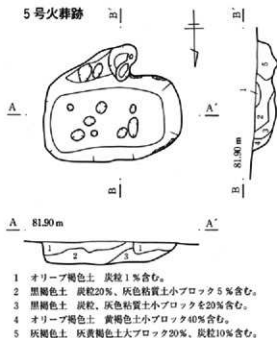
4号火葬跡



- 1 黒色土 炭主体。黄褐色粘土大ブロック20%含む。
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土

0 1:30 1m

第94図 1区火葬跡(1)



第95図 1区火葬跡(2)

6. 堀・溝

1区1号堀(付図2 PL24-5~8、25-1~4、45、46)

「上植木調査区」の1号溝と同一の区画掘であり、ここでは関連づけて報告する。

位置 調査区中央部を横断し、74D-73C-6-8グリッドに位置する。

重複 北端で670号土坑と重複するが新旧関係は明確にできなかった。

形態 南北に走向するが南側3分の1程は20m程東へ張り出して、全体として柄杓形をなす。南端部は西走して調査区域外となるが、15m程で鯉沼の底面となるため、全体規模と大差のないものとする。全体の長さは「上植木調査区」分を含めて南北距離125mである。詳細な規模は「上植木調査区」の北西端部から折れ部までが長さ12m程で、そこから32.5m程南進して1区に至る。1区では北側直線部(北端から張り出し部北西角まで)が、外側で長さ43.5m内側で46.3mで、「上植木調査区」の折れ部からは80.6mとなる。張り出し部は外側で北辺16m東辺37.8m南辺22m、内側では北辺16.6m東辺32.4m南辺19.5mを測る。また、東辺には北角から

16m部分に折れ部があり、南側が更に1.5m程東側へ張り出す。張り出し部として区画された南堀内部分は、南北32m東西21.5~23.2mとなる。1号堀の幅は北端が最大で上幅3.20m下幅0.70m、また張り出し部は上幅2.0~2.7m程、下幅0.5m前後である。深さはA断面で0.80m、B断面で0.94m、C断面で0.84m、D断面で1.36mである。底面の標高を比較すると、北端D断面付近と南端A断面付近とは殆ど比高差はなく、かえって張り出し部の北辺と南辺とを比較すると50cm程北辺が高くなっている。走向方位は、北側直線部でN-1°-E、張り出し部で北辺N-89°-W、東辺N-5°-W-N-4°-E、南辺N-89°-Wである。断面形は逆台形で、最も深い北端部ではよりV字形に近い形状となる。

埋没状況 埋土は総じて底面から40cm程まで腐植に富んだ黒~暗褐色粘土或は砂質土が堆積し、その上面を黄褐色~灰褐色土が埋める。したがって、本遺構は多量な流水は無いにしても、常時湿潤な状況にあったに違いない。なお、上層と下層の層境は明確

第4章 検出された遺構と遺物

に分層できるため、掘り直しの可能性がある一方、自然埋没によって下層堆積後一時期に上層によって人為埋填された可能性もあることから、調査時において埋土をこの基準で上下に分け、遺物を分類して傾向を見ることとした。土層断面を観察すると、C断面は南堀内部分側(南側)から黄褐色土が流入し、D断面でも同じく北堀内部分側(西側)から黄褐色土が流入している。ただし、南堀内部分ではC断面以外でこの状況は見られず、一方南堀内部分の北西折れ部から北端にかけては、非常に顕著にこの状況が看取できた。したがって、北堀内部分から南堀内部分北辺までは縁辺に土塁が存在していた可能性が非常に高く、南堀内部分でもその可能性がある。

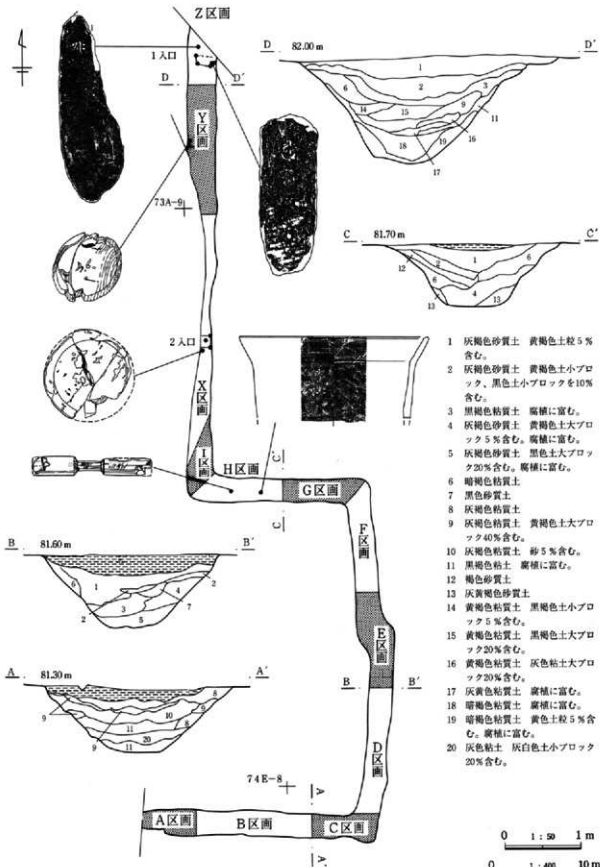
関連施設 4つの入口遺構が確認された。1号入口遺構は北端に位置し、3本の杭と1本の杭痕跡が残存する。この遺構から南へ28.5m南堀内部分北辺から15mには2号入口遺構があり、2本の杭と1本の

柱痕跡が残存する。3号入口遺構は南堀内部分の東辺折れ部に存するが、柱材等が出土したほか、1号堀の両肩部に20・21号柱穴列が検出され関連が想定される。また、南堀内部分南辺の東角から11~13mには4号入口遺構がある。

出土遺物 総量とその分布は第3表のとおりであり、特に1号入口遺構部分であるY・Z区画は土器・石器のほか木器・木製品の出土量も多い。また3号入口遺構部分であるE・F区画でもその傾向は同じである(1・3号入口遺構の遺物は重複を避けるため、詳細についてはここでは触れない)。こうした中で、南堀内部分の北西角に位置するH・I区画では土器類がやや多く出土し、木器・木製品もE・F・Y・Z区画と同様な出土状況であった。これは堀の折れ部という性格に起因すると言える。堀の埋没状況では、この北西角から調査区北壁まで顕著に西側からの埋填土(土塁か)の流入があることか

第3表 1区1号堀出土土器・石器一覧表

| 1区1号堀 区画・層 | 個 体 数 | | | | | | | | | | | 個体数以外の()は破片 | | | 掲載遺物数 |
|---------------|----------|---------|-----------|-------------|---------|--------|------------------|--------|--------|--------|-----------------------|------------------|---------|--|-------|
| | 中国 陶磁 | 古 瀬戸 | その他 磁器 | 焼 罎 瓦 | 在 地 土 器 | | | 板 碑 | 石 臼 | 小 計 | 金 具 ・ 平 安 | 近 世 陶 器 | 総 計 | | |
| | | | | | 鉢 | 鍋 | カ ワ ラ ケ | | | | | | | | |
| A区画上層 | | | | 1 | | | | | | 1 | (1) | | 1(1) | | |
| A区画下層 | | | | 1 | 1 | | | | | 2 | | | 2 | | |
| B区画上層 | 青磁1 | | | 1 | 茶壺1 | | | | | 3 | (11) | 3 | 6(11) | | |
| B区画下層 | | | | | | 1 | 1 | | | 2 | | | 2 | | |
| C区画上層 | | | | | | 1 | | | | 1 | (4) | | 1(4) | | |
| C区画下層 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | |
| D区画上層 | | | | | | 1 | | | | 1 | (9) | | 1(9) | | |
| D区画下層 | 白磁1 | | | | | 1 | | | | 2 | (4) | 1? | 3(4) | | |
| E区画上層 | | 1 | | 1 | 1 | 2(3) | | | | 5(3) | (37) | | 5(40) | | |
| E区画下層 | | | | | 1 | 2(2) | | | | 3(2) | (7) | | 3(9) | | |
| F区画上層 | | | | | | 1 | | | | 1 | (13) | | 1(13) | | |
| F区画下層 | | | | | | 1 | | | | 1 | (3) | | 1(3) | | |
| G区画上層 | | | | | | | | | 1 | 1 | (20) | | 1(20) | | |
| G区画下層 | | | | | | 1 | | | | 1 | (7) | | 1(7) | | |
| H区画上層 | | | | | 1 | | | | | 1 | (11) | | 1(11) | | |
| H区画下層 | | | | | 1 | 3(1) | | | | 4(1) | | | 4(1) | | |
| I区画上層 | | | | | | 1(5) | 1 | | | 2(5) | (17) | | 2(22) | | |
| I区画下層 | 青磁2 | | 1 | | | | | | | 3 | (8) | | 3(8) | | |
| X区画上層 | | | | | | | 1 | | | 1 | (34) | | 1(34) | | |
| X区画下層 | | | | | | 1 | | | 茶臼1 | 2 | (2) | | 2(2) | | |
| Y区画上層 | | 1 | | | 1 | 1 | | 1 | | 4 | (8) | | 4(8) | | |
| Y区画下層 | 青磁1 | 1 | | | | 5(1) | 1 | | | 9(1) | (5) | | 9(6) | | |
| Z区画上層 | | | 天目1 | | | 3(13) | 3 | 1 | | 8(13) | (36) | 1 | 9(49) | | |
| Z区画下層 | | 2 | | 1 | | 6(5) | | | 5 | 2 | (27) | | 16(32) | | |
| 計 | 5 | 5 | 2 | 5 | 7 | 31(30) | 7 | 7 | 6 | 75(30) | (264) | 5 | 80(294) | | |

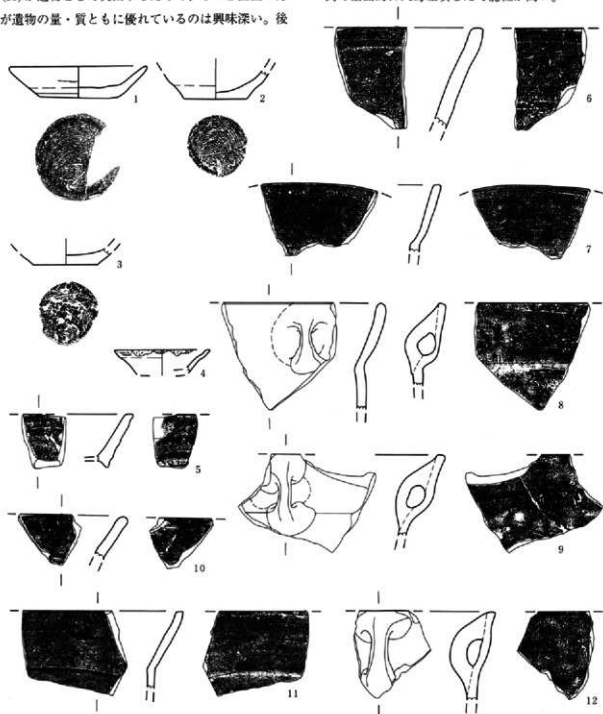


第99図 1区1号堀土層断面・遺物出土状況・調査区画配置図

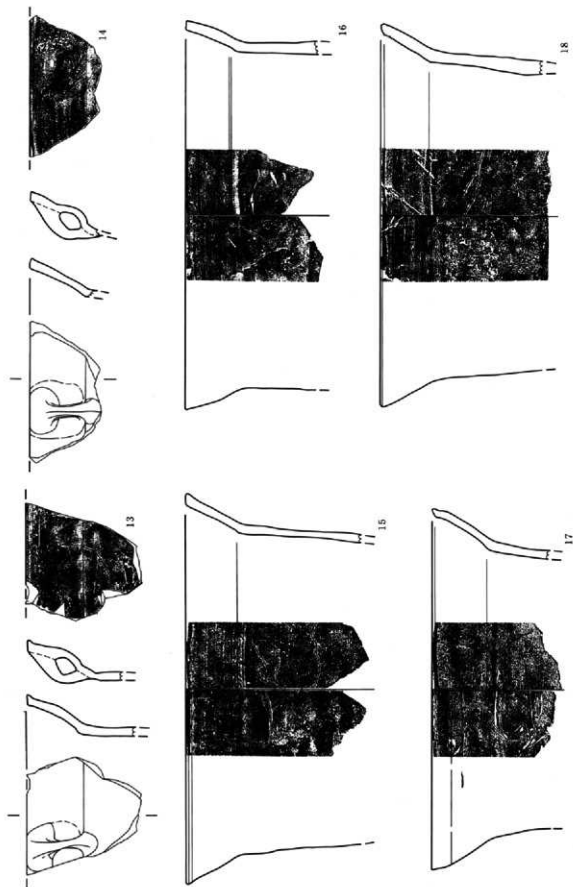
第4章 検出された遺構と遺物

ら、1つの区画された領域の境界である可能性もあり、この角部にそうした性格があるとすれば、第5の入口の存在も想定でき、遺物の出土状況はこうしたことを示したものと想像できる。ところで、本館跡の主体部と言える南堀内部分を囲むA-I区画では、H区画の遺存状態の良い在土器鍋(18)や手杵(50)が遺物として突出するだけで、Y・Z区画の方が遺物の量・質ともに優れているのは興味深い。後

述のとおり本館跡は掘立柱建物跡の分析から、第3類段階では建物群の中心が北西方向に移動したと見られるのと符合するのである。なお、埋土上層全体の出土遺物の状況として、中世以降遺物の混入が極めて少ない点があり、こうした状況は堀が短期間に埋没したことを示唆し、土塁等の削平も含めて短期間で全面的に人為埋填した可能性が高い。

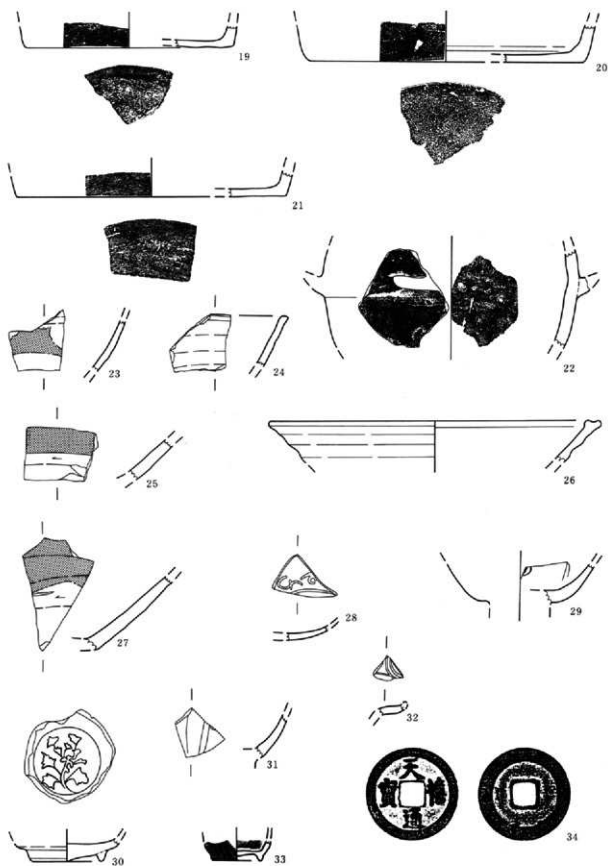


第97図 1区1号掘出土遺物(1)

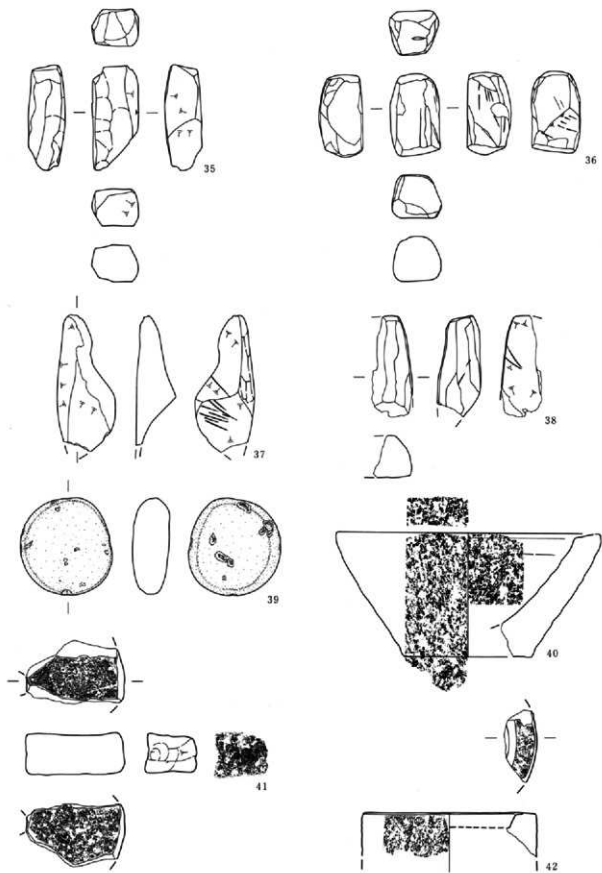


第98圖 1区1号掘出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

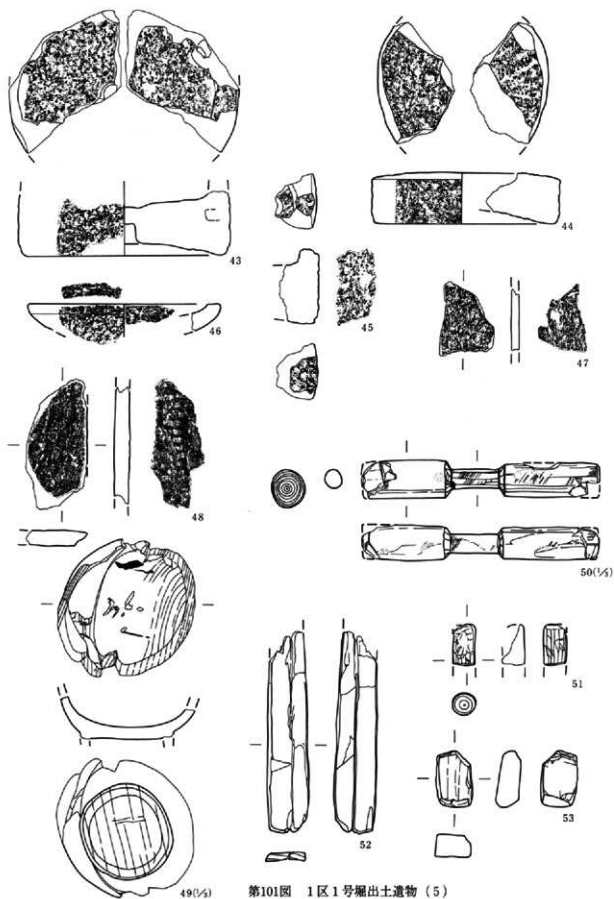


第99図 1区1号掘出土遺物(3)

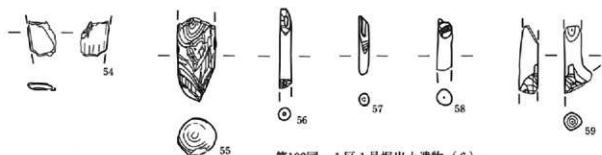


第100图 1区1号掘出土遺物(4)

第4章 検出された遺構と遺物



第101図 1区1号堀出土遺物(5)



第102図 1区1号掘出土遺物(6)

1区2号溝 (PL 25-5、46)

位置 南堀内部分の中央部西寄り、74F~H-8・9グリッドに位置する。北端部から北へ2.3mの間隔をとって170号土坑がある一方、南端部から西へ2.7mの間隔をとって221号土坑や3号溝が存しており、1つの区画を囲い込んでいる様相を示す。ただし主軸方位は221号土坑が第1類で、170号土坑と3号溝が第3類に属する点で注意を要する。

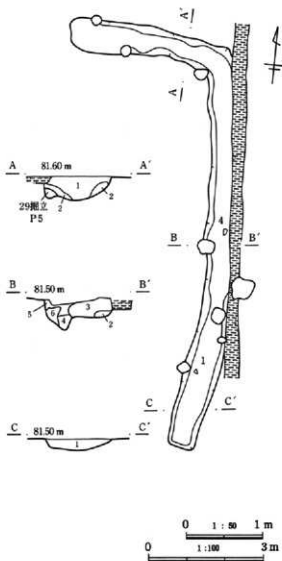
重複 29号掘立柱建物跡のP5より新しい。7号掘立柱建物跡のP2は土層断面観察では後出に見えるが、上面が攪乱を強く受けている影響下にあるため、やや確実さに欠ける。本遺構の新旧関係は、南堀内部分の建物配置を考える点で重要な要素であるため、注意を要する。

形態 南を上側にしたL字状を呈し、長辺は東側へ弓なりに張り出す。南端部は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がる。北端部は攪乱の影響で壁が壊され輪郭も不鮮明となる。規模は短辺(北辺)が長さ4.30m、長辺(東辺)10.52m、最大幅は上幅0.94m下幅0.64m、深さは中央部が一番深く30cmで、両端へ向かって徐々に底面が上がる。走向方位は短辺でN-85°-W、長辺N-5°-W~N-15°-E。

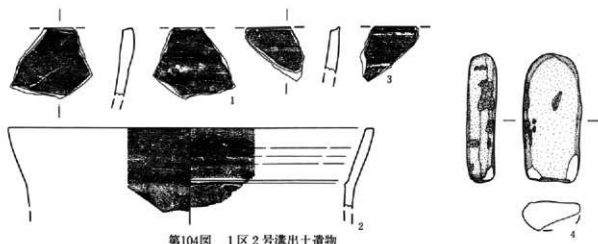
- 1 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 2 オリーブ褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを10%含む。
- 5 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒色土小ブロック10%含む。
- 6 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。

断面は底面の広い逆台形で、底面はやや丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物 埋土から在地土器鍋(1~3)、敲石(4)が出土している。



第103図 1区2号溝



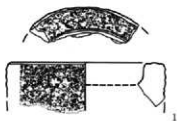
第104図 1区2号溝出土遺物

1区3号溝 (PL 46)

位置 南堀内部分の西端部中央で、74F-9グリッドに位置する。25~40cmの間隔をとって221号土坑の南側に隣接して規模・形態ともに近似する。東端は2号溝と3.0mの間隔をとる。

重複 25号柱穴列のP1よりも新しい。6号柱穴列のP2とは新旧関係不明。

形態 ほほ直線状で、西側は調査区域外となるため、全体規模は不明である。東端は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がり、2号溝の南端に類似する。規模は長さ4.22m以上、最大上幅0.52m下幅0.37m、深さは断面観察部で13cmである。走向方位はN-84°-W。断面形はU字状。底面はやや丸みを持つ。
出土遺物 底面で石臼上臼(1)が、埋土から在土器銅片が出土している。



第105図 1区3号溝出土遺物

1区6号溝 (PL 25-6)

位置 北堀内部分の中央部で、83D-0・1グリッドに位置する。

重複 15・16号柱穴列の各P1と重複するが新旧関係は明確にできなかった。651・686号土坑より新しい。

形態 北西部ではほぼ直角に折れるL字状を呈し、両端とも南側調査区域外へ延びる。長さは東辺で(4.62)m、北辺が(4.70)mで、最大幅0.62m、深さは断面観察部で38cmである。走向方位は東辺がN-6°-E、北辺がN-82°-W。断面はU字状を呈し、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物 在土器片が少量出土している。

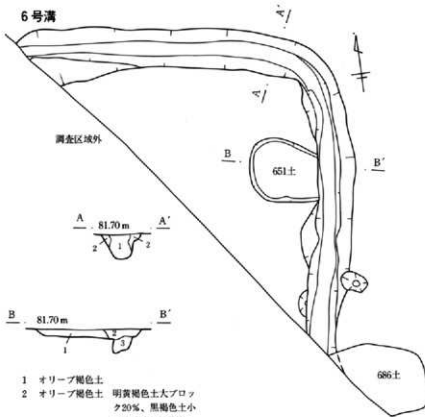
1区7号溝 (PL 25-7、46)

位置 北堀内部分の中央部で、83D-0グリッドに位置する。

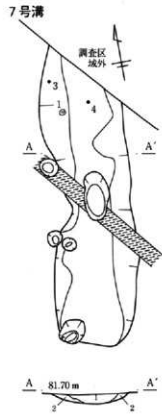
重複 15号柱穴列のP3と重複するが新旧関係は明確にできなかった。南側50cm程には655・656号土坑が近接しており、これらの主軸方位は第3類に属する。

形態 ほほ直線状。北端は北側調査区域外に延びるが、「上植木調査区」では符合するものとして東西方向に走向する溝状の遺構があり気にかかる。長さは4.28m最大幅1.33m、深さは断面観察部で16cmである。走向方位N-9°-E。断面は皿状で、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

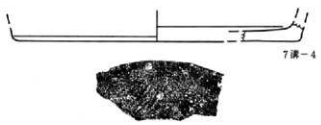
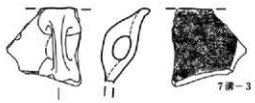
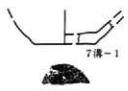
出土遺物 北壁底面近くから在土器カワラケ(1・2)・鍋(3・4)が出土している。



- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。
- 3 オリーブ褐色土 明黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロックを5%含む。



- 1 オリーブ褐色土
- 2 オリーブ褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、黒褐色土小ブロック5%含む。



第106図 1区6・7号溝・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

1区8号溝 (PL 47)

位置 北堀内部分の中央部で、73C・D-9~83C・D-0グリッドに位置する。

重複 9号溝とは新旧関係不明だが、9号溝は本溝の西側へは延びていないため合流して並存か。

形態 ほぼ直線状。両端部とも調査区域外へ延びるが、北側は「上植木調査区」で未検出となる。長さは(7.70)m、最大幅0.90m、深さは断面観察部で21cmである。走向方位はN-15°-E。断面はU字状で、底面は丸みを持つ。流水痕跡は見られない。

出土遺物 埋土から1つは口縁部にススの付いた在土器カワラケ(1・2)、石鉢(3)、時期不明の天目茶碗細片・施釉陶器片が出土している。

1区9号溝

位置 北堀内部分の中央部で、73C-9グリッドに位置する。

重複 8号溝とは新旧関係不明だが、本遺構は8号溝を越えて西側へは延びていないため合流して並存か。

形態 直線状で、南端は8号溝と合流。北端は「上植木調査区」へ連続する。長さは2.00mで、「上植木調査区」分を含めると6.5m、最大幅は0.32m、深さは断面観察部で16cmである。走向方位はN-76°-E。断面はU字状で、底面は丸みを持つ。

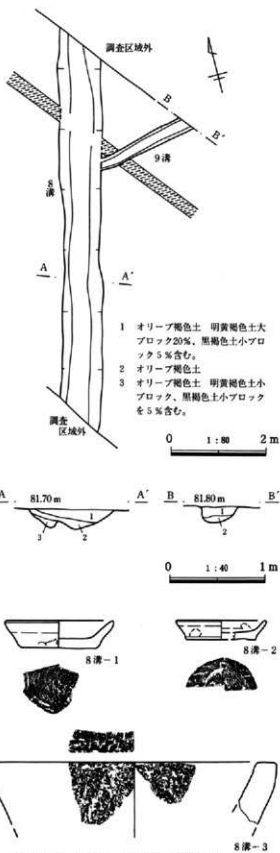
出土遺物 なし

1区10号溝 (PL 25-8)

位置 調査区中央部で、73A・B-8グリッドに位置する。

重複 753号土坑より新しく、4号落ち込みとは新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状で、南端部は角の整った方形で、壁は垂直に立ち上がり、2号溝の南端部、3号溝の東端部の形状に類似する。北端は「上植木調査区」に連続するが立ち上がりも同様か不明。長さは(8.70)mで「上植木調査区」分を含めると13.5m、最大幅は1.12m、深さは断面観察部で24cmである。走向方位はN-5°-E。断面は皿状で、底面はほぼ平坦。



第107図 1区8・9号溝・出土遺物

出土遺物 出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

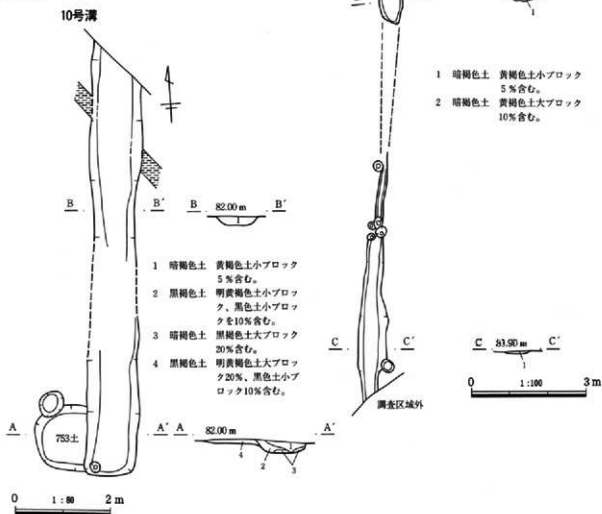
1区14号溝

位置 調査区中央部南寄り、74H・I-7グリッドに位置する。

重複 912・916号土坑より古い、後者は第3期に属する。また新旧関係は不明だが、柱穴と多く重複しており関連が想定される。

形態 ほは直線状だが、中央部で一度断裂するが同一溝。全体に削平によって残存状態が悪い。端部は東西ともに更に延びるが、西側は痕跡のみ。長さは東側が9.00m西側で(6.42)m、最大幅は1.40m、深さは断面観察部で17cmである。走向方位はN-86°-W。断面は皿状で、底面はやや凸凹する。

出土遺物 なし



第108図 1区10・14号溝

7. 入口遺構

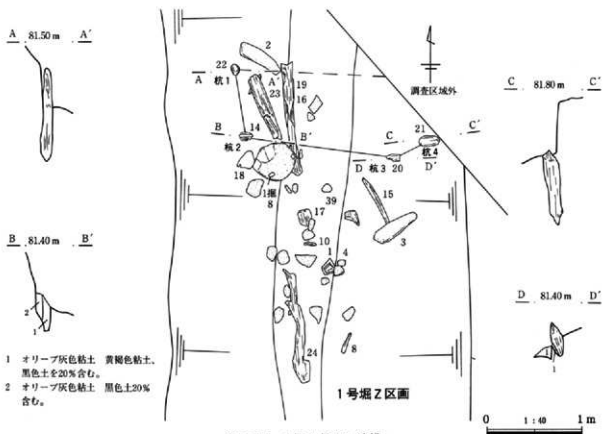
1区1号入口遺構 (PL 26-1-4、27-1-3、47-49)

痕跡を含む4本の杭と柱材等の出土状況や出土遺物、また周辺の掘立柱建物跡の分布などを総合判断した結果、橋等の一部と考えて入口遺構と認定した。

位置 1号堀の北端部で、73A・B-6グリッドに位置する。

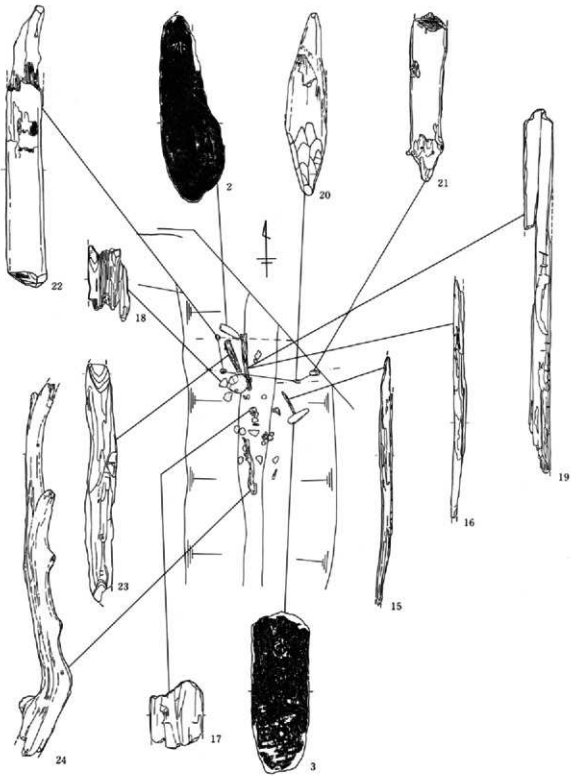
形態 この部分の1号堀の規模は、上幅3.08m下幅0.72m深さ1.20mである。この堀の西壁中位にクリ及びマツ属の丸太を使用した杭を伴う北から杭1・杭2（正確には杭痕跡）、同じく東壁中位に北から杭3・杭4が存在する。杭1と杭2の間隔は60cmで杭3と杭4の間隔は24cmと符合しないことから、杭3の北側調査区域外に更に杭の存在を想定する。杭1は長さ88.3cmと残存状況は良く、土中へ58cm程打ち込まれている。また、杭2と杭3はともに掘り方を持っている。杭はすべて上端が鋭利で、入り口廃棄時に人為的に截断した可能性がある。

出土遺物 杭1～3のほか、木器・木製品が非常に多く出土している。柱材・角材にはホゾを持つもの(17-19)があり、角の整った角棒材もやや多く出土するが、未加工のものでも23・24のように十分部材として使用可能なものもある。これらの多くは杭の上部構造として橋等の部材であったものと想定される。その他、注目すべき遺物として板碑(1-4)があり、2は堀底面に3は堀肩部に投棄されることから、仮に1号入口遺構の橋部分が破却されたとすれば同時期に板碑も廃棄されたこととなり、板碑が本館跡と並存もしくは前出のものである傍証となる。また、前述のとおり本遺構が存在する1号堀Y・Z区画は土器・石器の出土量が多い部分であり、近くで漆器椀(1堀-49)が出土したとおり流木を含めて木器・木製品の出土量も多く、非常に生活に密着した領域であり、その点でも入口であることを証明する。

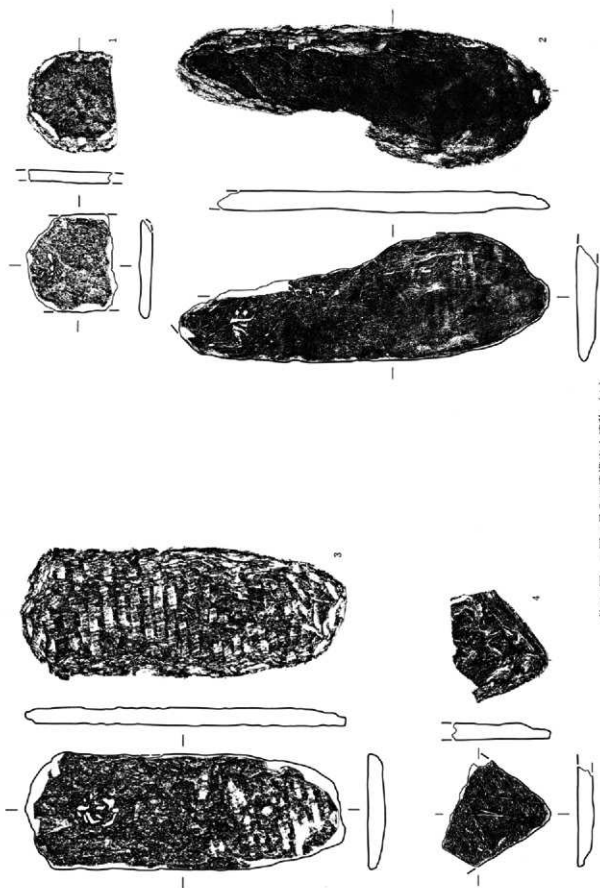


第109図 1区1号入口遺構

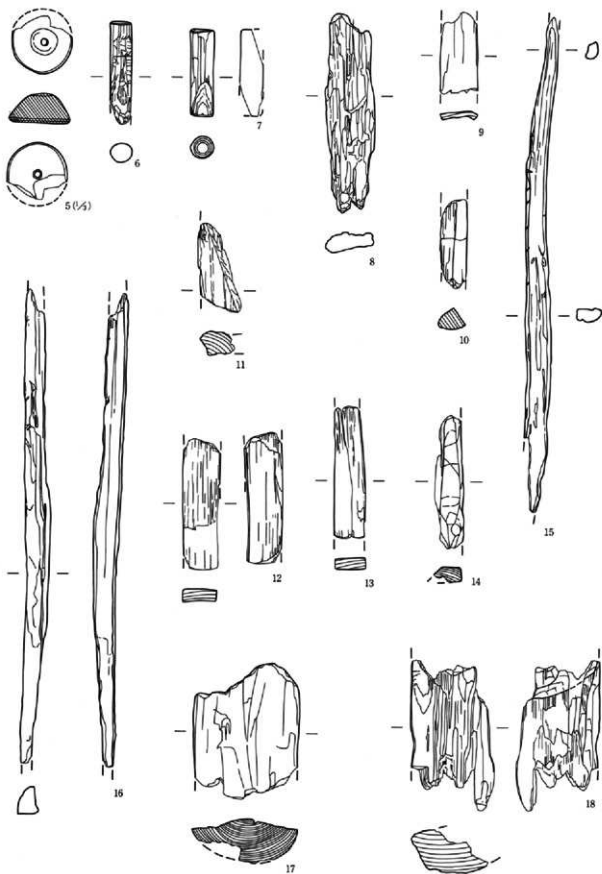
- 1 オリーブ灰色粘土 黄褐色粘土、
黒色土を20%含む。
2 オリーブ灰色粘土 黒色土20%
含む。



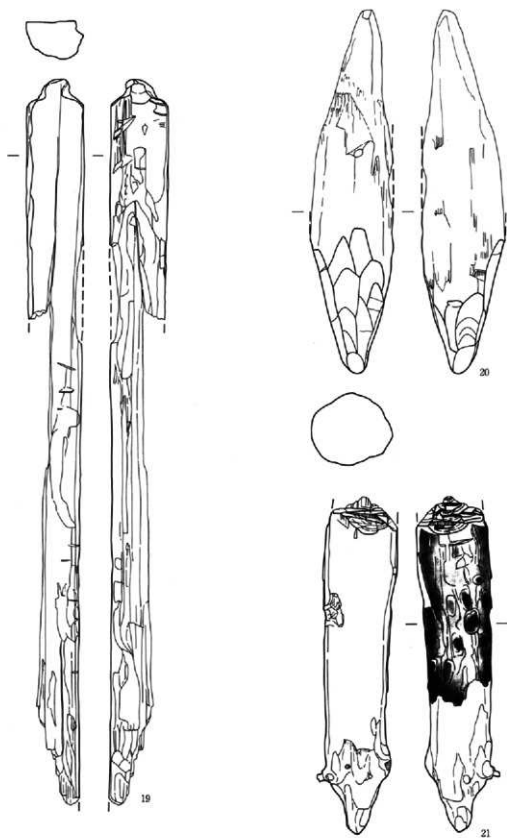
第110图 1区1号入口遺構遺物出土状況



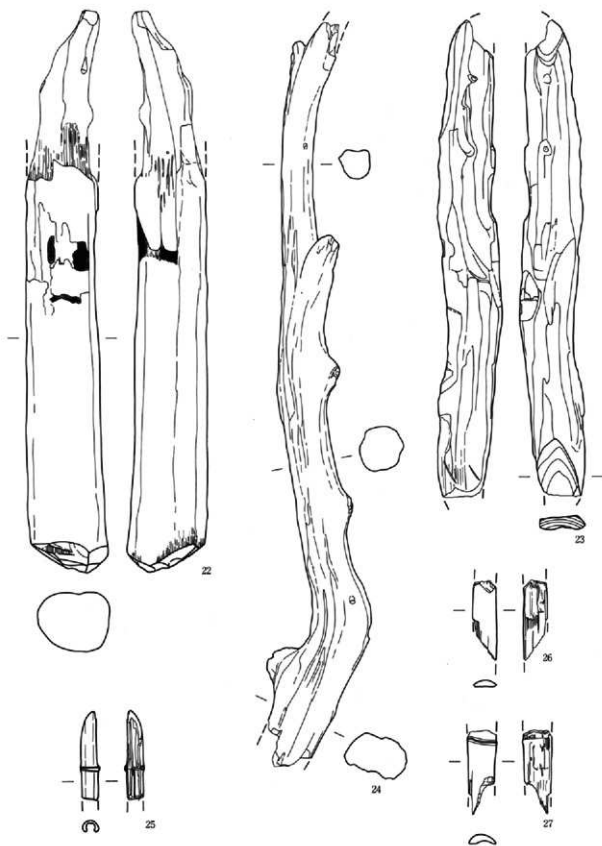
第1111図 1区1号入口遺構出土遺物(1)



第112图 1区1号入口遺構出土遺物(2)



第113図 1区1号入口遺構出土遺物(3)



第114图 1区1号入口遺構出土遺物(4)

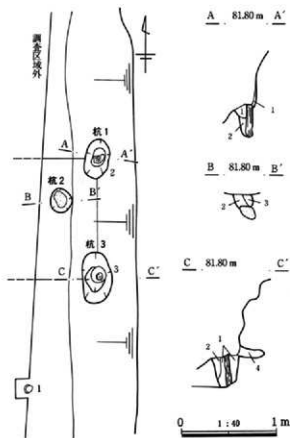
第4章 検出された遺構と遺物

1区2号入口遺構 (PL 27-4-8, 49)

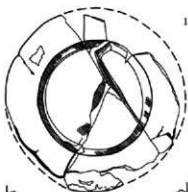
痕跡を含む3本の杭と周辺の柱穴列の分布などを加味して判断した結果、橋等の一部と考えて入口遺構と認定した。

位置 1号堀北側直線部の中央で、74I-8グリッドに位置する。東側に隣接する11号柱穴列との関連が想起される。

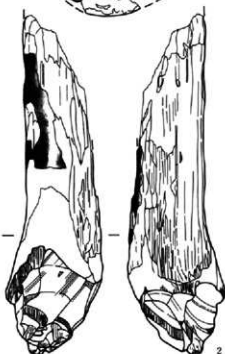
形態 この部分では1号堀のほぼ西半分が調査区域外となっており、堀の規模は不明である。クリの丸太を使用した杭1と杭3はこの堀の東壁の中位に、杭2（正確には杭痕跡）はその底面壁際に存する。



- 1 灰色粘土 黄褐色土小ブロック、黒色土小ブロックを5%含み、しまらない。
- 2 灰色粘土 しまらない。
- 3 黒灰色砂質土 しまらない。
- 4 黒灰色砂質土 黄褐色土小ブロック5%含み、しまらない。



1(5)



2



第115図 1区2号入口遺構・出土遺物(1)

またこの堀の西壁にも対となる杭群が存在しているものと推測する。杭1と杭3の間隔は77cm。杭1～3は全て掘り方を持ち、杭1と杭3はともに土中に34cm程埋めるが、杭2は14cmと浅く根石を置く。杭の上端は自然欠損。なお、杭1では水平方向にも支柱の存在を想起させる長さ28cm程の掘り込みが検出された。

出土遺物 漆器皿(1)が堀底面で出土した以外、出土量は非常に少ない。

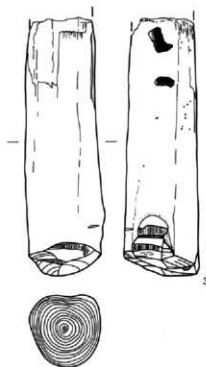
1区3号入口遺構と20・21号柱穴列 (PL 28-1-4、49、50)

1号堀の折れ部であり、柱材等の出土状況と出土遺物や柱穴列の存在を総合判断した結果、橋等の存在を想定して入口遺構と認定した。

位置 南堀内部分の折れ部で、74F-6・7グリッドに位置する。

形態 1号堀折れ部の北と南では、1.5m程南側が東へ張り出す。北側の幅は上幅3.0m下幅0.84m深さ1.10m、南側は上幅2.38m下幅0.52m深さ0.76mである。堀内部分の20号柱穴列は全長4.27mで南北に走向し、P1は1号堀の西肩部に位置する。柱間は1.83～2.44mと一定しない。主軸方位はN-78°-W。柱穴はP1・P2が円形で、P3は方形。規模はP3が際立って大きく深いが、他は長径31cm、短径23cm、深さ36・32cmとほぼ均一である。21号柱穴列は全長4.33mで南北に走向し、柱穴は全て1号堀東辺肩部に並行する溝状の落ち込み内に存するが、新旧関係不明。柱間は1.00～1.77mと一定しない。主軸方位はN-88°-E。柱穴はほぼ円形で、P1のみ根石を有する。規模はP1がやや大きいが、他は長径(26)～(29)cm、短径(17)～(25)cm、深さ18～32cmとほぼ均一である。

出土遺物 出土量は少ないが、面取りされた角材・角棒材(2・6・8)が並んで出土している。なお、木材に並んで年齢7・8歳の牡馬の上顎のみの馬歯も出土しており、「下顎とは切り離された状態で埋存したか、堀内に埋存後水流等で上顎・下顎が分離したものと考えられ」(宮崎)、前者であるとすれ



第116図 1区2号入口遺構出土遺物(2)

ば何らかの儀式的な側面も窺える遺物である。土器・石器の出土量は少ない。

1区4号入口遺構

南堀内部分の南辺縁辺から北へほぼ160cmの範囲は、非常に遺構の少ない空間(土塁の構築範囲か)であり、本遺構の部分だけが南へ突出した形状を示している。周辺の掘立柱建物跡の分布等も考慮した結果、土塁の開口部を想定して入口遺構と認定した。しかし他の入口遺構に比べ根拠が弱く、認定にやや無理があることも否定できない。

位置 南堀内部分の南辺縁辺部中央西寄り、74D-8グリッドに位置する。

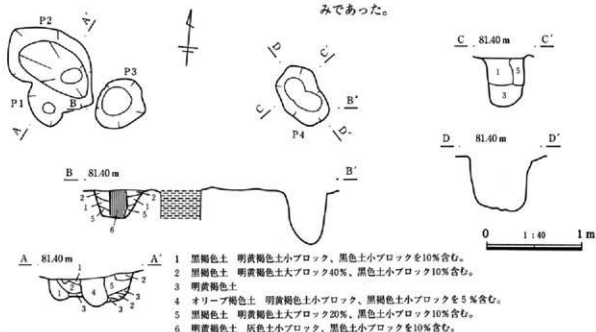
形態 本遺構はP1～P4の柱穴で構成されるが、P4は2基の柱穴の重複のため正確には5基の柱穴の集まりである。基本的にはP1～P3の一群とP4が対面して対をなす形態と考える。したがって2・3回の掘え直しが想定される。P3とP4の間隔は2.04mを測る。柱穴はほぼ隅丸方形で、P2は際立って大きいが、他も長径56～66cm、短径43～49cm、深さ22～57cmと柱穴としては大きい。本遺構と対応すべき遺構を、1号堀南面周辺で検出に努め

第4章 検出された遺構と遺物

たが発見できなかった。本遺構は柱穴の規模や形態から門跡を想定するが、1号堀には簡便な板橋等を

架けていたと想像する。

出土遺物 平安時代以前の遺物がP4に混入するのみであった。



第117図 1区4号入口遺構

8. 井戸跡

1区1号井戸跡 (PL28-5、50)

位置 南堀内部分の南西端で、74E-8グリッドに位置する。4号掘立柱建物跡の南辺に隣接する。

重複 13号掘立柱建物跡のP4と重複するが新旧関係不明。16号掘立柱建物跡は直接柱穴の重複はないが、平面形が重なる。新旧関係不明。

確認面形状と規模 西側を著しく掘削に壊されるがほぼ円形。径227×217cm。

底面形状と規模 隅丸方形。径70×67cm。

断面形 漏斗状 深さ 2.67m

標高 上面81.35m、底面78.68m。

アグリ 最上部は深さ128cm、標高80.04mで、底部まで不連続に数条見られる。深さ1.60m付近が最大である。アグリの上下幅は139cmを測る。

湧水 底面から相当量の湧水があり、XIc層からも常時浸み出していた。

埋没状況 1m強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十

分な観察もできなかった。目測では埋土は上面から下へ50cm程までは暗褐色土で埋まるが、その下層を5cm程灰色粘土が被覆し、以下橙色砂質土が堆積することから、人為埋填後灰色粘土で被覆したが更に沈下したため暗褐色土が堆積したものと解される。

出土遺物 埋土から漆器皿(1・2)、曲物の底板(3)、棒・丸棒材(4・5)が出土している。

1区2号井戸跡 (PL29-1・2、51、52)

位置 南堀内部分の西端で、74F-9グリッドに位置する。

重複 221号土坑よりも古い。

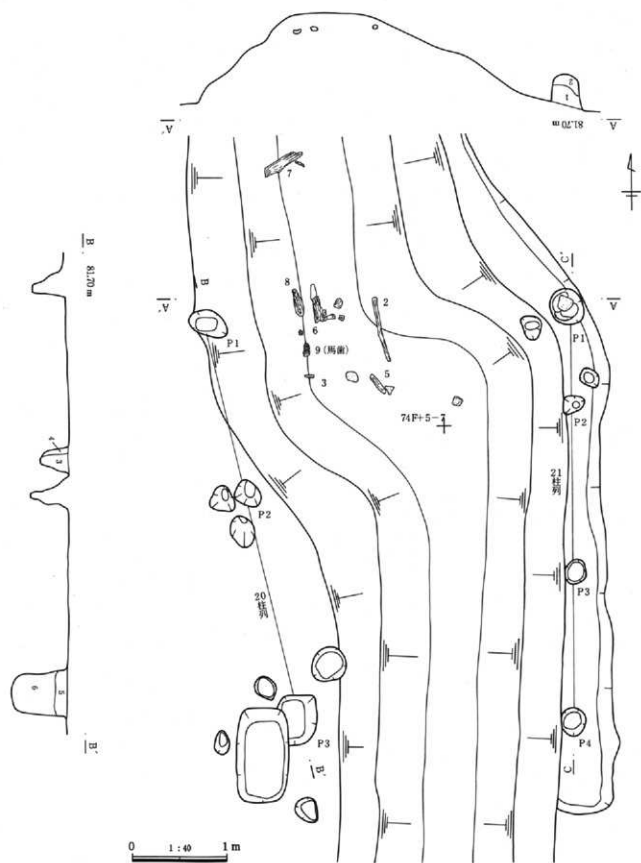
確認面形状と規模 ほぼ円形。径116×112cm。

底面形状と規模 ほぼ円形。径92×85cm。

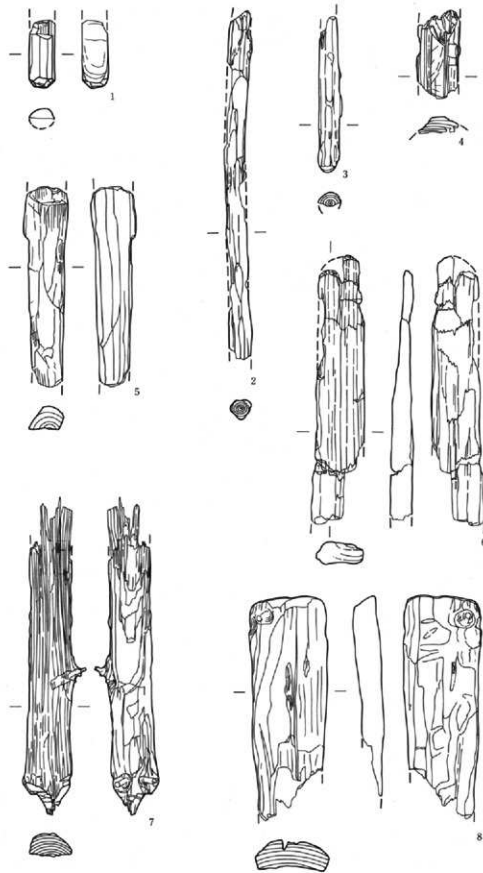
断面形 円筒形 深さ 2.95m

標高 上面81.46m、底面78.51m。

アグリ 最上部は深さ94cm(標高80.52m)、以下底部まで不連続に見られる。3か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は201cmを測る。



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック
5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック
10%含む。
- 3 黒褐色土 明黄褐色土小ブロック、
黒色土小ブロックを10%含む。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土大ブロック20%、
黒色土大ブロック10%含む。
- 5 黒色土 黄褐色土大ブロック10%
含む。
- 6 黒色土



第118図 1区3号入口遺構・20・21号柱穴列・出土遺物

湧水 Ⅺ (砂礫層) から相当量の湧水があり、その上層ⅪbやⅨの砂質部分からも常時しみ出していた。

埋没状況 1m強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十分な観察もできなかった。目測では埋土は上面から1m程までは灰～黄褐色粘土の大ブロックを主体としており、下から層厚70・15・20cmの3層に分層できる。また更に下層は黄褐色砂質土で埋まる。したがって黄褐色砂質土で人為的に埋填した後、灰～黄褐色粘土混土で埋めたが、埋土が更に沈下したため

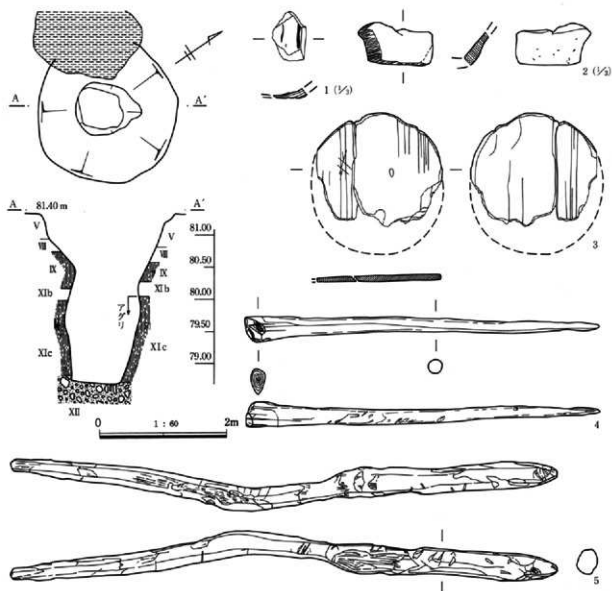
2度埋填したものと解される。これは結果として221号土坑の底面を意図的に平坦にしていることを意味する。

出土遺物 在土器内耳鍋(1)、曲物の底板(2)、柱材(3)、角棒材(4)、未加工の又材・丸棒材(5～7)が出土している。

時期 出土遺物から14世紀後半に比定される。

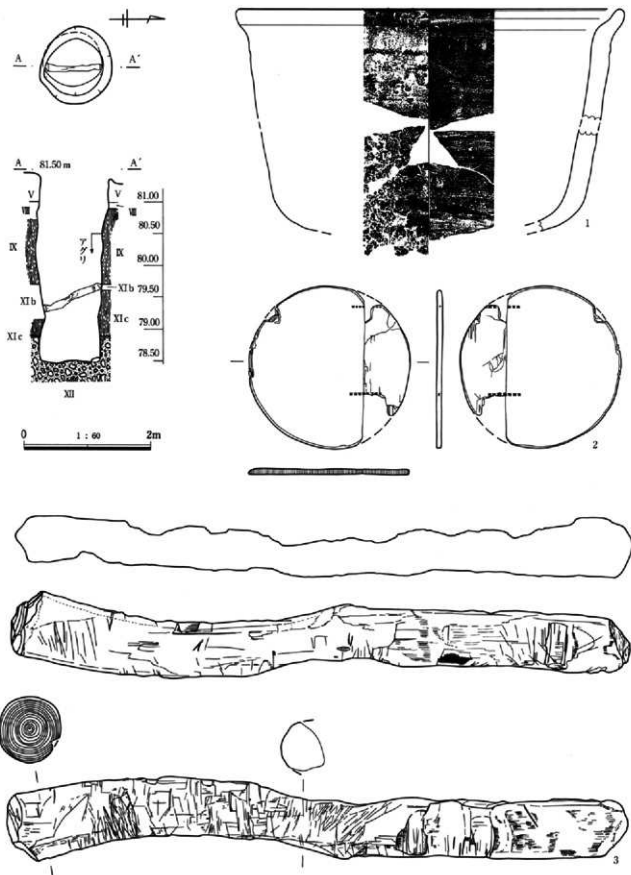
1区3号井戸跡 (PL29-3・4、52)

位置 南堀内部分の南東端部で、74D-7グリッドに位置する。1号堀南東角部から西へ0.5m程をとる。1号堀南辺の北壁の上端20cm程を切り込んで付



第119図 1区1号井戸跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第120図 1区2号井戸跡・出土遺物(1)

設される。

重複 1号堀と重複し、平面確認では1号堀の埋土が本遺構の重複部分を被覆していたが、それは1号堀埋土の最上部で新旧関係を示す証左にならない。ただし、本遺構が1号堀埋没後さく井されたものでないことはほぼ判明する。したがって、両遺構は並存していたとするのが妥当と考える。

確認面形状と規模 楕円形。径131×119cm。

底面形状と規模 不整円形。径94×93cm。

断面形 やや上面に向かって開く円筒形。

深さ 2.83m

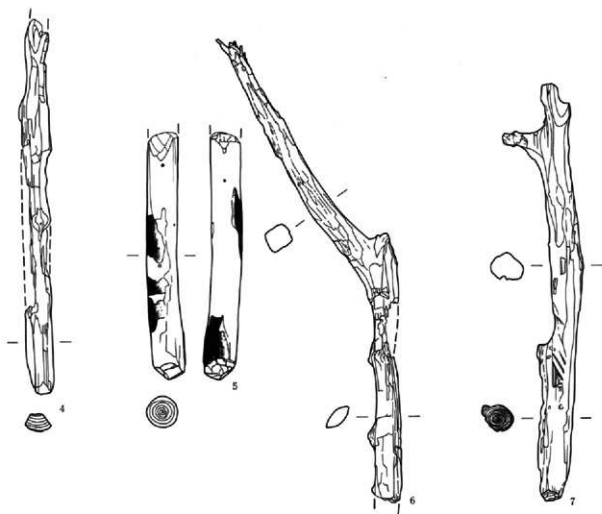
標高 上面81.27m、底面78.44m。

アグリ 最上部は深さ80cm（標高80.38m）、以下底部まで不連続に見られる。2か所ほどやや大きくア

グリが形成される。アグリの上下幅は203cmを測る。湧水Ⅷ（砂礫層）から相当量の湧水があり、その上層Ⅹの中位以下からも常時浸み出していた。

埋没状況 土層観察断面では周囲からほぼ均一に土砂が流れ込んだ自然埋没の様相を示すが、掘削の際深さ1m以下の埋土は橙色砂質土であったことから人為埋填された後、埋土の沈下も作用しながら徐々に自然埋没したと考える。

出土遺物 曲物の底板（3）、板材（4）、未加工の丸棒材（5）、凹み石（1）が出土している。腕形鉄滓（2）は混入か。



第121図 1区2号井戸跡出土遺物（2）

1区4号井戸跡 (PL 29-5、52)

位置 南堀内部分の南西端で、74E-9グリッドに位置する。重複 なし

確認面形状と規模 ほぼ円形。径108×107cm。

底面形状と規模 不整楕円形。径100×78cm。

断面形 円筒形

深さ 2.49m。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ10cm程下位が砂礫層であると見られる。

標高 上面81.34m、底面78.85m。

アグリ 最上部は深さ92cm(標高80.40m)、以下底部まで不連続に見られる。アグリ上下幅は157cmを測る。

湧水 X以下から常時浸み出しがあるが、XI bで顕著である。

埋没状況 1m強掘削した時点で湧水の影響で土層観察面が崩落してしまったため作図できず、また十分な観察もできなかった。目測では深さ約1m以上の埋土は、灰~黄褐色粘土の大ブロックを主体として東側から埋填され、その上に25cm程暗褐色土を入れる。更に西側半分には黄褐色粘土が堆積する。また深さ1m以下の埋土は不明である。本遺構は東側からの人為埋填が良好に観察されるため、埋没後の埋土の沈下も殆どなく、非常に丁寧に人為埋填されたものと評価できる。

出土遺物 被熱して炭化した未加工の丸棒材(1)が出土している。

1区5号井戸跡 (PL 29-6・7、52)

位置 北堀内部分の中央部で、83D・E-0グリッドに位置する。重複 なし

確認面形状と規模 不整円形。径246×(211)cm。

底面形状と規模 不整円形。径72×70cm。

断面形 漏斗状 深さ 2.76m

標高 上面82.15m、底面79.39m。

アグリ 最上部は深さ126cm(標高80.90m)、以下底部まで不連続に見られる。底面近くに最大部がある。アグリ上下幅は150cmを測る。

湧水 底面からの湧水はなく、底面から10cm程高い

部分(灰色砂)からの湧水多い。

埋没状況 底面から3分の2程までは黄色砂を多く含んだ暗褐色土で埋め、更に上層に均質な暗褐色土が堆積するが、最上部中央は黄褐色砂を入れて締め固める。

出土遺物 在土器鉢(1)、香炉?(2)、鍋(3)、漆器椀(5)、丸棒材(6)、敲石(4)が出土している。

1区7号井戸跡 (PL 29-8、52)

位置 北堀内部分の東端で、73B-9グリッドに位置する。1号堀から西へ7m程をとる。

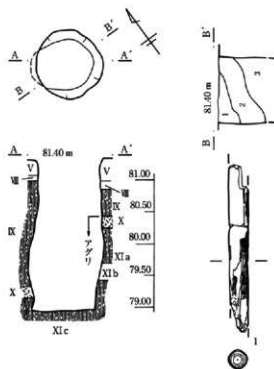
重複 なし

確認面形状と規模 南側3分の1程が調査区域外となるが、ほぼ円形。径151×130cm。

底面形状と規模 隅丸方形。径62×62cm。

断面形 漏斗状

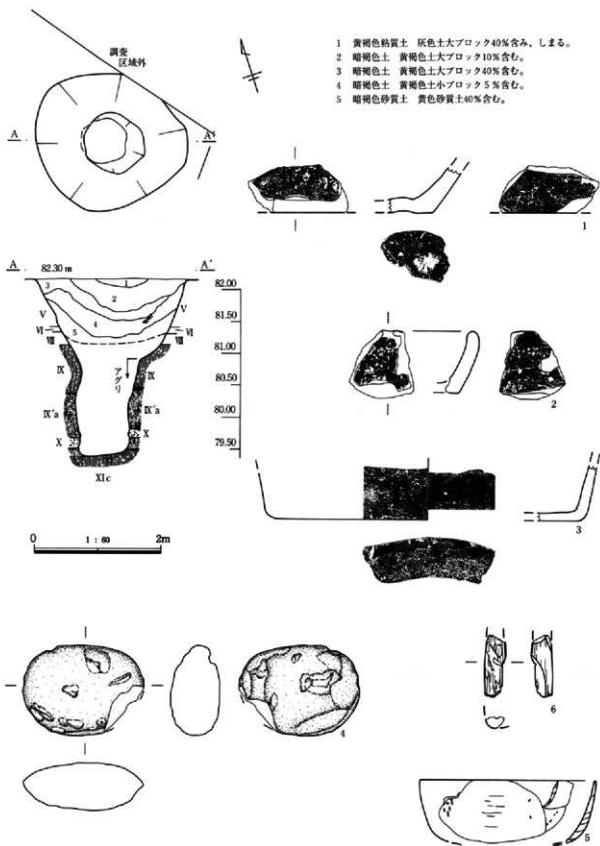
深さ 2.48m。底面は砂礫面に達していないが、ピンポールで数度試したところ70cm程下位が砂礫層で



- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土大ブロック40%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。

第123図 1区4号井戸跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第124図 1区5号井戸跡・出土遺物

あると見られる。

標高 上面82.12m、底面79.64m。

アグリ 最上部は深さ86cm(標高81.24m)、最下部は深さ215cm(標高79.95m)で、その上下幅は129cmを測る。

湧水 底面から少量の湧水あり。

埋没状況 土層観察断面が中心から外れていたため詳細は不明で、自然埋没か人為埋填か確認できなかった。

出土遺物 在地土器内耳鍋(1)、石臼下臼(2)が出土している。

1区8号井戸跡(PL30-1・2、52)

位置 調査区中央部で、74I-7グリッドに位置する。25号掘立柱建物跡の南辺に接する。

重複 なし

確認面形状と規模 楕円形。径151×117cm。

底面形状と規模 楕円形。径65×48cm。

断面形 南北方向に開いた漏斗状。

深さ 1.95m。底面は砂礫面に達していないが、ピ

ンポールで数度試したところ75cm程下位が砂礫層であると見られる。

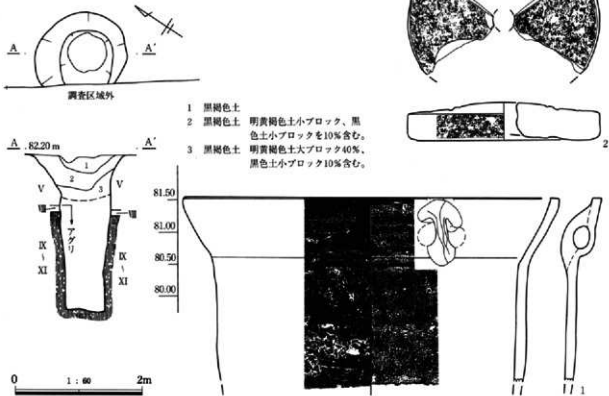
標高 上面81.86m、底面79.91m。

アグリ 最上部は深さ36cm(標高81.50m)、最下部は深さ167cm(標高80.19m)で、その上下幅は131cmを測る。

湧水 底面から上へ29cm以下から常時浸み出していた。

埋没状況 底面から30cm程上位に本遺構の内径とはほぼ等しい巨円礫があり、廃棄時に投棄されたものと考えられる。埋土は黄褐～褐色土の大ブロックを含んだ黒～黒褐色砂質土で上面まで人為埋填される。また、西壁から15cm程離れた位置にほぼ垂直な立ち上がりが見られ、井戸枠の痕跡である可能性がある。

出土遺物 未加工の用材(1-4)が出土している。



第125図 1区7号井戸跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

1区9号井戸跡 (PL30-3・4)

位置 調査区中央部で、74I・J-7・8グリッドに位置する。23号掘立柱建物跡の内部には中央に存しており、これは上屋と考えられる。

重複 904号土坑と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模 楕円形。径156×137cm。

底面形状と規模 不整形円形。径58×50cm。

断面形 上面に向かって開く円筒形。

深さ 2.38m。底面は砂礫面に達していないが、ピンボイルで数度試したところ30cm程下位が砂礫層であると見られる。

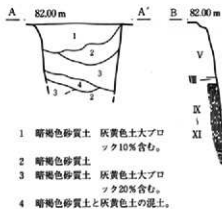
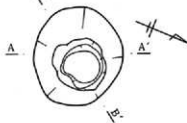
標高 上面81.94m、底面79.56m。

アグリ 最上部は深さ148cm(標高80.44m)、最下部は深さ212cm(標高79.80m)で、その上下幅は64cmを測る。アグリはあまり顕著ではない。

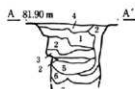
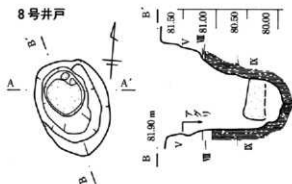
湧水 底面から上へ20cm以下から少量浸み出していた。

埋没状況 上面から約70cm以下までは、南側から人為埋填される。出土遺物 なし

9号井戸



8号井戸

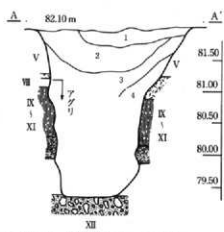
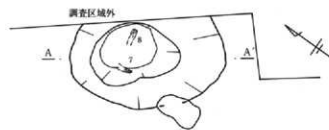


- 1 黒褐色砂質土 褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10%含む。
2 暗褐色砂質土 褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを20%含む。
3 黒色砂質土
4 暗褐色土 黄褐色土小ブロック5%含む。
5 黒褐色砂質土
6 黒色砂質土 褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10%含む。
7 黒色粘質土 砂20%含む。黄楨に富む。



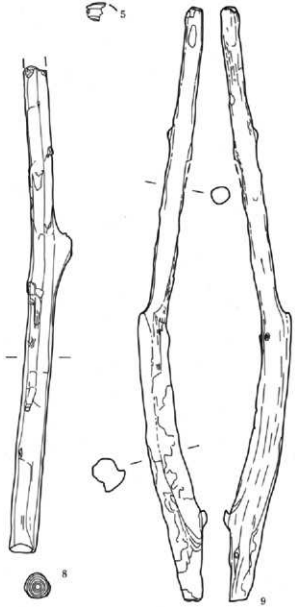
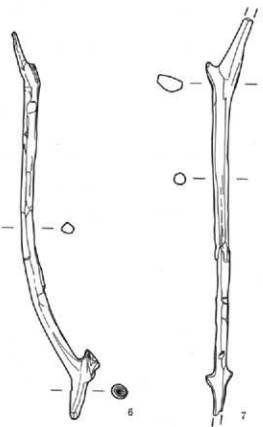
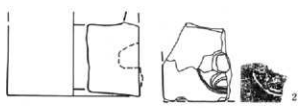
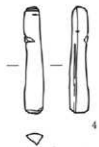
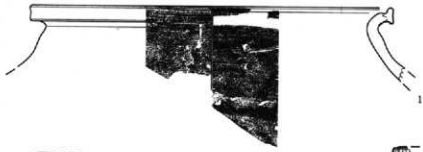
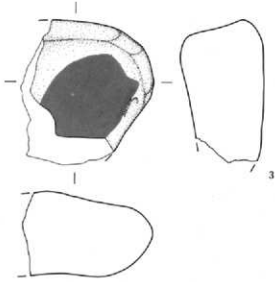
0 1:60 2m

第126図 1区8・9号井戸跡・出土遺物



- 1 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%含む。
- 2 黒色砂質土
- 3 黒褐色砂質土
- 4 黒褐色砂質土 黄褐色土大ブロック40%含む。

0 1:60 2m



第127図 1区10号井戸跡・出土遺物

1区10号井戸跡 (PL30-5・6、53)

位置 調査区中央部で、73A-7・8グリッドに位置する。1号堀上面から東へ7m程をとる。

重複 21号掘立柱建物跡のP1と重複するが新旧関係は確認できなかった。

確認面形状と規模 北半分が調査区域外となるが楕円形か。径246×(141)cm。

底面形状と規模 不整形。径90×68cm。

断面形 漏斗状 深さ 2.65m

標高 上面82.02m、底面79.37m。

アグリ 最上部は深さ82cm(標高81.16m)、以下底部まで不連続に見られる。3か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は183cmを測る。

湧水 底面から相当量の湧水があり、底面から上位約70cm以下からも常時浸み出していた。

埋没状況 上面から深さ1m程までは黄褐色土大ブロックを多く含んだ黒褐色土で人為埋積され、その後は均質な黒色砂質土が堆積する。

出土遺物 埋土から焼締陶器甕(1)、茶白白(2)、磨石(3)、棒状木製品(4)、棒材(5・6)が出土し、底部近くで未加工の用材(8・9)が立置した状態で出土した。

1区11号井戸跡 (PL30-7・8)

位置 南堀内部分の中央部で、74F-8グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡の東辺に接する。

重複 なし

確認面形状と規模 整った円形。径108×106cm。

底面形状と規模 不整形。径59×54cm。

断面形 円筒形 深さ 2.69m

標高 上面81.45m、底面78.76m。

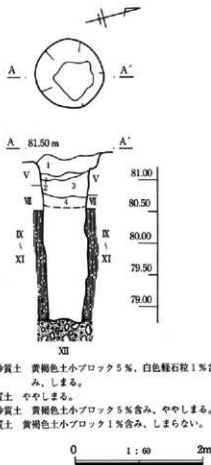
アグリ 最上部は深さ128cm(標高80.14m)、以下底部まで不連続に見られる。2か所ほどやや大きくアグリが形成される。アグリの上下幅は141cmを測る。

湧水 底面から少量の湧水があり、底面から上位約80cm以下からも常時浸み出していた。

埋没状況 上面から深さ60cm程までは黒色砂質土で人為埋積し、その後は暗褐色土→褐色土→黒色土の

順で締め固める。これは埋土の沈下に対処して数度の埋積を行ったものと解される。

出土遺物 なし



- XII
- 1 黒褐色砂質土 黄褐色土小ブロック5%、白色粒石粒1%含み、しまる。
 - 2 褐色粘質土 ややしまる。
 - 3 暗褐色砂質土 黄褐色土小ブロック5%含み、ややしまる。
 - 4 黒色砂質土 黄褐色土小ブロック1%含み、しまらない。

第128図 1区11号井戸跡

第2項 2区～4区

1. 掘立柱建物跡・柱穴列

3区1号掘立柱建物跡 (PL31-1)

位置 調査区の中央部で、72D-0・1グリッドに位置する。

重複 なし 主軸方位 N-80°-W

形態 身舎は2×3間 (3.22×5.58-5.65m) の東西棟で、北側に0.82mの間隔をとって庇が付き、全体として3.84×5.58-5.65m、(11+2)×19尺の規模である。桁行の柱間は6尺と6.5尺である。南辺の西南角柱穴は削平されて消滅した可能性があるが、P6とP7の間には柱穴は検出されなかった。P5・P8の存在から考えて総柱建物跡であったかもしれない。北辺及び庇部分の柱穴はほぼ等間隔である。柱穴は柱軸にはば載っている。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、P2が特に小さいが、他も長径26-42cm、短径19-33cm、深さ12-42cmで数値にばらつきがある。

内部施設 なし 出土遺物 なし

4区1号掘立柱建物跡 (PL31-2・3)

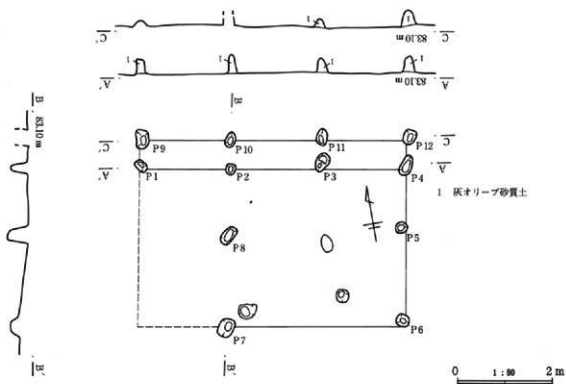
位置 調査区の東南部で、73H-5・6グリッドに位置する。

重複 P7は32号土坑と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-13°-E

形態 2×2間 (2.40-2.47×3.98-4.25m、8.5尺×14尺) の南北棟。桁行の柱間は7尺が多い。東辺のP2、西辺のP6ともに各辺のほぼ中央部に設ける。南辺のP4は20cm程西寄り、北辺のP8も規模は不明となってしまったが、同じく西寄りで柱軸から30cm程北へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、やや大きいP8を除き、規模は長径27-33cm、短径24-29cm、深さ13-33cmで均整がとれる。

内部施設 なし 出土遺物 なし



第129図 3区1号掘立柱建物跡

4区2号掘立柱建物跡 (PL31-2・4・5)

位置 調査区の東南部で、73H-6グリッドに位置する。

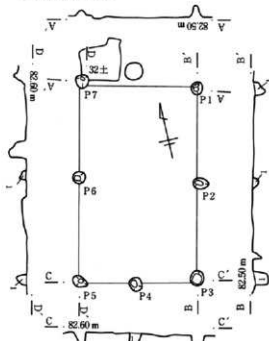
重複 なし 主軸方位 N-12°-E

形態 1×2間 (3.07~3.58×4.17~4.78m、11尺×16尺)の南北棟。桁行は7尺~9尺で一定しない。東辺のP2は15cm程北寄り、西辺のP5も50cm程北寄りである。西南角のP4は柱軸から南西方向に20cm程外れる。柱痕跡は見られない。柱穴は円形で、規模は大小2つに分かれ、P1・P6が長径35・38cm、短径33・36cm、深さ47・26cmで、残りが長径21~24cm、短径16~21cm、深さ17~40cmである。

内部施設 中央部に主軸方位と平行する6号土坑と、西辺に接して主軸方位とほぼ直交する10号土坑がある。6号土坑は方形で、規模は径104×80cm、深さ16cmで、主軸方位N-11°-E。10号土坑は隅丸方形で、径103×87cm、深さ22cmで、主軸方位N-80°-W。6号土坑は4号掘立柱建物跡P6と重複するが新旧関係不明。両土坑ともに埋土に焼土や灰・炭等全く見られず、硬化面もない。

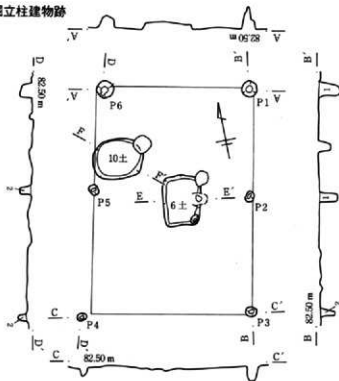
出土遺物 なし

1号掘立柱建物跡



1 黒褐色土 炭、黄褐色粘土粒を5%含む。

2号掘立柱建物跡



1 黒褐色土 炭粒、黄褐色粘土粒を5%含む。

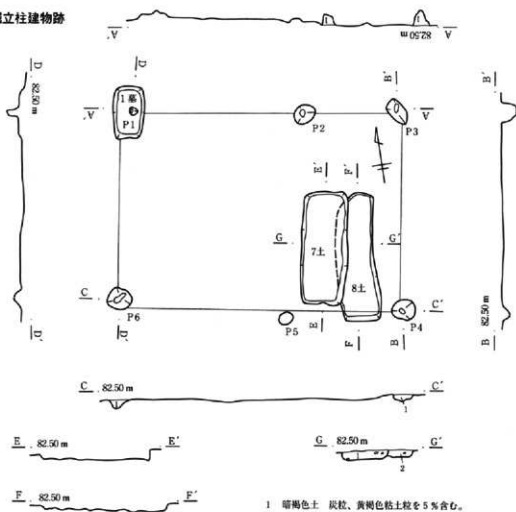
2 暗褐色土 炭、黒褐色土小ブロック、黄褐色粘土粒を5%含む。

0 1:80 2m

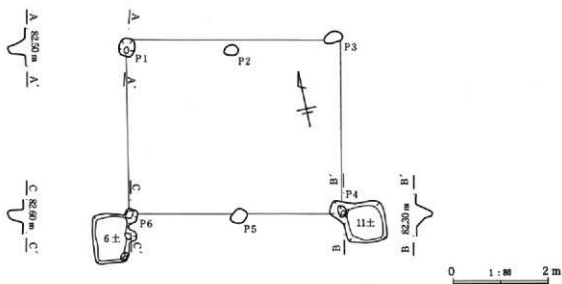
第130図 4区1・2号掘立柱建物跡・6・10号土坑

第4章 検出された遺構と遺物

3号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡



第131図 4区3号掘立柱建物跡・7・8号土坑・4号掘立柱建物跡

4区3号掘立柱建物跡 (PL31-2・6・7)

位置 調査区の東南部で、73G・H-5・6グリッドに位置する。

重複 P1は1号土墳墓と重複するが新旧関係不明。

主軸方位 N-80°-W

形態 1×(3)間 (3.96~4.26×5.60~5.98m、14尺×20尺)の東西棟。柱間は不明。北辺のP1とP2の間及び南辺のP5とP6の間に、柱穴を検出することに努めたが発見できなかった。またその間隔は等しい。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在し、規模はやや小さいP5を除いて、長径46~58cm、短径33~45cm、深さ16~33cmである。

内部施設 東端1間分の中に主軸方位にはほぼ平行な7・8号土坑がある。7号土坑の形状は長方形、8号土坑の形状は細長方形である。7号土坑の規模は径237×98cm、深さ20cmで、主軸方位N-11°-E。8号土坑の規模は径270×(84)cm、深さ16cmで、主軸方位N-7°-E。両土坑は重複しており、7号土坑が新しい。埋土にはともに焼土・硬化面は見られないが、炭を少量含む。

出土遺物 なし

4区4号掘立柱建物跡 (PL31-2)

位置 調査区の東南部で、73H-5・6グリッドに位置する。

重複 P4は11号土坑、P6は6号土坑と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。

主軸方位 N-79°-W

形態 1×2間 (3.44~3.70×4.39~4.51m、12.5尺×14.5尺)の東西棟。桁行の柱間は7.5尺。北辺のP2と南辺のP5はともに各辺のほぼ中央部に位置するが、P2は柱軸から20cm程南へ外れる。柱痕跡は見られない。柱穴の形状は隅丸方形と円形が混在するが、規模は長径30~40cm、短径23~35cm、深さ34~37cmでほぼ均整がとれる。

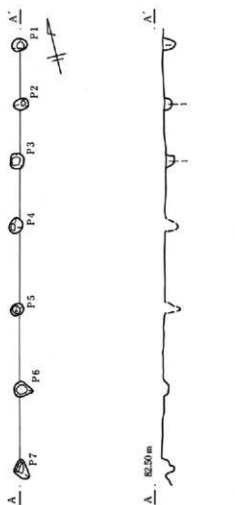
内部施設 なし 出土遺物 なし

4区1号柱穴列

位置 調査区の東南部で、73G・H-6グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡の西側に隣接する。

重複 なし 主軸方位 N-16°-E

形態 全長8.91mで南北に走向する。柱間はP1~P4が1.22~1.39m、P4~P7が1.65~1.77mで、P4を境に南北では均整がとれる。柱痕跡は見られない。柱穴は隅丸方形と円形が混在するが、規模は長径27~40cm、短径23~30cm、深さ12~28cmとほぼ均整がとれている。 出土遺物 なし



1 黒褐色土 炭粒、黄褐色粘土粒を5%含む。

第132図 4区1号柱穴列

2. 土坑・柱穴

4区2号土坑 (PL 31-8)

整った円形を呈し、壁は底近くでオーバーハングする。底面は平坦。規模は径65×65cm、深さ44cmである。主軸方位N-55°-W。遺物は出土しなかった。

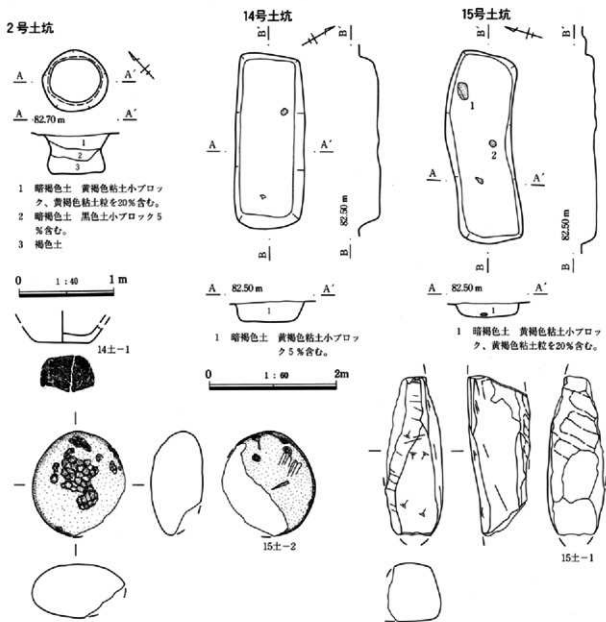
4区14号土坑 (PL 32-1)

細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺277cm、短辺110cm、深さ37cmである。主軸方位N-60°-W。埋土は均一で人為

埋填。出土遺物は在地土器カワラケ(1)のみである。土壌腐か。

4区15号土坑 (PL 32-2、53)

北辺のやや湾曲した細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺300cm、短辺104cm、深さ22cmである。主軸方位N-71°-E。埋土は均一で人為埋填。砥石(1)・敲石(2)が出土している。



第133図 4区土坑・出土遺物(1)

4区17・18・19・20・21・22・23・39号土坑 (PL 32-3)

形状から長方形の17・18・19・21・23・39号土坑と細長方形の22号土坑、方形の20号土坑に類別できるが概して浅く、19・20号土坑が小さい以外規模も同程度であり、同様な機能を持って繰り返し付設された可能性が高い。

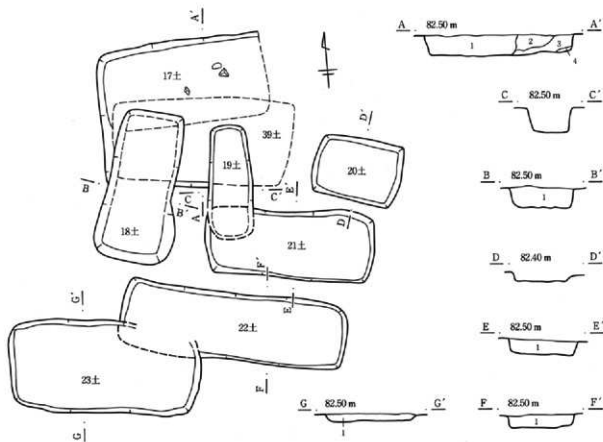
17号土坑 長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(270)cm、短辺(134)cm、深さ34cmである。主軸方位N-89°-E。39号土坑より古い。埋土から自然埋没である。出土遺物は近世?施釉陶器のみである。

18号土坑 長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上

がる。底面は平坦。規模は長辺240cm、短辺124cm、深さ33cmである。主軸方位N-17°-E。39号土坑と重複するが、新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

19号土坑 長方形で南へ向かいやや広がり、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(180)cm、短辺(74)cm、深さ39cmである。主軸方位N-4°-E。21・39号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

20号土坑 方形を呈し浅く、壁は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺142cm、短辺102cm、深さ17cmである。主軸方位N-73°-W。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。



- 1 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック40%含む。
- 2 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を40%含む。
- 3 暗褐色砂質土 黄褐色粘土粒5%含む。
- 4 黒褐色砂質土 黄褐色粘土粒5%含む。

0 1:60 2m

第134図 4区土坑・出土遺物(2)

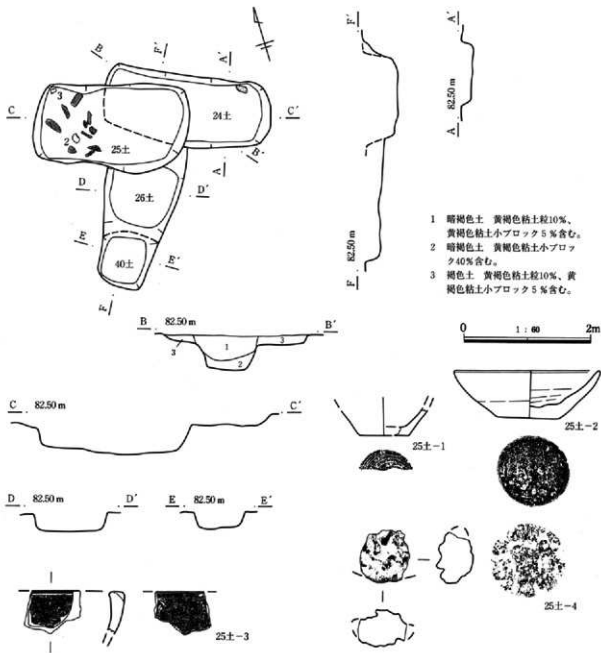
第4章 検出された遺構と遺物

21号土坑 長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺270cm、短辺116cm、深さ26cmである。主軸方位N-82°-W。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は在土器鍋片のみである。

22号土坑 細長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺358cm、短辺107cm、深さ22cmである。主軸方位N-77°-W。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

23号土坑 長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺306cm、短辺146cm、深さ7cmである。主軸方位N-83°-W。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

39号土坑 長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は非常に平坦。規模は長辺(299)cm、短辺(140)cm、深さ34cmである。主軸方位N-82°-W。断面観察の結果17号土坑より新しいことが判明した



第135図 4区土坑・出土遺物(3)

ため、上場は一部不明となってしまった。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

4区24・25・26・40号土坑 (PL 32-4, 54)

形状から長方形の24・25号土坑と隅丸方形・正方形の26・40号土坑に類別されるが、後出である25号土坑は深く、炭化材の出土状況等特異なもので、他は浅く類似した性格であったものとする。

24号土坑 長方形を呈し浅く、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺(268)cm、短辺112cm、深さ(20)cmである。主軸方位N-64°-W。25号土坑より古い。埋土は均一で人為埋填。遺物は出土しなかった。

25号土坑 長方形を呈し深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺240cm、短辺144cm、深さ54cmである。主軸方位N-64°-W。24号土坑より新しい。埋土は均一で人為埋填。炭化材が底面近くに多く見られるが性格不明。遺物はほぼ完形の在土器カワラケ(2)が炭化材に混じって出土したほか、在土器鉢(3)、鉄滓(4)が出土している。出土遺物から14~15世紀前半に比定される。

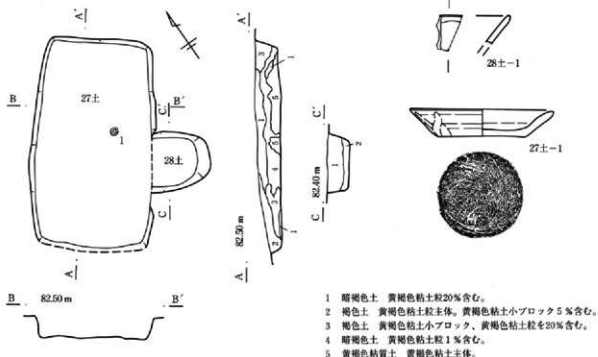
26号土坑 隅丸方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺123cm、短辺(100)cm、深さ30cmである。主軸方位N-29°-E。25・40号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

40号土坑 ほぼ正方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺(90)cm、短辺81cm、深さ27cmである。主軸方位N-32°-E。25・26号土坑と重複するが、新旧関係不明。遺物は出土しなかった。

4区27・28号土坑 (PL 32-5, 54)

27号土坑 規模は長辺(334)cm、短辺194cm、深さ47cmである。主軸方位N-38°-E。28号土坑との新旧関係不明。出土遺物は完形の在土器カワラケ(1)のみで、15世紀後半に比定される。

28号土坑 規模は長辺(92)cm、短辺94cm、深さ35cmである。主軸方位N-53°-W。27号土坑との新旧関係不明。出土遺物は青磁碗片(1)のみである。



- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒20%含む。
- 2 褐色土 黄褐色粘土粒主体。黄褐色粘土小ブロック5%含む。
- 3 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色粘土粒1%含む。
- 5 黄褐色粘質土 黄褐色粘土主体。

0 1:60 2m

第136図 4区土坑・出土遺物(4)

3. 土墳墓

4区1号土墳墓 (PL 33-1, 54)

長方形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺109cm、短辺67cm、深さ14cmである。主軸方位N-12°-E。3号掘立柱建物跡のP1と重複するが新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は永楽通寶(1)、紹聖元寶(2)、皇宋通寶(3)の3枚が出土している。この内後者の2枚は共に文字面を内側にして付着し、布様の付着物がわずかに見られたが、文字判読のため分離した。なおうち1枚の拓本は残存状況が悪く、破砕する可



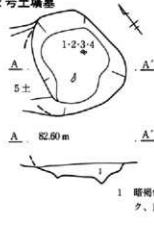
1 暗褐色土 暗褐色土大ブロック、
黄褐色粘土小ブロックを10%、
灰小ブロック5%含む。

能性が高いため分離前に採取した表面のみに止めた。

4区2号土墳墓 (PL 33-2, 54)

隅丸方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は長辺110cm、短辺84cm、深さ21cmである。主軸方位N-0°。5号土坑と重複するが新旧関係不明。埋土は均一で人為埋填。出土遺物は永楽通寶(1)、洪武通寶(2)、祥符□寶(3)、不明銅銭(4)

2号土墳墓



1 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、
黄褐色粘土粒を5%含む。



1墓-1



2墓-1



1墓-2



2墓-2



1墓-3



2墓-3



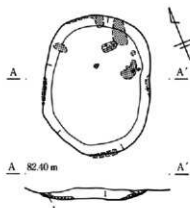
第137図 4区1・2号土墳墓・出土遺物

の4枚が出土している。うち1枚は残存状況が悪く、破砕する可能性が高いため拓本を採取しなかった。

4. 火葬跡

3区1号火葬跡 (PL33-3)

隅丸九方形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は長辺111cm、短辺85cm、深さ9cmである。主軸方位N-28°-E。外形線に沿って壁はよく焼けて焼土化するが、底面は焼けていない。底面には最大厚4cm程の炭層が全面に堆積する。出土遺物は須恵器細片1点のみで混入と見られる。



1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック20%、炭化物、焼土粒を10%含む。



第138図 3区1号火葬跡

5. 井戸跡

2区4号井戸跡

やや浅く井戸跡でない可能性があるが、調査時の認定を採用しておく。

位置 調査区の東端で、61B-6グリッドに位置する。1号溝の東に隣接する。重複なし

確認面形状と規模 円形。径93×86cm。

底面形状と規模 ほぼ円形。径56×50cm。

断面形 円筒形 深さ 0.78m

標高 上面83.76m、底面82.98m。アグリなし

湧水 不明 埋没状況 自然埋没か

出土遺物 なし

2区5号井戸跡 (PL33-4、54)

位置 調査区の東端で、61B-6・7グリッドに位置する。

重複 1号溝と重複するが新旧関係不明。

確認面形状と規模 円形。径116×108cm。

底面形状と規模 円形。径78×70cm。

断面形 円筒形 深さ 2.16m

標高 上面83.72m、底面81.60m。アグリ不明

湧水 湧水はあったが、湧水層等詳細は不明。

埋没状況 自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 馬見岡凝灰岩製の台石?片(1)のみである。

2区6号井戸跡 (PL54、55)

位置 調査区の東端で、61B-7グリッドに位置す

る。1号溝の西に隣接する。重複なし
確認面形状と規模 ほぼ円形。径100×90cm。

底面形状と規模 円形。径64×61cm。

断面形 上に向かって開く円筒形。深さ 2.71m

標高 上面83.66m、底面80.95m。アグリ不明

湧水 湧水はあったが、湧水層等詳細は不明。

埋没状況 自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 埋土中から曲物の胴部(2)、板草履(1)、舟形木製品(3)、角材ほかの用材(6-14)等々多くの木器・木製品が出土している。

備考 木器・木製品の出土量に符合する遺構が周辺にないが、東側に隣接する伊勢崎市調査分でも同時期の井戸跡が調査されていることから、本調査区では柱穴等の遺構は削平によって消滅している可能性もある。

2区7号井戸跡

やや浅く井戸跡でない可能性があるが、調査時の認定を採用しておく。

位置 調査区の西端で、71B-0グリッドに位置する。2・3号溝の西に隣接する。重複なし

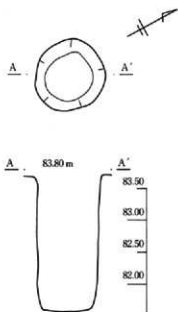
確認面形状と規模 隅丸九方形。径92×88cm。

底面形状と規模 円形。径50×49cm。

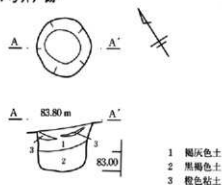
第4章 検出された遺構と遺物

断面形 上に向かって開く円筒形。 深さ 0.76m
 標高 上面83.51m、底面82.75m。 アグリ なし
 湧水 不明
 埋没状況 自然埋没か人為埋填か不明。
 出土遺物 なし

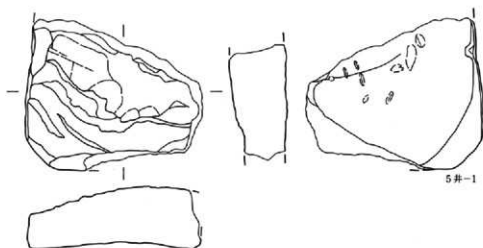
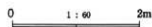
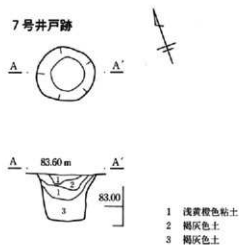
5号井戸跡



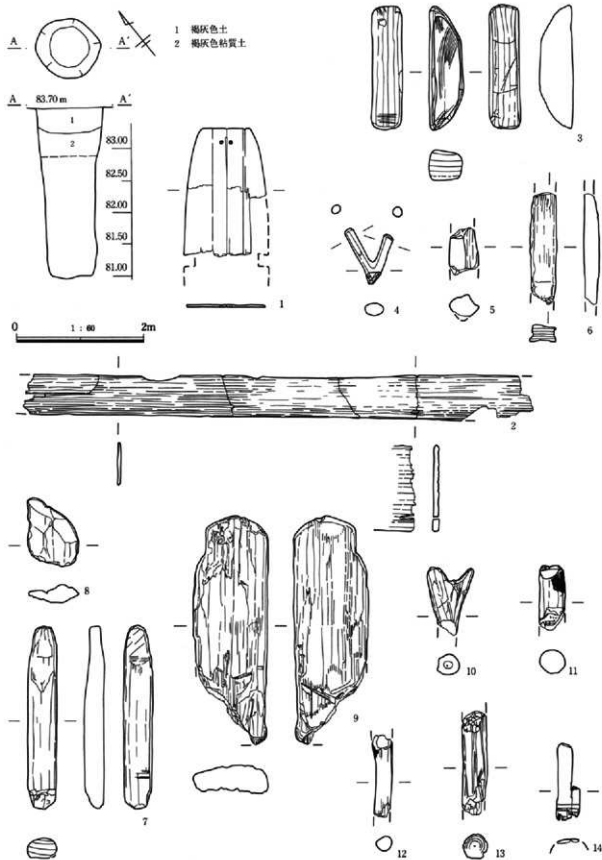
4号井戸跡



7号井戸跡



第139図 2区4・5・7号井戸跡・出土遺物



第140图 2区6号井戸跡・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

4区1号井戸跡 (PL33-5・6、55、56)

位置 調査区の東端で、73I-6グリッドに位置する。重複なし

確認面形状と規模 不整楕円形。径219×65cm。

底面形状と規模 不整楕円形。径64×59cm。

断面形 漏斗状 深さ 2.76m

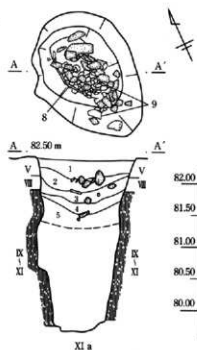
標高 上面82.43m、底面79.67m。

アグリ 最上部は深さ44cm (標高81.98m)、最下部は深さ44cm (標高79.78m)で、その上下幅は220cmを測る。

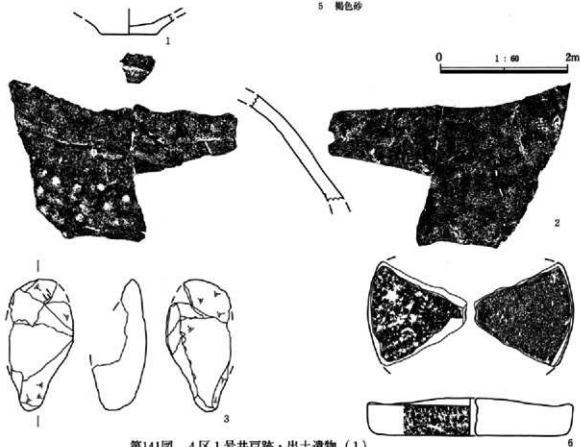
湧水 調査時は底面の砂層 (Ⅹ) から相当量の湧水あり。Ⅸ以下で湧水。

埋没状況 深さ1m程まで褐色砂・大中礫によって人為的に埋填し、その後は自然埋没で遺物も投棄される。

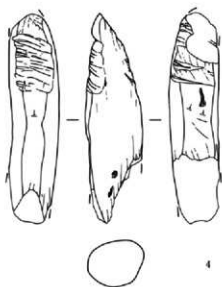
出土遺物 在土器カワラケ(1)、焼締陶器甕(2)、砥石(3・4)、凹石(11・12)、石臼上・下臼(5～9)が出土している。



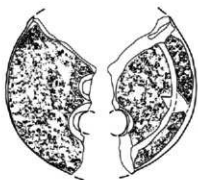
- 1 暗褐色土 白色軽石、黄褐色粘土粒を1%含む。
- 2 暗褐色粘質土
- 3 褐色土 黄褐色粘土大ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。
- 4 黒褐色砂質土 砂主体、黄褐色粘土粒5%含む。
- 5 褐色砂



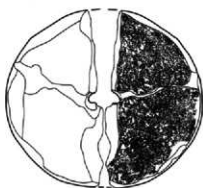
第141図 4区1号井戸跡・出土遺物(1)



4



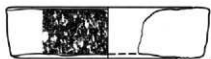
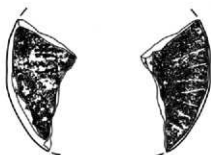
5



7



8



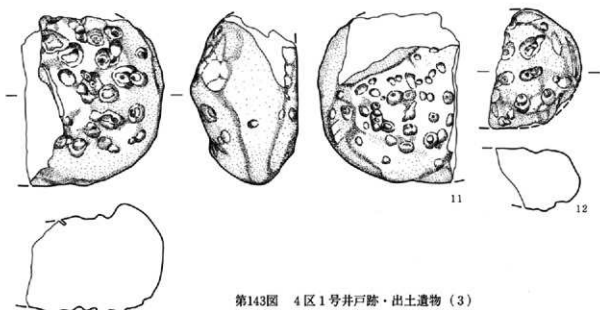
9



10



第142图 4区1号井戸跡・出土遺物(2)



第143図 4区1号井戸跡・出土遺物(3)

4区2号井戸跡 (PL 33-7・8)

浅いがアグリも形成されており井戸跡として扱う。

位置 調査区の東南端で、73H-6グリッドに位置する。重複なし

確認面形状と規模 ほほは円形。径89×85cm。

底面形状と規模 不整形円形。径60×58cm。

断面形 円筒形 深さ 1.15m

標高 上面82.31m、底面81.17m。

アグリ 深さ50cm(標高81.80m)の1か所のみである。

湧水 底面から上へ40cm以下から湧水あり。

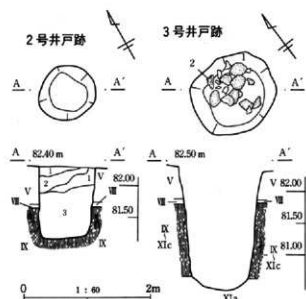
埋没状況 東側から人為的に埋填される。

出土遺物 なし

4区3号井戸跡 (PL 34-1・2、56)

位置 調査区の東南端で、73H-6グリッドに位置する。重複なし

確認面形状と規模 円形。径138×120cm。

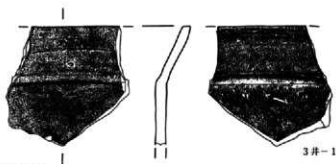


2号井戸跡

1 暗褐色土 黄褐色粘土粒5%含む。

2 褐色土 黄褐色粘土小ブロック20%含む。

3 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を5%含む。



第144図 4区2・3号井戸跡・出土遺物

底面形状と規模 円形。径95×89cm。

断面形 上へ向かって開く円筒形。深さ 1.96m
標高 上面82.41m、底面80.46m。

アグリ 壁面の荒れが図面上で認められるが、観察は行っていない。

湧水 相当量の湧水があったが、湧水層は観察していない。

埋没状況 大中円礫が底面から多く混入しており人為埋填。

出土遺物 在土器鍋(1)、石臼上臼(2)が出土している。

4区4号井戸跡 (PL 34-3~5, 56)

位置 調査区中央部南寄り、73 I-7 グリッドに位置する。中世面では最も北側低湿地よりである。

重複 なし

確認面形状と規模 楕円形。径279×198cm。

底面形状と規模 不整形円形。径122×122cm。

断面形 漏斗状 深さ 2.76m

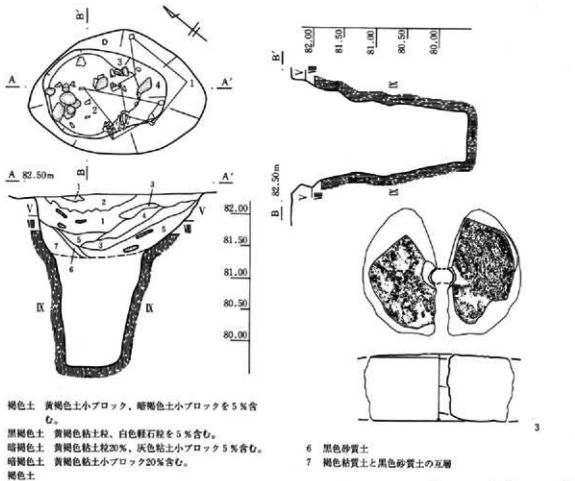
標高 上面82.35m、底面79.56m。

アグリ 観察は行っていないが、図面上では最上層は深さ116cm(標高81.19m)で、底面まで不連続に形成されたものとする。

湧水 相当量の湧水があったが、湧水層は観察していない。

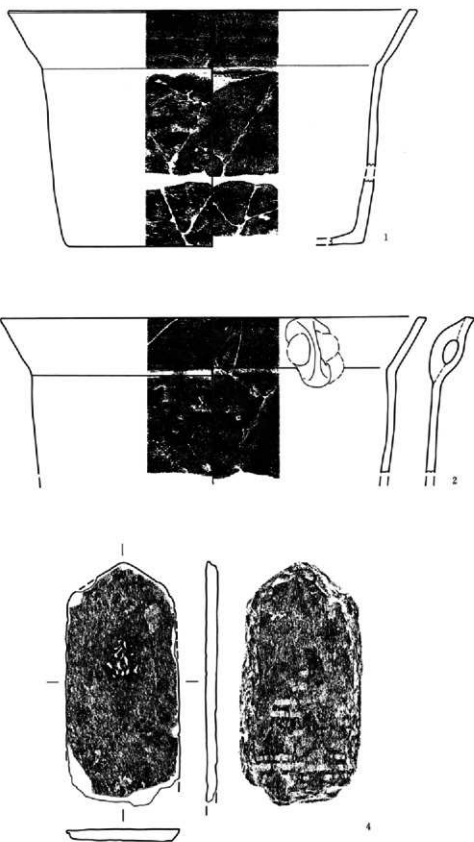
埋没状況 深さ1m程まで黒~褐色砂質土により人為埋填、その後は自然埋没で遺物も投棄される。

出土遺物 ほは完形の板碑(4)が東側から流れ込んだ状態で出土しており、土層断面観察から井戸を大部分人為埋填してから投棄されたものと考えられる。その他在土器鍋(1・2)、石臼下臼(3)や石が多く出土している。



第145図 4区4号井戸跡・出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第146図 4区4号井戸跡・出土遺物(2)

第3項 まとめと問題点

1. 遺構の変遷と特徴

(1) 館跡とその周辺

ア. 堀内部分 (1区)

掘立柱建物跡の主軸方位別の分類によれば、第1～3類とその他の4つに分類され、その他以外はそのまま時期区分の旧い順を示している。新旧関係の根拠は、第4表に示したとおりであるが、幾つか矛盾する部分もあり「？」を付した。ただし、多くはピット1基のみを柱穴列から除外すればいい程度に過ぎない。なお、2号溝は第1類だが状況から第3類段階と共存すると見られ、第2類の7号掘立柱建物跡との新旧関係に矛盾を残している。

各分類における数量は、第1類で8棟、第2類で6棟、第3類で9棟であるが、堀外部分も含めた全体の数量も、第149図に示したとおり同じ割合である。また、同一分類内でも重複があり時期の違いがあるため、柱筋に着目して桁・梁側の面や柱が一致すること(第149図以下一一一で示した)を基準として区分し、A・B・C群に細分した。土坑も一致するものは抽出した。

(イ) 第1類A群

主屋である東西棟の12号掘立柱建物跡は南堀内部分のほぼ中央に配置され、その南面に所在する南北棟の13・14号掘立柱建物跡は付属屋であろうか。13号掘立柱建物跡は、4号入口遺構とよく一致している。また、北面に所在する東西棟の31号掘立柱建物跡は、12号掘立柱建物跡とやや距離をとって28号柱穴列で仕切っている。33号掘立柱建物跡はA・B群どちらに属するのか不明である。土坑のうち、47号土坑は規模から竪穴建物跡とも見られ、形状は隅丸方形で浅い。14号掘立柱建物跡や1号柱穴列の位置から見て、本段階では南堀内部分の縁辺に土塁は存在していなかったものと考えられる。

(ロ) 第1類B群

主屋である東西棟の11号掘立柱建物跡は南堀内部分の中央部に配置される。南面に所在する南北棟の

15号掘立柱建物跡と東西棟の30号掘立柱建物跡は、柱筋で11号掘立柱建物跡と一致する2号柱穴列との位置関係からB群と認められ、付属屋と見られる。建物構成はA群に近似するものとなっている。なお、15・30号掘立柱建物跡は共に、1号堀の上端から2.5m程度の間隔をとることから、この段階で南堀内部分の縁辺に垣根や塙、土塁などの障壁が設けられた可能性が高く、開口部である4号入口遺構とそれに連続する2号柱穴列がよく符合する。

(ハ) 第2類A群

A群とB群の新旧関係は不明だが建物構成が近似することから継続するものと考え、一方C群はB群よりも新しいため、最も後出のものとする。

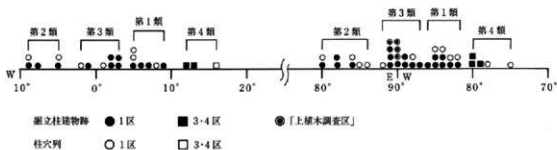
主屋である東西棟の10号掘立柱建物跡は南堀内部分の西端に偏る。また、南北棟の34号掘立柱建物跡は逆に東端に位置しており、両者の間隔はやや広い。3号入口遺構と建物配置との関係が気になるが、第4類に属する20号柱穴列は、位置的に34号掘立柱建物跡と関連する可能性が高い。282号土坑は規模から竪穴建物跡とも見られ、隅丸長方形で深い。10号掘立柱建物跡と282号土坑の東面が、4号入口遺構とよく符合している。

北堀内部分で唯一検出できた20号掘立柱建物跡は、A・B・C群のどれに属するか不明だが、1号入口遺構とよく符合する位置関係にある。第2類は全体として建物が少ない、各々が独立して分散している観がある。

(ニ) 第2類B群

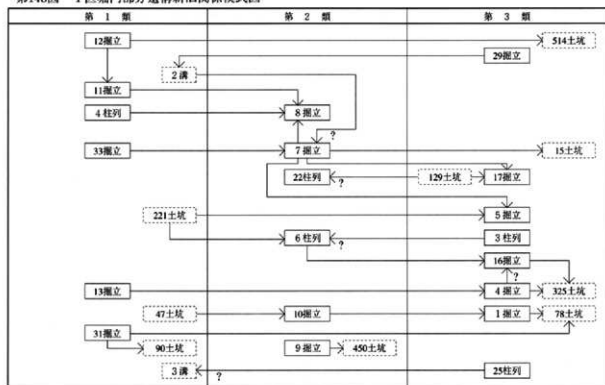
主屋である東西棟の9号掘立柱建物跡は、東側(外側)に偏っている。南北棟の7号掘立柱建物跡は規模も大きく、9号掘立柱建物跡と競合する印象もあるため、或いは時期が違うとした方が妥当かもしれない。第2類全体に言えることだが、建物構成及び

第4章 検出された遺構と遺物



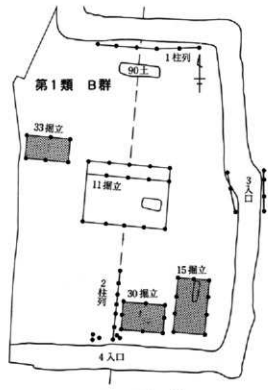
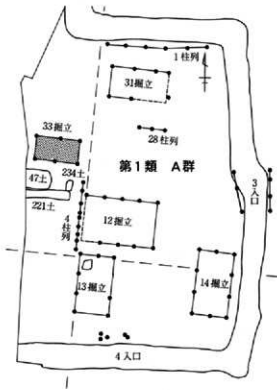
第147図 掘立柱建物跡・柱穴列主軸方位別分布グラフ

第148図 1区堀内部分遺構新旧関係模式図

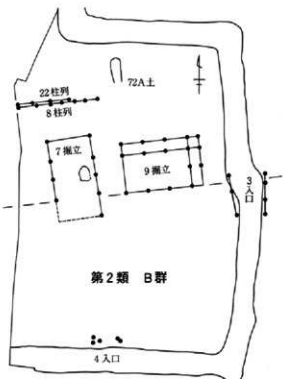
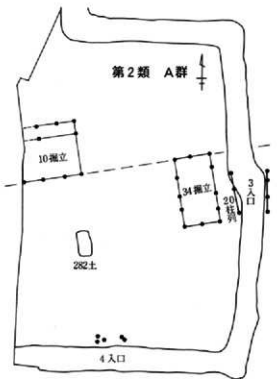


第4表 1区堀内部分遺構新旧関係基礎資料

| 旧 | → | 新 | 旧 | → | 新 | 旧 | → | 新 |
|-------------|---|------------|-----------|---|-----------|------------|---|------------|
| 11掘立(P 8・9) | → | 8掘立(P 5・6) | 7掘立(P 7) | → | 8掘立(P 1) | 1掘立(P 14) | → | 78土坑 |
| 12掘立(P 5) | → | 11掘立内433土坑 | 7掘立(P 7) | → | 17掘立(P 5) | 4掘立(P 2) | → | 325土坑 |
| 12掘立(P 6) | → | 514土坑 | 7掘立(P 8) | → | 15土坑 | 4掘立(P 7) | → | 16掘立内287土坑 |
| 13掘立(P 3) | → | 4掘立(P 4) | 9掘立(P 12) | → | 450土坑 | 221土坑 | → | 5掘立(P 6) |
| 31掘立(P 1) | → | 78土坑 | 47土坑 | → | 10掘立(P 6) | 16掘立(P 2) | → | 325土坑 |
| 31掘立(P 2・3) | → | 90土坑 | 10掘立(P 9) | → | 1掘立(P 9) | 129土坑 | → | 17掘立(P 1) |
| 33掘立(P 5) | → | 7掘立(P 8) | 221土坑 | → | 6柱列(P 1) | 29掘立(P 5) | → | 2溝 |
| 4柱列(P 1) | → | 8掘立(P 2) | 6柱列(P 4) | → | 16掘立(P 9) | 25柱列(P 11) | → | 3溝 |
| 2溝 | → | 7掘立(P 2) | 3柱列(P 2) | → | 6柱列(P 5) | | | |
| 7掘立(P 6) | → | 5掘立(P 4) | 129土坑 | → | 22柱列(P 1) | | | |

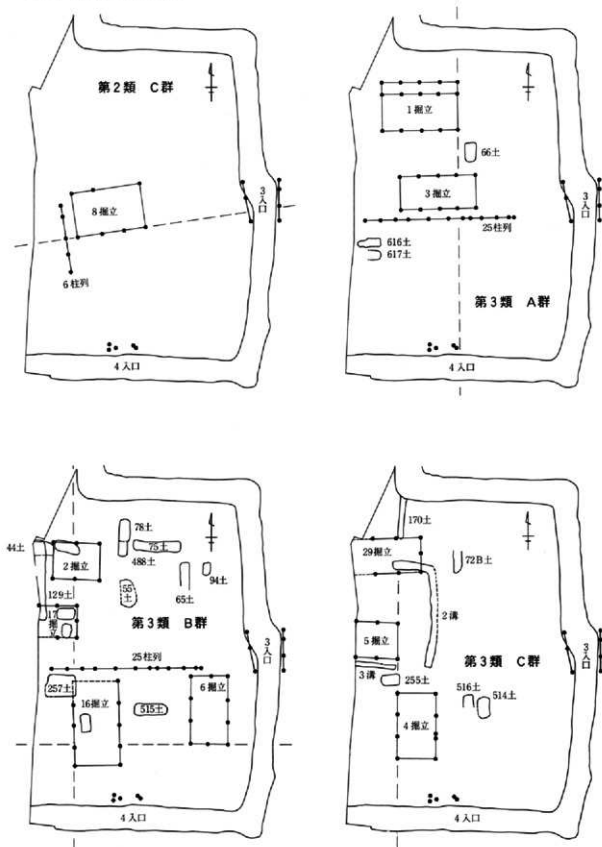


トーンは群別不確定



第149図 1区堀内部分主軸分類別配置図(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第150図 1区堀内部分主軸分類別配置図(2)

配置の面で、南堀内部分全体に対する意識が、第1類に比べて明らかに薄れて来ており、1号堀を介して堀内・堀外とする位置付けも変更しなくてはならない段階と考える。こうして見ると、9号掘立柱建物跡が東端に偏していることも理解できる。

(b) 第2類C群

東西棟の8号掘立柱建物跡のみが、南堀内部分の中央部西寄りに配置される。

(c) 第3類A群

主屋である東西棟の1号掘立柱建物跡は、南堀内部分の北西端に配置され、その南面に所在する東西棟の3号掘立柱建物跡は付属屋であろうか。建物は南堀内部分の北半分のみにまとめ25号柱穴列で仕切り、南半分を広場の空間としている。この南側を空き地(建物のない空間)とする傾向は、第2類A群段階から始まっており、第1類の中庭的な空間とは異なる。また、第3類では建物周辺に土坑が顕著に分布するようになる。

(d) 第3類B群

B群とC群は建物構成が近似し継続性が高い。25号柱穴列と3号溝の新旧関係からC群をB群よりも後出としたが、4号掘立柱建物跡と16号掘立柱建物跡の新旧関係にやや疑問が残る。

A群に引き続き、25号柱穴列によって南堀内部分を南北に仕切り、各々掘立柱建物跡2棟ずつを配置する。南半分では南北棟の6・16号掘立柱建物跡が所在し、A群北半分の建物構成に近似する。16号掘立柱建物跡の東面は、4号入口遺構とよく符合し、この入口の北側延長線を境に、6・16号掘立柱建物跡を各々独立した建物と考えることもできる。

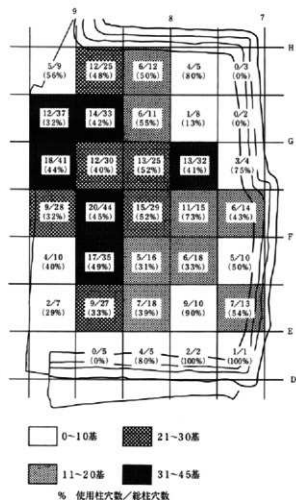
北半分では西側に偏して東西棟の2・17号掘立柱建物跡が配置される。東側は土坑がやや多く分布するが、第2類段階南半分の空間と近似した性格を持つことも考えられる。2・17号掘立柱建物跡は規模から付属屋とすれば、西側調査区域外に主屋が所在する可能性もある。

(e) 第3類C群

4号掘立柱建物跡の西面、5号掘立柱建物跡の東

面の延長線上に170号土坑・3号溝があることを根拠として設定したが、29号掘立柱建物跡よりも2号溝は後出しており、内部を2号溝などで区画する段階では29号掘立柱建物跡は共存しない。

南堀内部分北西端に所在する東西棟の5・29号掘立柱建物跡は、B群から継続するもので、その建て直しだろうか。南半分の西側に所在する4号掘立柱建物跡も、16号掘立柱建物跡からの継続であり(新旧関係に疑問はあるが)、同じくB群に一致して4号入口遺構によく符合するが、東側に6号掘立柱建物跡に続く掘立柱建物跡はない。南堀内部分を南北に区切っていた柱穴列は3号溝へと変わり、170号土坑・2号溝と共に北西部を再区画するようになる。したがって、B群でも想定したとおり西側調査



第151図 1区堀内部分柱穴分布図

区域外に主屋が存在する可能性がある。また、B群では北東部分のみであった広場の空間は、2号溝以東の南堀内部分東半へと拡大する。

第1類と第2類以降では、建物構成・配置に明らかな違いがあることは前述したが、本遺構が館跡として継続していた場合、第2類以降ではその主体部分が北西の調査区域外に移動していったと見るのが妥当と考える。また、館跡としての性格が第1類段階のみに該当するもので、その後突出した居住空間がなくなり、等質な集落構成へと変化したと考えるとしても、南堀内部分よりも北西の調査区域外に中核的な部分がある可能性もあると考える。

(イ) その他と問題点

19号掘立柱建物跡は、規模・構造ともに他に比較できるものがなく、時期・性格ともに不明とならざるをえない。

これまで検討してきたとおり、掘立柱建物跡の主軸方位を基に分類することで、堀内部分における遺構の変遷を概ね捉えることができた点と考える。ただし、問題となるのは掘立柱建物跡として抽出できた以外にも柱穴は存在することであり、これは調査上回避できない限界である。柱穴を掘立柱建物跡の柱穴として使用できた数量と分布は、第151図のとおりである。割合とすれば、40～50%が使用できた点で多い方かもしれない。また、柱穴総数の分布を見た時、堀内部分の北西部・南西部・中央部東寄りが顕著であるのは、第1～3類の状況を総合した状況と一致しており、この点からも第1～3類の分析結果が柱穴全体を分析できた場合と大差ないことを示していると判断する。

イ. 堀外部分（1・3・4区・「上植木調査区」）

堀内部分と同様な基準によって分類を行ったところ、第1～4類の4つに分類された。堀外部分では第1～3類の重複はなかったが、堀内部分を援用して旧い順の新旧関係にあると考えたところ、矛盾はなかった。また、第4類は3・4区の掘立柱建物跡の全てであり、選択された平面配置となっており、

3種の重複があることから最低でも3期の時期差を想定できる。しかし、第1～3類に対して比較する根拠に欠けるため、両者を同じ時間軸の尺度として使用することはできなかった。また、土坑では第5類を加えた5つに分類可能であったが、詳細は後述することとして、ここでは掘立柱建物跡の遺構分布を中心に、遺構の変遷を見たい。

各分類における数量は、第1類が3棟、第2類が1棟、第3類が4棟（「上植木調査区」を含めれば6棟）、第4類が4棟であり、数量の増減は堀内部分と同じ傾向を示している。また、堀内部分と同様に柱筋に着目して、桁・梁側の面や柱が一致すること（第152図以下――で示した）を基準として区分し、A・B・C群に細分することができた。

(ウ) 第1類A群

南堀内部分の東側に立地する東西棟の27号掘立柱建物跡は、規模的に堀内部分の主屋12号掘立柱建物跡とはほぼ同じである。堀内部分では各遺構との関連が不明瞭である3号入口遺構だが、ここでは堀内部分と27号掘立柱建物跡とを結ぶ通路としての機能が想定される。南堀内部分東面及び14号掘立柱建物跡東面の北延長線上には、東面を一致させた25号掘立柱建物跡がある。また、18号掘立柱建物跡はA・B群のどちらに属するか不明である。ただし、18・25号掘立柱建物跡の間に存在する空間は、多少の広さの差はあるとしても、第3類段階まで継承される状況であり、南堀内部分東面の延長線と一致して、何らかの境界を反映していたとも見られる。

(イ) 第1類B群

北端の10号柱穴列が、唯一同じ群として捉えられるが性格は不明である。B群段階では、A群の掘立柱建物跡がそのまま継続していたと見ることも可能であるが、南堀内部分の掘立柱建物跡配置の大幅な変化と対比して考えれば、この時期堀外部分では掘立柱建物跡が消滅していたとするのも不自然ではない。

(ウ) 第2類A群

23号掘立柱建物跡西面と南堀内部分の34号掘立柱

建物跡西面を描ることがどのような意図を持つのか理解できないが、堀内部分でも触れたとおり、北堀内部分で唯一検出できた20号掘立柱建物跡が1号入口遺構と符合していたことと同様、23号掘立柱建物跡も2号入口遺構と符合していることが注目される。第2類段階では、堀内・堀外部分に共通して掘立柱建物跡が独立分散している傾向を読み取ることができる。

(ロ)第2類B・C群

この段階では、堀外部分に同じ群の遺構として捉えられるものはない。この時期は堀内・堀外部分とも一致して掘立柱建物跡が少ない傾向をよく示している。

(ハ)第3類A群

掘立柱建物跡の構成・配置は、第2類と近似しており、遺構の性格としての継続性が見られる。22号掘立柱建物跡は構造的に住居よりも蔵舎などが想定され、21号掘立柱建物跡の付属家とも解される。

(ニ)第3類B・C群

本遺跡で最も掘立柱建物跡が多く、平面的な広がりを持つ時期である。南堀内部分を検討した時と同じく、掘立柱建物跡の構成・配置はA群段階とはかなり変化しており、堀外部分では非常に顕著な違いとして表れる。堀内・堀外部分全体として掘立柱建物跡は規則的に整然と配置され、各々独立した空間を持っているようである。既に第2類段階でも見えていたが、第1類段階が有していたような堀内部分の遺構構成が優位な状況は全くなく、むしろ21・24号掘立柱建物跡は堀内部分よりも大きな規模を備えている。ただし、西側調査区域外の堀内部分が不明な以上、堀外部分優位と断定はできない。

第2類段階と同じく、1・2号入口遺構と掘立柱建物跡との関連は強く、1号入口遺構の東延長線は21号掘立柱建物跡と「上植木調査区」3号掘立柱建物跡の間を通り、「上植木調査区」1・2号掘立柱建物跡の間を貫ける通路及び区画境として想定できる。2号入口遺構でも、11号柱穴列の北側を通り、24・26号掘立柱建物跡の間を貫ける通路及び区画境

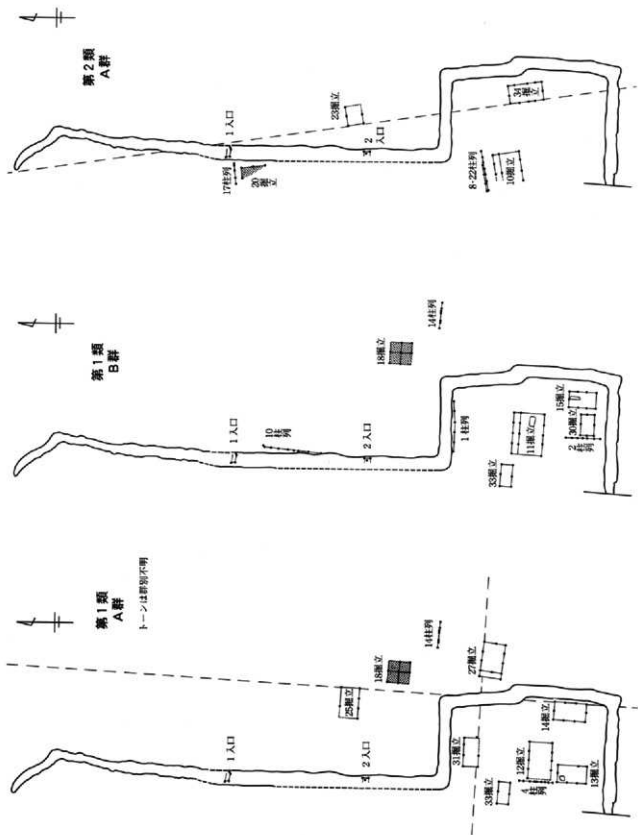
の存在が窺える。ただし、26号掘立柱建物跡を24号掘立柱建物跡の付属家とすることも可能である。なお、第1類A群段階で見たとおり、24・26号掘立柱建物跡の間には南北に貫ける通路の存在も窺え、北上して「上植木調査区」1・2号掘立柱建物跡の西側を通り、4区の東側へ貫けるルートも想定できる。しかも、「上植木調査区」2号掘立柱建物跡の北側には、「上植木調査区」報告書でも触れられているとおり、掘立柱建物跡数棟の存在が想定できる柱穴が密集しており、4区へと続く一連の掘立柱建物跡群を想定できる。

(ホ)第4類 (第159図)

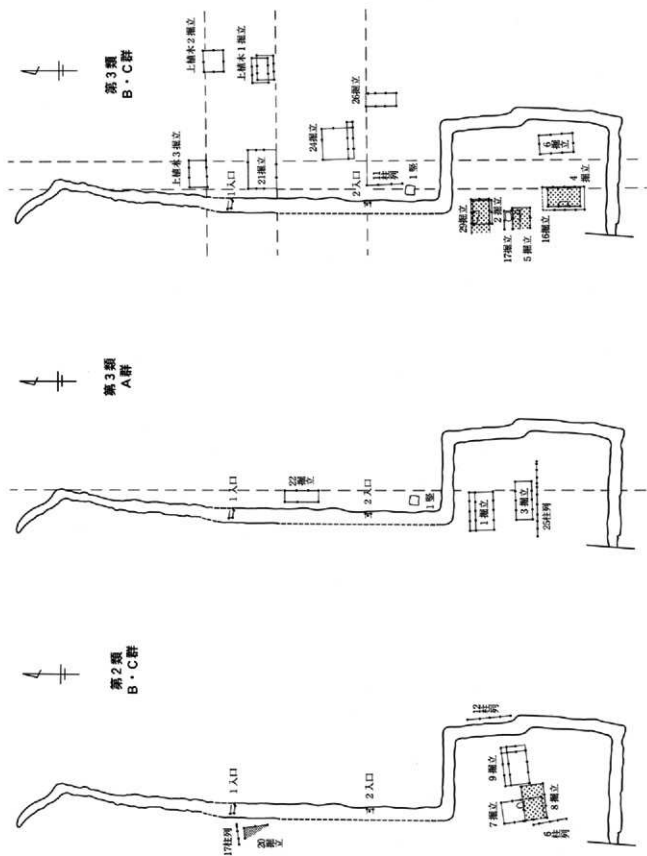
1・2・4号掘立柱建物跡は重複しており、最低でも3時期の存在が想定されるが新旧関係不明。西面が一致することに注目すれば、2・3号掘立柱建物跡が共存すると位置付けることも可能であるが、規模から1・2・4号掘立柱建物跡が各々3号掘立柱建物跡の付属家とすることも可能である。遺構配置を見ると、1号柱穴列を境に東側を居住域として区分していることが判明する。なお、時期としては第3類から続く南北通路との関係から、第3類に近づけることも可能であるが、土坑の分析結果も加味した上で後述する。

ウ. 総括

以上見てきたとおり、掘立柱建物跡を基準に4類・1～3群 計9時期に分類して検討を行ってきたが、第4類を除いて年次比定を行うと、第1類A群の221号土坑に先行する2号井戸跡が14世紀後半であることを上限として、1号堀その他出土の在土器類の下限が16世紀前半であることで、その全体の年代幅を押さえることが可能である。ただし、221号土坑は第3類の2・3号溝との関連も想定されるのだが、2号井戸跡自体が南堀内部分では最も古い点から大差ないものとする。なお、搬入遺物である中国陶磁器や古瀬戸が概ね14世紀代であるのも、導入主体と想定される館跡の存続期間である第1類A・B群の時期とほぼ符合してくるものと言えらる。



第152図 1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類配置図(1)



第153図 1区・「上植木調査区」堀外部分主軸分類別配置図(2)

(2) 掘立柱建物跡

A. 規模と構成

第154・155図は、梁側の長さを基準として掘立柱建物跡をA～D型に分類し、主軸方位別に並べたものである。本遺跡検出の掘立柱建物跡は、殆どが側柱建物ではほぼ相似形となっていることから、梁行を基準とすることにした。ただし、面積を考慮すると、若干補正して考える必要があり、第1類B型の18号掘立柱建物跡はC型相当、C型のうち第2類の23号掘立柱建物跡、第3類の2・5号掘立柱建物跡、第4類の2・4号掘立柱建物跡は各々D型相当と考えた方が妥当である。また、南堀内部分検出の掘立柱建物跡の特徴として、庇は全て北側であることが注目される。以下、(1)で述べた内容と重複する面もあるが、検証するつもりで時期別に構成を検討する。

(イ) 第1類A群

堀内部分ではB型の12号掘立柱建物跡を主屋として、C型3棟、D型1棟が整然と配置される。堀外部分では、南堀内部分に東隣するB型の27号掘立柱建物跡が12号掘立柱建物跡と同規模を備えており、やや離れたC型相当2棟（18号掘立柱建物跡補正）が存在する。27号掘立柱建物跡は、南堀内部分北面の延長線上にある14号柱穴列によって、南北に仕切られることに注目すれば、その周辺は堀内部分に近い性格を持った空間として見ることも可能である。

(ロ) 第1類B群

堀内部分では、主屋である11号掘立柱建物跡の面積が55.55㎡と本遺跡最大規模を持ち、B型1棟、C型2棟が整然と配置される。11号掘立柱建物跡が傑出している点が示すとおり、堀内部分優位の段階で、1号堀に区画された館跡と位置付けられる。

(ハ) 第2類A群

堀内部分では、B型の10号掘立柱建物跡が第1類の主屋に対比されるが、建物配置が全く変化しており、C型である34号掘立柱建物跡も面積的に10号掘立柱建物跡に近く、建物構成も違う。堀外部分の23号掘立柱建物跡はD型相当で、9号井戸跡に共存す

る小屋と考えられる。

(ニ) 第2類B・C群

B・C群の掘立柱建物跡は全てB型であり、本遺跡で唯一2面庇を備えた9号掘立柱建物跡も、面積では同じB群内の7号掘立柱建物跡と変わらない。C群の8号掘立柱建物跡も、棟方向は違うが7・9号掘立柱建物跡と規模的には大差ないものである。したがって、前述したとおりこの3棟は共存せず、1棟ずつが各々南堀内部分の中央部のみで、堀外部分にも掘立柱建物跡を持たないものである。

(ホ) 第3類A群

南堀内部分の主屋である1号掘立柱建物跡は、北側に庇を持つ構造や規模から、第2類の9・10号掘立柱建物跡或いは多少大きいが第1類の11号掘立柱建物跡までもその系譜を引くものといえる。比較的面积の広いC型の付属屋3号掘立柱建物跡を配置するのは、第2類のA群に類似する。堀外部分の22号掘立柱建物跡は細長い構造で、厩舎などであろうか。

(ヘ) 第3類B群

堀内部分の他類では、面積的に主屋に相当する16号掘立柱建物跡は、南堀内部分の南半に所在する南北棟で、位置的にはそれまでの主屋の系統ではない。ただし、東端C型の6号掘立柱建物跡が、A群の3号掘立柱建物跡に相当する点では、A群の建物構成に似ている。また、北半の2・17号掘立柱建物跡は面積的にD型相当であり、付属屋である可能性が高いことから、西側調査区域外に主屋の存在が想定される。

堀外部分では、堀内部分より規模の大きいA型の21・24号掘立柱建物跡が現われ、細長い26号掘立柱建物跡はA群の22号掘立柱建物跡に共通するものがある。また、C型である「上植木調査区」の1～3号掘立柱建物跡も含めて、堀外部分の建物は整然と配置されており、各々の間に通路が介在することは既に述べたが、堀内部分の建物配置にも同じ傾向が読み取れる。したがって、この段階では堀内・堀外部分が1号堀を挟んではいても、非常に均質な一連の建物群或いは集落を形成していたものと考えられる。

| | | 1区 | 1類 | 1区 | 2類 |
|------------------------------|--------------------------|--------|----|----|----|
| A 型 梁行 (20~22尺) | | | | | |
| | B 型 梁行 15、18.5尺 | 庇 付 | | | |
| 庇 なし | | | | | |
| C 型 梁行 (10.5~13.5尺) | | | | | |
| | | | | | |
| D 型 梁行 (8~9.5尺) | | | | | |

第154図 掘立柱建物跡規模分類図(1)

第4章 検出された遺構と遺物

| | | 1区 第3類 | | 3-4区 第4類 | |
|------------------------------|----------------------------|--------|--|----------|--|
| A 型 梁行 (20~22尺) | 庇付 | | | | |
| | B 型 梁行 (15~18.5尺) | 庇付 | | | |
| | 庇なし | | | | |
| C 型 梁行 (10.5~13.5尺) | 3区 | | | | |
| | 4区 | | | | |
| D 型 梁行 (8~9.5尺) | 3区 | | | | |
| | その他 | | | | |

第155図 掘立柱建物跡規模別分類図(2)

(キ)第3類C群

堀内部分ではC型の5・29号掘立柱建物跡が、南堀内部分北半に所在しB群の建替えと見なされるが、南半では主屋根の建物であった16号掘立柱建物跡の位置に、やや小さいC型の4号掘立柱建物跡が現われ、南堀内部分東半は広場の空間へと変化する。また、B・C群は継続性が高く時期差が少ないと考えられるため、堀外部分はB群と大差ないと考える。

(ク)第4類

4区では他に比して大きいC型の3号掘立柱建物跡に対して、D型相当で付属屋の3棟が重複してお

り、この点でC型も主屋となりうる事が理解される。また、3区1号掘立柱建物跡はC型で唯一北庇を備えており、1区に対比すると第4類はC型を主屋とする一群であるという性格付けが可能となる。

イ. 柱間

各柱穴間の柱間を個別に集計したのが、第5～7表である。分類はこれまで検討してきた軸方位別と梁行規模別を使用することで、時期差をも見られるものと考えたが、結論として各類別を比較しても相違点は少なく、ほぼ同じ傾向であることが解った。

桁行を見ると、全体では6.5～8尺が大部分を占

第5表 1区掘立柱建物跡柱間尺数(桁行)

| 桁 柱間尺数 型 遺構名 | 4 | 4.5 | 5 | 6 | 6.5 | 7 | 7.5 | 8 | 8.5 | 9 | 12.5 | 13 | 13.5 | 16 | 16.5 | 18 | 計 |
|-----------------|---|-----|---|---|-----|---|-----|---|-----|----|------|----|------|----|------|----|-----|
| 第1類 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| A型 11掘立 | | | | 1 | | 2 | 2 | 2 | | | | | | | | | 7 |
| B型 27掘立 | ① | ① | 2 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | 6 |
| 12掘立 | | | 3 | 4 | | | | | | | | | | | | | 7 |
| 18掘立 | | | | | | 1 | 3 | | | | | | | | | | 4 |
| C型 13掘立 | | | | | 3 | 2 | 1 | | | | | | | | | | 6 |
| 14掘立 | | | | | | | 6 | | | | | | | | | | 6 |
| 15掘立 | | | 2 | 4 | | | | | | | | | | | | | 6 |
| 25掘立 | | | | | | 3 | | | | | | 1 | | | | | 4 |
| 31掘立 | | 1 | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | 4 |
| D型 30掘立 | | | | | | 1 | 3 | | | | | | | | | | 4 |
| 33掘立 | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | | | | | | 4 |
| 第2類 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| B型 9掘立 | ③ | | | | | | | 5 | ① | | | | | | | | 6 |
| 10掘立 | | | | 1 | 1 | ① | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | 4 |
| 7掘立 | | | | | 2 | 2 | 2 | 1 | | | | | | | | | 7 |
| 8掘立 | | | | | | | 1 | 2 | 1 | | | | | 1 | | | 5 |
| C型 20掘立 | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | 2 |
| 23掘立 | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | 3 |
| 34掘立 | | 1 | 3 | 1 | 2 | | | | | 1 | | | | | | | 8 |
| 第3類 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| A型 24掘立 | ① | | | | 1 | | 3 | 1 | | | | 1 | | | | | 6 |
| 21掘立 | | | | | | | | | | 2 | | | | | | 1 | 3 |
| B型 1掘立 | | | | 1 | ③ | ③ | | | | | | | | | | | 7 |
| 16掘立 | | | | 1 | 1 | | 4 | 1 | | | | | | | | | 7 |
| C型 2掘立 | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | 4 |
| 3掘立 | | | | | 6 | 2 | | | | | | | | | | | 8 |
| 4掘立 | | | | | | | 4 | 2 | | | | | | | | | 6 |
| 5掘立 | | | | | | | 3 | 1 | | | | | | | | | 4 |
| 6掘立 | | | | | | | | 1 | 5 | | | | | | | | 6 |
| 17掘立 | | | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | | 3 |
| 29掘立 | | | | | | | 2 | 2 | | | | | | | | | 4 |
| D型 22掘立 | | | | | | 1 | | 1 | 1 | 1 | | | | | 1 | | 5 |
| 26掘立 | | 1 | | | 1 | 1 | 3 | | | | | | | | | | 6 |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| D型 19掘立 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | 2 |
| 計 | ⑤ | 1 | 5 | ① | 13 | ③ | 29 | ⑤ | 43 | 24 | 5 | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 | 164 |

注：桁は○数字。

第4章 検出された遺構と遺物

めており、ピークは7.5尺にあることが注目される。また、6尺が意外と少ない。一方梁行を見ると、梁行2間では5.5・6・7尺が、梁行1間では13尺の数量が突出している。したがって、桁・梁行では別々の柱間が採用されていたことが判明する。

形が多い。C型でも規模のばらつきはあるが、径30～50cmが大半で、形状は隅丸方形と円形が等量となる。D型の規模は30～40cmが多く、形状は円形が大半を占める。

ウ. 柱穴

第156図は梁行別規模区分に従って、柱穴の規模・形状をグラフに作成したものである。A型では規模のばらつきもあるが、径50cmを超える大型のものも多く、形状は隅丸方形のものが卓越している。B型の規模は40～50cm位に集中し、形状はやはり隅丸方

第6表 1区掘立柱建物跡柱間尺数(梁行)

| 梁行 | 柱間尺数 | 4 | 4.5 | 5 | 5.5 | 6 | 6.5 | 7 | 7.5 | 8 | 8.5 | 9 | 9.5 | 10.5 | 11 | 11.5 | 12 | 12.5 | 13 | 14 | 14.5 | 15 | 15.5 | 16 | 16.5 | 18 | 計 | |
|-----|------|---|-----|---|-----|----|-----|---|-----|---|-----|---|-----|------|----|------|----|------|----|----|------|----|------|----|------|----|-----|----|
| 第1類 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| A型 | 11掘立 | | ② | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 2② | |
| B型 | 27掘立 | | | | | | | 3 | | | | 1 | | | | | | | ① | | | | | | | | 4① | |
| | 12掘立 | | | | | | | | 2 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | |
| | 18掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| C型 | 13掘立 | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | |
| | 14掘立 | | | | | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| | 15掘立 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | |
| | 25掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 31掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| D型 | 30掘立 | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| | 33掘立 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 第2類 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| B型 | 9掘立 | ③ | | | | | 2② | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3③ | |
| | 10掘立 | ① | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1① | |
| | 7掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 8掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| C型 | 20掘立 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 23掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | 34掘立 | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| 第3類 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| A型 | 24掘立 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2① |
| | 21掘立 | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| B型 | 1掘立 | ② | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2② | |
| | 16掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| C型 | 2掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 3掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 4掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 5掘立 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 6掘立 | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| | 17掘立 | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 29掘立 | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| D型 | 22掘立 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 26掘立 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| D型 | 19掘立 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 計 | | ⑥ | 2② | 2 | 8 | 10 | 4② | 9 | 4 | 2 | 4 | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 | 3 | 7 | ① | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 | 72③ | |

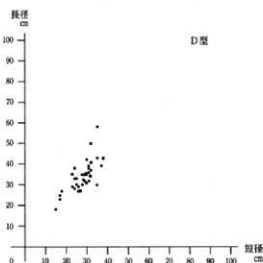
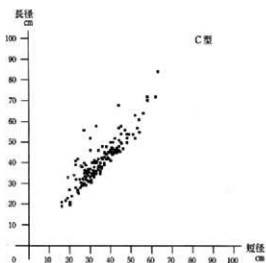
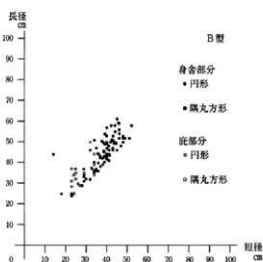
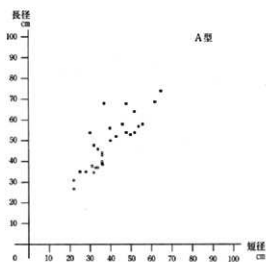
注：梁行1間のときはアンダーライン。底は○数字。

第7表 3・4区掘立柱建物跡柱間尺数(桁行・梁行)

| 桁 柱間尺数 型 遺構名 | 6 | 6.5 | 7 | 7.5 | 8 | 8.5 | 9 | 12 | 12.5 | 計 |
|-----------------|----|-----|---|-----|---|-----|---|----|------|-----|
| 第4型 (3区) | | | | | | | | | | |
| C型 1掘立 | 1① | 2② | | | | | | | 1 | 4③ |
| 第4型 (4区) | | | | | | | | | | |
| C型 2掘立 | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | 4 |
| 3掘立 | | | 1 | | 1 | | | 2 | | 4 |
| 4掘立 | | | | 4 | | | | | | 4 |
| D型 1掘立 | | | 3 | 1 | | | | | | 4 |
| 計 | 1① | 2② | 5 | 6 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 20③ |

| 梁 柱間尺数 型 遺構名 | 2 | 3.5 | 4 | 4.5 | 6.5 | 10 | 11.5 | 12 | 12.5 | 13.5 | 14 | 計 |
|-----------------|---|-----|---|-----|-----|----|------|----|------|------|----|-----|
| 第4型 (3区) | | | | | | | | | | | | |
| C型 1掘立 | ② | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | 2③ |
| 第4型 (4区) | | | | | | | | | | | | |
| C型 2掘立 | | | | | 1 | | 1 | | | | | 2 |
| 3掘立 | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| 4掘立 | | | | | | | | 1 | | | | 2 |
| D型 1掘立 | | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | 4 |
| 計 | ② | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 12③ |

注：梁行1間の場合はアンダーライン。庇は○数字。



第156図 掘立柱建物跡規模分類別柱穴規模一覧

(3) 土坑

ア. 分布

土坑についても、掘立柱建物跡同様に主軸方位別に分類を行ったが、各分類における数量は第5→2→4→1→3類の順で増加しており、掘立柱建物跡の数量比に極めて符合する結果を示していた。

(イ) 堀内部分 (1区)

第1類は北堀内部分でわずか分布し、南堀内部分でも少量見られるが、性格付けとして①掘立柱建物跡の内部施設であるもの:363・433号土坑、②掘立柱建物跡と対置され、別個の機能を有すると考えられるもの:90・221・234号土坑、③竪穴建物跡と考えられるもの:47号土坑の3つに大別される。

第2類の数量は少ないが、第1類と同様①として246号土坑、②として72A・96号土坑、③として282号土坑を完てることができる。

第3類の数量は一気に増加するが、①として287号土坑、③として257号土坑があり、その他多くは②に属している。ただし、170号土坑は2号溝と共に区画する機能を持つものと考えられる。第3類では②の数量が多いため、幾つかのまとまりが見られ、土坑の性格を知る手がかりとなる。それらは大きく4つに分かれており、北半の75号土坑ほかの9基、西端北寄りの44・127・211号土坑、西端南寄りの236号土坑ほか4基、中央部の514～516号土坑である。これらは各々重複し同時に存在していたものではなく、繰り返し付設されてきたことは本文中に述べたが、分類をA～C群に細分した際、一致するものとして抽出される土坑も少なからず存在した。こうして見ると、既に対置という言葉を使っているが、掘

立柱建物跡と整合性を持った土坑配置が存在すると見て間違いない。

第4類では44・1075号土坑が存在するが、偶然主軸方位が一致した可能性も否定できない。

(イ) 堀内部分 (「上植木調査区」)

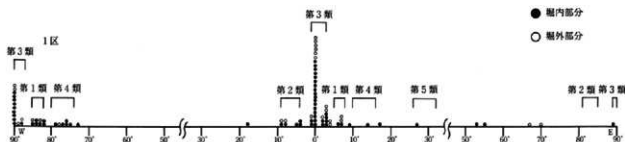
各分類における数量は、第3→1→4類の順で増加しており、特に第1・4類の分布は類似する。何か中心的なものを取り囲んで、方形に配置され、中心部分を欠損したように見える。また、掘立柱建物跡は見られない反面、地下式土庫や土墳墓が分布していることから、土墳墓も少なからず含まれているものと推測される。

(ロ) 堀外部分 (1区)

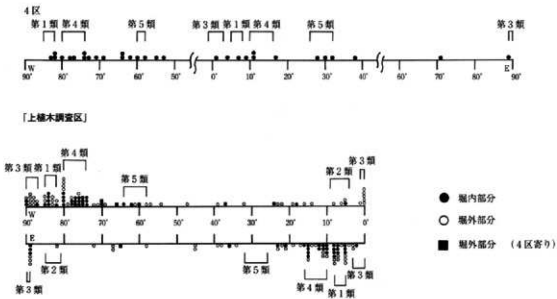
第1・2類は少なく、第3類がやや多く見られ、掘立柱建物跡周辺に集中する傾向がある。

(ロ) 堀外部分 (「上植木調査区」)

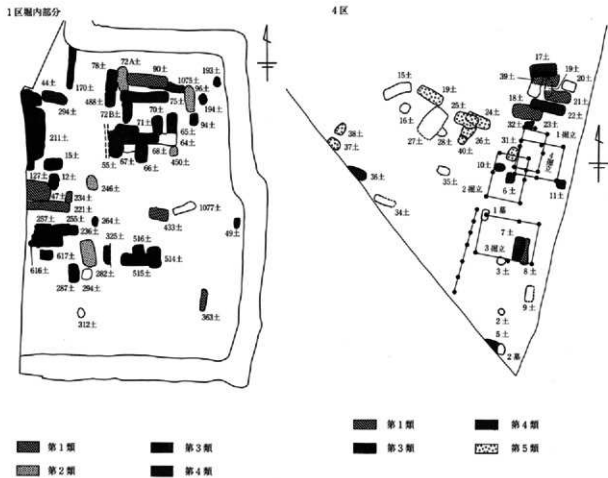
各分類における数量は、第5→2→4→1→3類の順で増加しており、分類外の土坑は少ない。第1・3類の配置には規則性があるように見られることから、南堀内部分と同様、土坑に対置される掘立柱建物跡が存在していたが認定できなかった可能性が高い。なお、第1類の土坑は「上植木調査区」が最も多いが、主軸方位の近い第3類の混同も考慮される。また、第5類は「上植木調査区」4区寄りから4区にかけて偏在する。



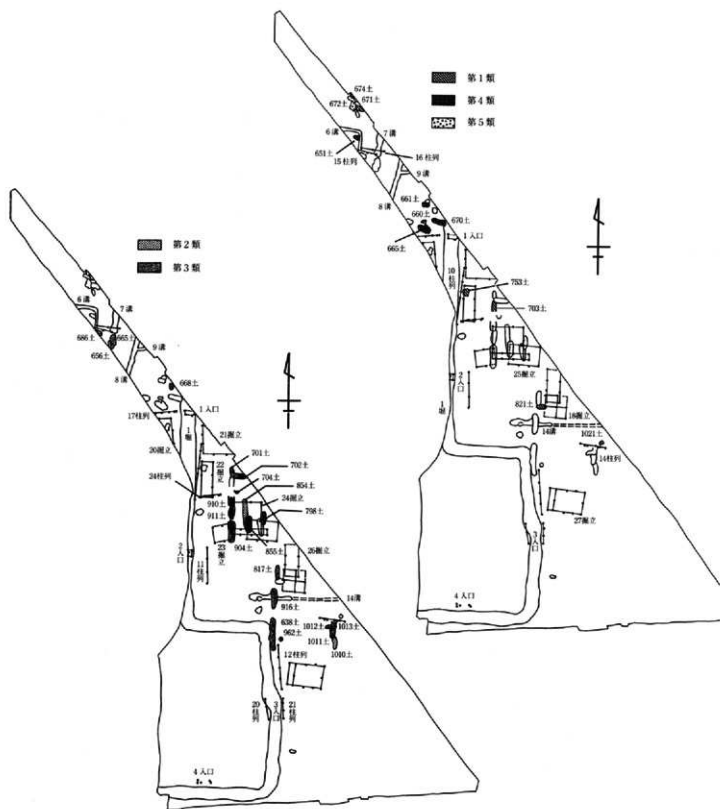
第157図 1区土坑主軸別分布グラフ



第158图 4区・「上植木調査区」土坑主軸方位別分布グラフ



第159图 1区堀内部分・4区土坑主軸方位別分布図



第160図 1区土坑主軸方位別分布図



第161図 「上植木調査区」土坑主軸別分布・土壇墓・地下式土壇分布図

(外)堀外部分(4区)

各分類における数量は、第3→1→4→5類の順で増加しており、堀内・堀外部分を含む他の調査区と異なった構成を示すと共に、分類外の土坑も少なくない。第1・4類は共に掘立柱建物跡周辺に分布し、第4類では掘立柱建物跡の内部施設であるものもある。第5類は4区に集中し、居住空間である1号柱穴列より西側に分布する点が注目される。

イ. 規模・形状

形状は長さ・幅を基準に、長短比1.00~1.50を方形・正方形、1.51~2.50を長方形、2.51以上を細長方形として分類した。

形状が方形・正方形及び隅丸方形・正方形のものは、1・4区では数量が少なく点在しており、「上植木調査区」では堀内・堀外部分ともに20基程度総計47基とやや多く、面積は3㎡以上のもの1基を除けば、殆どが1㎡前後である。その分布は「上植木調査区」堀内部分で方形に配置され、第1・4類段階で盛んに構築される。なお、規模・形状ともに類似する12~14号土墳墓が同じ主軸方位を持って分布している点から、この内の相当量が土墳墓であり、一辺17m程の正方形を呈する整然とした墓域を形成していたと思われる。したがって、南に隣接して東西方向に走向する溝は、直角に曲がって7号溝と同一の区画溝を形成し、北側の墓域を画していたものと言える。

長方形・隅丸長方形のものは、1・4区で26基とやや多く、1区では南堀内部分に集中し第3類が殆どである。また、4区土坑の大半がこの形状である。深さは30cm以上のものも半数近くあるが、分布からその機能を明確にすることはできない。「上植木調査区」では堀内・堀外部分ともに20基程度総計47基と、方形・正方形などと同様多く分布している。特に堀内部分は、土墳墓と規模・形状ともに同等であり、土墳墓も少なからず含まれているものと見られる。なお、この形状の土坑には、1区47・257号土坑や4区27号土坑のように規模が大きく堅穴建物跡

と考えられるもの、1区433号土坑のように掘立柱建物跡の内部施設であるものなど、多様な機能を持つものが混在している。

細長方形・隅丸細長方形のものは、1・4区で総数16基、「上植木調査区」で11基とあまり多くないが、総じて掘立柱建物跡周辺に分布する傾向を見ることができる。特に1区23号掘立柱建物跡と85号土坑や、4区1・4号掘立柱建物跡と22号土坑の位置関係に見られるとおり、両者は少し間隔を空けて配置される傾向を示している。面積は3㎡を超えるものが大半であるが、短軸は他の形状のものと同様、1mを大きく越えるものは少なく、長軸だけが長くなった結果として細長い形状となったことが取次される。これは一方で、長方形・隅丸長方形の中に同種の機能を持つものが混在する可能性を示す。1区南堀内部分では、掘立柱建物跡が配置されなくなった空間に遺地している傾向が見える。例えば、1号掘立柱建物跡消滅後、78号土坑が掘られていることが示すとおり、南堀内部分北東部に分布する75号土坑ほかの一群が空間を埋めている。こうして見ると、堀内・堀外部分ともに、掘立柱建物跡に沿うと見えた土坑が、建物と空き地(建物のない空間)の間に介在していることが読み取れ、むしろそうした空き地に属していると考えた方が、他の分布も併せて理解し易い。仮説として、そうした空き地は屋敷畝であり、土坑は芋類を貯えておく、いわゆる「芋穴」とする見方も成り立つ。

以上、土坑の分析を通じて得られた知見に、掘立柱建物跡の分析結果を加味して、時期区分の変遷を考えると、第4類は「上植木調査区」堀内部分で見たとおり第1類との連続性が認められる。また、第5類も、4区25号土坑が14~15世紀前半であることから、本遺構群でも古い段階に位置づけられ、4区西半から「上植木調査区」4区寄りに偏在する傾向は第1・4類に対比され、同種の遺構群であることが濃厚となる。したがって変遷としては、第1・4・5(順不明)→2→3類とするのが妥当と結論する。

第8表 下植木志町遺跡 形態別中世土坑 計測値分析表

| 方 形・正 方 形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | | |
|------------------------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|-----------|------|
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第3類 | 1 | 1.33 | 1.33 | | | | 1 | 6.75 | 6.75 |
| 1区 その他 | 1 | 1.10 | 1.10 | 1 | 0.95 | 0.95 | | | |
| 4区 第3類 | 1 | 1.00 | 1.00 | 1 | 0.77 | 0.77 | | | |
| 4区 第4類 | 2 | 1.02～1.30 | 1.16 | 2 | 0.76～0.83 | 0.80 | | | |
| 4区 第5類 | 1 | 1.42 | 1.42 | 1 | 1.42 | 1.42 | | | |
| 4区 その他 | 1 | 1.39 | 1.39 | 1 | 1.45 | 1.45 | | | |
| 計 | 7 | 1.00～1.42 | 1.22 | 6 | 0.76～1.45 | 1.03 | 1 | 6.75 | 6.75 |
| 方 形・正 方 形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第3類 | 1 | 1.17 | 1.17 | 1 | 1.27 | 1.27 | | | |
| 計 | 1 | 1.17 | 1.17 | 1 | 1.27 | 1.27 | | | |
| 隅 丸 方 形・隅 丸 正 方 形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第2類 | 1 | 1.18 | 1.18 | 1 | 0.85 | 0.85 | | | |
| 4区 第4類 | 1 | 1.18 | 1.18 | 1 | 0.90 | 0.90 | | | |
| 4区 第5類 | 1 | 1.45 | 1.45 | 1 | 1.13 | 1.13 | | | |
| 4区 その他 | 1 | 1.06 | 1.06 | 1 | 1.00 | 1.00 | | | |
| 計 | 4 | 1.06～1.45 | 1.22 | 4 | 0.85～1.13 | 0.97 | | | |
| 隅 丸 方 形・隅 丸 正 方 形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第1類 | 1 | 1.20 | 1.20 | 1 | 0.93 | 0.93 | | | |
| 1区 第3類 | 1 | 1.19 | 1.19 | 1 | 0.88 | 0.88 | | | |
| 1区 その他 | 1 | 1.33 | 1.33 | 1 | 0.75 | 0.75 | | | |
| 計 | 3 | 1.19～1.33 | 1.24 | 3 | 0.75～0.93 | 0.85 | | | |
| 不 整 方 形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 その他 | 1 | 1.49 | 1.49 | 1 | 1.80 | 1.80 | | | |
| 4区 その他 | 1 | 1.37 | 1.37 | 1 | 1.16 | 1.16 | | | |
| 計 | 2 | 1.37～1.49 | 1.43 | 2 | 1.16～1.80 | 1.48 | | | |
| 長 方 形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第1類 | 3 | 1.75～1.88 | 1.82 | 3 | 0.74～2.57 | 1.60 | | | |
| 1区 第3類 | 4 | 1.80～2.46 | 1.91 | 4 | 0.53～1.58 | 0.99 | | | |
| 4区 第1類 | 2 | 2.10～2.33 | 2.22 | | | | 2 | 3.13～4.47 | 3.80 |
| 4区 第4類 | 1 | 2.42 | 2.42 | 1 | 2.32 | 2.32 | | | |
| 計 | 10 | 1.80～2.46 | 2.00 | 8 | 0.53～2.57 | 1.39 | 2 | 3.13～4.47 | 3.80 |
| 長 方 形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | | |
| 主軸方位別 分 類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | | |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 |
| 1区 第2類 | 1 | 2.00 | 2.00 | | | | 1 | 3.92 | 3.92 |
| 1区 第3類 | 3 | 1.64～1.84 | 1.73 | 3 | 2.03～2.25 | 2.17 | | | |
| 4区 第5類 | 2 | 1.50～1.67 | 1.59 | 1 | 1.27 | 1.27 | 1 | 3.46 | 3.46 |
| 4区 その他 | 1 | 1.94 | 1.94 | 1 | 2.98 | 2.98 | | | |
| 計 | 7 | 1.50～2.00 | 1.76 | 5 | 1.27～2.98 | 2.15 | 2 | 3.46～3.92 | 3.69 |

第4章 検出された遺構と遺物

| 隅丸長方形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|------------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|------|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第1類 | 1 | 1.53 | 1.53 | 1 | 0.75 | 0.75 | | |
| 1区 第2類 | 1 | 1.53 | 1.53 | 1 | 1.65 | 1.65 | | |
| 1区 第3類 | 2 | 1.74～1.88 | 1.81 | 2 | 1.29～2.35 | 1.82 | | |
| 1区 第4類 | 1 | 2.40 | 2.40 | | | | 1 | 3.12 |
| 1区 その他 | 1 | 1.60 | 1.60 | 1 | 1.44 | 1.44 | | 3.12 |
| 計 | 6 | 1.53～2.40 | 1.78 | 5 | 0.75～2.35 | 1.50 | 1 | 3.12 |

| 隅丸長方形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | |
|------------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|------|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 1 | 1.65 | 1.65 | 1 | 2.38 | 2.38 | | |
| 1区 第4類 | 1 | 2.34 | 2.34 | | | | 1 | 3.65 |
| 計 | 2 | 1.65～2.34 | 2.00 | 1 | 2.38 | 2.38 | 1 | 3.65 |

| 不整隅丸長方形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|--------------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 1 | 1.67 | 1.67 | 1 | 1.77 | 1.77 | | |
| 計 | 1 | 1.67 | 1.67 | 1 | 1.77 | 1.77 | | |

| 細長方形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|-----------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|-----------|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 5 | 2.74～7.10 | 4.26 | | | | 5 | 4.28～6.16 |
| 1区 その他 | 1 | 3.11 | 3.11 | 1 | 2.80 | 2.80 | | 5.26 |
| 4区 第4類 | 1 | 3.35 | 3.35 | | | | 1 | 3.83 |
| 4区 その他 | 1 | 2.88 | 2.88 | | | | 1 | 3.12 |
| 計 | 8 | 2.74～7.10 | 3.83 | 1 | 2.80 | 2.80 | 7 | 3.12～6.16 |

| 細長方形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | |
|-----------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|-----------|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第1類 | 1 | 3.38 | 3.38 | | | | 1 | 5.37 |
| 1区 第2類 | 1 | 2.39 | 2.39 | | | | 1 | 3.44 |
| 1区 第3類 | 1 | 2.73 | 2.73 | 1 | 2.11 | 2.11 | | 3.44 |
| 4区 第5類 | 1 | 2.52 | 2.52 | | | | 1 | 3.05 |
| 計 | 4 | 2.39～3.38 | 2.76 | 1 | 2.11 | 2.11 | 3 | 3.05～5.37 |

| 隅丸細長方形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|-------------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第1類 | 1 | 3.52 | 3.52 | 1 | 1.35 | 1.35 | | |
| 1区 第3類 | 1 | 3.01 | 3.01 | 1 | 1.83 | 1.83 | | |
| 1区 その他 | 1 | 3.25 | 3.25 | 1 | 1.98 | 1.98 | | |
| 計 | 3 | 3.01～3.52 | 3.26 | 3 | 1.35～1.98 | 1.72 | | |

| 隅丸細長方形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | |
|-------------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|------|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 1 | 3.03 | 3.03 | | | | 1 | 3.34 |
| 計 | 1 | 3.03 | 3.03 | | | | 1 | 3.34 |

| 円形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|---------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 その他 | 2 | 1.01～1.03 | 1.02 | 2 | 1.20～1.69 | 1.45 | | |
| 計 | 2 | 1.01～1.03 | 1.02 | 2 | 1.20～1.69 | 1.45 | | |

| 円形 (深さ30cm以上) | | | | | | | | |
|---------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 4区 その他 | 1 | 1.00 | 1.00 | 1 | 0.42 | 0.42 | | |
| 計 | 1 | 1.00 | 1.00 | 1 | 0.42 | 0.42 | | |

| 楕円形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|----------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 2 | 1.44～1.60 | 1.52 | 2 | 0.61～0.71 | 0.66 | | |
| 1区 その他 | 3 | 1.34～1.45 | 1.38 | 3 | 0.61～0.86 | 0.73 | | |
| 計 | 5 | 1.34～1.60 | 1.44 | 5 | 0.61～0.88 | 0.70 | | |

| 不整楕円形 (深さ30cm未満) | | | | | | | | |
|------------------|--------|------------|------|---|-------|---|---|----|
| 主軸方位別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 1区 第3類 | 1 | 1.25 | 1.25 | 1 | 0.80 | 0.80 | | |
| 計 | 1 | 1.25 | 1.25 | 1 | 0.80 | 0.80 | | |

第9表 「上植木調査区」 形態別中世土坑 計測値分析表

| 方形・正方形 | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|----|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀内部分 | 11 | 1.00～1.44 | 1.24 | 11 | 0.27～2.25 | 1.22 | | |
| 堀外部分 | 12 | 1.05～1.42 | 1.23 | 12 | 0.42～1.55 | 0.77 | | |
| 堀外 4区寄 | 4 | 1.05～1.40 | 1.20 | 4 | 0.71～2.10 | 1.32 | | |
| 計 | 27 | 1.00～1.44 | 1.23 | 27 | 0.27～2.25 | 1.03 | | |

| 隅丸方形・隅丸正方形 | | | | | | | | |
|------------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀内部分 | 8 | 1.07～1.45 | 1.28 | 8 | 0.27～2.38 | 1.11 | | |
| 堀外部分 | 12 | 1.05～1.47 | 1.28 | 11 | 0.39～1.65 | 1.02 | 1 | 4.25 |
| 計 | 20 | 1.05～1.47 | 1.28 | 19 | 0.27～1.65 | 1.06 | 1 | 4.25 |

| 不整方形 | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-------|---|---|----|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀内部分 | 1 | 1.00 | 1.00 | 1 | 0.81 | 0.81 | | |
| 計 | 1 | 1.00 | 1.00 | 1 | 0.81 | 0.81 | | |

| 長方形 | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|-----------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀内部分 | 9 | 1.53～2.00 | 1.77 | 9 | 0.50～2.42 | 1.48 | | |
| 堀外部分 | 9 | 1.62～3.60 | 2.21 | 7 | 0.72～2.73 | 1.89 | 2 | 3.19～3.60 |
| 堀外 4区寄 | 1 | 2.16 | 2.16 | 1 | 1.95 | 1.95 | | |
| 計 | 19 | 1.53～3.60 | 2.00 | 17 | 0.50～2.73 | 1.88 | 2 | 3.19～3.60 |

| 不整長方形 | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-------|---|---|----|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀外部分 | 1 | 1.87 | 1.87 | 1 | 1.05 | 1.05 | | |
| 計 | 1 | 1.87 | 1.87 | 1 | 1.05 | 1.05 | | |

| 隅丸長方形 | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|---|---|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | 平均 |
| | | 最小～最大 | 平均 | 数 | 最小～最大 | 平均 | 数 | |
| 堀内部分 | 13 | 1.50～2.27 | 1.79 | 12 | 0.32～2.65 | 1.08 | 1 | 5.12 |
| 堀外部分 | 11 | 1.50～2.44 | 1.97 | 11 | 0.40～2.82 | 1.57 | | |
| 堀外 4区寄 | 3 | 1.58～1.82 | 1.71 | 3 | 0.57～1.32 | 0.96 | | |
| 計 | 27 | 1.50～2.44 | 1.84 | 26 | 0.32～2.82 | 1.27 | 1 | 5.12 |

第4章 検出された遺構と遺物

| 細長方形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-------|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀内部分 | 1 | 2.52 | 2.52 | 1 | 2.78 | 2.78 | | | |
| 堀外部分 | 3 | 2.88~3.16 | 2.99 | 2 | 2.30~2.90 | 2.60 | 1 | 4.14 | 4.14 |
| 計 | 4 | 2.52~3.16 | 2.87 | 3 | 2.30~2.90 | 2.66 | 1 | 4.14 | 4.14 |

| 隅丸細長方形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-----------|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀内部分 | 2 | 3.69~3.71 | 3.70 | | | | 2 | 5.34~6.24 | 5.79 |
| 堀外部分 | 5 | 2.50~3.29 | 2.82 | 2 | 1.40~1.60 | 1.50 | 3 | 3.60~3.91 | 3.71 |
| 計 | 7 | 2.50~3.71 | 3.07 | 2 | 1.40~1.60 | 1.50 | 5 | 3.60~6.24 | 5.14 |

| 円形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-----------|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀外部分 | 8 | 1.00~1.19 | 1.09 | 5 | 0.56~2.48 | 1.23 | 3 | 4.62~8.06 | 6.88 |
| 堀外 4区寄 | 1 | 1.12 | 1.12 | 1 | 0.81 | 0.81 | | | |
| 計 | 9 | 1.00~1.19 | 1.09 | 6 | 0.56~2.48 | 1.16 | 3 | 4.62~8.06 | 6.88 |

| 楕円形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-------|----|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀外部分 | 5 | 1.31~1.47 | 1.39 | 5 | 0.48~1.33 | 0.86 | | | |
| 計 | 5 | 1.31~1.47 | 1.39 | 5 | 0.48~1.33 | 0.86 | | | |

| 不整楕円形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-------|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀外部分 | 4 | 1.38~1.79 | 1.54 | 3 | 1.62~2.60 | 1.99 | 1 | 7.92 | 7.92 |
| 計 | 4 | 1.38~1.79 | 1.54 | 3 | 1.62~2.60 | 1.99 | 1 | 7.92 | 7.92 |

| 不整形 | | | | | | | | | |
|-----------|--------|------------|------|---|-----------|------|---|-----------|------|
| 区画別 分類 | 総 数 | 比率 [長径÷短径] | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 未満) | | | 面積 [長径×短径] m ² (3.00m ² 以上) | | |
| | | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 | 数 | 最小-最大 | 平均 |
| 堀内部分 | 1 | 1.38 | 1.38 | | | | 1 | 9.36 | 9.36 |
| 堀外部分 | 6 | 1.09~2.82 | 1.63 | 4 | 0.63~1.50 | 1.03 | 2 | 3.41~4.93 | 4.17 |
| 計 | 7 | 1.09~2.82 | 1.59 | 4 | 0.63~1.50 | 1.03 | 3 | 3.41~9.36 | 5.90 |

(4) 土墳墓・火葬跡

ア. 分布

土墳墓の分布は、「上植木調査区」でその特徴が捉えられており、以下のとおり報告がなされている。「墓域は、発掘区南隅と北西の二つに分けられ、明銭を有する5基は、全て南隅に位置しており、北西の墓域のほうが造墓終了時期が早かったと思われる。また、明銭を出土した5基は、南隅の墓域中でも北寄りに集中する傾向が認められ、南から北に墓域を拡大していったものと考えられる。また、その造墓終了時期は、1号土墳墓の年代から、16世紀代と考えられる。「南方の土墳墓群一帯は、近世には11・12号井戸を中心とする屋敷地に変化したと考えられる」とされる。

1区土墳墓のうち、1号土墳墓は南堀内部分に所在し掘立柱建物跡群との新旧関係は不明だが、位置から見て時期差を与えたいところである。また、2号土墳墓は明銭を出土したことから、「上植木調査区」の検討に反して、北西の墓域が南隅の墓域と同様に存続していたことを示す結果となる。また、4区の土墳墓もともに明銭を出土していることから、墓域と掘立柱建物跡群との時期差は課題となるが、土墳墓相互の時期的な変遷を分布域別に捉えることは難しく、むしろ4区を除けば、掘立柱建物跡とはある程度離れた部分、つまり集落の縁辺部を選地して設定している点に注目したい。なお、(3)土坑で既に検討したとおり、「上植木調査区」堀内部分では、土墳墓に規模・形状ともに類似する土坑が多く分布しており、掘立柱建物跡或いは柱穴が極めて少ない状況を加味すれば、「上植木調査区」堀内部分が整然とした一つの墓域を構成している可能性が高く、周辺の館跡や掘立柱建物跡群といった居住域とは明確に区別する意識が働いていたものと見て過言ではない。

火葬跡の分布は、数量が少ないことからして特徴は捉えにくい。1区の2・4・6号火葬跡が居住域に対してその縁辺に位置することは注目される。また、ばらつきはあるが1区中央部と「上植木調査

区」の一群と、1区南東部の一群とに分けることも可能であるが、その所在理由までは明らかにできない。

ところで、遺構自体の直接の新旧関係が明確でないため、本遺跡検出の館跡及び掘立柱建物跡群との関係が不明のままとなってしまいがちだが、出土遺物から建物群の出現は14世紀後半には確実である一方、土墳墓に明銭が含まれていることから、両者は個別の新旧関係は別として、総体としては同時存在していた可能性が高い。この点で、1号堀の1号入口遺構部分の底面で、完形に近いものを含む2個体分の板碑が出土していることは重要で、少なくとも1号堀が廃棄される時点で、周辺に板碑を建立した墓地施設が存在していたことを示唆しており傍証となる。1区南堀内部分に所在する1号土墳墓・1号火葬跡は、第3類C群段階では2号溝を介して建物群とは別の空き地となっており、畠地の一面に墓地を配置したという仮説も成り立つのではないだろうか。

イ. 規模・形状

本遺跡で検出された土墳墓(1・4区)の規模は、長径100~132cm、平均113cmで、短径67~112cm、平均86cmで、深さ10~21cm、平均16cmである。また、火葬跡(1・3区)の規模は、長径90~119cm、平均108cmで、短径66~87cm、平均77cmで、深さ9~27cm、平均14cmである。両者の規模は大差なく、その違いは、形状の違いと、土墳墓は銅銭を伴うこと、火葬跡は土器などの遺物はないが、焼骨を含み壁面が被熱して炭化材・炭化物を多く含むことによる。また、「上植木調査区」では、土墳墓の規模は長径73~126cm、平均98cmで、短径51~92cm、平均66cmで、深さ11~41cm、平均26cmで、火葬跡の規模は、長径116cm短径66cm深さ38cmであり、同様な規模で大差ないことが解る。

形状は、本遺跡・「上植木調査区」とともに土墳墓は隅丸方形・長方形で、火葬跡では張り出しを持つ隅丸方形4基(うち「上植木調査区」1基)と、円形が3基あり、時期差も想定されるところである。

(5) 1号堀

1号堀の詳細は前述したので省略することとし、ここでは埋没時期について若干考える。1号堀の埋土は上下2層に分層でき、上層は掘り直し成いは人為埋填を示すと考え、その出土遺物について構成を比較したところ、前述のとおり遺物の集中する地点があることや、上層でも近世以降の出土遺物が極めて少ないことが判明した。そこで、後者が意味するものとして、土墨などの削平を伴った短期的な人為埋填を想定した。ところが、1号堀と同一遺構である「上植木調査区」1号溝では近世後半の遺物が出土しており、近世の遺構として報告がなされている。ただし、その報告は埋土を上下に分層して出土遺物を検討したものでないことから、そのまま本遺跡との比較資料にはなりえず、埋没時期について矛盾する資料としてのみ尊重されよう。

しかし、以上を知った上で敢えて大胆な仮説を述べたい。文献史料では、鯉沼の構築は慶長18年(1613)とされ、大井戸から導水したことが知られる。したがって、3区41号溝がその導水路に相当するものと既に考えたところであるが、同じく3区55号溝は41号溝から南へ分流して数多の溝へと分岐し、それらの幾つかが土地改良以前の地割り線や用水路に一致することが確認されている。つまり、1区は鯉沼構築当時既に集落でなかった可能性が高いが、その構築時に一気に削平されて3区とともに水田化されることになったと考える。この事件を象徴する地名として、「老町田」の名前が付されたものではないだろうか。

(6) 井戸跡

本遺跡検出の井戸跡について、最も突出した特徴として人為埋填後の地業がある。井戸跡は不明なものとは別として、半数は深さ1m近くまで人為埋填された後、ゴミ穴などに利用された可能性もあるが自然埋没したと思われる一方、残る1・2・4・5・11号井戸跡は上面近くまで完全に人為埋填した後、上面を灰～黄褐色粘土・砂で締め固めている(11号

井戸跡のみ黒～暗褐色土)。なお、この事例は「上植木調査区」の10号井戸跡でも報告されている。この埋填行為の意図するものは、すなわち次の土地利用に先立つ地業である可能性が高く、最も明確な事例が2号井戸跡の場合である。2号井戸跡は埋填された後に上面に221号土坑が構築されるが、平坦にするために2度粘土を充填したことが認められる。しかも、221号土坑は第1類A群に属しており、2号井戸跡も出土遺物(在地土器鍋)から14世紀後半に比定されることから、館跡の出現期に最も近い時期と考えられる。

井戸跡の深さは、極端に浅い深さ1m前後のものを除けば、大体深さ2.5～3mである。1区の1～5号井戸跡では、12月末の鯉沼の水抜き時に出水量を計測した。方法は現場始業時に井戸水を水中ポンプで全て汲み上げ、翌朝水深を測るものとし、4日間連続で行なった。結果として、1・4号井戸跡は60cm前後、2・3・5号井戸跡は115cm前後と、毎日例外なく二分された。この数値から中世を考えるのは無理があるが、概して出水量は多いと言える。なお、北方の三和工業団地遺跡(伊勢崎市教委調査)では深さ5m以上の井戸跡が調査されており、大井戸などの湧水点の等高線地域を境として、南北で井戸の設置条件が、かなり違うことが推測できる。

2. 遺物

(1) 在地土器

ア. カワラケ

カワラケの出土量は少なく、覆土も含めて総数21点にすぎない。このうち、1/2以上残存し遺構に伴うもの16点は全て掲載したが、形態は以下のとおり5分類できる。

I類 小型で底径が大きく厚いもの。

a 口縁部はやや外反するもの。

b 直線的なもの。

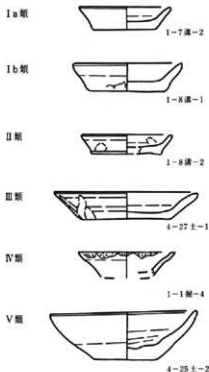
II類 小型で器高が低く、底径が大きいもの。

III類 底径が大きく、口縁部は直線的なもの。

IV類 小型で底径が小さく、口縁部は強く外反するもの。

V類 底径が小さく器厚は厚く、口縁部は内湾するもの。

カワラケは地域色の強い遺物であり、形状の特徴自体に時期を与えるまでには至っていない現状で、口径・底径・器高の各比率が重要な指標となっている。各分類全ての年代比定を行うことは難しいが、III類は器高が低くやや外反することから15世紀後半



第162図 在地土器カワラケ形態分類図

に、V類は器高がやや深いことから14～15世紀前半に比定される。

第10表 中世在地土器 カワラケ 遺物観察表

| 番号 | 出土位置 遺存状態 | 法量 (cm) | ①胎土 ②焼成 ③色調 | 形 態 | 成・整形技法の特徴及び備考 |
|-------------|------------------------|-------------------|----------------------|------|---------------------------------|
| I区29号掘立柱建物跡 | | | | | |
| 1 | P7 口縁部～体 部1/6 | □(11.4) 残存高2.9 | ①赤②酸化焰普通 ③浅黄橙 | | ロクロ成形。 |
| I区211号土坑 | | | | | |
| 1 | 1/3 口縁部 欠 | 底5.0残存高2.0 | ①赤②酸化焰普通 ③灰黄 | | ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。 |
| I区614号柱穴 | | | | | |
| 1 | 底部1/3 | 底(4.4)残存高1.3 | ①赤②酸化焰普通 ③浅黄 | | ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。 |
| I区1号堀 | | | | | |
| 1 | I区面上層 2/3 | □10.9底6.0高2.4 | ①黒色岩片含む② 酸化焰普通③浅黄 | III類 | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 2 | X区面上層 4/5 口唇部 欠 | 底5.0残存高2.2 | ①赤②酸化焰普通 ③浅黄 | | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 3 | B区面下層 底部 | 底5.0残存高1.2 | ①赤②酸化焰普通 ③浅黄橙 | | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り後推で。内面 底部推で。 |
| 4 | Y区面下層 口縁部～体 部1/5 | □(7.6)残存高1.8 | ①赤②酸化焰普通 ③橙 | IV類 | ロクロ成形。口縁部油漕付着。灯火皿。 |

第4章 検出された遺構と遺物

| | | | | | |
|---------|--------------|------------------------|--------------------|------|---------------------------------|
| 1区7号溝 | | | | | |
| 1 | 体部-底部 1/4 | 底(4.8)残存高1.8 | ①赤②酸化焙普通 ③明赤地 | | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 2 | 4/5 | 口7.2底5.6高1.8 | ①赤②酸化焙普通 ③にぶい黄地 | Ia類 | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 1区8号溝 | | | | | |
| 1 | 1/4 | 口(8.6)底(5.8) 残存高2.1 | ①赤②酸化焙普通 ③橙 | Ib類 | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 2 | 1/2 | 口(7.2)底(5.6) 高1.5 | ①赤②酸化焙普通 ③橙 | II類 | ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。 |
| 4区14号土坑 | | | | | |
| 1 | 体部-底部 2/5 | 底4.2 残存高1.3 | ①赤②酸化焙普通 ③灰地 | | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 4区25号土坑 | | | | | |
| 1 | 1/3 | 底(3.8)残存高2.0 | ①赤②酸化焙普通 ④残灰 | 分類外 | ロクロ成形。底部は回転糸切り未調整。 |
| 2 | 2/3 | 口11.4底5.1高3.7 | ①赤②酸化焙普通 ③灰白 | V類 | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。 |
| 4区27号土坑 | | | | | |
| 1 | 完形 | 口11.3底6.8高2.1 | ①赤②酸化焙普通 ③橙 | III類 | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。口縁部油煙付着。 |
| 4区1号井戸跡 | | | | | |
| 1 | 体部-底部 1/4 | 底4.6残存高1.6 | ①赤②酸化焙普通 ③にぶい黄地 | | ロクロ成形(右回転)。底部は回転糸切り未調整。板状圧痕あり。 |

イ. 鍋類

鍋類は本遺跡の中世遺物では一番出土量の多い遺物であるが、新旧関係を明確に示す出土状況にあるものは極めて少なく、最も古いと見られる遺構である2号井戸-1(I類)以外は多くが1号堀出土である。形態は以下のとおり6分類できる。

- I類 口縁部が短く、内側に一度後を持って折れるもの(未掲載1片)。
- II類 口唇部外側端部と内側端部がほぼ水平か内側端部がやや高くなるもの(未掲載8片)。
- III類 口唇部内側に水平方向の突起があるもの(未掲載2片)。
- IV類 口唇部外側がやや突き出すもの(未掲載5片)。
- V類 口唇部外側がやや突き出し、内側に水平方向の突起があるもの(未掲載2片)。
- VI類 口唇部外側が丸みを帯びて突出するもの(未掲載4片)。

I類は口縁部が短く器厚が厚く、丸底であることから14世紀後半に、II-V類は頸部の稜線が顕著と

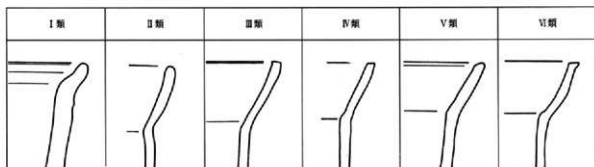
なることから15世紀後半-16世紀前半に、VII類は口唇部が丸みを帯びて突出する特徴から16世紀前半に比定される。

胎土で最も注目されるのが、海綿骨針と結晶片岩の混入であり、県内では藤岡方面のみに存在する点から明らかに畿内遺物である。一方、1-1堀-7・11は、破片でありながら未使用の可能性があり(大西氏ご教授による)、近辺に焼成窯の存在も想起されるのである。

ウ. その他

特に注目されるものとして、1-1堀-22と外-5の茶釜がある。これらは胎土などから別個体と見られるが、ともに外面に鈔が回らず、耳部周辺のみを鈔状に引き出している。なお、外-4は羽釜または茶釜の蓋であろうか。

鉢の出土量は少なく14世紀後半に比定されるが、その後を補完するものとして石鉢があると考えられる。



第163図 在土器器鍋・内耳鍋形態分類図

第11表 中世在土器 鍋・内耳鍋 遺物観察表

| 番号 | 器種 | 出土位置 遺存状態 | 法量 (cm) | 胎土 | | | 焼成 | 黒色 処理 | 色調 | 口縁部 形態 | 胴部 外面種 | 胴部 内面段 | 底形 | 器厚 | 成・整形技法の特徴 及び備考 |
|----------|-----|-----------------------------|---------------------|----------|----------|----------------|-----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----|----|-----------------------------|
| | | | | 海綿 骨針 | 結晶 片岩 | その他 | | | | | | | | | |
| 1区325号土坑 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 鍋 | 口縁部片 | □(28.0) 残存高(5.2) | × | × | 並 | 還元焰 普通 | 内外 | 黒褐 | Ⅳ | × | × | - | 並 | 内面 口唇部に使用により擦れる。 |
| 1区656号土坑 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 内耳鍋 | 口縁部一 体部片 | 残存高8.4 | × | × | 密 | 還元焰 普通 | × | 灰 | V | — | ○ | - | 薄 | 外面 内耳部に指頭圧痕あり。 |
| 1区1号堀 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | 鍋 | H区画下層 口縁部一 体部片 | 残存高5.2 | × | × | 並 | 還元焰 硬質 | × | 灰 | Ⅱ | ○ | ○ | - | 薄 | 未使用か。 |
| 8 | 内耳鍋 | Z区画下層 口縁部片 | 残存高8.3 | × | × | 並 | 還元焰 普通 | 外 | 灰 | Ⅱ | ○ | × | - | 薄 | 外面 内耳部に指頭圧痕あり。耳部は下方へ三角に広がる。 |
| 9 | 内耳鍋 | Z区画上層 口縁部一 体部片 | 残存高7.7 | × | × | 白色 岩片 含む | 還元焰 普通 | × | 灰 | Ⅱ | × | ○ | - | 薄 | 外面 内耳部に指頭圧痕あり。 |
| 10 | 内耳鍋 | E区画下層 口縁部片 | 残存高3.8 | × | × | 並 | 還元焰 普通 | × | 灰 | Ⅱ | — | — | - | 並 | |
| 11 | 鍋 | Y区画下層 口縁部一 体部片 | 残存高6.0 | × | × | 並 | 還元焰 硬質 | × | 黒 | Ⅳ | ○ | ○ | - | 薄 | 未使用か。 |
| 12 | 内耳鍋 | Z区画下層 口縁部片 | 残存高6.8 | × | × | 並 | 還元焰 普通 | 外 | 灰 | Ⅳ | × | — | - | 薄 | 外面 内耳部に指頭圧痕あり。 |
| 13 | 内耳鍋 | 下層・Z区 画下層 口縁部一 体部片 | 残存高8.6 | ○ | × | 並 | 還元焰 普通 | 外 | 灰 | Ⅵ | × | ○ | - | 薄 | 外面に塗付。耳部は短い。 |
| 14 | 内耳鍋 | E区画上層 口縁部一 体部片 | 残存高5.7 | ○ | × | 並 | 還元焰 普通 | 外 | 黄灰 | Ⅵ | × | ○ | - | 薄 | 外面 内耳部に指頭圧痕あり。 |
| 15 | 内耳鍋 | Z区画下層 口縁部一 体部片 | □(30.6) 残存高13.9 | ○ | ○ | 並 | 還元焰 普通 | 外 | 黄灰 | Ⅵ | × | ○ | - | 並 | |
| 16 | 鍋 | Y区画下層 口縁部一 体部1/5 | □(30.5) 残存高10.2 | × | × | 密 | 還元焰 普通 | 外 | 灰 | V | × | ○ | - | 並 | 内面 体部は斜め方向の撫で。 |
| 17 | 鍋 | Y区画下層 口縁部一 体部片 | □(28.4) 残存高9.9 | ○ | × | 並 | 還元焰 普通 | × | 灰 | V | × | × | - | 薄 | 内面 体部は斜め方向の撫で。 |
| 18 | 鍋 | H区画下層 口縁部一 体部2/5 | □(30.0) 残存高12.8 | × | × | 密 | 還元焰 軟質 | 外 | ぶい 黄褐 | Ⅵ | × | ○ | - | 並 | 内面 体部は斜め方向の撫で。使用により擦れる。 |

第4章 検出された遺構と遺物

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----|---------------|-------------------------------|---|---|----------------|-----------|----|----------|---|---|---|---|---|-------------------------------------|
| 19 | 銅 | X区画下層 底部片 | 底(16.6) 残存高1.7 | × | × | 並 | 酸化鉛 普通 | 外 | にぶい 濁 | — | — | — | 平 | 並 | 外面 底部周辺は平滑 に撫でる。 |
| 20 | 銅 | Y区画下層 底部片 | 底(22.0) 残存高2.9 | × | ○ | 並 | 還元鉛 普通 | 外 | 灰 | — | — | — | 平 | 並 | 外面 体部は横方向の 撫で。 |
| 21 | 銅 | Z区画下層 底部片 | 底(21.4) 残存高2.0 | × | × | 並 | 酸化鉛 普通 | × | にぶい 濁 | — | — | — | 平 | 並 | 外面 底部周辺は平滑 に撫でる。 |
| 1区2号溝 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 銅 | 口縁部片 | 残存高5.4 | × | × | 並 | 酸化鉛 普通 | 外 | オリ ブ黒 | Ⅵ | — | — | — | 並 | |
| 2 | 銅 | 口縁部片 | 口(29.0) 残存高6.3 | × | × | 並 | 酸化鉛 普通 | 外 | オリ ブ黒 | Ⅵ | × | ○ | — | 並 | |
| 3 | 銅 | 口縁部片 | 残存高3.6 | ○ | × | 並 | 還元鉛 普通 | × | 灰 | Ⅵ | — | — | — | 並 | |
| 1区7号溝 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 内耳銅 | 口縁部片 | 残存高5.7 | ○ | × | 並 | 酸化鉛 普通 | × | オリ ブ灰 | Ⅵ | — | — | — | 薄 | |
| 4 | 銅 | 底部片 | 底(22.6) 残存高1.6 | × | × | 並 | 酸化鉛 普通 | × | 暗灰 黄 | — | — | — | 平 | 並 | 外面 底部周辺は平滑 に撫でる。 |
| 1区2号井戸跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 内耳銅 | 口縁部一底 部片 | 口(30.2) 底(19.8) 残存高17.0 | ○ | × | 並 | 酸化鉛 軟質 | 内外 | オリ ブ灰 | I | × | × | 丸 | 厚 | 外面 体部に煤付着。 底部横方向の撫で。或 部端部は炭化。 |
| 1区5号井戸跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 銅 | 体部下位一 底部片 | 底(24.0) 残存高4.2 | × | ○ | 砂多 く含 む | 還元鉛 普通 | × | 濁 | — | — | — | 平 | 薄 | 外面 底部端部は使用 により磨れる。 |
| 1区7号井戸跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 内耳銅 | 口縁部一体 部1/3 | 口(30.0) 残存高14.0 | ○ | ○ | 砂多 く含 む | 還元鉛 普通 | 内外 | オリ ブ黒 | Ⅵ | × | ○ | — | 薄 | 外面 内耳部に指痕圧 痕。体部は斜め方向の 撫で。煤付着。 |
| 4区3号井戸跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 銅 | 口縁部一体 部片 | 残存高9.3 | ○ | × | 白色 岩片 含む | 還元鉛 普通 | × | 灰 | Ⅳ | ○ | ○ | — | 薄 | |
| 4区4号井戸跡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 銅 | 口縁部一底 部片 | 口(32.3) 底(23.5) 高(18.5) | ○ | ○ | 並 | 還元鉛 普通 | × | 灰 | Ⅳ | ○ | ○ | — | 薄 | 内外面 体部不定方向 の撫で。 |
| 2 | 内耳銅 | 口縁部一底 部1/3 | 口(33.6) 残存高12.1 | ○ | ○ | 並 | 還元鉛 普通 | × | 灰 | Ⅳ | ○ | ○ | — | 薄 | 外面 内耳部に指痕圧 痕。 |
| 遺構外遺物 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1 | 銅? | 3区55溝 口縁部片 | 残存高4.9 | × | × | 白色 岩片 含む | 還元鉛 軟質 | × | 灰 | — | × | × | — | 厚 | |

第12表 中世在地土器 鉢・茶釜・火鉢 遺物観察表

| 番号 | 器 種 | 出土位置 遺存状態 | 法 量 (cm) | ①粘土 ②焼成 ③色調 | 成・整形技法の特徴及び備考 |
|----------|-----|---------------|--------------|------------------------|--------------------|
| 1区90号土坑 | | | | | |
| 1 | 鉢 | 底部 | 残存高2.1 | ①並②還元鉛普通 ③にぶい濁 | 内面 底部は中央部を残し良く磨れる。 |
| 1区252号柱穴 | | | | | |
| 1 | 香炉 | 口縁部一体 部片 | 口(9.0)残存高3.0 | ①並②還元鉛普通 ③明赤灰 | 外面 菊花文。 |
| 1区1号堀 | | | | | |
| 5 | 鉢 | Y区画上層 口縁部片 | 残存高4.2 | ①並②還元鉛普通 ③灰 | 口クロ成形。 |
| 6 | 鉢 | E区画上層 口縁部片 | 残存高8.0 | ①結晶片岩含む②還元鉛 普通③にぶい濁 | |

| | | | | | |
|---------|------|------------------|-------------------|------------------------|----------------------------------|
| 22 | 茶釜 | B区面上層 体部片 | 残存高7.7 | ①赤②酸化焰普通 ③黒 | 外面 黒色処理。 |
| 1区5号井戸跡 | | | | | |
| 1 | 鉢 | 体部下位～ 底部片 | 残存高3.6 | ①赤②還元焰普通 ③灰 | 底部は一部円球状に押し上げる。内面 平滑に仕上げ。 |
| 2 | 香炉? | 口縁部～底 部片 | 残存高4.9 | ①赤②還元焰鉄質 ③黒 | 外面 器面は荒れており外面の文様の有無は不明。体部横方向の撫で。 |
| 4区25号土坑 | | | | | |
| 3 | 鉢? | 口縁部片 | 残存高3.4 | ①赤②酸化焰普通 ③黒褐 | 外面 口唇部は使用によりよく擦れる。 |
| 遺構外出土遺物 | | | | | |
| 2 | 鉢 | 4区78～8 口縁部片 | 口(27.0) 残存高4.2 | ①赤②還元焰普通 ③灰 | ロクロ成形。内面体部は斜め方向の撫で。 |
| 3 | 鉢 | 2区 体部～底部 片 | 底(18.0) 残存高6.4 | ①硝。結晶片を含む。 ②還元焰普通③灰 | 外面 体部平滑に撫でる。底部は使用により擦れる。 |
| 4 | 羽釜の蓋 | 3区62H-7 破片 | 径(12.0)高1.3 | ①赤②還元焰普通 ③灰 | 外面 削りにより端部は角を作る。内面 突出部は使用により擦れる。 |
| 5 | 茶釜 | 1区74 口縁部片 | 残存高5.6 | ①赤②還元焰普通 ③灰 | 耳部の貼り付けは穿孔する。内面 撫で。 |

(2) 国産施釉陶器

ア. 古瀬戸

破片資料が多く年代比定できるものは少ないが、15世紀前半に比定される卸目付大皿などがあり、時期としては殆どがその辺りであろうか。器種は皿類が多いが、碗や四耳壺、花瓶などやや器種に富んでいる。

イ. 焼締陶器

1区10号井戸跡から13世紀半ばに比定される常滑系壺(赤羽1995)が出土しているが、概して焼締陶器の出土量は少なく、他のものは器厚が厚く時代は下がる。

(3) 中国陶磁器

青磁では碗が多く、皿もわずか含まれる。年代は13～14世紀のものが殆どである。白磁皿は年代不明だが、染付皿は15世紀後半～16世紀前半と下がる。

(4) 石鉢・石臼・茶臼

石鉢は総数5個で、材質は全て粗粒輝石安山岩である。口径は推定径で24.1～30.0cmと少しばらつきがあり、用途を示す特徴として内側口縁部近くまで

よく擦られていることが観察される。

石臼(粉挽き臼)上臼は片減りが著しく、高さは9.0～12.7cmで、径は24.0～32.6cmと数値はややばらつく。下臼も片減りが著しいことから、高さは6.6～12.0cmとばらつくが、径は22cmと小さい1点を除けば、27.8～32.4cmと近似している。石臼はよく使い込まれており片減りが著しい一方、欠損後も砥石として転用されている例が少なからず存在する。

茶上臼は高さ12.2cm、径20.2cmで、挽き手穴を側部中央に設けて飾りは円形である。茶下臼は受け皿部のみが残存しており、径31.0cmである。

第5節 近世以降

第1項 溝

3区溝群 (付図4 PL35-1~6)

本遺構は2方向の走向方向を基軸として構成される。一つは微高地と低地の境界部分を東西に走向する41号溝と、それに前出して並走する48号溝のほか重複が著しい溝群である。もう一つは41号溝の東壁から11.2mで南へ分岐する55号溝と、それに続く1・2号溝である。また、41・48号溝から分岐して南走するものとして36・39号溝があり、南半部では1・2号溝から分岐する62・64・86・95・98号溝がある。以上の溝は土地改良前までは水田に伴う水路として機能していたものであり、殆どが近世まで遡る可能性が高い。特に41号溝を中心とする東西方向の溝群は、大井戸から雙沼へ導水する水路の主流に比定できる。また、1・2・55号溝出土遺物は昭和期までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたもので、土地改良前には道路側溝として、水田区画の基本となる溝であった。

1号溝 (PL35-1) 直線状で南西流する。55号溝の延長線上にあり、同一水路の可能性高い。長さは54.60m、最大幅1.40m、深さは断面観察部で22cmである。走向方位はN-36°-E。断面はU字状を呈し、底面はやや凸凹する。流水痕跡あり。西側に50cm程の間隔をとって2号溝が存しており、この間に硬化面はないが道路面が想定できる。道路側溝と水田の用水路を兼ねていたものと見られる。出土遺物は昭和期までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

2号溝 直線状で南西流する。55号溝の延長線上にあり、同一水路の可能性高い。長さは54.70m、最大幅1.00m、深さは断面観察部で20cmである。走向方位はN-32°-E。断面は皿状を呈し、底面はやや凸凹する。流水痕跡あり。東側に50cm程の間隔をとって1号溝が存しており、この間に硬化面はないが道路面が想定できる。道路側溝と水田の用水路を兼ねていたものと見られる。出土遺物は近現代ま

でのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

41号溝 (PL35-2~4) 調査区の北側を東西に走向し、西側3分の1程で南へ湾曲して南西流し、弓なりのL字状を呈する。長さは63.50m、最大幅2.70m、深さは断面観察部で35cmである。走向方位はN-87°-W~N-41°-E。断面はU字状を呈し、底面はやや丸みを持つ。流水痕跡あり。C断面では北側70cm程が最終部分であり、杭を南側に打ってそれに合わせて版築状に側壁を作ったものと見られる。また打ち込まれた杭の分布によって数度に及ぶ補修の痕跡を読みとることができ。本溝の南側に走向する48号溝は前出し規模も類似するが、人為埋填した後盛土されて高まりとなり、堤へと変化する。こうした点で相当量の流量が想定できる。出土遺物は近現代までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

55号溝 直線状で南西流する。北端は41号溝から南へ分岐する。南半部では2条以上の溝で構成され、そのまま1・2号溝に連続する。長さは49.00m、最大幅2.10m、深さは断面観察部で44cmである。走向方位はN-22°-E。断面はU字状を呈し、底面は丸みを持つ。流水痕跡あり。杭も随所に打たれており、41号溝と同様に相当量の流量が想定できる。出土遺物は近現代までのものがあり、土地改良前まで継続して機能していたものと認める。

4区2号溝 (PL35-7)

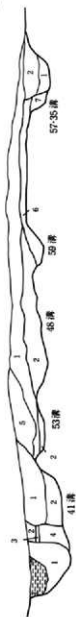
位置 中央部やや東寄りを南北に縦走する。

重複 14号溝より新しい。

形態 直線に近いが西側にやや湾曲する。規模は1.70×0.67m、深さは断面観察部で55cmである。走向方位はN-4°-W程である。断面はU字状。埋土中位にやや厚く砂質土が堆積しており、流水の存在を認める。

出土遺物 出土遺物は近現代までのものがあり、土

A. 83.00 m



- 1 黒灰色砂質土
- 2 灰黄褐色砂質土
- 3 黄褐色粘土 固くしまる。
- 4 にこい黄褐色土
- 5 淡黄褐色シルト
- 6 褐色砂質土
- 7 黒灰色シルト

B. 83.10 m



- 1 黒灰色粘土質シルトブロック
- 2 黒灰色砂質土 As-B10%含む。
- 3 黒灰色粘質土

C. 82.80 m



- 1 黒灰色砂質土
- 2 黄灰色砂質土

D. 83.00 m



- 1 灰黄褐色砂質土
- 2 黒灰色砂質土
- 3 黄灰色粘質土
- 4 黒褐色粘質土
- 5 黒褐色砂

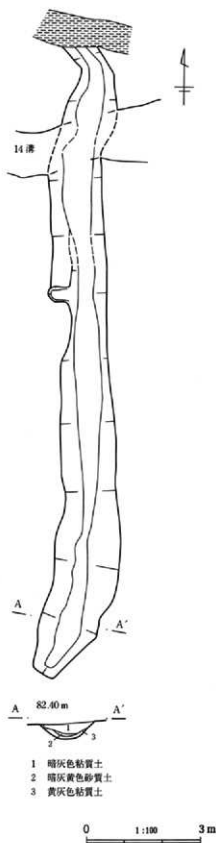
H. 82.40 m



- 1 暗褐色土 As-B 1%含む。底分の凝集状あり。
- 2 暗褐色砂質土 As-B 5%含む。



第164図 3区溝群土層断面



第165図 4区2号溝

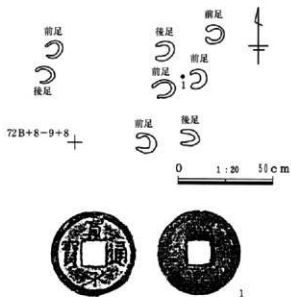
地改良前まで継続して機能していたものと認める。
備考 耕地図では農道となっており、側溝であった可能性が高い。

第2項 馬蹄痕

3区馬蹄痕 (PL 35-8, 56)

位置 3区の中央部で、62B-9グリッドに位置する。1・2号溝の上端部東側に隣接する。

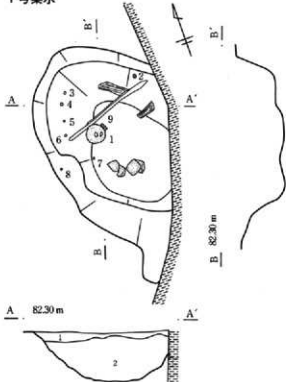
形態 前足が5か所、後ろ足が3か所で、全て東方向を前にする。検出面は黒褐色粘質土 (IV) 上面であり、灰色砂に被覆される。出土遺物は寛永通寶 (1) 1枚のみである。周辺の溝と同様に、近世以降の水田に伴っていたものとして偶然依存したものと考えられる。



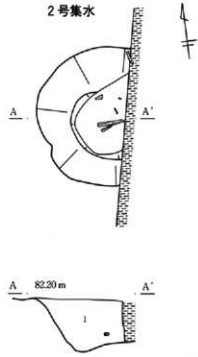
第166図 3区馬蹄痕・出土遺物

第3項 集水遺構

1号集水

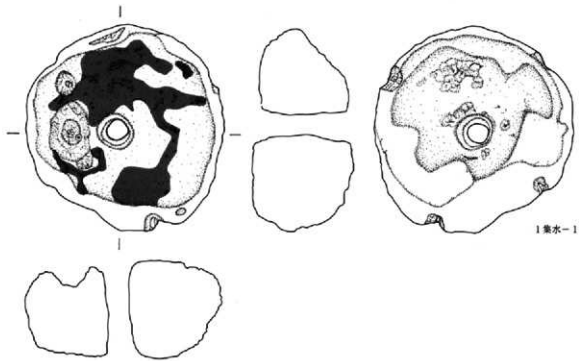
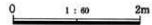


2号集水



- 1 黒褐色土 径1m大の白色軽石5%含む。
- 2 黒褐色土

1 黒褐色砂質土 植物の根茎と貝殻を10%含む。



1集水-1

第167図 4区1・2号集水遺構・出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

4区1号集水遺構 (PL36-1・2、56)

位置 調査区の西端で、72B-9グリッドに位置する。低湿地に存する。重複 なし

形態 上下面とも不整形。壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は上面で径270×250cm、下面で径143×135cm、深さは79cmである。埋土は砂質だが腐植に富んでおり、悪臭が著しかった。詳細は不明だが、導水して溜め枿或いは沈殿槽に類似した性格を持っていた可能性がある。

出土遺物 掲載遺物である不明石器(1)のほか、壁の中心に外形に沿って円形に杭が打ち込まれていた。杭は8本残存しており、最大で長さ110cmを測るが、元来外形に沿って全周していたものと想定される。

第4項 まとめ

近世以降の遺構とした41号溝或いはそれに前出する48・53号溝は、近世まで遡る可能性が高いものであり、規模から見ても慶長18年(1613)伊勢崎藩主種垣長茂が構築させた鯉沼へ大井戸から導水した用水路である可能性が極めて濃厚である。その形状を見ると、48号溝から北へ向かって掘り直してゆく際、徐々に底面の標高が下がってゆく傾向が認められ、少しずつでも流水量を増やしてゆく努力の跡を読みとることができる。なお、41号溝から分水して南流する55号溝は更に数本の溝へと分岐して用水系を形成し、それらの多くは土地改良前の用水路と一致することから、近世初期に大井戸から導水の過程で、その流域ではその都度分水が行われ、新田開発が適宜なされたものと判断する。3区馬蹄痕はわずかではあるが、江戸期の水田耕作の物的証拠と成りうるものと考えられる。

4区2号集水遺構 (PL36-3)

位置 調査区の北端で、72B-7グリッドに位置する。低湿地に存する。重複 なし

形態 ほぼ半分が攪乱によって壊されるが、上下面ともにほぼ円形と考える。壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は上面で径218×174cm以上、下面で径98×70cm以上、深さは84cmである。埋土は砂質だが腐植に富んでおり、悪臭が著しかった。詳細は不明だが、導水して溜め枿或いは沈殿槽に類似した性格を持っていた可能性がある。

出土遺物 底面近くに板片2片が出土したが、杭は出土しなかった。

さて、「上植木調査区」の報告段階では近世の遺構として、1号溝、9・11・12号井戸跡が認知され、近世の屋敷地の存在が想定されている。こうした中で、本書が導いた結論とは齟齬を来す結果となった。しかし、本書で扱った居住域では近世遺物は埋土を含めて極めて少なく、対称的に2・3区の近世以降の溝群では近現代遺物に混じって多く見られたのである。したがって、「上植木調査区」の根拠とする溝や井戸跡が遺構の性格上、後世まで存続しやすいこと、特に井戸跡は灌漑用として転用されたり、古井戸として放置される傾向があることを考えれば、近世屋敷地の存在ははや疑問を感じる。1区1号堀が近世の早い段階で一気に埋填されていることなどを考慮しても、新田開発による本地域の水田化は鯉沼の構築とはほぼ同じ時期になされたものと結論したい。

第6節 時期不明及び遺構外遺物

第1項 土坑・土坑群・粘土採掘坑

1区1号粘土採掘坑 (PL 36-4)

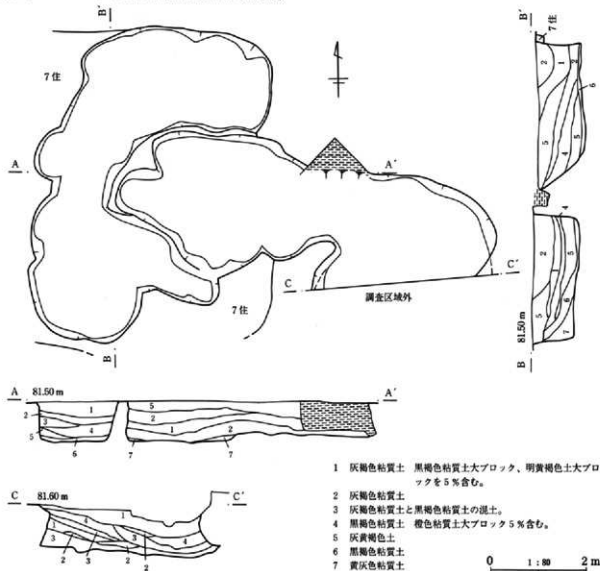
位置 調査区南端で、74D-5グリッドに位置する。東側に1m弱の間隔をとって2号粘土採掘坑と隣接する。

重複 7号住居跡より新しく、1147・1148号土坑より古い。4号火葬跡とは新旧関係不明。本遺構の年代は、大枠で古墳時代前期以降近世以前である。

形態 東西9.96m、南北6.48mの範囲に4基以上の土坑が重複し、東南部は更に調査区域外に延びる。壁はオーバーハングしており、黒褐色粘土(暗色帯)

を彫り込んだものと見られる。深さは最大で112cmである。底面はほぼ平坦。埋土は黒褐色土と黄褐色土が互層となる部分が多く見られ、壁や天井部を落としながら横穴状に掘り進めた結果と解される。ただし、天井部として地山が存在していたことを示す崩落土は埋土中になく、随時天井部を落として開口状態にしていたものと想像する。

出土遺物 なし



第168図 1区1号粘土採掘坑

第4章 検出された遺構と遺物

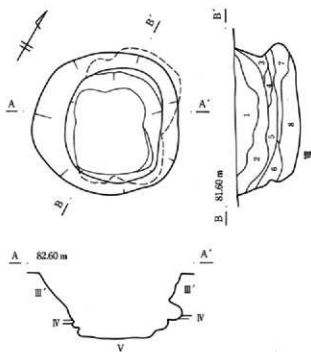
1区2号粘土探掘坑 (PL.36-5)

位置 調査区南端で、74D-4・5グリッドに位置する。西側に1m弱の間隔をとって1号粘土探掘坑と隣接する。

重複 なし

形態 上・下面ともに隅丸方形。壁は中位部分が大きく掘り込まれてオーバーハングする。底面は平坦。規模は径2.28×2.23m、深さ1.03mである。オーバーハング部分は黒褐色粘土(暗色帯)を中心に掘り込んでいる。埋土は中位に灰白色粘質土が入り、壁部分を崩して人為埋填した可能性が高い。それより上層は自然埋没と見られる。出土遺物 なし

2号粘土探掘坑



- 1 黒褐色砂質土 白色軽石5%含む。
- 2 黒褐色粘質土 灰褐色土大ブロック10%含む。
- 3 黒褐色粘質土 灰褐色土大ブロック40%含む。
- 4 黒褐色粘質土 灰褐色土大ブロック20%含む。
- 5 灰白色粘質土 よくしまる。
- 6 灰白色粘質土 しまらない。
- 7 黒褐色粘質土 灰色土大ブロック20%含む。
- 8 黒褐色粘質土 灰褐色土大ブロック40%含む。

1区1147・1148号土坑 (PL.36-6)

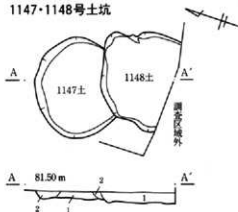
1147号土坑 後出の1148号土坑に壊されるが円形か。壁は浅いが垂直か。底面は平坦。規模は径98×(72)cm、深さ9cmである。1148号土坑より古いが、同様に桶を埋設したものと考える。出土遺物は平安時代以前の遺物で混入と見られる。

1148号土坑 南側一部は調査区域外となるが長円形。壁は浅いが垂直か。底面はほぼ平坦。規模は径96×(86)cm、深さ11cmである。1147号土坑より新しい。隙間に一部灰褐色粘土を巡らせた部分があり、桶を埋設したものと見られる。遺物は出土しなかった。

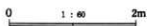
3区1号土坑群 (PL.36-7)

62E・F-7・8グリッドにかけて南北10m東西13mに分布する数十基の不整形形を呈する土坑の集まりである。また、同様な土坑群の分布は72E・F-1グリッドに見られるほか、3区の北半分に分布する不整形形の土坑(後掲7・8号土坑も含む)の内の多くも同類と思われる。遺構の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は全体として非常に凸凹するが、

1147・1148号土坑



- 1 黒色砂質土 白色軽石細粒20%、黄色土粒1%含む。
- 2 灰褐色粘質土 黒色土大ブロック10%含む。



第169図 1区2号粘土探掘坑・1147・1148号土坑

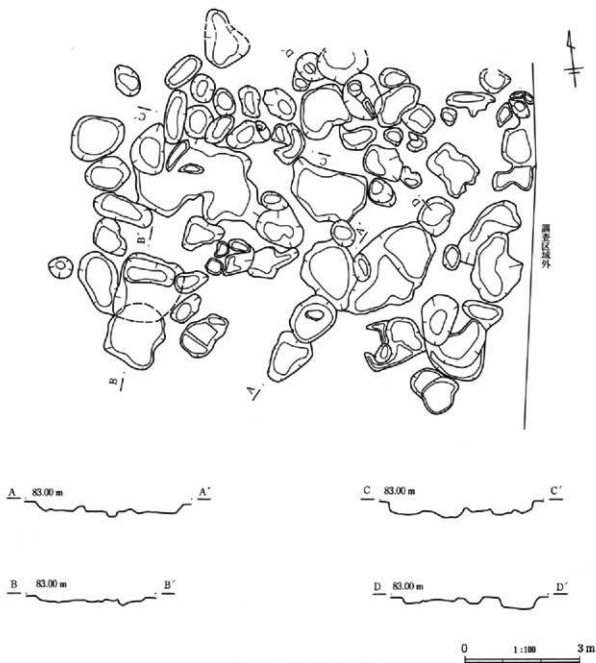
個々の土坑としては丸みを持ち、深さは確認面から40~50cm程度である。なお、本遺構は調査当初は土坑群として把握できず適切な土層観察が行えなかったため、各土坑の新旧関係は不明となってしまった。完掘状況はいわゆる粘土採掘坑に類似する。遺物は遺構量に比して極めて少なく平安時代以前の遺物が大部分であり、中世・近世の遺物が1点ずつ出土するが重複による混入の可能性があり、時期は特定できない。

3区7号土坑

円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径186×158cm、深さ31cmである。主軸方位N-16°-E。遺物は出土しなかった。

3区8号土坑 (PL36-8)

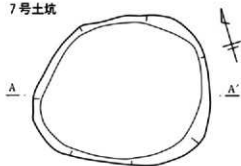
整った円形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径151×142cm、深さ79cmである。主軸方位N-16°-E。遺物は出土しなかった。



第170図 3区1号土坑群

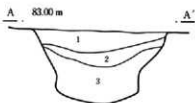
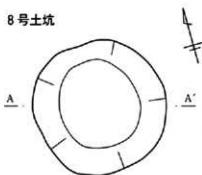
第4章 検出された遺構と遺物

7号土坑

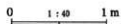


- 1 にぶい黄褐色砂質土 黄褐色粘土小ブロック10%含む。
- 2 褐灰色砂質土
- 3 灰黄褐色シルトと褐灰色砂質土の混土。
- 4 にぶい黄褐色シルト

8号土坑



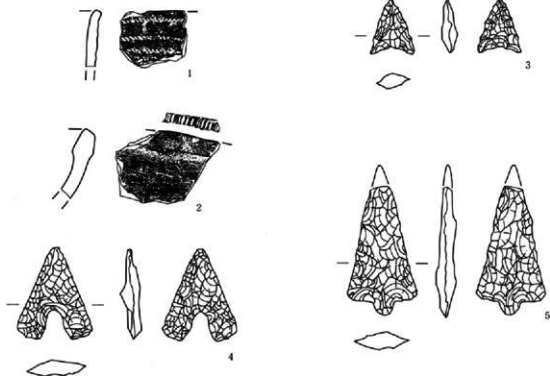
- 1 暗灰色砂質土
- 2 黄灰色粘質土と灰白色シルトの混土。
- 3 黒褐色粘質土



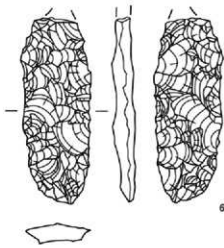
第171図 3区7・8号土坑

第2項 遺構外遺物

1. 縄文時代

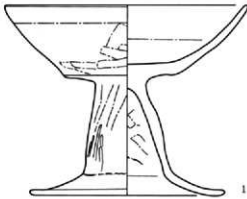


第172図 遺構外出土 縄文時代遺物(1)



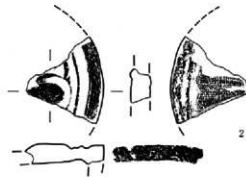
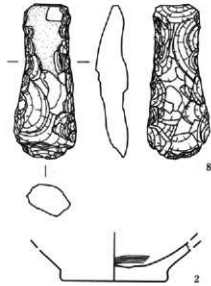
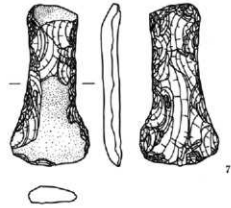
第173図 遺構外出土 縄文時代遺物 (2)

2. 古墳時代

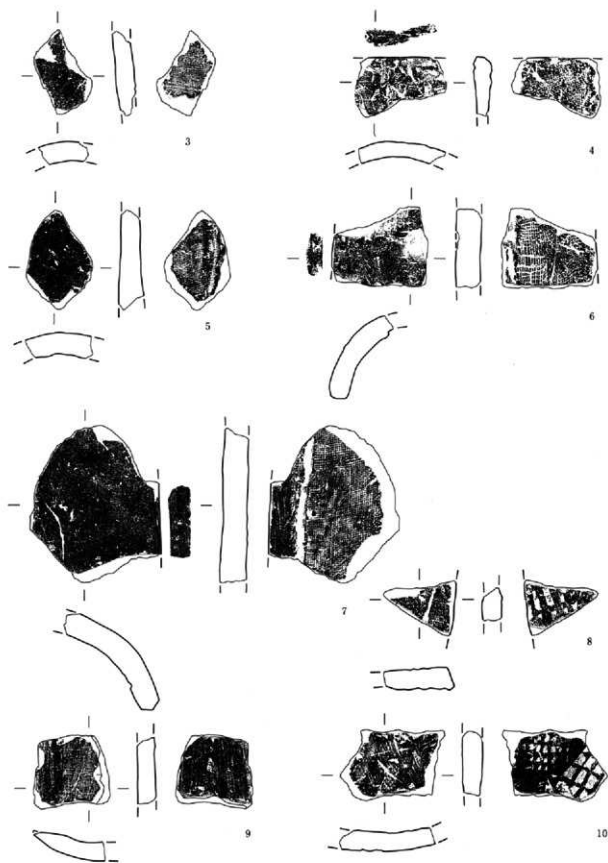


第174図 遺構外出土 古墳時代遺物

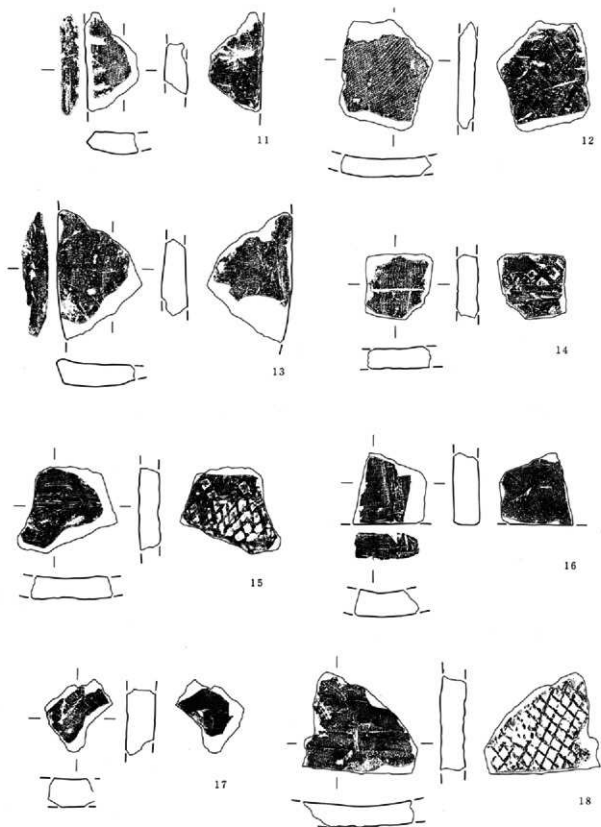
3. 古代



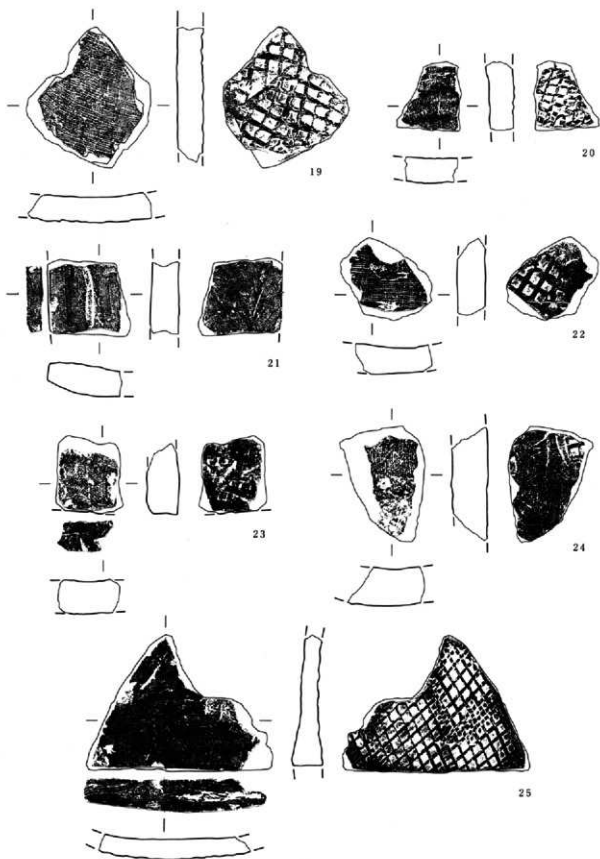
第175図 遺構外出土 古代土器・瓦 (1)



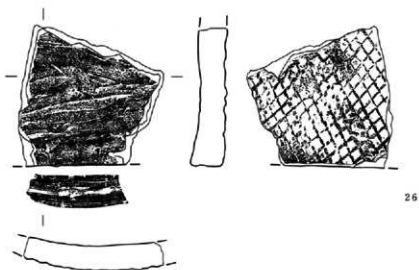
第176図 遺構外出土 古代瓦(2)



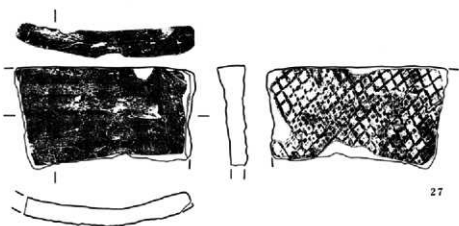
第177図 遺構外出土 古代瓦(3)



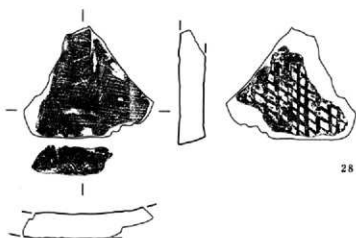
第178図 遺構外出土 古代瓦(4)



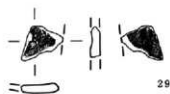
26



27



28

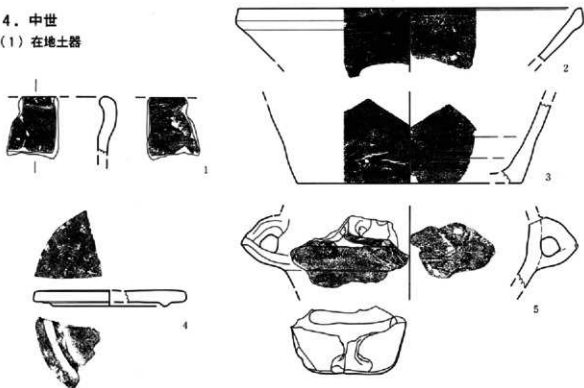


29

第179図 遺構外出土 古代瓦(5)

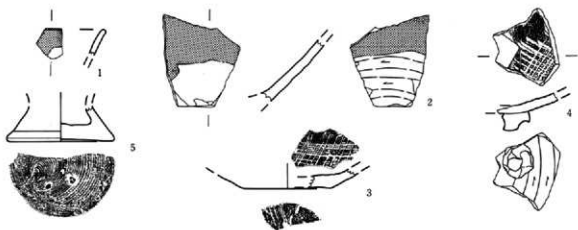
4. 中世

(1) 在地土器



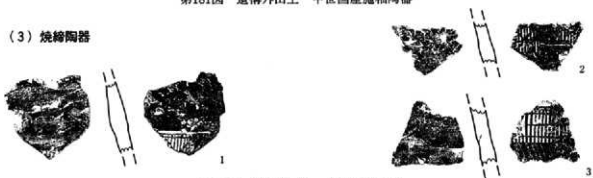
第180図 遺構外出土 中世在地土器

(2) 国産施軸陶器



第181図 遺構外出土 中世国産施軸陶器

(3) 焼締陶器



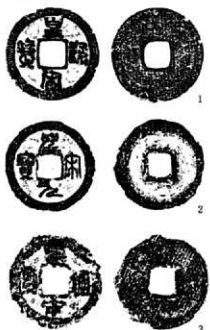
第182図 遺構外出土 中世焼締陶器

(4) 中国産陶磁器



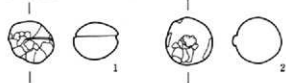
第183図 遺構外出土 中国産陶磁器

(5) 銅銭



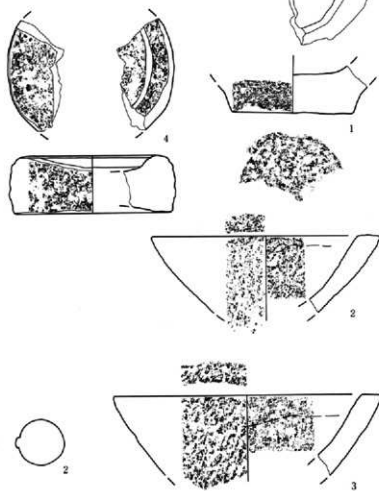
第184図 遺構外出土 銅銭

(7) 鉄砲玉



第186図 遺構外出土 鉄砲玉

(6) 石鉢・石臼



第185図 遺構外出土 石鉢・石臼

第5章 自然科学分析

1. 群馬県、下植木宅町田遺跡の自然科学分析(1)

株式会社 古環境研究所

I. 下植木宅町田遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域には、赤城火山や榛名火山さらに浅間火山など多くの火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を求めることによって、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。そこで良好な土層断面が認められた下植木宅町田遺跡においても、地質調査とテフラ検出分析を合わせて行って示標テフラの層位を明らかにし、土層の堆積年代に関する資料を得ることになった。

2. 土層の層序

調査分析の対象となった地点は、3区72A-3グリッドトレンチ、3区62B-7グリッドトレンチ、5区75J-1グリッドトレンチ、1区74F-4グリッドトレンチ、1区74H-5グリッドトレンチ、5区75G-0グリッドトレンチの6地点である。以下、地点ごとに土層の層序について記載する。

(1) 3区72A-3グリッドトレンチ

この地点では、下位より黒褐色土(層厚15cm以上)、白色細粒火山灰層(層厚4cm)、褐色土(層厚16cm)、灰色砂質土(層厚23cm)、褐色土(層厚14cm)、表土(層厚24cm)が認められる(図A)。

(2) 3区62B-7グリッドトレンチ

ここでは、下位より木片を多く含む黒褐色泥炭層(層厚5cm以上)、灰褐色砂質土(層厚13cm)、暗褐色泥炭層(層厚2cm)、灰褐色砂質土(層厚13cm)、褐色泥炭層(層厚7cm)、青灰色粘質土(層厚5cm)、成層したテフラ層、暗灰色土(層厚13cm)、白色軽石(最大径5mm)および灰色軽石(最大径4mm)混じり黒色粘質土(層厚7cm)、白色軽石混じり暗灰色土(層厚13cm、軽石の最大径3mm)、黒褐色土(層厚4cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、灰色砂質土(層厚4cm)、黄褐色砂質土(層厚5cm)、灰色砂質土(層厚7cm)、白色軽石混じり灰色土(層厚5cm、軽石の最大径3mm)、灰色土(層厚23cm)が認められる(図B)。

これらのうち、成層したテフラ層の下位の2層準に認められる灰色砂質土は、約1.8-2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1994)に同定される。また成層したテフラ層は、下部の桃灰色粗粒火山灰層(層厚12cm)と上部の白色細粒火山灰層(層厚2cm)から構成されている。このテフラ層は、層相から1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に同定される。

(3) 5区75J-1グリッドトレンチ

ここでは、下位より黒褐色泥炭層(層厚3cm以上)、褐灰色細粒軽石層(層厚9cm、軽石の最大径4mm)、暗灰色泥炭層(層厚2cm)、灰色粗粒火山灰混じり褐色泥炭層(層厚2cm)、黒灰色泥炭層(層厚5cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚11cm)、灰色砂質土(層厚8cm)、灰色粘土層(層厚2cm)、成層したテフラ層、灰白色軽石混じり灰色土(層厚12cm、軽石の最大径2mm)、黒褐色粘質土(層厚11cm)、灰色軽石に富む黒褐色粘質土(層厚8cm、軽石の最大径3mm)、灰褐色土(層厚9cm)、暗褐色表土(層厚15cm)が認められる(図E)。

これらのうち、成層したテフラ層の下位の2層準に認められるテフラ層は、As-BP Groupに同定される。また成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層(層厚13cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚2cm)、桃灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚3cm)から構成されている。このテフラ層は、層相からAs-YPに同定される。

(4) 1区74F-4グリッドトレンチ

ここでは、下位より青灰色粘土層(層厚8cm)、成層したテフラ層、青灰色砂質シルト(層厚13cm)、黒褐色泥炭層(層厚13cm)、黒泥層(層厚12cm)、黒褐色土(層厚11cm)、灰色軽石に富む黒褐色土(層厚8cm)、黒色土(層厚4cm)、白色軽石混じり暗褐色土(層厚11cm、軽石の最大径5mm)、黒褐色土(層厚6cm)、褐灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、砂混じり黒褐色土(層厚7cm)、褐色砂質土(層厚4cm)、黄褐色砂質土(層厚3cm)、灰褐色土(層厚27cm)が認められる(図D)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層(層厚10cm)、成層した白色細粒火山灰層(層厚6cm)から構成されている。このテフラ層は、層相からAs-YPに同定される。また褐灰色粗粒火山灰層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に同定される。

(5) 1区74H-5グリッドトレンチ

ここでは、下位より灰色粘質土(層厚31cm)、白色細粒軽石混じり暗褐色泥炭層(層厚17cm)、灰色火山灰質土(層厚8cm)、黄白色細粒軽石混じり灰褐色土(層厚5cm)、灰褐色土(層厚7cm)、褐色砂質土(層厚6cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚13cm)、褐色土(層厚13cm)、白色細粒軽石混じり褐色土(層厚5cm)、黄色細粒軽石混じり黄褐色土(層厚8cm)、灰褐色土(層厚5cm)、灰褐色表土(層厚17cm)が認められる(図C)。

これらのうち、灰色火山灰質土の上位で、白色細粒軽石混じり褐色土の間の2層準のテフラ層は、As-BP Groupに同定される。また褐色土の中の白色細粒軽石は、岩相から層位などから、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1985, 町田・新井, 1992, 早田, 1994)に由来すると考えられる。その上位の土層に多く含まれる黄色細粒軽石は、岩相からAs-YPに由来すると考えられる。

(6) 5区75G-0グリッドトレンチ

この地点では、垂角礫混じり灰色泥層(層厚3cm以上)の上位に、下位より黒褐色泥炭層(層厚5cm以上)、白色細粒軽石層(層厚2cm、軽石の最大径2mm)、暗褐色泥炭層(層厚15cm)、黄色がかった灰色粗粒火山灰層(層厚8cm)、暗褐色泥炭層(層厚5cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、暗褐色泥炭層(層厚9cm)、黄色がかった灰色細粒軽石層(層厚5cm)、暗褐色泥炭層(層厚1cm)、黄色がかった灰色細粒軽石層(層厚3cm、

軽石の最大径3mm)、暗褐色泥炭層(層厚2cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、褐灰色砂質土(層厚4cm)、暗褐色泥炭層(層厚8cm)、灰色粗粒火山灰に富む黒灰色砂質土(層厚3cm)、黒灰色砂質土(層厚2cm)、成層したテフラ層、青色がかかった灰色砂質シルト層(層厚7cm)、黒灰色土(層厚2cm)、灰色軽石混じり黒灰色土(層厚1cm)、黒灰色土(層厚3cm)、暗灰色砂質土(層厚8cm)、灰色粗粒火山灰混じり黒灰色土(層厚3cm)、白色粗粒火山灰および灰色粗粒火山灰に富む灰色砂質土(層厚8cm)、暗褐色表土(層厚14cm)が認められる(図F)。

これらのうち層厚3cmの灰色粗粒火山灰層以下のテフラ層は、層相からAs-B P Groupに同定されると考えられる。また成層したテフラ層は、下位より桃灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、白色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、桃灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)、白色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、桃灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)から構成されている。このテフラ層は、層相からAs-Y Pに同定される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

示標テフラ層の層位を明らかにするため、テフラ検出分析を行い示標テフラの降灰層準の把握を試みた。分析試料は3区72A-3グリッドトレンチ、5区75J-1グリッドトレンチ、1区74F-4グリッドトレンチ、1区74H-5グリッドトレンチ、5区75G-0グリッドトレンチの5地点で採取された8試料である。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析結果を、表Aに示す。3区72A-3グリッドトレンチでは、試料番号7に多くの灰白色軽石(最大径1.9mm)が認められた。この軽石はスポンジ状によく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。したがって、試料番号7付近にAs-Cの降灰層準があると考えられる。また試料番号5に多くの白色軽石(最大径2.1mm)が認められた。この軽石はあまりよく発泡しておらず、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からHr-F Aに由来すると考えられる。なお、試料番号1には、Hr-F AのほかAs-Cに由来する軽石が少量含まれている。

5区75J-1グリッドトレンチ試料番号1には、灰白色軽石(最大径1.3mm)が少量含まれている。この軽石の発泡の程度はよくない。したがってAs-Cとは異なるテフラに由来すると考えられる。おそらく縄文時代に降灰した浅間火山起源の軽石の可能性が考えられる。1区74F-4グリッドトレンチ試料番号3には、灰白色軽石(最大径1.3mm)が比較的多く含まれている。この軽石はスポンジ状によく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また試料番号2には、白色軽石(最大径1.8mm)が認められた。この軽石はあまりよく発泡しておらず、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からHr-F Aに由来すると考えられる。したがって、試料番号3および2付近に各々As-CとHr-F Aの降灰層準のある可能性が考えられる。

1区74H-5グリッドトレンチ試料番号1には、透明で平板状のいわゆるパブル型ガラスが比較的多く含まれている。この火山ガラスは、その特徴から約2.2-2.5万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火

山灰(A T, 町田・新井, 1976, 1992)に由来すると考えられる。層相を合わせて考えると、この試料はA Tに同定される可能性が大きい。

5区75G-0グリッドトレンチでは、試料番号1に灰白色軽石(最大径1.8mm)のほか白色軽石(最大径3.6mm)が多く含まれている。前者はスポンジ状によく発泡しており、班晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また後者はあまりよく発泡しておらず、班晶に角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からHr-F Aに由来すると考えられる。したがってこの地点では、層相を合わせて考えると試料番号1にAs-CとHr-F Aの降灰層準があると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

5区75G-0グリッドトレンチ試料番号4および試料番号2の2試料について、示標テフラとの同定の精度を向上させるために、屈折率の測定を行った。測定は、位相差法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

測定結果を表Bに示す。5区75G-0グリッドトレンチ試料番号4には、斜方輝石のほかに単斜輝石が少量認められた。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.710である。このテフラ粒子は、As-Y Pのすぐ下位にあること、また斜方輝石の屈折率から、As-Ok 1に由来すると考えられる。一方、5区75G-0グリッドトレンチ試料番号2にも、斜方輝石のほかに単斜輝石が少量認められた。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711である。このテフラ粒子は、As-Y Pのすぐ上位にあることや斜方輝石の屈折率から、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田, 1991, 1994, 1995)に由来すると考えられる。

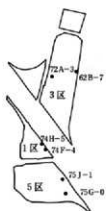
5. 小結

下植木町田遺跡において地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より始良Tn火山灰(A T, 約2.2-2.5万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As-B P Group, 約1.8-2.2万年前)、浅間大窪沢第1軽石(As-Ok 1, 約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-Y P, 約1.3-1.4万年前)、浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、標名二ツ岳洪川テフラ(Hr-F A, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間柏川テフラ(As-Kk, 1128年)を検出することができた。

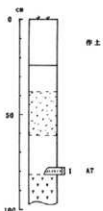
文献

- 新井 勇夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井 勇夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
 町田 洋・新井 勇夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 中沢 俊・新井 勇夫・遠藤 邦彦 (1984) 浅間火山, 黒斑—前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 坂口 一 (1986) 標名二ツ岳起源FA・FP層下の土脚器と須臾器。群馬県教育委員会編「寛政以来遺跡・今井神社古墳群・寛政骨董遺跡」, p.103-119.
 早田 勉 (1989) 6世紀における標名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち。後久考古通報, no.35, p.2-7.
 早田 勉 (1994) 群馬の示標テフラと自然環境。笠懸野岩窟文化資料館・岩窟フォーラム実行委員会編「群馬の岩窟時代の変遷と特色」, p.20-24.
 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間火山の活動史。御代田町誌自然編, p.22-43.

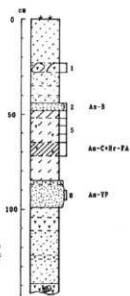
第5章 自然科学分析



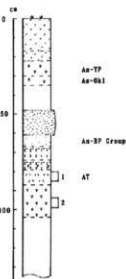
分析地点位置図



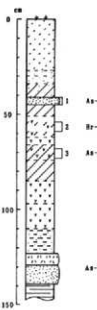
図A 3区 72A-3 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



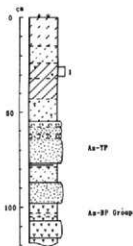
図B 3区 62B-7 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



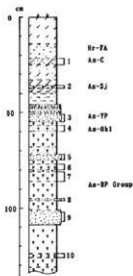
図C 1区 74H-5 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



図D 1区 74F-4 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



図E 5区 75J-1 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



図F 5区 75G-0 グリッドトレンチの土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号



第187図 自然科学分析図(1)

表A 下植木壱町田遺跡のテフラ検出分析結果

| グリッド | 試料 | 軽石 | | | 火山ガラス | | |
|---------|----|------|------|---------|-------|----|------|
| | | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 形態 | 色調 |
| 3区72A-3 | 1 | + | 白>灰白 | 1.8,1.3 | ++ | pm | 白>灰白 |
| | 5 | ++ | 白>灰白 | 2.1,2.2 | +++ | pm | 白>灰白 |
| | 7 | ++ | 灰白>白 | 1.9,1.8 | +++ | pm | 灰白>白 |
| 5区75F-1 | 1 | + | 灰白 | 1.3 | ++ | pm | 灰白 |
| | 2 | ++ | 白>灰白 | 1.8,1.4 | +++ | pm | 白>灰白 |
| | 3 | ++ | 灰白 | 1.3 | +++ | pm | 灰白 |
| 1区74F-5 | 1 | - | - | - | ++ | bw | 透明 |
| 5区75G-0 | 1 | ++++ | 灰白 | 3.3 | +++ | pm | 灰白 |

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない,

最大径の単位は, mm, bw:バブル型, pm:軽石型,

表B 下植木壱町田遺跡の屈折率測定結果

| グリッド | 試料 | 重鉱物 | 斜方輝石の屈折率(n _F) |
|---------|----|---------|---------------------------|
| 5区75G-0 | 2 | opx>cpx | 1.707-1.711 |
| 5区75G-0 | 4 | opx>cpx | 1.705-1.710 |

位相差法(新井, 1972)による。

II. 下植木壱町田遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

PL 60-A

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

試料は、1区74F-4グリッドトレンチで7点、3区62B-7グリッドトレンチで7点、3区63I-8グリッドトレンチで1点の計15点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレバート作成

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヒエ属型（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。なお、3区62B-7グリッドトレンチと3区63I-8グリッドトレンチについては、水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表A、表Bおよび図A、図Bに示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、Bタイプ、Cタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 1区74F-4グリッドトレンチ（図B）

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）、Hr-F A混層（試料2）、As-C混層（試料4）の各層からイネが検出された。このうち、Hr-F A混層（試料2）では密度が2,900個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下層（試料1）およびAs-C混層（試料4）では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、前者は直上をテフラ層で覆われており、後者も直上層（試料3）で検出されていないことから、それぞれ上層か

ら後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) 3区62B-7グリッドトレンチ (図A)

As-Bの上層(試料1)からAs-Cの下層(試料7)までの層準について分析を行った。その結果、As-Bの上層(試料1-3)、As-B直下層(試料4)、As-Bの下層(試料5)、As-C混層(試料6)からイネが検出された。このうち、As-Bの下層(試料5)では密度が7,500個/g、As-Bの上層(試料1)でも6,000個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下層(試料4)では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、直上をテフラ層で覆われていることから上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。また、As-C混層(試料6)では密度が2,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

3) 3区63I-8グリッドトレンチ

As-B直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネが3,100個/gと高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

6. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ族とヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

(1) オオムギ族

オオムギ族(穎の表皮細胞)は、3区62B-7グリッドトレンチのAs-Bの上層(試料1)から検出された。オオムギ族については標本の検討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類(コムギやオオムギなど)と見られる形態のもの(杉山・石井, 1989)である。定量を行っていないことから密度は不明であるが、穎(稃殼)は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

(2) ヒエ属型

ヒエ属型が検出されたのは、1区74F-4グリッドトレンチのHr-F A混層(試料2)である。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためである。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

第5章 自然科学分析

表A 群馬県下植木宅町田遺跡の植物遺体分析結果

| 分類群 \ 試料 | 1区74F-4グリッドトレンチ | | | | | |
|-------------------|-----------------|------|------|------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| イネ | 15 | 29 | | 15 | | |
| ヒエ属類 | 7 | | | | | |
| キビ属類 | 22 | 15 | 45 | 22 | 59 | 29 |
| ヨシ属 | 29 | 51 | 23 | 7 | 74 | 66 |
| ススキ属類 | 121 | 66 | 105 | 215 | 133 | 212 |
| ワタケ属 | 255 | 328 | 359 | 341 | 486 | 499 |
| ワタケ属(大型) | 7 | | | 15 | | 7 |
| クマシラ | 15 | 23 | 7 | 15 | 22 | |
| コナシラ | | | | | | 28 |
| タケ類類 | 192 | 199 | 90 | 222 | 178 | 212 |
| キヤク属類 | 15 | 22 | 15 | | | 7 |
| クマシラ属類 | 300 | 491 | 474 | 450 | 524 | 494 |
| 未分類 | | | | | | 232 |
| その他(イネ科) | 15 | 15 | 23 | 15 | 7 | 7 |
| 表皮毛織物 | 820 | 816 | 1105 | 1890 | 1215 | 1234 |
| 麻織物 | 7 | 15 | 20 | 7 | 15 | 14 |
| 糸織物 | 646 | 729 | 902 | 770 | 667 | 755 |
| 絹織物 | 7 | | | | | 14 |
| 糸織物以外(コナシラ属など) | | | | | | 161 |
| 検出総数(単位: ×100個/g) | 2381 | 3115 | 3258 | 3124 | 3579 | 3146 |

| おもな分類群の検出率(単位: kg/g-ppm) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|--------------------------|------|------|------|------|------|------|
| イネ | 0.43 | 0.86 | | 0.44 | | |
| ヒエ属類 | 0.43 | | | | | |
| ヨシ属 | 1.84 | 3.22 | 1.42 | 0.47 | 4.69 | 4.16 |
| ススキ属類 | 1.83 | 0.81 | 2.06 | 2.07 | 1.48 | 2.43 |
| ワタケ属類 | 0.49 | 0.52 | 0.43 | 1.07 | 0.85 | 1.02 |
| クマシラ属類 | 0.11 | 0.18 | 0.11 | | 0.11 | 0.55 |

※試料の検出量を1.0と仮定して算出。

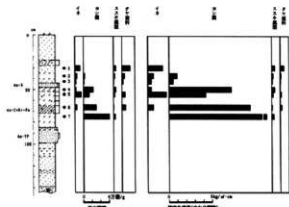
表B 下植木宅町田遺跡のプラント・オパール分析結果

| 分類群 \ 試料 | ※主な分類群について詳説 | | | | | | | |
|----------|-------------------|----|-----|----|-----|-----|----|-----|
| | 検出総数(単位: ×100個/g) | | | | | | | |
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| イネ | 60 | 23 | 18 | 15 | 76 | 23 | | 21 |
| ヨシ属 | 15 | 8 | 115 | 68 | 176 | 203 | | 221 |
| ススキ属類 | 30 | 15 | 8 | 31 | 15 | 8 | 23 | 8 |
| クマシラ | 87 | 31 | 13 | | 30 | 45 | | |

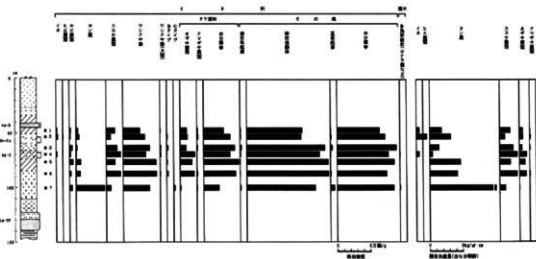
| 検出率(単位: kg/g-ppm) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|-------------------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|
| イネ | 1.76 | 0.67 | 0.48 | 0.43 | 2.21 | 0.59 | | 0.90 |
| ヨシ属 | 0.56 | 0.46 | 7.25 | 4.27 | 0.49 | 38.14 | | 32.86 |
| ススキ属類 | 0.27 | 0.19 | 0.29 | 0.36 | 0.19 | 0.29 | 0.24 | 0.49 |
| クマシラ | 0.47 | 0.15 | 0.27 | | 0.18 | 0.22 | | |

※試料の検出量を1.0と仮定して算出。

①3区62B-7グリッドトレンチ ②3区62C-1-8グリッドトレンチ



図A 下植木宅町田遺跡3区62B-7グリッドトレンチのプラント・オパール分析結果



図B 群馬県下植木宅町田遺跡1区74F-4グリッドトレンチの植物遺体分析結果

7. 植生と環境の推定

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、As-Cより下層では各地点ともヨシ属が卓越していることが分かる。As-C混層からAs-B直下層にかけてもおおむねヨシ属が優勢であり、1区74F-4グリッドトレンチではスキ属型も比較的多くなっている。

以上のことから、遺跡周辺は稲作が開始される以前はヨシ属が多く生育する湿地的な状況であったと考えられ、As-C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。なお、1区74F-4グリッドトレンチの周辺ではスキヤチガヤなどが生育する比較的乾燥したところも見られたものと推定される。

8. まとめ

以上のように、榛名二ツ岳洗川テフラ(Hr-F A, 6世紀初頭)混層ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層や浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)混層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属が繁茂する湿地的な状況であったと考えられ、浅間C軽石混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

参考文献

- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の植体標本と定量分析法―, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探索―, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号, p.27-37.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 微動植物群の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕遺跡のための基礎資料として―, 考古学と自然科学, 20, p.81-92.
 杉山真二・石井克己(1989) 群馬県守持村, F P直下から検出された灰化物の植物植体(プラント・オパール)分析, 日本第四紀学会要旨集, 19, p.94-95.

Ⅲ. 下植木壱町田遺跡における花粉分析

PL 60 - B

1. 試料

試料は、1区74F-4グリッドトレンチのAs-C直下層(試料5)である。同層では縄文時代後期の土器が検出されている。

2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるといった操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

同定された分類群は、樹木花粉1、草本花粉4、シダ植物胞子1形態の計6である。これらの学名と和名および粒数を表Aに示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単葉溝胞子

分析の結果、As-C直下層(試料5)からは花粉粒があまり検出されず、検出された花粉粒も分解を受けている。草本花粉のヨモギ属が他より多いのが特徴であり、樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属がわずかに検出された。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)直下層の堆積当時は、ヨモギ属などが生育する日当たりの良い乾燥地が分布していたと推定される。植物珪酸体分析(第II章)でも、この時期にはヨシ属が減少してススキ属が増加しており、堆積環境の乾燥化が進んだことが分かる。樹木は孤立木かやや遠方に分布していたと考えられる。

参考文献

- 中村純(1973)花粉分析, 古今書院, p.82-110.
 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 鳥倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
 中村純(1980)日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表A 下植木沓町田遺跡における花粉分析結果

| 学名 | 和名 | 分類群 | |
|---|-----------|-----|-----|
| | | 試料5 | 試料5 |
| <i>Adiantum pulchrum</i> | 鮮水蕨 | | 1 |
| <i>Quercus alpinus</i> <i>Lepidobalanus</i> | コナラ属コナラ亜属 | | 1 |
| <i>Monolepidium pulchrum</i> | 鮮水蕨 | | 2 |
| <i>Oenothera</i> | イネ科 | | 2 |
| <i>Thalictrum</i> | カタマツソウ属 | | 1 |
| <i>Oenothera</i> | アブラナ科 | | 1 |
| <i>Artemisia</i> | ヨモギ属 | | 14 |
| <i>Pteris</i> sp. | シダ植物胞子 | | 2 |
| <i>Monolepidium</i> sp. | 鮮水蕨 | | 2 |
| <i>Adiantum pulchrum</i> | 鮮水蕨 | | 1 |
| <i>Monolepidium pulchrum</i> | 鮮水蕨 | | 18 |
| Total pollen | 花粉総数 | | 19 |
| <i>Pteris</i> sp. | シダ植物胞子 | | 2 |

2. 群馬県、下植木老町田遺跡の自然科学分析(2)

株式会社 古環境研究所

I. 下植木老町田遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域には、浅間火山や榛名火山をはじめとする多くの火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を遺跡で求めることによって、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。良好な土層断面が認められた下植木老町田遺跡においても、地質調査を行って土層を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行って、示標テフラの層位の把握を試みた。調査分析の対象となった地点は、3区62G-9グリッドトレンチである。

2. 土層の層序

下植木老町田遺跡の台地部を構成する地層をよく観察できた3区62G-9グリッドトレンチでは、下位より至円礫層(層厚20cm以上、礫の最大径185mm)の上位に、下位より灰色砂層(層厚5cm)、暗褐色泥炭層(層厚23cm)、灰褐色シルト層(層厚18cm)、白色軽石混じり灰色シルト層(層厚16cm、最大径4mm)、灰褐色シルト層(層厚4cm)、暗褐色泥炭層(層厚2cm)、灰褐色シルト層(層厚11cm)、暗褐色腐植質シルト層(層厚7cm)、白色軽石層(層厚15cm、軽石の最大径13mm)、白色軽石混じり青灰色シルト層(層厚15cm)、青灰色シルト層(層厚52cm)、白色軽石混じり暗灰色砂質シルト層(層厚7cm、軽石の最大径12mm)、黒泥層(層厚11cm)、葉理の発達した白色細粒火山灰層(層厚4cm)、白色風化軽石層(層厚4cm)、暗灰色腐植質泥層(層厚2cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚17cm)、黄白色粘土層(層厚2cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚6cm)、黄白色粘土層(層厚18cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚8cm)、灰色土(層厚5cm)、暗灰色土(層厚9cm)、灰色軽石に富む暗灰色土(層厚4cm)が認められる(図A)。

これらのうち、白色軽石層は、その層相から約4.1-4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Hr-H P, 新井, 1962, 鈴木, 1976, 大島, 1986)に同定される。また葉理の発達した白色細粒火山灰層の上位の3層のテフラ層は、層相から約1.8-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-B P Group, 新井, 1962, 早田, 1992)に同定される。その上位の灰色粗粒火山灰層は、層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-Y P, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に同定される。さらに最上位の灰色軽石については、層位や岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

白色軽石層の下位の土層について、テフラの混入の有無を調べるために、基本的に5cmごとに採取された試料のうち5cmおきの試料10点、さらに白色細粒火山灰層と示標テフラとの同定を行うために白色細粒火山灰層の合計11点について、テフラ検出分析を行うことになった。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

1) 試料10gを秤量。

- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表Aに示す。試料番号21から11にかけては、白色軽石（最大径5.2mm）が比較的多く含まれている。軽石の班晶としては、斜方輝石と単斜輝石が含まれている。ただしその顕著な降灰層準は不明である。試料番号5には、白色軽石（最大径2.6mm）が少量含まれている。班晶としては、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から上位の白色軽石に由来するものと考えられる。試料番号2には、透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスがとくに多く含まれている。この火山ガラスは、その特徴から約2.4-2.5万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992）に由来すると考えられる。業理があることから、完全な一次堆積層とは考えられないが、その純度が高いことからほぼATの降灰層準を示していると思われる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料番号11および試料番号3に含まれるテフラ粒子について屈折率測定を行い、示標テフラとの同定精度を向上させることにした。測定は、位相差法（新井, 1972）による。

(2) 測定結果

試料番号11には、重鉱物として、量の多い順に斜方輝石、単斜輝石、普通角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.704-1.714である。また普通角閃石の屈折率（ n_2 ）は、各々1.676-1.687である。これらの値は、これまで知られている赤城火山起源のテフラとは完全に一致しない。このことから、これらのテフラ粒子は大胡火砕流堆積物（新井, 1962）など多くのテフラから2次的に混入したものと考えられる。

また試料番号3には、重鉱物として量の多い順に、普通角閃石、斜方輝石、カミングトン閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.708-1.712である。また普通角閃石とカミングトン閃石の屈折率（ n_2 ）は、各々1.671-1.677および1.664-1.668である。重鉱物の組成や斜方輝石、普通角閃石さらにカミングトン閃石の屈折率などから、このテフラは約3万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎火山灰（Hr-HA, 早田, 1990）に同定される。

5. 小結

下植木老町田遺跡3区62G-9グリッドトレンチにおいて地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より榛名八崎軽石（Hr-HP, 約4.1-4.4万年前）、榛名八崎火山灰（Hr-HA, 約3万年前）、始良Tn火山灰（AT, 約2.4-2.5万年前）、浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 約1.8-2.1万年前, 3層）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.3-1.4万年前）、浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉）が検出された。

文献

- 新井勝夫 (1962) 関東盆地西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 町田 洋・新井勝夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 中沢英俊・新井勝夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山。黒炭-前換期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 大島 治 (1986) 榛名大山の地質。日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」, p.222-224.
 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.37-139.
 早田 勉 (1994) 群馬の示標テフラと自然環境。笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色子集」, p.20-24.
 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史。御代田町誌編集委員会編「御代田町誌自然編」, p.22-43.
 鈴木正男 (1976) 過去をさぐる科学。講談社, 234p.

表A 3区62G-9グリッドレンチにおけるテフラ検出分析結果

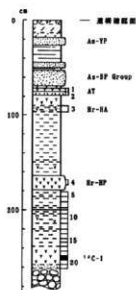
| 試料 | 軽石 | | | 火山ガラス | | |
|----|----|----|-----|-------|----|----|
| | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 形態 | 色調 |
| 2 | - | - | - | ++++ | bw | 透明 |
| 5 | + | 白 | 2.6 | - | - | - |
| 7 | - | - | - | - | - | - |
| 8 | - | - | - | - | - | - |
| 9 | - | - | - | - | - | - |
| 11 | ++ | 白 | 4.4 | - | - | - |
| 13 | ++ | 白 | 2.1 | - | - | - |
| 15 | ++ | 白 | 5.2 | - | - | - |
| 17 | ++ | 白 | 3.2 | - | - | - |
| 19 | ++ | 白 | 3.9 | - | - | - |
| 21 | ++ | 白 | 2.8 | - | - | - |

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。
 最大径の単位は, mm. bw: パブル型, pm: 軽石型。

表B 3区62G-9グリッドレンチにおける屈折率測定結果

| 試料 | 重鉱物 | 斜方輝石 (γ) | 角閃石 (n ₂) |
|----|------------|-------------|---------------------------------------|
| 3 | ho>opx>cum | 1.708-1.712 | ho : 1.671-1.677 cum : 1.664-1.668 |
| 11 | opx>cpx>ho | 1.704-1.714 | ho : 1.676-1.687 |

opx: 斜方輝石, cpx: 单斜輝石, ho: 普通角閃石, cum: カミングトン
 閃石。屈折率の測定は位相差法 (新井, 1972) による。



図A 3区62G-9グリッドレンチの土層柱状図と年代測定試料の層位。数字はテフラ分析の試料番号



分析地点位置図



第189図 自然科学分析図 (3)

II. 下植木町田遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

| 調査地点 | 試料 | 種類 | 前処理・調整 | 測定法 |
|---------|--------------------|----|-----------------|------|
| 3区62G-9 | ^{14}C -1 | 腐植 | 酸-アルカリ-酸洗浄・石炭調整 | AMS法 |

2. 測定結果

| 調査地点 | 試料 | ^{14}C 年代 (年BP) | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 補正 ^{14}C 年代 (年BP) | 暦年代 | 測定No. beta- |
|---------|--------------------|-----------------------------|------------------------------|--------------------------------|-----|----------------|
| 3区62G-9 | ^{14}C -1 | 16380±90 | -27.2 | 16350±90 | — | 96819(Gr) |

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、暦年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ 値が表記される場合もある。

5) 測定No.

Grはオランダのグローニンゲン(Groningen)大学の加速器を使用したことを示す。

3. コメント

今回測定を行った試料は、約4.1-4.4万年前に標名火山から噴出した標名八崎軽石層(新井, 1962, 鈴木, 1976, 大島, 1986)の下位にあるにも関わらず、かなり新しい年代値が得られた。本遺跡と同一流域にある遺跡においても、約3万年前の標名八崎火山灰(早田, 1990)の下位の泥炭層より明らかに新しすぎる年代値が得られている(古環境研究所, 未公表資料)。これらのことから、本遺跡とその周辺に関しては、少なくとも約3万年前以前の地層において、地下水による汚染作用などを受けて、新しい年代測定値の得られる傾向があるように思える。

文献

- 新井秀夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 大島 治(1986) 標名火山の地質。日本の地質関東地方編集委員会編「関東地方」, p.222-224.
 早田 勉(1990) 群馬県自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.37-129.
 鈴木正男(1976) 過去をさぐる科学。講談社, 234p.

Ⅲ. 下植木宅町田遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

2. 試料

試料は、3区62G-9グリッドトレンチで採取された試料1~11の11点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μm ・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μm 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキッパ) 中に分散、プレバカート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバカート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ネザサ属は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表Aおよび図Aに示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来: キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族、Bタイプ、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (おもにクマザサ属)、タケ亜科 (未分類等)

その他: 表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

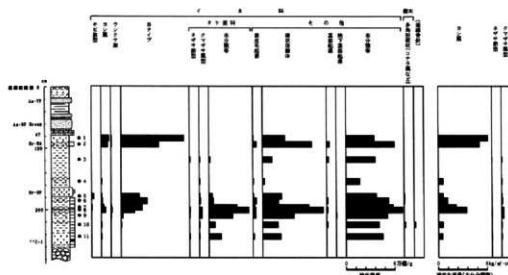
（2）植物珪酸体の検出状況

礫層直上の泥炭層（試料11）からA T直下層（試料1）までの層準について分析を行った。その結果、泥炭層（試料11）ではタク亜科（未分類等）や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ヨシ属やネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。その上層（試料10）ではイネ科Bタイプや樹木（ブナ科コナラ属など）が出現している。イネ科Bタイプの給源植物は不明であるが、泥炭層などの湿地性堆積物から一般的に検出されている。

表A 群馬県下植木屯町田遺跡における植物珪酸体分析結果

| 分類群 \ 試料 | 3区 62G-9グリッドトレンチ | | | | | | | | | | |
|-------------------------|------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| イネ科 | | | | | | | | | | | |
| キビ類 | | | | | 23 | | 7 | | | | |
| ヨシ属 | 81 | 87 | | 8 | 8 | 15 | 29 | 48 | | 8 | 7 |
| ワンクサ属 | 7 | 7 | | | | | 7 | 15 | 6 | | |
| Bタイプ | 943 | 283 | | | 189 | 267 | 214 | 137 | 18 | 8 | |
| タク亜科 | | | | | | | | | | | |
| ネザサ節型 | | | 8 | | | | | | 8 | 6 | 7 |
| クマザサ属型 | | | 8 | 8 | 8 | 15 | | 30 | 30 | 8 | 7 |
| 未分類等 | | | 16 | | 38 | 46 | 287 | 610 | 342 | 61 | 127 |
| その他のイネ科 | | | | | | | | | | | |
| 高草モミ属 | 7 | 27 | | | 8 | 8 | 27 | 22 | 20 | 20 | 15 |
| 細粒モミ属 | 229 | 561 | 59 | 13 | 196 | 164 | 472 | 616 | 319 | 159 | 187 |
| 葉節型 | | 30 | 22 | | | 15 | | 15 | | 13 | |
| 地下葉節型 | | | | | | | | | | | 6 |
| 未分類等 | 296 | 501 | 303 | 143 | 317 | 441 | 487 | 585 | 431 | 342 | 385 |
| 樹木起源 | | | | | | | | | | | |
| 多角形板状(コナラ属など) | | | | | | 8 | 7 | | | | 15 |
| (珪酸体計) | | | | | | | | | | | 13 |
| 検出植物体総数 | 1384 | 1831 | 451 | 188 | 792 | 1008 | 1528 | 1825 | 1087 | 613 | 728 |
| おもな分類群の検出生産量 (単位: kg/㎡) | | | | | | | | | | | |
| ヨシ属 | 5.13 | 4.24 | | 0.47 | 0.48 | 0.94 | 1.86 | 2.88 | | 0.48 | 0.47 |
| ネザサ節型 | | | 0.04 | | | | | 0.04 | 0.03 | 0.04 | 0.04 |
| クマザサ属型 | | | 0.08 | 0.08 | 0.08 | 0.11 | | 0.23 | 0.22 | 0.08 | 0.08 |

検出数の仮定値を1.5として算出。



図A 下植木屯町田遺跡3区 62G-9グリッドトレンチにおける植物珪酸体分析結果